

香道と文学

—江戸中期の香道伝書による文学受容の研究—

武居 雅子

博士（文学）

総合研究大学院大学

文化科学研究科

日本文学研究専攻

平成28（2016）年度



博士論文

# 香道と文学

―江戸中期の香道伝書による文学受容の研究―

二〇二二〇六〇一

文化科学研究科 日本文学研究専攻 武居雅子

香道と文学

―江戸中期の香道伝書による文学受容の研究―

序 章	1
第一部 大枝流芳の香道伝書を通して	
第一章 『心遠斎香道叢書』と大枝流芳	18
第二章 大枝流芳による刊本香道伝書四書と文学	39
第三章 『香名引歌之書』―香名と引歌、和歌を中心に―	89
第四章 『香名引歌之書』―香名と引歌、漢詩を中心に―	125
第二部 菊岡沾涼の香道伝書を通して	
第一章 『香道蘭之園』の成立と概要	141
第二章 『香道蘭之園』組香と文学	153
第三章 『香道蘭之園』組香と『夫木和歌抄』―『夫木和歌集抜書』との関係を中心に―	206
第四章 「源氏千種香」の依拠本を探る	236
第五章 「名香古歌古詩」―香名と引歌	330
終 章	352

## 凡例

- 一、 文献の引用に当たっては原文のままを原則とし、濁点・仮名遣い等は底本の通りにした。ただし漢字は原則として通行の字体に改め、また解読の便宜を考慮して、句読点を付し、適宜改行した。振り仮名を省略したり、片仮名を平仮名に直したりしたところもある。□は虫損等による判読不能箇所を示す。傍線・波線は筆者による。また引用文の「」内は筆者による補記である。
- 一、 漢詩・漢文は、原則として書き下し文を掲げた。
- 一、 和歌の引用は、香道伝書などから引いた場合を除き、原則として『新編国歌大観』に拠った。
- 一、 近代以後の引用文献の刊年は、原則として西暦表記に統一した。
- 一、 漢数字は、引用部を除き原則として「一〇（イチゼロ）方式」にて表記した。
- 一、 先学の名前の引用は、原則として敬称を省略した。

\*本論文で扱う時代には、未だ家元制度がみられない。したがって流義・流派意識も希薄で道として確立されていないが、原則として「香道」「香道伝書」を用いる。

## 香道の専門用語

- 1 組香 数種の香を組合せ、一定の主題を表現する香のゲームの様式で、文学的主题を持つものが多い。
- 2 証歌 組香の主題の典拠となる和歌（または漢詩）のこと。

- 3 証詞 組香の主題の典拠となる物語の言葉のこと。
- 4 聞きの名目 組香の主題や依拠文学作品による言葉が指定され、その言葉で答える。答えは名乗り紙（回答用紙）に書く。
- 5 炷継 香名を連歌的に繋げて炷き続けるもの。
- 6 空炷 部屋や家具、着物や装身具に香りを炷きしめること。
- 7 聞香 「もんこう」または「ぶんこう」と読む。聞き香炉に炭団を活け、銀葉の上に載せてくゆらした香木の匂いを嗅ぐことであるが、嗅ぐと言わずに聞くと言う。
- 8 盤物 盤立物ともいう。盤上で立物と呼ばれる人形をはじめ、様々な形象を用い、香を聞き当てることに立物を移動させて楽しむもの。組香のひとつで香席に女性が参加するようになり、視覚的な遊戯性を高めるものとして生れた。東福門院和子の後水尾天皇への入内を契機に江戸中期にかけて流行したとも言われる。（神保博行『香道の歴史事典』柏書房、二〇〇三年、四〇九頁）。
- 9 一炷 香を一つ炷くこと。
- 10 一炷聞き 一炷を聞いて、すぐに答え合せをすること。盤物のゲームでは、香を聞き当てることに、立物（人形等）を移動させてゲームを進めるため、一炷聞きとなる。
- 11 一炷聞き その都度答え合せはせず、最後にまとめて答え合せをすること。したがって「一炷聞〇度」（一炷聞きを〇回行うの意味）と表現する。
- 12 香種数 使われる香の種類のこと。「香品数」とも言う。

13 試しころみ

本香（本ゲーム）で使われる香をゲームの前に聞いてその香りを記憶すること。

14 客香

試のない香のことで、客という字のウ冠をとって「ウ」と略され、これを聞き当てると得点が高くなることもある。

15 聞捨

香を聞いてもその答えを記さないこと。

16 捨香

試をした香を、ゲームの最初や途中で打ちまぜた上で、いくつか取り除き、敢てその香を聞かないこと。ゲームによつてはその捨てた香が何の香りであったかを当てるものもある。

17 札打ち

香札で答えること。香札は一二枚一組で小箱に納められ、この小箱一〇客分、一二〇枚が札箱に納められる。大きさは縦二・七センチ、横一・二センチが標準。札の表は様々であるが花形文が一般的。札の裏は数字の一〜三が記されたものが各三枚で、その内「月」「花」の模様がついたものが各一枚ある。さらに三枚には「客」または「ウ」の字が記されている。材質は紫檀、黒檀が多い。

補足

香筵（香会）の客（聞き手・連衆）は一〇人が基本。香筵で使う香木を提供する人を出香（者）  
と言ひ、香手前をする人を香元と言うが、香元が香木を用意することが多い。また客全員の答えを取りまとめて、一枚の紙に記録する係を執筆（文台・記録）と呼ぶ。この記録は「香之記」と呼ばれ、その香筵での勝者で席次の高い者に贈られる。

## 序章

香道は、茶道、花道とともに三大遊芸とされ、室町時代以来の伝統的貴族文化として、公家、寺社、武家、富裕町人などの上層社会で行われてきた。しかし、香道の祖とされる三条西実隆（1）や志野家にしても、当初は専門の職業香道人ではなく、香道という道意識も後付けのものと考えられる（2）。香道では香りを嗅ぐことを聞くと呼ぶが、『源氏物語』梅枝巻、薫物合の場面では「嗅ぎ合はず」（3）であり、『お湯殿の上の日記』（4）天文元年（一五三二）八月十七日条「御かう御きゝあらせおはしませす」の記事が香を「聞く」の初出である。薫物の時代の後に、香木一木を賞翫し、左右に分かれて香木の香りを競い合う「香合」を経て、十炷（種）香（5）が行われたのは応永年間（6）であり、ここに組香の原点が見られる。その後、「古十組」と呼ばれる未だ文学的主题を持たない組香が生れ、江戸時代にかけて、特定の和歌を証歌とし、物語の詞を証詞とする組香が多作される。香りと文学（文芸作品）との融合なくして組香の完成はありえなかつたと言つても過言ではない。

近年、香りはインセンス、アロマテラピーと言った呼び名でもはやされているが、香道は、茶道、花道に比して特殊な分野として捉えられ、その扱いは小さい。特殊な分野という位置付けは、嗅覚による感覚の遊びでありながら、聞香を楽しむためには、王朝文学や和歌に通じ、短歌を詠むことができ、執筆のための書ができなければ近づきがたい、という思い込みによるものである。香道を特集した記事や雑誌、書籍は、美しい香道具や蘭奢待など香木の写真等を掲載して、表層的な香道を紹介するものが多い。

香道研究は、香道全般を解説するもの、仏教と香道の関係を論じるもの、美術工芸的視点による香道具研究や香木の科学的調査、香道の歴史研究、『源氏物語』の薫物（練香）や薫物合に関する研究、源氏香や有名な組香の解説・研究、香道伝書に関する研究などが挙げられる。このほか西山松之助の家元制を論じたものもある。

香道全般を解説するもの（7）としては、昭和初期の杉本文太郎や早川甚三、一色梨郷の著作があり、昭和二二年（一九四七）に香道御家流二十一世宗家に推戴された三条西公正や、第十九世志野流家元蜂谷宗由、第二十世宗玄、安藤御家流・安藤綾信など各流派による著書がみられる。また北小路功光・成子、神保博行、矢野環、畑正高らの著書が主だった文献と言える。

仏教と香という観点から香道を論じた（8）花岡淳一や有賀要延、荒川浩和の香道具研究や徳川美術館、東京芸術大学美術館他の展覧会列品解説など美術工芸的視点によるもの（9）、香料として捉えた山田憲太郎の香木・香料研究、ガスクロマトグラフィ―質量分析計を用いた米田該典による科学的調査（10）などもみられる。

歴史研究（11）としては、香道の通史を著した一色梨郷、香の歴史の時代による特色を論じた早川甚三の業績があり、三条西公正は「薫香遊びの変遷」を記している。薫物合（12）については、桑田忠親、尾崎左永子、宮川葉子、田中圭子による論考が挙げられる。組香の解説や研究（13）では、早川甚三、尾崎左永子の「源氏香」、矢野環の「四季合香」に関する論考が見られるが、有名な組香に限られ、特定の香道伝書収載の組香についてその依拠する文芸作品を詳らかにしたものは見られない。

香道の普及と伝承に伴って、相伝の次第や細かな点前、所作、組香の趣き、更に秘事や口伝が生れ、

それら香道全般の心得を記述したものが、香道伝書である。その内のいくつかの伝書については校注(14)や現代語訳(15)があり、本稿で扱う『香道蘭之園』は尾崎左永子・薫遊舎により翻刻されている。板本として最古の香道書『香道秘伝書』(16)についても翠川文子の論考、堀口悟の注釈書の翻刻及び研究がある。

現代では、香道流派といえば御家流と志野流が有名であるが、当初は流派・流儀意識はなく、江戸初期には、師資相伝(17)形式で継承され、未だ家元制度も見られない。後に蜂谷家が京都で志野流家元制度を確立するまでは、個別の師資相伝による技の継承と普及が繰り返され、厳しい師弟関係や流派に縛られない、自由な立場で香を嗜む人口が、多数存在していたものと察せられる。西山松之助は『家元の研究』で、この時代を百家争鳴の時代(18)と名付けている。

享保から元文にかけて大坂で多くの香道伝書を刊行した大枝流芳(19)の師匠にあたる、大口含翠(20)にしても、志野、米川、御家の流れを受け継いでいる。

大口含翠の香道系譜について確認すると、『心遠齋香道叢書』(21)新編十四『香事稽古八十八箇条略註』四十六条「香事伝来諸流宗匠之事」に、志野流正伝系嗣として

志野三子(22) — 建部隆勝 — 坂内宗拾 — 本阿弥光悦 — 同光甫 — 大沢常栄ツネナカ与左衛門 —

同苗字常知伝衛門 — 大口保高ツネトモなり

とあり、米川流伝は(志野三子)芳長老については『心遠齋香道叢書』続編八『香之記』から補記)、

志野三子 — 建部隆勝 — 坂内宗拾 — 芳長老 相国寺 奥松軒  
松田丹後守四世孫 — 米川常伯 — 同玄察 — 清水清右衛門 —

眉山和尚 — 大口氏

とある。また、御家流香道家元三条西公正の「聞香に就きて」(23)によれば、御家流香道の系譜は、三条西実条↓烏丸光広↓油小路隆基↓隆基の子孫↓猿島家胤↓大口含翠(一六八九〜一七六四)とし、含翠に伝わった頃に堂上から地下に移ったので、それまでは公家間で「当流」と呼んでいたのを、地下の一般民衆がこれを御家流と呼ぶに至った、と推定している。

これらの記述によれば、大口含翠は志野、米川、そして御家の系譜を受け継いでいるので、大口を御家流香人と特定することは正しくないと考えられる。また米川流も志野流本流から分派した流儀であることが解る。志野流からは後に藤野流も分派する。東山時代から江戸時代にかけては、今となつては断片的な伝書(24)は残るものの実態は不明な小笠原流、相阿弥流、風早流といった流派もあった。

百家争鳴の時機到来の背景には、堂上方の雅遊の嗜みとしての香が、新たな上層階級となった上流武家社会に浸透したこと、一七世紀後半から一八世紀初頭にかけて台頭した都市部の富裕町人層の文化的要望があったことが考えられる。こうした流行現象の中、享保から延享にかけて、志野、米川、御家の三つの流れを汲んだ大口含翠に師事した大枝流芳によって、香道伝書が著作されるのである。しかもその一部は京都・大坂・江戸に店舗を持つ植村藤右衛門、植村藤三郎によって板行され、広く流通することになる。

大枝流芳自身も流派に拘ってはいない。師・大口含翠所伝の香道伝書を書写することに始まり、それから先行香道を比較精査し、研究を重ね、板本に集大成している。享保一八年(一七三三)刊『香道秋の光』では「中古より有来ありきたる組香」を収載し、享保一十九年刊『香道滝の糸』では「米川流香道具・同流十組香包紙之図・盤立物寸法図・古組香十品」などを載せ、元文二年(一七三七)刊『香道軒の玉水』下巻

には「志野三乃道具の事」も掲載している。元文四年刊『改正香道秘伝・附録奥の栞』は、寛文九年（一六六九）刊の志野宗信、同宗温、建部隆勝、岌翁齋宗入、翠竹菴道三等による古伝書『香道秘伝書』（25）を校正、考察した書である。『香道秘伝書』は寛文九年の刊本ではあるが、内容的には江戸時代以前の伝書と十組香を輯録したものである。

御家流は江戸後期まで師資相伝を踏襲していたために、志野流のような家元制度を組織することはできなかったが、大枝も最晩年には、当初八八箇条であった御家流稽古箇条を箇条改定とともに内容を改めた一〇〇箇条とし、秘伝固持のための入門誓約之控として「香事盟誓八箇条」の制定にとめている。志野流は九世宗先以降、『志野流香道箇条目録』の成立など流派伝書の整備につとめ、『諸国門人帳』に見られるごとく家元家長的権力の拡大再生産構造を展開していく（26）。米川流にしても、空華庵忍鎧（27）によって享保一四年『十種香暗部山』が刊行され、米川流の十組香を遵守し、元文三年（一七三八）以前に『香会弁要録』、同五年以前『香道弁要録』、延享三年（一七四六）以前『香道余談』と旺盛に執筆している。忍鎧は米川常白（28）に学んだ西村成政（実閑齋）に師事し、さらに志野流の古書を渉猟して、作法・道具の変遷を弁えた上で、新古、取捨選択をし、最終的には忍鎧流を構築したと考えられる（29）。斯くして、江戸中期以降、家元を中核とした香の社会が、志野流や米川流によって囲いこまれ、統制がとられた結果、各流派の香道伝書は、自流のみを尊ぶ閉塞的なものに収斂していく。家元を頂点とするピラミッド型の組織は全ての統制が家元に集中していくため、伝書にも錯雑や誤謬は起りにくい。師資相伝形式の宿命として、伝授者による改善や時に改悪も生じ易く、人的結束も小規模で弱いものになりがちである。師資相伝を貫いていた御家流は、やがて自己分裂をとげることになり、大

枝最晩年の門弟、江田世恭のように師匠の死後、他流に入門（30）するような者もいた。また師資相伝による伝書の書写は、伝書の細分化を招き、書写年や筆記者不明の断片的な伝書が現在も散見される。

このようになる以前の古法を集大成した香道伝書が、享保、元文期から延享期の大枝流芳による香道伝書群なのである。それらには、各々の流派に固定する以前の、多様な情報や知見が収載されている。しかも流芳はこれだけに留まらず、江戸中期の唐様流行を背景に、宋・明代の香に関する書籍を涉猟して、『香志』を編み、享保一八年七月に『香道秋の光』附録として上梓した。組香の原拠は和歌文芸が主流だが、大枝は諸書に素材を求めて彼独自の新組香を考案し、文人趣味の香道を模索したのである。

一方、江戸では元文年間に香道古法の集大成である『香道蘭之園』（31）一〇卷附録一卷が成立している。本書成立の発端は、御家流香人・鈴鹿周斎（32）が、延宝初め、江戸へ下向したことに始まる。彼は正保・慶安（一六四四〜一六五二）の頃、京都に住み堂上方に香を伝授し、香道の達人と世に知られていた。その後、香に熟達し、公卿に仕えていた衣山靱負丞宗秀も下向し、鈴鹿の世話でその近所に住いを設ける。この二人から香道の伝授を受けたのが山下弘永で、弘永から栗本穩置に香の奥義が伝授される。この栗本穩置が、周斎より伝授された草稿の錯雑を憂い、菊岡房行（沾涼）（33）の力を借りて旧原稿を訂正し、『蘭園』と名付けたのである（34）。

本書の書名『蘭之園』を付けたのは菊岡沾涼であるが、鈴鹿周斎以来の草稿を整理輯録したもので、それらは何代かに亘って書き継がれたものと察せられる。この草稿には御家流以外の、例えば東山殿流、相阿弥流、志野流を冠した組香記事も見られ、栗本穩置、菊岡沾涼らに、自流のみに固執する姿勢は窺えない。本書は「香の伝来」「十炷香の法」など基礎知識を記した一卷に始まり、二〜九巻及び附録巻に

は、二三四の組香が収載されている。十巻には香道具の詳細な図示と解説がなされ、「名香目録」「名香古歌古詩」「薫香名目」などが収載されている。八・九巻は、現在他の伝書には見られない「源氏千種香」(35)が収載され、二・七巻・附録巻には「古十組」と呼ばれる未だ文学的主题を持たない初期の組香から、大枝流芳『香道秋の光』下巻収載の流芳新組香も含まれている。附録巻は「新組香并組香異説」とし、巻末に以下の記述がある。

右条新組の香、或異説の組香これに限るへからす。品々ありといへともそのひとつふたつを記す。是判本に載する所也。此外新組追て印行の目録あまたあり。鈴鹿の家流はかつて用ひす。然れども其虚実をあらはさんかため、崔下菴書。

この文言からは、『香道蘭之園』編纂にあたり、当時、三都で流通していた大枝流芳の香道伝書、新組香への関心が窺え、その存在を意識して「鈴鹿の家流はかつて用ひす」の言葉が記されたものと考えられる。京都・大坂が香道の主流であった時代に『香道蘭之園』が江戸で取りまとめられたこと、『源氏物語』受容による「源氏千種香」が本書にしか見られないこと(36)、附録巻に大枝の新組香を収載していることは注目に値し、『香道蘭之園』は、元文年間当時の香道事情を今に伝える貴重な資料と考えられる。

そこで本論文では、大枝流芳による香道伝書と江戸で編まれた菊岡沾涼による香道伝書を精密に読むことにより、享保から延享にかけての香道伝書における文学受容、特に組香においていかに文芸作品が受容されたのかを実証的に解明することを目的とする。

第一部は「大枝流芳の香道伝書を通して」と題し、第一章で、大枝流芳の書写による『心遠齋香道叢書』を精査し、彼の香道伝書執筆の経緯を追うことで、香人・大枝流芳について検討を行う。この叢書

は三四冊で、正編四冊・続編八冊・後編七冊は、大方が大枝の師匠・大口含翠所伝の書である。新編一五冊は大枝の考察・研究を認めたものが多く、新編七『木処気味秘考』は、刊本『香道秋の光』附録『香志』執筆の基盤ともなった、宋・明代の香に関する文献を渉猟しての大枝の香木論が記されている。彼は『雅遊漫録』（宝暦一三年刊）や煎茶論『青湾茶話』（宝暦六年刊）、瓶花論『抛入岸の波』（寛延三年刊）執筆にあたり中国文献を研究したと同様に、香道においても『説郛』をはじめ多くの漢籍を利用している。新編八『江氏新組香残篇』には、刊本『香道滝の糸』『香道軒の玉水』に近刊、追日梓行と広告が掲載されながら、刊本が確認されず、内容不明であった「香道深緑 組香十品」が収載されている。また従来、詳細な根拠なきままに語られてきた「寄合」の文芸（37）としての連歌と香の関連性だが、新編十四『香事稽古八十八箇条略註』七十八条「連歌俳諧之香之事」に、含翠口受による、連歌会での炷香作法が記されている。なお、新編九『香道拾玉』、新編十『香道随筆卷一』新編十五『香道随筆』、新編十三『香事千代之古道』は、香事香道全般についての太枝の論説である。

これらを踏まえて、第二章では、香道叢書での太枝の研究・考察が刊本香道伝書四書にいかん反映しているか、また彼の創作組香における文芸受容、明風享受について考察する。

第三章では、『心遠齋香道叢書』後編五『香名引歌之書』での香名と引歌の関係を、和歌を中心に精査し、香名と和歌を重ね合わせるといふ享受の在り方を検討する。引き続き第四章では、漢詩を中心に、香名と引歌（詩）の関係を精査して、これら引歌（詩）が、香りの印象を伝えるにあたっていかに機能したのかを考察する。

第二部「菊岡沾涼の香道伝書を通して」では、第一章で『香道蘭之園』の成立と概要を確認した後、

第二章・第三章・第四章で組香の文芸享受を具体的に検証する。

第二章では、本書二〜七巻及び附録巻収載組香の原拠とする文芸作品を精査し、いかなる作品が組香の素材として採用されたのかを検証する。『古今和歌集』由来の組香は、その和歌が証歌として、また和歌の言葉が香名、聞きの名目として使われるだけでなく、仮名序、真名序の文章、古今伝授に依拠するものがあること、『伊勢物語』に依拠する組香には能楽との関連が窺える盤物の組香があること等を明らかにする。文芸作品との関連が窺えない組香も、主題別に分類すると、和歌集の部立（春・夏・秋・賀・恋・雑）に似た様相を呈し、文学的反映が皆無とは考えがたいことを述べる。さらに、座の遊芸として、組香が連衆にいかん享受されたかを考察する。

第三章では『夫木和歌抄』由来の組香について検討する。『香道蘭之園』組香中、証歌が据えられている組香は四三組あり、その内二四組が『夫木和歌抄』由来のものである。しかし、それら証歌と『夫木和歌抄』収載和歌とは微妙に異なるものもある。本章では、『夫木和歌抄』写本、板本、『夫木和歌集抜書』西順自筆本及びその板本を用いて、その異同の経緯を詳らかにする。さらに従来語られてきた、連歌の付合や証歌の検索に利用されたという文学における『夫木和歌抄』享受のほかに、組香においても『夫木和歌抄』『夫木和歌集抜書』が享受されていた事実を明らかにしたいと考える。

第四章では「源氏千種香」の依拠本を探る。『源氏物語』は組香の素材として最も多く用いられたと言え、「源氏千種香」もその所産である。しかしその内容を精査すると、物語にはない言葉が聞きの名目に使用され、重要な場面での登場人物に欠落があるなど、必ずしも忠実な物語の再現はなされていず、原典の『源氏物語』と明らかに異なる事象が存在している。しかし組香考案者やその後継者によって、安

易な物語の内容改編が行われたとは考えにくい。この問題について梗概書を視野に入れて検討した結果、『源氏小鏡』の特定の系統との関わりが確認されたので、その点について検証する。

第五章では十巻収載「名香古歌古詩」を取り挙げる。「名香古歌古詩」は香名とその引歌を列挙したものである。しかし、第一部第三・四章で扱う『香名引歌之書』に比べ、香名が同じでも引歌に異同が見られること、連歌の発句によるものがあることなどが注意される。『香名引歌之書』と比較しながら検討する。

以上、江戸中期、享保から延享にかけての大枝流芳と菊岡沾涼の香道伝書を精査検討して、香道における文学受容の様相を詳しく検証する。またその過程で、座の文芸としての連歌と香道の関連性を考察する。香道の世界が家元制の出現によって統制される以前の、流派意識にとらわれず、古法を集大成したこれらの伝書を精密に読むことで、文学と香道がいかに融合したのかを解き明かすことを目的とする。

## 序章 注

- 1 三条西実隆を香道の祖とするのは、従来の定説であるが、本間洋子「香道の祖」三条西実隆についての再検討」(『中世後期の香文化―香道の黎明―』思文閣出版、二〇一四年)に詳しい。
- 2 『山上宗二記』(天正一六年(一五八八)から一八年(一五九〇))には「香ノ道」「名香ノ道」がみられる。寛文九年(一六六九)『香道秘伝書』刊行に鑑みれば一七世紀半ばには「香道」と言われていたと考えられる。
- 3 『新編日本文学全集 源氏物語③』小学館、一九九六年、四〇四頁「嗅ぎ合はせて」、四〇六頁「嗅ぎ合はせたまへる」の二例のみ。
- 4 『続群書類従七』(続群書類従完成会、二〇一三年)。
- 5 最も古い代表的な組香。伝書により十炷香、十種香との表記があるが、内容は不明。
- 6 『看聞日記』(『群書類従補遺二』) 応永二三年(二四一六)四月一日が初出。
- 7 香道全般を解説するもの  
杉本文太郎『香道』(雄山閣 一九二九年初版、一九八四年増補改訂版)。  
早川甚三『香道』(八雲書林、一九四三年)、「香の歴史」(伝統芸術の会編『伝統と現代 第十巻 茶と香』学芸書林、一九六九年)。

一色梨郷『香書』（石原求龍堂、一九四三年）、『香道の安由美』（芦書房、一九六八年）。

三条西公正『源氏物語新組香（上）』（新生活社、一九五四年）、『組香の鑑賞』（理想社、一九六五年）、『香

道―歴史と文学』（淡交社、一九七一年・改訂版一九八四年）、「風興の世界 香」（芸能史研究

会編『日本の古典芸能 第五巻 茶・花・香』平凡社、一九七〇年）、「日本文学と香」「香の美

と鑑賞」（伝統芸術の会編『伝統と現代 第十巻 茶と香』（学芸書林、一九六九年）他。

蜂谷宗由監修、長ゆき編『図解 香道の作法と組香』（雄山閣、一九九三年）。

蜂谷宗玄「香の歴史における生活と儀礼文化」（『儀礼文化』一六号、一九九一年）。

安藤綾信『徳川譜代大名安藤家の伝承ごと―茶道・香道・礼法―』（東洋出版、二〇〇五年）。

北小路功光・成子『香道への招待』（宝文館出版、一九九二年）。

神保博行『香道ものがたり』（めいけい出版、一九九三年）、『香道の歴史事典』（柏書房、二〇〇三年）。

矢野環「香りの伝統・香りの美」・「香道具への招待」（『太陽スペシヤル 香りの世界』平凡社、一九八七

年）、「香道の古伝書―習見聴諺集』所収伝書など」（『儀礼文化』二三号、一九九六年十一月）、

「香書『薫物方』―竹幽文庫本―」（同志社大学文化情報学部紀要『文化情報学』一卷一号、二〇〇

六年三月）他。

畑正高『香三才 香と日本人の物語』（東京書籍、二〇〇四年）、監修『香が語る日本文化史 香千載』

（光村推古書院、二〇〇一年）、『香清話 香に聞く、香を聞く』（淡交社、二〇一一年）。

- 8 花岡淳一「香道の話」(『仏教』一卷八号、一九三五年)。  
有賀要延『香と仏教』(国書刊行会、一九九〇年)。
- 9 荒川浩和『日本の美術 香道具』二七六号(至文堂、一九八九年)他。  
徳川美術館編『香の文化』(秋季特別展図録、一九九六年)。  
東京芸術大学美術館編『香り―かぐわしき名宝展』(図録、二〇一一年)。
- 10 山田憲太郎『香の文化』(中央公論美術出版、一九七六年)、『香料―日本において』(法政大学出版、一九七八年)他。
- 米田該展「全浅香、黄熟香の科学調査」(『正倉院紀要』一二号、二〇〇〇年三月)。
- 11 前掲注7 一色梨郷『香道の安由美』、早川甚三「香の歴史」、三条西公正『香道』。
- 12 桑田忠親「源氏物語と薫物合」(『國學院雜誌』六一卷八・九号、一九六〇年九月)。  
尾崎左永子『源氏の薫り』(朝日新聞社、一九九二年)。  
宮川葉子「薫物―梅枝巻の行動論―」(『源氏物語の文化史的研究』風間書房、一九九七年)。  
田中圭子『源氏物語』の女君と薫物」(『源氏物語』と王朝の教養)(広島女学院大学公開セミナー論集  
二〇〇九年三月)。
- 13 早川甚三「いわゆる源氏香之図について」(『日本大学理工学部一般教育室彙報』八号、一九六七年三月)。  
尾崎左永子「くらしの中の『源氏香』」(香道文化研究会編『香と香道』雄山閣、一九八九年、増補改訂版)

二〇〇二年)

矢野環「東京国立博物館保管吉田露香氏寄贈香道具『花笠香』盤立物」

—実は中御門院御製『四季合香』—」(『ミュージアム』五二〇号、一九九四年七月)。

14 西山松之助校注『香之書』(『日本思想大系 近世芸道論』岩波書店、一九七二年所収)。

川嶋将生校注『香道規範』『古今香鑑』『御家流香道百ヶ条口授伝』『御家流香道掟書』『志野家香道十三ヶ条』『香之茶湯書』『香問答集』(芸能史研究会編『日本庶民文化史料集成 第十卷 数寄』三一書房、一九七六年所収)。

15 神保博行現代語訳『香道規範』(前掲注7『香道ものがたり』所収)、同現代語訳『香道秘伝書』『香道蘭之園』『香会余談』『香道規範』(同注『香道の歴史事典』所収)。

尾崎左永子・薫遊舎校注『香道蘭之園』(淡交社、二〇〇二年)。

16 翠川文子「香道秘伝書」(『川村短期大学研究紀要』二〇号、二〇〇〇年三月)。  
堀口悟『香道秘伝書集註の世界』(笠間書院、二〇〇九年)。

17 西山松之助は、『家元の研究』(『西山松之助著作集』第一巻 吉川弘文館、一九八二年)で相伝形式について精査し、御家流のような相伝形式を「完全相伝」と名付けた。師匠と弟子の繋がりのみで、家元不在の相伝形式のことある。本論文では「師資相伝」と表記する。

18 注17同書、四二五頁。

19 大枝流芳 香道家、生年未詳、寛延二年（一七四九）〜同四年の間に没。第一部第一章で詳述。

20 大口含翠・樵翁 茶人、元禄二年（一六八九）生、明和元年（一七六四）没。七六歳。大坂の人。大西閑齋に石州流の茶道を学び、のちに一派を創して大口流と称した。

21 実践女子大学日野図書館蔵。『心遠斎香道叢書』については、第一部第一章を参照。

22 志野三子とは志野宗信（三郎左衛門）、志野宗温（弥三郎、参雨斎）、志野省巴（弥次郎、不寒斎）のこと。

23 三条西公正「聞香に就きて」（『日本芸能史講話』紫乃故郷舎、一九四九年）。

24 『心遠斎香道叢書』『小笠原流香之記』、同『香之筆記』相阿弥流』、同『風早』実種卿家本』等。

25 翠川文子は「香道秘伝書」（注16論文、二五八頁）で、寛文九年（一六六九）八月刊『香道秘伝書』は現存する香道板本として最古の物であり、享保五年板（一七二〇）、推定享保一九年板（一七三四）の二度の重板が確認され、享保末年まで約六〇年にわたるロングセラーの書であること、初板から七〇年後に『改正香道秘伝』が大枝流芳により出版されたこと、を指摘している。

26 注17同書、四四八頁。

27 空華庵忍鎧 僧侶・香道家 寛文一〇年（一六七〇）生、宝暦二年（一七五二）没。八三歳。法諱、忍鎧。字、恵南。号、空華子・空華庵。京都の人。和歌を風早実積に学び、香道に長じた。著書『十種香暗部山』『香会余談』『香道余談』など。

28 米川常白 香道家 生年未詳、延宝四年（一六七六）没。通称、小紅屋三右衛門。号、常白・東庵・一任。

京都奈良屋町で粉紅商を営み、禁裏御用も努める。香道を相国寺の僧松軒に学び、後水尾天皇の中宮東福門院に認められ、禁裏に伝わる組香を学び、地下に伝えた。米川流香道の祖。また能書家としても知られた。著書『女御御問書』『米川常白香道秘伝抄』等。

29 翠川文字「忍鑑とその著述」(『川村学園女子大学研究紀要』第一二巻三号、二〇〇一年三月)一一頁。

30 江田世恭は、諸道に通じた大坂の豪商。大枝の死後、志野流宗先の弟子となる。香の伝書収集を精力的に行い、考証の著述も多い。

31 『香道蘭之園』宮内庁書陵部所蔵御所本(一六三八八五)一〇巻五分冊、附録一卷一冊。ほかに国立国会図書館本、宮内庁書陵部の別写本がある。

32 鈴木鹿周斎 香道家 生没年未詳。正保〜延宝(一六四四〜八一)頃の人。

33 菊岡沾涼 俳人 延宝八年(一六八〇)生、延享四年(一七四七)没。六八歳。初め飯束氏、のち菊岡氏。名、房行。号、崔下庵・沾涼など。伊賀上野の人。

34 本書の成立過程について、詳しくは第二部第一章を参照。

35 「源氏千種香」は『源氏物語』五十四帖の内「桐壺」「夢浮橋」を除いた五十二帖を題材とした組香で、物語卷々の場面を捉え、証歌や証詞を用いて、香名や聞き名目に据え、時に盤物で人形に因んだ所作をさせるなど、物語をより深く楽しめるように考案された組香である。

36 安永二年(一七七三)の自叙をもつ竹幽文庫蔵『源氏千種香』は、『源氏物語』五十四帖にちなんだ五十

四種類の組香の作法を記した伝書である。物語内容と合わない箇所が少なくない『香道蘭之園』所収「源氏千種香」に対し、竹幽本は、物語に合わせて手直ししていることが認められる。すなわち、『蘭之園』所収「源氏千種香」は『源氏小鏡』第一系統を参照して考案されたようだが、竹幽本は『源氏小鏡』第二系統、或は、『源氏物語』そのものに拠っていると考えられる。

37 「寄合の場『会所』の文芸」(中村修也監修『よくわかる伝統文化の歴史②茶道・香道・華道と水墨画 室町時代』淡交社 二〇〇六年)では、茶・花・香・連歌が開催される場となる会所やその会合である寄合に着目している。

## 第一部 大枝流芳の香道伝書を通して

### 第一部 第一章 『心遠齋香道叢書』と大枝流芳

はじめに

大口含翠（1）に師事した御家流の香人、大枝流芳（宝永半ばから寛延四年頃）は、香道だけでなく、投壺、貝合等の遊戯や煎茶、花道等、諸芸に秀でた人物で、その一端は『雅遊漫録』（宝暦五年都賀庭鐘序、宝暦一三年刊）等に窺える。しかし、流芳自身に関して著された記事や記録は存外に少なく、生没年を含めその詳伝は不明である。石田誠太郎『大阪人物誌』（石田文庫、一九二六・一九二七年。復刻版、臨川書店、一九七四年）に拠れば、享保中、桜の宮に住し、流芳のほかに脩然翁・青湾・釣隠等の号を有し、香道の達人で著書が多いこと、また自らの香道書を板行するだけでなく、前代のものを編集した『改正香道秘伝』（元文四年刊）、『東山殿御香合』（寛延元年刊）等があることが解る。

本章では、大枝流芳が収集及び編纂書写した香道伝書群『心遠齋香道叢書』（写本三四冊）（2）を軸に、大枝流芳の事蹟を追求し、香道における大枝流芳の位置を考察する。

まずは先行研究に拠り大枝流芳について確認する。

- ・ 本名、岩田信安。本姓、大江。一字姓、岩・崑・巖・江。号、漱芳・四川・青湾・涵青湾・洳叟・脩然・脩然翁・脩然子・釣隠・釣雪ほか。書齋名、心遠齋・靖共亭ほか（3）。
- ・ 大枝流芳と岩田信安は同一人物である（4）。

- ・大枝は執筆活動において、多くの号を有し岩田姓あるいは大枝姓を使っているが、岩田姓での編著書の大半は写本であり、大枝姓でのそれは大半が刊本である（5）。
- ・大枝は都賀庭鐘より数十年年上で、泉谷での二人の出会いには享保一八・九年より数年前とすると、大枝の生年は宝永（一七〇四〜一七一〇）の頃か（6）。
- ・撰津浪華の人で多病のため、療養をかねて享保一〇年八月下旬には京都西山、泉谷に隠棲していた（7）。
- ・大坂網島に帰棲し風雅を楽しむ生活を送り、心は隠者として、香技をもって豪貴の人々と交わった（8）。
- ・香事指南者として上本町一丁目に住いした（9）。
- ・大枝流芳著『青湾茶話』は、上田秋成『清風瑣言』（寛政六年刊）において典拠として利用された可能性がある（10）。
- ・没年は寛延四年（一七五二）五月二四日以降と推定できる（11）。

ところで大枝のヨミについては、『香道秋の光』（享保一八年刊）、野衲素雲堂吟阿の序に、

折をりから大枝おゝえだうち氏の何なにがしとてかくれ住すめる人ひとの内うち／＼集あつめをき侍はべりける巻まき々々を携たづさへきた来きたれり。

とルビが振られている。また、心遠のヨミは「自分の心境がすでに俗界を超越している」（『大漢和辞典 卷四』大修館書店、一九五七年、九三九頁）に拠る「シンエン」と考えられ（12）、京都西山泉谷に隠棲していた大枝に相応しい号と言えよう。

## 一 『心遠齋香道叢書』の書写経緯と概要

『心遠齋香道叢書』（実践女子大学日野図書館蔵）は、大枝流芳が収集及び編纂書写した香道伝書群で、正編四冊、続編八冊、後編七冊、新編一五冊の計三四冊である（13）。内一一冊は、師匠大口含翠所伝の書である。正編第四冊『古十組香之記』末尾に「信安」「漱芳」の朱印があり、朱印は叢書中この冊のみであるが、他の冊もこの冊と筆跡が同一なので、全体が大枝自筆の叢書であると認められる。本叢書執筆にあたり大枝は、岩田信安、岩（巖）信漱芳、岩田信安漱芳、岩田大江信安、岩信恊然、浪華心遠齋等の名を用いている。以後、本章では「大枝流芳」で統一し、「大枝」の略称も用いる。

識語の書写年に拠れば、享保一五年（一七三〇）四冊、元文元年（一七三六）一冊、元文二年四冊、元文三年一〇冊、元文四年三冊、寛保元年（一七四一）一冊、延享元年（一七四四）二冊で、あとの九冊に書写年の記載はない。九冊の内新編九『香道拾玉』以外は、その内容からある程度の書写年が推定できる。

師匠大口含翠について、大枝は『心遠齋香道叢書』新編十『香道随筆卷一』小引で以下のように記している。

余多年、香を好み先に志野流香道を聞といへども委しからず。其後、師を求る事年あり。享保十七壬子歳（一七三二）正月九日、偶大口先生に謁して香道を聞、夫より日を追、年を積て習学す。先生は、白川殿の臣・猿嶋帯刀先生の門弟なり。猿嶋氏の香道は、西三条殿の末流なり。別に香道伝来系図、連理香の巻に附して伝ふ。又大口先生の家には志野流も伝あり。志野三世省巴、〔建部〕隆勝、〔坂内〕宗拾、〔本阿弥〕光悦、光甫、大澤常栄、同子常知、大口先生と相承せり。其余米川家の事

を探り、古書を集めて口伝を猿嶋氏にうくる。

この記述から大口含翠は、三条西の御家流、志野宗信、宗温、省巴へと継承された志野流、坂内宗拾を経て志野本流から分派した米川流と、三流に通じた香人であったことが解る（14）。なお大口への師事が享保一七年正月九日であると記されるが、大枝は、享保一五年には含翠所持の伝書を書写している（本叢書正編一・続編一・二・三、各々の識語に「大口氏より写し侍る」「大口先生所伝なり」とある）ので、享保一五年には、既に二人の交流が始まっていたであろうことが推測できる。

翠川文字（15）は、

大枝流芳が、香道の師、大口含翠といつ出会ったかはわからない。現存の資料（白露結書―享保一五年二月）によつて、流芳が紐結びを含翠に伝授し、流芳が含翠所持の香書を書写していることから、享保十五年には二人の交流が始まっていたことが知られる。

と論じている。

また新編九『香道拾玉』に、

余多年、香を好により、古来の諸書の中に香の事あづかるもの散在せるを集めて一卷となし、事を考るの一助とす。

とあり、大枝流芳の香道資料、文献の収集書写は、多年にわたって行われたことが推測できる。そうでなければ、享保一七年正月に大口に師事し、同年五月に『香道秋の光』（享保一八年刊）凡例を記すことは不可能である。

まずは全体を鳥瞰するために、『心遠齋香道叢書』三四冊を書写年により時系列（識語年が再校・再清

書・再記等のみのものは、それにしたがった)に並べ、そこに大枝の刊本伝書六冊を含め、合計四〇冊の香道伝書年表を掲げる。記載事項は、通し番号、『心遠齋香道叢書』は「心」、刊本は「刊」、識語による書写年が判明しないものについては「推定」を付し、外題『』、内題「」、識語、刊本の場合は刊記、内容【】、\*注記とする。

享保一五年(一七三〇) 庚戌

1 心 正編一『勅撰六種香記』「後小松院勅撰六種乃序」享保十五年二月岩田信安<sup>マカ</sup>溶手灰題。

2 心 続編一『薰物の書。群書類従本「むくさのたね」とほぼ同じ。』  
【薫物の書。群書類従本「むくさのたね」とほぼ同じ。】

享保十五年霜月岩田信安。後日再考識語に、元文五年余冬中浣岩信漱芳再記。

【志野入道宗温在判、香道雜録】

3 心 続編二『参雨齋香之筆記 三部合冊』「参雨齋香之筆記」享保十五年霜月岩田信安。

【参雨齋香之筆記三部(香之道具唱言葉、盆ノ内置合、香合へ香入様之事)の抜粹】

4 心 続編三『香之筆記 相阿弥流』「香炉条々」

享保十五年中冬至日岩田漱芳信安。【床に香炉置事他二五箇条、香炉灰押図他】

\*享保一七年(一七三二) 正月九日、大口含翠に師事か。

享保一八年（一七三三） 癸丑

5 刊『香道秋の光』附録『香志』

刊記（『香志』末尾）「香熏堂藏版／享保十八癸丑七月吉且／京師書坊 堀川通高辻上ル町 植村藤右衛門／東都書坊 通石町三丁目 植村藤三郎／撰陽書坊 高麗橋壺丁目 植村藤三郎」  
\* 『香道秋の光』凡例「享保壬子（一七）年五月中浣大枝流芳誌之」  
附録『香志』卷末に以下の広告あり

秋の光統編香道千代の秋 全部四冊／追日版行

\* 『香志』は、四四種の漢籍資料引用に拠る香木類・香器類・雑類に関する細目記述。

6 心推定新編一『香会式次第』『香会式次第』 巖信漱芳父記。

【主客の香会手順】

7 心推定新編二『香稽古目録』『香事稽古目録』 岩信漱芳父記。

【御家流稽古箇条目録 初三二箇条・中三二箇条・後二四箇条、計八八箇条】

享保一十九年（一七三四） 甲寅

8 刊『香道滝の糸』

刊記「享保十九甲寅正月吉且／京師書坊 堀川通高辻上ル町 植村藤右衛門梓行／東都書坊 通石町三丁目 植村藤三郎／撰陽書坊 高麗橋壺丁目 植村藤三郎」  
\* 『香道滝の糸』跋文「享保十八癸丑五月上浣大枝流芳編集」

\* 『香道滝の糸』上巻末に以下の広告あり

香道秘伝書 全部二冊 板行出来

右之書は古来香道宗匠数家の名作にして／香道の奥義秘事どもを記す、証左にそのふべき／書なり。

同改正増補 二冊／追考 奥のしほり一冊 追而梓行

香道秘伝は古書たるにより伝写の誤脱漏不<sub>レ</sub>少<sub>レ</sub>／又書面にして難<sub>レ</sub>解秘事どもを考増補する者也 京師書坊 植村玉枝軒識

\* 『香道滝の糸』下巻末に以下の広告あり

香道秋の光 附録香志 共全四冊

右書先に撰し香道の重宝新古の組香／数多のせ侍る

香道千代の秋／香道深緑 全四冊

右両書、追日撰集し出す香道の奥秘／とも考しるし侍るなり

元文元年（一七三六）丙辰

9 刊『香道千代の秋』

刊記「元文元丙辰七月吉旦／京師書坊 堀川通高辻上ル町 植村藤右衛門／東都書坊 通石町三

丁目 植村藤三郎／撰陽書坊 高麗橋壺丁目 植村藤三郎」

\* 「香道千代の秋」跋文「享保十七壬子歳至日大枝流芳書」白文印「信安」の印は、『心遠齋香道叢

書』正編四『古十組香之記』末尾白文印と同一か

\* 「香道千代の秋」下巻之二巻末に以下の広告あり

改正香道秘伝 附録奥の枝折／志野古流秘書なり 未刻

秋の光 附録香志／古組香十品新組香十品有之 出来

千代の秋 新組三十品／其余重宝の考多し 出来

滝の糸 古組米川流之書／香包折形火道具図有 出来

右大枝流芳子編集の書玉枝軒／板行之分

10 心 正編四『古十組香之記』『香之記(序)』元文元年霜月至日心遠齋主人岩田漱芳記。

【香之記序(細川玄旨在判、組香古十組意の記、岩田信安の十組香之記跋)】

\* 朱印は叢書中本書のみ。白文印「信安」朱文印「漱芳」

11 心 推定 後編一『組香十品』『古組香十品』岩田漱芳記。【中古組香十品】

12 心 推定 後編二『組香十品』『古組香十品』岩田漱芳記。【組香十組】

13 心 推定 後編三『組香十品』『古組香十品』岩田漱芳記。【組香十組】

元文二年(一七三七)丁巳

14 心 後編四『組香殘篇』『組香附録』元文二年乙巳正陽上浣岩田大江信安記。【組香八組】

15 心 新編四『香木區別考』『香木立味香 三ヶ秘伝之内』

16 心 推定 皆元文丁巳歳八月下浣岩田信安漱芳父書。【達味之論、建之木、五味之事、建味考跋】  
新編七『木処気味秘考』『木処気味秘考』岩信漱芳父原輯・佐住芳州父増補。

【総論、各木処についての本名考証・国号考証、五味之論、一味之名香】  
\*新編四『香木区別考』に加筆したものと考えられる。

17 心 推定 新編十三『香事千代古道』『香事千代之古道』岩信脩然甫著。

【焚香の種々及び香事香道全般についての論説】

18 刊『香道軒の玉水』

刊記「元文二丁巳九月吉旦／京師書坊 堀川通高辻上ル町 植村藤右衛門梓行／東都書坊 通石  
町三丁目 植村藤三郎／撰陽書坊 高麗橋壱丁目 植村藤三郎」

\*「香道軒の玉水附録」巻末「元文元年霜月至日 大枝流芳著」

\*「香道軒の玉水」上巻末の広告

改正香道秘伝 附録奥の枝折／志野古流秘書なり 未刻

秋の光 附録香志／古組香十品新組香十品有之 出来

千代の秋 新組香三十品／其余重宝の考多し 出来

滝の糸 古組香米川流之書／香包折形火道具図有 出来

軒の玉水 新組十品并香道古実／重宝の考とも多く著 出来

深みとり 新組香二十品 未刻

千代の古道 香道の古意古実の／事ともを著す 未刻

右大枝氏の編集の書なり

- 19 心 正編二『名香合薰物合記』『東山殿御香合』『六種薰物合』

元文二年己秋上浣（校正改正）岩田江信安書。

【東山殿で行われたという香合・薰物合の記】

- 20 心 新編十『香道隨筆』『香道隨筆 卷一』元文丁巳歲菊秋上浣岩田信安記。

【香道雜錄、大口師からの聞書、知友、筆者の見聞・伝聞他、江氏新組目録（六〇組）】

\* 「江氏新組目録」に「刊行せるもの四十二品、其余十八品」の組香名を列挙。跋に「深緑と号し、筒にかくす。他日刊行の志あり。」の記述あり。

元文三年（一七三八）戊午

- 21 心 新編五『蘭奢待考』<sup>ぐや</sup>「蘭奢待考」皆元文戊午歲六月上浣浪速岩田信安漱芳父輯録。

【蘭奢待記事と蘭奢待図、截香二例と截香考察】

- 22 心 続編五『実種卿家本』『亜相実種卿家本 香銘二十八條目録』

元文三年戊午歲八月廿四日燈山功畢。岩田江信安書。【組香の書】

\* 〈朱〉寛保元辛酉歲九月十四日於有馬湯山旅亭以極楽寺本校正畢以為記。

- 23 心 推定 正編三『志野名香合』『名香合記』岩田信安記。

【文龜元年五月二九日志野宗信宅名香合一〇番の記録、三条西実隆跋、連中名】

- 24 心 続編四『志野流香説』『志野流香之書』 皆元文三戊午歲南呂念六日岩田信安漱芳記。  
 【香道雜録】\*（朱）西二月於洛陽一本校正す。
- 25 心 続編六『御問目錄 号一炷煙』『女御様御問目錄八箇条 一炷煙』  
 皆元文戊午歲中秋廿九日岩田大江信安漱芳書。  
 【女御様香道質問八箇条と寿命院法印立安回答】
- 26 心 続編八『香之記 三部合冊』『香之記』  
 「香之記 茶湯出香之事」 皆元文戊午歲菊秋十日岩田江信安漱芳記。  
 「香之書 香具之事」 皆元文三戊巳歲菊秋上浣岩田信安漱芳父再書。  
 「香之書 炷合之事」 皆元文三戊午歲菊秋中浣岩田信安漱芳父再記。  
 【三部の書の抜粹】
- 27 心 新編十二『燒合香秘伝』『燒合香秘伝書 三箇秘伝之内』  
 皆元文三戊午歲長月上浣書於浪華心遠齋。  
 【古十組中の十炷香燒合について大口師よりの口受筆記】
- 28 心 続編七『香之記 名香目錄』『香之書』 元文三年十二月上浣再清書功畢。岩田江信安漱芳書。  
 【香名集（一二〇種名香、二〇〇種名香、名香木処分類、一〇種の香・追加六種、木処口伝、香十徳）】
- 29 心 後編五『香名引歌之書』『香名引証』 元文三年暮冬上浣再清書。岩信漱芳父記。【香名証歌の書】
- 30 心 後編六『小笠原流香之記』『小笠原流家香之記拔書』

- 31 心 新編十一『薰香名目志』『薰香名目志』 皆元文三年十二月廿九日改正清書終。巖信漱芳甫記。【元文三年暮冬中浣再清書。岩田信安漱芳父記。【小笠原家組香の書。特に記録の罫界寸法】  
【香名の書（引証書目、凡例一三条、御家六六種名香、いろは香名集、香名分類他）】

元文四年（一七三九）己未

- 32 心 後編七『香図式』『香図式拔書』 元文四年正月五日清書功畢。岩信漱芳父記。【組香書の拔書】  
33 心 新編八『新組香殘編』『江氏新組香殘編』 皆元文己未正陽中浣岩信漱芳甫記。【香道深緑】  
34 刊『改正香道秘伝・附録奥之栞』

刊記「元文四年己未五月／京師書坊 堀川高辻上ル丁 植村藤右衛門梓行／東都書林 通石町三丁目 植村藤三郎／撰津書舗 高麗橋壺丁目 植村藤三郎」

\*寛文九年（一六六九）八月刊「香道秘伝書」に校正と考察を加えた書。

- 35 心 新編十四『香稽古目録註 全三冊合』『香事稽古八十八箇条略註』  
元文第四己未歳六月上浣功畢。岩田信安漱芳甫記。

【御家流稽古箇条初期の計八八箇条目録と略註、香事盟誓八箇条】

寛保元年（一七四一）辛酉

- 36 心 新編十五『続香道随筆』『香道随筆』 寛保改元年霜月至日後一。信安記。  
【香道雜録、野本氏からの伝聞七箇条、師友・筆者の見聞・伝聞】

延享元年（一七四四）甲子

37 心 新編三『十組香秘考』『古十組香秘考』延享改元歳中夏再校。岩田信安漱芳考記。

38 心 新編六『香道具寸法書』『香器物寸放書尚象録』  
【組香の書、古十組香惣論、古十組香考察、米川流組替三組香考察、附録】

延享改元甲子歳夏六月上浣再校功畢。浪華岩信漱芳甫序。【香道具寸法書】

寛延元年（一七四八）戊辰

39 刊『東山殿御香合』

刊記「寛延元年八月／書林 洛陽四條京極之西 上坂勘兵衛惟勝 発梓」

書写年不明

40 心 新編九『香道拾玉』

年表の通り、『心遠齋香道叢書』は正、続、後、新編の順で執筆されたものではない。識語年に再校・再清書・再記等と記されたものについては、それにしたいが記載したが、それ以前に成立している刊本と同文記述が有る等、原型は、刊本以前に成立していた可能性が考えられる。

本叢書三四冊中、大口含翠所伝の書は正編四冊、続編五冊（続編一、二、三、七、八）、後編一冊（後編五）、新編一冊（新編五）の二一冊である。

正編は、室町時代の薫物や薫物合に関する書と最初期の組香「古十組」の書で、続編は志野、相阿弥、風早（実種）流他、諸流の伝書を扱っている。後編一〜四は「中古より有来る組香」四八品を記し、後編五『香名引歌之書』は、香名と引歌を列挙している（16）。後編六は小笠原流、後編七は米川流の抜書である。新編一五冊は、聞書、及び大枝の考察を認めたものが多い。

大枝の門弟、宮崎詮恭による御家流香道伝書群（国文学研究資料館蔵、17）中、外題『香書目録』内題「師伝書籍目録写本之分」（寛保三年（一七四三）一月二日に宮崎書写）に、伝受過程での書写書目、全一九冊が列挙されている。この一九冊は『心遠齋香道叢書』の正編四冊、続編八冊、後編七冊に該当する。宮崎書写本の正、続、後編各冊の貼題簽には「正編」「続編」「後編」の記載がある。宮崎は、寛保二年（一七四二）正月に『香事千代古道』（新編十三）（18）、延享二年（一七四五）正月に『江氏新組香残編』（新編八）（19）を書写しているが、各貼題簽に「新編」の表記は見られない。これらの事実から、『心遠齋香道叢書』正、続、後編は、寛保三年（一七四三）「師伝書籍目録写本之分」以前の段階で整序されていたと推測できるが、新編一五冊については、延享二年（一七四五）正月の時点で、未だ整序されていなかった可能性が窺える。

宮崎が書写した「師伝書籍目録写本之分」の後半に、

右、師伝古書〔正、続、後編を指す〕之外、聞書類、覚書、考物之類は各々伝来の書にあらざれば、外に出すべからず。志ふかき人は口訣を聞て、面々にかき置べき事にこそ。口伝を聞、書留むべき事ならざる器量の人には、伝へても益なしと知るべし。

とあり、「聞書類、覚書、考物之類は伝来の書にあらざれば」は正に新編各書に該当すると考えられる。

したがって、新編一五冊がどの時点で整序されたかは不明であるが、正、続、後編整序後、さらに時間が必要であったと推測される。

## 二 香道の伝承における大枝流芳の位置

『心遠齋香道叢書』は、享保一五年（一七三〇）から延享元年（一七四四）までの約一五年にわたる、大枝の考究研鑽の事蹟である。大枝は、元文元年（一七三六）～四年の四年間に、全三四冊の内、一八冊を書写し、その内一〇冊は元文三年に集中している。

御家、志野、米川の三流に通じた師匠大口に倣い、大枝も諸流の伝書書写に積極的であり、それらに知見を求め、長短を取捨選択し研鑽につとめた。また故実を重視する姿勢から、組香以前の薫物の書にも目を向け、これらは前代の香事継承と考えられる。

『香稽古目録』（新編二。八八箇条の稽古目録）は、師匠大口より茶書の稽古箇条目録に準えて香事稽古箇条を集めるよう託され、大口との審議相談の上に誕生した書で、元文四年の『香稽古目録註』（新編十四）を経て、大枝の晩年には一〇〇箇条に増補され、後の『御家流香道百ヶ条口伝秘書』（20）に結実する。流派構築のための起点であり、骨格となる伝書を作成し、その増補改正につとめた大枝は、御家流の貢献者と言える。

大枝は遠隔地の門弟（21）のために、備忘の覚えとして短縮型の伝書（新編一『香会式次第』内「香元二拾三節」）を考案する等、良き指導者としての資質も窺える。先述した宮崎詮恭だけでなく、大枝門弟の樋口道与（22）や江田世恭（23）等らによる『心遠齋香道叢書』の写本も残存しており、本叢書は

師資相承のために整備され、相伝のテキストとして大いに機能したのである。

第八七条「木処気味之事」は八六条「焼合香之式」、八八条「連理香之秘事」とともに「三箇之大事」とされ、「別に三巻となして家に蔵す」と大枝は記している。木処（香木の産出国）の考証を究めた『木処気味秘考』（新編十五）がこの三巻の内の一巻に該当すると考えられる。これは、『香木區別香』（新編四）での検証に加筆した書であり、『香道秋の光』の附録『香志』での漢籍資料渉獵―宋、元、明、清にわたる本草書、博物書、地誌、小説、『說郭』『說郭続』といった随筆雑著の精査―をもとに、実証的手法に拠って香木の本名と産出国の特定を試みた書である。また大枝は『香事千代古道』（新編十三）でも『香志』や『書経』『論語』『孟子』を引用して、香道を論じている。

大枝は本叢書後編で古組香を精査し、『香道千代の秋』（元文元年刊）跋文で、

組香は女童に香を聞ならはしめ、初心を導んとする筈蹄にして、組香は香の歌舞妓なるものなり。何ぞ要とせむ。

と記し、『香事千代古道』（新編十三）にも、

女わらんべのもてあそぶ十炷香もありとみへたり。組香、そらたきに名香を用ゆまじき事は古人のおきてなり。組香至て未なる事にて、稽古のため用し事なり。香の歌舞妓なるものなり。

と論じている。斯く言いながら、彼は六〇品の組香を創作し、内四二品を刊行した。香道の要ではないにしても、香道普及のための手引きとして、組香を必要と考えていたであろう大枝は、『江氏新組香殘編』（新編八）に、新組香「香道深緑」一〇品を収載している。

組香の素材と言えば和歌が多くを占めるなかで、大枝は説話、漢詩、中国故事等に取材の範囲を広げ、

簡潔な文章表現で小引を記し、聞香が身近なものになるように解説している。彼は江戸中期の唐様流行を背景に明風を享受して、文人趣味の香道を模索し、同時に、地下社会に香道を伝播せしめたのである。大枝流芳は、師匠大口の良き弟子として故実の継承につとめ、御家流伝書確立に貢献し、師資相承のための指導者となる一方、所伝の単なる反復を脱した研究的視座での伝書執筆を行ったのである。

おわりに

大枝門弟の宮崎詮恭、樋口道与、江田世恭等は、『心遠齋香道叢書』以外の大枝に拠る香道伝書も書写している。例えば、『名香合之式』『香事焚組香式』『香包盤立物寸法』『嚴儀組香会式次第』『桂海香志』『御香所考』『類聚薫物秘法』『称名院公香合之判』『香道伝』『飾方秘鑰』等である。この事実からは、『心遠齋香道叢書』だけが伝授されたのではないことが解る。

『香包盤立物寸法』（東京国立博物館蔵、24）外題下には「新編十七」とあり、大枝晩年の弟子、江田世恭に拠る『偷閑記聞』（東京都立中央図書館蔵、宝暦元年（一七五一）跋、25）の大枝流芳著作一覧に新編十七として見える書名と同じだが、『心遠齋香道叢書』は新編十五までであるから、十七は完成稿ではなかったか、あるいは、新編に収録予定の段階であったのかもしれない。江田に拠る大枝流芳著作一覧には、正編一部、続編九部、後編八部（他三部）、外編九部、新編三〇部、遺編七部（他二部）、残編（門弟宮崎詮恭記録本）八部の合計八二部（他五部）の書名が確認できる。どの時点かの特定はできないが、『心遠齋香道叢書』は増補整備されたと考えるべきである。

先述した『香稽古目録』八八箇条が『御家流香道百ヶ条口伝秘書』に変容したのと同様に、『心遠齋香

『道叢書』も門弟へと書写が繰り返される段階で、様々に変容、増殖したのであり、それらについて精査することも今後の課題と言える。ともあれ、大枝なくして大口所伝の命脈は繋ぎ得なかつたと言つても過言ではなく、既に言及が見られる大枝の茶書（26）や花の書（27）と同様に、大枝による香道伝書群は評価されるべきである。

## 第一部第一章 注

- 1 香道伝書では樵翁ではなく、含翠の号が使われている。元禄二年（一六八九）生、明和元年（一七六七）没。七六歳。大坂の人。大西閑斎に石州流茶道を学び、のちに一派を創して大口流と称した。
- 2 翠川文字『香道文献目録―所蔵館別―（香道双書 資料1）』二〇一五年、一五九〜一六五頁。全三四冊の各識語及び内容を目録形式で収載。
- 3 翠川文字「大枝流芳（岩田信安）小考」（『川村学園女子大学紀要』第一五卷第二号、二〇〇四年三月）一九〜二〇頁。
- 4 玉手紀子「大枝流芳の人物像―岩田信安は大枝流芳か―」（『解釈』第二九卷第一号、一九八三年六月）。
- 5 玉手紀子「大枝流芳と岩田信安との関係―両者の号を中心に―」（『解釈』第三二卷第一号、一九八六年一月）。
- 6 中村幸彦「都賀庭鐘伝攷」（『中村幸彦著述集』第一一巻（中央公論社、一九八二年）三二二〜三三七頁）。
- 7 『貝尽浦之錦』（寛延四年刊）巻末附録『相貝経』を享保一〇年（一七二五）八月下旬、京都泉谷の山中で書写した。
- 8 『雅遊漫録』（宝暦五年都賀庭鐘序、宝暦一三年刊）。
- 9 『増補改訂難波丸綱目』延享五年版。
- 10 奥田昌子「大枝流芳と青湾茶話―上田秋成著「清風瑣言」の再検討―」（『芸能史研究』一五号、一九六六年一〇月）。
- 11 翠川文字『香道文献目録―所蔵館別―（香道双書 資料1）』二〇一五年、一〇一〜一〇二頁。

「香事焚組香式」焚組香の記録に、「寛延四年五月二四日、流芳先生病中有馬入湯の病床の会があり、流芳の死はこの後の夏秋の間と思われる。」

12 陶淵明、飲酒詩、其五「心遠地自偏（心遠くして、地、自ら偏なり）」に拠るか。

13 実践女子大学日野図書館蔵、常磐松文庫七九二（五八七〇四〜三七）。縦二四・五cm×横一七・七cm。  
14 序章三〜四頁参照。

15 注3論文、二四頁。

16 合計一三三種の香名を挙げ、その内一〇六種に対し引歌（和歌八〇首、漢詩二六首）を列挙している。  
第一部第三・四章を参照。

17 国文学研究資料館蔵『香之書』ヤ8・337・1〜20、写本二〇冊、岩田漱芳の識語、宮崎詮恭奥書有り。

『香書目録』はヤ8・337・1。宮崎最初の伝書書写『香道盟誓草案』（『心遠齋香道叢書』新編十四卷末

「香事盟誓八箇条」に該当。内容は師匠への誓約書）は、寛保元年（一七四一）七月で、大枝が新編十五『続香道随筆』を執筆中の時期にあたる。

18 『香事千代古道』は、『香道軒の玉水』（元文二年刊）上巻末に広告掲載されたが板行されていない。

19 「香道深緑」は『香道滝の糸』（享保一九年刊）下巻末に「追日撰集し出す香道の奥秘とも考えしるし侍るなり」と広告掲載されながら、刊本が確認されず内容が不明であった。新編八によって「香道深緑」の全貌が明らかとなった。

20 国立国会図書館蔵、二〇二・〇二六「文化八年（一八一二）辛未歳閏二月二十二日写之。杉田克誠。」百箇条の箇条内容、及び初・中・後の箇条数も『御家流香道百ヶ条口伝秘書』に至る間には、度重な

る変更が見られる。

21 注11同書、三七一頁。高知市民図書館蔵「加賀野井家資料」中「岩田漱芳・桐間蔵人（恒卓）師弟間目録（寛延二年九月二九日桐間蔵人差し出し）」等には、大枝流芳の遠隔地の門弟への指導の一端が窺える。

22 長島弘明「秋成年譜考（享保一九年〜寛保三年）」（『東京大学国文学論集』第二卷、二〇〇七年、五月）に詳しい。樋口淳叟道与は上田秋成の実母・松尾ヲサキの姉妹だった人の夫で、秋成の義理の叔父にあたり、津軽出身で宇都宮藩医として仕えた後、大坂で町医者をつとめ、寛延元年四月、大坂滞在中の朝鮮通信使の大火傷を治療した経緯を『韓客治験』（寛延二年刊）に記している。鹿児島大学付属図書館中央図書館蔵『御家流香事稽古目録百箇条註解』（享保一九年（一七三四）三月樋口淳叟序跋）には、皆伝の門弟として淳叟の名が挙げられている。

23 江田世恭は諸道に通じた大坂の豪商。大枝晩年の弟子で、大枝の死後、志野流（蜂谷流）藤野専斎昌章に入門。香の伝書収集を精力的に行い、考証の著述も多い。前掲注11同書一二二頁。

24 東京国立博物館蔵、と六二二二。樋口淳叟門弟、伊藤因胤写、書写年記載なし。香具寸法書。

25 東京都立中央図書館蔵、加賀六四二〇。宝暦改元（一七五一）冬、沙原居士椎本矩州跋。御家流稽古百箇条の半数余の内容の聞書他。

26 『青湾茶話』宝暦六年刊。

27 『抛入岸之波』寛延三年刊。

## 第一部 第二章 大枝流芳による刊本香道伝書四書と文学

はじめに

浪華の人、大枝流芳は、享保一八年（一七三三）『香道秋の光』（1）を、翌年享保一九年『香道滝の糸』（2）を、元文元年（一七三六）『香道千代の秋』（3）を、そして元文二年には『香道軒の玉水』（4）を上梓している。

本章では、第一章で検討した『心遠齋香道叢書』での大枝の研究・考察がこの刊本四書にいかん反映しているか、また彼の創作組香における文学受容、明風享受がいかなるものかを考察する。まず四書の概要を述べた後、大枝による創作組香を詳述し、文学享受、明風享受の具体相を提示する。そして『心遠齋香道叢書』が各書にいかん反映しているか、その軌跡を追いたい。

大枝考案の組香は、概して盤物が多く、投壺や鷹狩りに想を得たものや、左右に分れて争う扇合、絵合を組香に取り入れたもの、名所歌枕「六玉川」を香名に据えて季に合わせて楽しむもの、曲水の宴を主題に『和漢朗詠集』の漢詩を証歌としたもの、また珍しいものとしては、説話的要素を含んだ琵琶の伝書『文机談』に取材した組香もある。さらに、唐土で端午の日に行われた競渡や、諸葛孔明の八陣図、玄宗皇帝に纏わる明皇蝶香伝説を盤物に仕立てたもの、孟嘗君の函谷関での故事を素材にしたものなど、甚だ多彩である。組香の仕組に典拠となる文学の情趣を反映させて、盤立物の動きや所作に活かし、香名や札の名、聞きの名目に証歌のことばを据えるなど工夫が窺える。

本章で詳述する組香は、他の伝書や古来の組香では扱われていない文芸作品に依拠するものを特に撰んだ。そこには大枝独自の文芸志向、創作意図が伺える。『香道秋の光』下巻「曲水香」、『香道千代の秋』中巻「撰虫香」、『香道軒の玉水』上巻「花鳥香」「蠶螂香」を取り上げる。

第一章で記述したように、大枝は江戸中期の唐様流行を背景に、宋・明代の香に関する書籍を渉猟して『香志』（『香道秋の光』附録）を編んだ。組香の原拠は和歌文芸が主流だが、彼は漢詩に素材を求め、独自の新組香を考案し、文人趣味の香道を模索している。袁宏道の詩による『香道軒の玉水』上巻「競渡香」についても後述する。

四書の内、大枝の新組香は『香道秋の光』に五、『香道千代の秋』に二二、『香道滝の糸』にはなく、『香道軒の玉水』に七となり、合計三四の内、二一が盤物である。盤物が多いことは大枝の組香の特徴である。

彼は『香道千代の秋』の跋文で「組香は女童に香を聞ならしめ、初心を導んとする筈蹄にして、組香は香の歌舞妓なるものなり。何ぞ要とせむ。」と、組香を初心者向けのものと言っている。大枝のこの主張は、『心遠齋香道叢書』新編十『香道随筆一』元文丁巳歳（二年）菊秋上浣成立の十四項「組香などは、初心の人の翫なるをや」にも見られ、さらに『心遠齋香道叢書』新編十四、元文第四己未歳六月成立『香事稽古八十八箇条略註』第五十二条「組香類之事」にも「組香は」香を聞ならしむたゝ筈蹄のみ。組香を深き事のやうに思ふはあさましき事なり。」と記している。彼は斯く言いながら、香道の普及を図る啓蒙的姿勢とその多才から、多くの新組香を創出したと考えられる。

また『香道随筆一』九項では、「享保壬子のとし秋の光と云書を作り刊行せしが、是も天覧に入しとな

り(5)。冥加至極有難き仕合なり。」と記し、続く十項では「千代の秋と云書、余つゞきて述作して刊行せしに、女御様より御覽被遊度よし、書肆に早々指上べきよし仰被下。板行出来次第、早々指上しなり。元文二年三月廿一日なり。世上へは五月下旬より發行せしむ。余が輩の卑賤の書なれども香の徳により高覽に入し事、是又冥加の至りなり。」と記している。これらは、『香道秋の光』『香道千代の秋』二書への評価と『香道千代の秋』刊行の経緯を知る貴重な記事と言えよう。

#### 一 刊本四書の概要

本章では、四書『香道秋の光』『香道千代の秋』『香道滝の糸』『香道軒の玉水』いずれも国文学研究資料館所蔵マイクロ資料を底本とし、『香道軒の玉水』以外は国立国会図書館本も参照した(6)。刊行年の時系列では『香道秋の光』(享保一八年)、『香道滝の糸』(享保一九年)、『香道千代の秋』(元文元年)、『香道軒の玉水』(元文二年)である。しかし『香道秋の光』凡例(大枝著)四項に「猶、此書の後編に香道の故実及新組品々を著して追日、梓に行はむとはかる」とあり、同書目録に「続編千代の秋目録 全部四冊追日令梓行」とあること、『香道千代の秋』跋文は大枝流芳により享保十七年至日に書かれていて、『香道滝の糸』『香道軒の玉水』の順に詳述する。

#### I 『香道秋の光』(資料A・1・2を参照)

『香道秋の光』は御家流香道具・盤立物の図が描かれた上巻、各十品の組香が収載されている中・下

卷、宋・明代の香に関する書籍を渉獵して編まれた附録卷『香志』の計四巻で構成されている。序をよせている野衲素雲堂・吟阿については解っていないが、前掲の『香道随筆一』二十一項に以下の記事がある。

吟阿子云、十炷香箱に書歌あり。書とゝめ置しとて書付給りぬ。因て爰に記。

一声を人にはつけす鶉きゝさためすとおもふ心に 続千載集

吹すくる松原の山の木からしにきゝもわかぬ村時雨かな 玉葉集 後さかの院

此事、当流には沙汰なき事なり。しかれども是も例ある事にや。しばらく爰に記て後の考にそのふ。この記事からは吟阿が御家流以外の人か、と推測されるが、それについては今後調査したい。

『香道秋の光』吟阿の序に続き、大枝自身が凡例を記している。第一項に、  
今爰書著す所は、此道にやんごとなき御家の法を伝へ聞し、其かたち寸法までを図して、初心の人、又遠き人までも此具を求め作らん便とする者也。

と述べている。大枝の「初心の人、遠き人までも」という配慮は、『心遠斎香道叢書』新編一『香会式次第』（8）の識語にも見られる。

余、初心のため、又は、遠方に伝んに、面受を得ずともあらまし心得の為、筆にうつす。心得易からしめん為、文の拙をいとはず、たゞ聞ゝやすからん事をはかる。

とあり、ここに大枝の一貫した伝授の姿勢が窺える。これこそが、大枝晩年の門弟、土佐藩・桐間恒卓との質疑応答を記した文書を遺さしめたと言えよう（9）。

中巻収載組香は「中古より有来たる組香十品」の「花軍香・古今香・呉越香・三夕香・蹴鞠香・鶯香・

六儀香・星合香・鬪鷄香・焼合花月香」であり、「花軍香」は「志野宗信之ヲ組ム」と記されているが、あとの組香、九品については作者の表記はない。下巻「新組香十品」は、「根合香・初音香・随蝶香・新玉川香・巢立香・篇突香・曲水香・関守香・玉橋香・子日香」であり、大枝流芳の作とされる組香は「随蝶香・新玉川香・篇突香・曲水香・関守香」の五品で、「随蝶香・曲水香」が盤物である。「根合香」の作者は大枝の師匠大口含翠であり、「初音香」の作者斎藤如竹は未だ推測の域を出ないが、如竹翁という号を持つ庸軒流茶人で大坂の人、斎藤道章（貞享元年一六八四〜明和三年一七六六）かと考えている。「巢立香」の作者江芳人は大江芳人のことで、大枝の弟岩田弥三あるいは弥三兵衛（10）である。「玉橋香」の作者落葉庵直風、「子日香」の作者山本秀範については不明である。

また中巻の「花軍香・三夕香・蹴鞠香・鶯香・六儀香・鬪鷄香」、そして下巻の十品すべては、江戸で元文年刊に菊岡沾涼によりとりまとめられた『香道蘭之園』（11）附録巻に「新組香并組香異説」として収載されている。

大枝作「随蝶香」「曲水香」については後述する。同じく大枝作の「新玉川香」は、古歌に詠まれた六つの玉川（陸奥野田・武蔵多摩・近江野路・山城井出・紀伊高野・撰津玉川）を素材にしたもので、「六玉川」は江戸中期から後期にかけての邦楽・清元や箏曲にも採り入れられ（12）、鈴木春信の美人画の題材にもなっている。また「篇突香」の「へんつき」とは、『源氏物語』にも登場する（13）王朝遊戯の一つで、偏と旁を合せて文字を作る遊びのことであり、「篇突香」では「日・一・木」の三文字を香名に据え、組み合わせることで文字を作り、その文字で答える仕組である。「関守香」は、中国戦国時代の名君・孟嘗君が、弟子たちの機転に抛る鷄の鳴き真似で関守を欺き、函谷関を無事脱出したことを題材に考え

られた組香であり、孟嘗方と関守方に分れて香を聞き、「鷄」と名付けた香を関守方が聞き当てると黒星となる規則である。

## II 『香道千代の秋』（資料B・1・2・3を参照）

先述のように、大枝流芳は『香道秋の光』目録において、『香道千代の秋』を、自ら『香道秋の光』の続編と位置付けている。『香道千代の秋』上巻には、「古来より有来組香目録、香棚鏝・香元鏝の図、香道具名目、六国香并五味の事、香の十徳の事、香道流派宗匠のこと、香席でのご法度や香道で弁えるべき規則、香道三十二箇条、盤立物図」が収載されている。

「古来より有来組香目録」には、『香道秘伝』（14）収載十品、『香道滝の糸』収載十品、『香道秋の光』収載十品の他に、「中古よりあるものなり」として十品「試十炷香・宇治香・宇治名所香・異住吉香・異花月香・新古今香・続古今香・烟競香・雪月花香・異雪月花香」、「中古より有来ものなり」として十品「又雪月花香・松竹梅香・難波名所香・四章香・六哥仙香・新月香・補任香・四季香・禁裏香・異蹴鞠香」、「中古より流布の組香なり」として十組「源氏蹴鞠香・忍香・異忍香・恋題香・玉川香・異四季香・又四季香・異名所香・一二三項・異小鳥香」が挙げられている。この三十品は、『心遠齋香道叢書』後編一・二・三『古組香十品』に詳細に香組が記されている。

また「六国香并五味の事」については、『心遠齋香道叢書』新編四、元文丁巳歳（二年）八月下浣成立『香木立味考』『達味之論』と異同箇所がある。元文元年成立『香道千代の秋』では、伽羅・羅国、真那賀、真那斑、佐曾羅・寸門多羅で六種の香とし、「六国と言うには、その木所が産出国である事を確かめ

なければ弁えがたい」と異議を唱え、さらに「羅国・満刺加・蘇門答刺・伽羅の四国は唐土の書物にあるが、さそら・まなばんの二国は未だ確かな書物によって考察していかない」と述べている。

元文二年成立の『香木立味考』では、伽羅・新伽羅・羅国・真那賀・真那斑・佐曾羅・蘇門多羅・太仁・シンの考察に及んでいる。これがさらに進化して同叢書新編七『木処気味秘考』では、『桂海香志』（15）『世法録』（16）『太平御覧』（17）『三才図会』（18）などを渉猟して香名の考証、産出国の国号考証に及んでいる。五味之事についても辛・甘・苦・鹹・酸の香りの表情を詳説し、「五味の事は古人にその説はなく、中古よりその説を言い出したといっても、香を聞き習うについて都合が良いので、区々たる細説といって廃するべきではない」と持論を展開している。さらに辛・甘・苦・鹹・酸、各々一味の香についても触れている。

「香道三十二箇条」とは、『心遠斎香道叢書』新編十四『香事稽古八十八箇条略註』（元文四年成立）の初三十二箇条・中三十二箇条・後廿四箇条の内の初三十二箇条の目録のみを挙げたものである。「組香盤立物之図」は、本書収載組香で使用する立物の図とその解説である。

中巻、下巻之一及び二に新組香が十品ずつ、合計三十品が収載されている。中巻の「新組香十品」は「富士香・撰虫香・鷹狩香・三曙香・蛍香・賄弓香・定考香・初雪香・花守香・続舞楽香」で、大枝作は「三曙香」を除く九品であり、「撰虫香・鷹狩香・蛍香・賄弓香・定考香・花守香」の六品が盤物である。「三曙香」の作者三上双巒は本書『香道千代の秋』序（享保十八癸丑年正陽上浣）の筆者であり、大枝の門弟三上嘉助で双ヶ岡（京都市右京区御室双岡町）の側に住いした（19）。三上双巒の序に、先師流芳子、御家の末流を汲て、其余の諸流を集て大成し、香道の古法を起むとはかる。

とあり、大枝が流派にとられず先行香道の集大成を目していたことの証左となろう。

本書中巻収載、大枝作の組香は、虫合、鷹狩、賭弓、加階、初雪見参、舞楽といった宮中行事に取材している。大枝は「鷹狩香」盤物で、実際の鷹狩りさながらに、鷹の立物をとまらせる格はこに大緒の結びをさせるよう指示し、「賄弓香」では香を聞きはずした人が、聞き当てた人に香一炷をあげるという規則をもうけて、実際の賭弓での罰酒に替えている。虫合が主題の「撰虫香」については後述する。

下巻之一の「新組香十品」は、「紅葉香・小倉香・拾貝香・扇合香・絵合香・忍音香・長寿香・鬪草香・新鬪鶏香・投壺香」で、大枝作は「扇合香・絵合香・忍音香・鬪草香・投壺香」の五品。その内「忍音香」以外は盤物である。「紅葉香・小倉香・長寿香」は三上双巒作、「拾貝香」は江芳山作である。

大枝は、『香道秋の光』収載「中古より有来たる組香」の「鬪鶏香」が、香十種を聞く香組で「初心の徒は紛乱して聞分がたし」と懸念し、本書『香道千代の秋』『新鬪鶏香』では、香三種に改編している。この改編にあたっては、かつて志野宗信の「六儀香」が香六種を以て和歌六儀を表わし、各二包の計一二包を用いていたものを、中此より香四種各二包の計八包に改められたことを「初心の人、聞分がたきを以て、香数を減ずるものか」と考え、この「例にならひて」改めた、と記している。

下巻之一での大枝による組香は、『古今著聞集』に基づく「扇合」や「絵合」、「子規」と名付けた香を聞ければ勝ちの「忍音香」、「草合」「投壺」を扱った組香である。「扇合香」では『古今著聞集』巻第七・能書第八で登場する、行成卿が楽府を書いた黄色の地紙で黒骨の扇と同じものを、盤の立物として用意させ、勝敗記録の「香之記」も扇に記すようにと、大枝は指示している。

「鬪草香」は「草合」が主題である。『雅遊漫録』（20）巻之七、最終頁「鬪草」で、大枝は『荊楚歳

時記』(21)の文章を挙げて「百草の戯れ」について説明しているので、それを発想源にしての組香と考えられる。『雅遊漫録』巻之七「投壺」においても、大枝は多く紙数を割いているが、「投壺香」も『礼記』(22)及び司馬温公の『投壺格』(23)に想を得たものと考えられ、実際の投壺を摸した壺と矢を盤上に置き、香の聞きにしたがい挿していく。

下巻之二「新組香十品」は、「鴛鴦香・八橋香・匂集香・難波名物香・新花月香・詩句香・花名所香・金鯽香・音信香・羽衣香」で、三上双巒作「八橋香・羽衣香」以外の八品が大枝作である。その内「鴛鴦香・花名所香・金鯽香」が盤物である。したがって、『香道千代の秋』組香全三十品の内、大枝流芳によるものが二二、その内盤物が一三である。

流芳は「難波名物香」で「歌道を難波の道ともいへば、若し、歌名所香といへる事にや。今爰に難波の名物を集て組侍る」と記し、夏の蛩、秋の芦、冬の蘅、春の梅を香名に据えて、季節ごとに楽しめる組香を考案している。また「詩句香」では、漢字五文字「窓・清・晩・涼・風」を香名にして、焚き出された通りの順で答えを記すよう指示し、「右之句いかやうに聞ても詩となる五十句に変わらず」と言っている。

「金鯽香」は「金魚」がテーマの盤物である。清・陳湏子による『秘伝花鏡』(24)巻之六「養鱗介法・金魚」に記される金魚の斑色名を札裏に記し、香の聞きにしたがい、盤上を青魚・紅魚・白魚の立物を進ませる。寛延元年(一七四八)には安達嘉之が『金魚養玩草』(25)を上梓するが、江戸時代の金魚流行の背景が窺える組香である。先に挙げた『香道千代の秋』下巻之一収載「鬪草香」「投壺香」とともに、「金鯽香」は大枝の文人趣味が反映した組香と考えられる。

### Ⅲ 『香道滝の糸』

『香道滝の糸』上之巻では、米川常白による米川流香道具を紹介し、下之巻では古来より伝わる「古組香十品」の錯雑や誤謬を、大枝が訂正・補足したものが収載されている。したがってこの伝書に大枝による新組香はない。

本書収載「古組香十品」は、米川常白によって改編された三品「名所香・競馬香・矢数香」と「源氏香・三炷香・住吉香・草木香・舞楽香・四町香・煙争香」である。

「古十組」について大枝は、『心遠齋香道叢書』新編三『古十組香秘考』で詳述している。本書は「延享改元歳（一七四四）中夏再校」の識語を持ち、附録二部として「系凶香名目考」「同かへ名之考」「享保十七年（一七三二）五月五日上賀茂社競馬一覽之記」がある。

『古十組香秘考』中「鳥合香」の後に次の記述がある。

右、細川幽齋子所定、十組香之考也。并に諸家之異説伝、師伝之説奥秘まで記て、後世一流之人之迷を弁ずるのみ。——中略——

此以下、米川家に組かへられし三組之香之説、秘事等を弁じ侍る。一流之人ひろく香事之考に備ふ。

細川幽齋所定の「古十組」とは、「十炷香・花月香・宇治山香・小鳥香・郭公香・小草香・系凶香・十炷香焼合・源平香・鳥合香」である。「米川家に組かへられし三組の香之伝」とは、「古十組香惣論」に記された次の三つの組香のことである。

米川常伯世<sup>よ</sup>に出て後、香事一変す。十組香も古のもの組かへられぬ。源平を以て名所にかへ、郭公

を競馬にかへ、鳥合を矢数にかへて、家の十組となせり。今、世上、徘徊せる香道具多くは此十組を入れたり。因て此書附録に、右之三組之事も弁じ侍りぬ。今、此書に考えをしるすものは、「大口」先生の口受と余考と世上に流布せる正説、邪説ともに合考て、しるし侍る。後世同志の人の疑惑を生ぜん事を恐てなり。

「古十組」は未だ文学的主題を持たない組香と言われているものである。細川幽斎所定の一〇の組香の内、源平香を名所香に、郭公香を競馬香に、鳥合香を矢数香に取り替えて、米川常白が米川流の古十組としたのである。

『香道滝の糸』『名所香』に、大枝は次のように記している。

源平香、志野家に用ひ来りしに、寛永、正保の比、源平のあらそひ不吉を思て、貴命をうけて米川常伯子これを改て、紅白の旗を花、紅葉にうつして立かへられし、となり。源平香は双方、はた行当れは負けし方をあとへ退て、手前のはたをすゝめ行。名所香は行あたれは、行ちがひ行り。又、源平香は初より、旗立をき、当ざる人のはたを横にうこかす。名所香ははじめふせ置、聞当て後、立るなり。此違、能く味べし。

したがって盤の立物も旗ではなく、吉野の桜と龍田の紅葉である。

米川常白が「郭公香」を「競馬香」に取り替えた理由について、大枝は記していないが、「競馬香」の由来に関して次のように述べている。

按に競馬は、往古は世々にありし事なり。今は只、賀茂の五月五日の競馬をのみ、人しれり。此競馬は堀川院勅願成就ありて、天下の御祈として寛治七年に始て行るゝよし、賀茂大神宮記に見えた

り。此香は賀茂の競馬をうつす也。衣裳の事、又は初二包除去て聞事にふかき子細有。古人の意を用る事深し、味べし。二包除去事、終までに残し出香何としれざるやうの為ばかりにあらず。此香にかぎり、除に子細あり。

先述の『心遠齋香道叢書』新編三『古十組香秘考』附録「五月五日上賀茂社競馬一覽之記」において、大枝は、

享保十七年五月五日、彼地に至て、余、拝見之上委く筆記す。前年、競馬香之事に付て諸書に異説多くうたがひつきざるにより、直に拝見して、其疑を尽す。因て今爰に委く図して、他日之考にそのふ。

と記している。この成果であろうか、「競馬香」では二つの異説について解説している。それは勝負の楓を、初め赤方に挿し置き、黒方が勝てば黒方に挿し替えることは、根付きの楓を植え替える事は故なき事なので誤りとし、また早く勝負の木を越すことを初めの勝ちとし、追いつけば持となる説も誤りである、と指摘している。これに則ると『香道蘭之園』二巻収載「競馬香」は異説となる。

『香道蘭之園』二巻収載「矢数香」は『心遠齋香道叢書』の『古十組香秘考』の「矢数香」と内容が同じであるが、矢数の由来は記されていない。大枝は、「矢数」の由来を解説し、盤の目を十六間とする理由を詳述している。

矢数の事は京都大仏三十三間堂にて、慶長十一年正月十九日、石堂竹林が弟子、浅岡氏より起れり。凡、矢数香の盤の目、十六目ありて、香は十二炷あり。十二つゞけ聞時は、十六間立物の矢をやる事、矢数の儀につき、深子細あり。古人の意を用る事、みだりに見すごすべからず。

矢数の儀に関わる深き子細については未だ不明であるが、江戸時代に大流行したという通し矢を素材とした組香は、当時、今めかしいものであったものと推察する。

『香道滝の糸』では、この変更された三組の詳述と、古来より伝承の「源氏香・三炷香・住吉香・草木香・舞楽香・四町香・煙争香」の錯雑を訂正補足したものが列挙されている。個々の記述から判明したことを以下に記す。

①『香道滝の糸』『源氏香』では、現行の『源氏物語』巻順「紅梅」「竹河」が、逆の「竹川」「紅梅」である。

②「三炷香」「住吉香」は『香道蘭之園』附録巻収載「三炷香」「住吉香」と同一。

③本来「小鳥香」と香組や規則が同じ「草木香」は、『香道蘭之園』二巻収載「草木香」と方法は同じであるが、聞きの名目が異なる。

④「舞楽香」盤物は『香道蘭之園』附録巻収載「舞楽香」と同一。しかし同書四巻収載「舞楽香」とは登場する人形・香名などが異なる。いずれも素材は『源氏物語』紅葉賀・花宴巻である。

⑤「四町香」は『源氏物語』の六条院に住む女君が主題の組香で、『香道蘭之園』四巻収載「源氏四町香」と同一。

⑥「煙争香」は『香道蘭之園』七巻収載「煙競香 一名煙争香」と同一。

まず①での巻順の違いは、「源氏香」(26)を考案した際に依拠した資料にしたがい、生じた異同と考えられる。中世・近世を通じて多く愛読されたと考えられる『源氏小鏡』(27)の巻順が反映したものである。これについては第二部第四章で詳述する。

②「三炷香」について補足すると、『香道滝の糸』『香道蘭之園』ともに香之凶名は「緑樹林・尾花露・故峰雪・琴音・隣家梅」であるが、『香道蘭之園』には「又一通りあり。」として「しらせばや・高砂・都人・よそにのみ・恋しさは」が列挙されている。「尾花露・隣家梅」などは和歌の句題に拠るものと考えられる。

また「住吉香」は五炷の香名に「君が代の久しかるべきためしにはかやかみみももううゑえけけむむ住吉の松」（読人不知『詞花和歌集』巻第三賀 一七〇）の五句を付し、試みなしの「住吉の松」を聞くことに主眼を置いた組香である。『香道蘭之園』二巻にも「住吉香」があるが、これは香名「松風・月・雁金」で、聞きの名目に「忘草・松風・月・かりがね」が指定されている。

④「舞樂香」盤物人形の違いは、『香道滝の糸』『香道蘭之園』附録巻では光源氏と朧月夜、『香道蘭之園』四巻「舞樂香」は光源氏と頭中将である。

小異はあるが、これらの組香は流派意識にとらわれない頃から伝承する「古組香」であり、『香道滝の糸』『古組香十品』はすべて『香道蘭之園』にも収載されていた。但し、「三炷香」「住吉香」は附録巻に収載されているので、栗本穩置・菊岡沾涼にとつて、この二つの組香は、「古組香」でありながらも「異説の組香」という認識であったものと察する。

大枝の記述からは、個々の組香が考案された背景や、素材とされた神事などの由来が読み取れ、またその故実に忠実であろうとする彼の姿勢が窺える。

#### IV 『香道軒の玉水』（資料Cを参照）

『香道軒の玉水』上巻では、当流つまり御家流のもので、大枝が新しく意匠を凝らした火道具と新組香十品、及びその盤立物之図を載せ、下巻には、香之伝来、香席での所作に関する事、志野流の香道具について、六十一種の名香の説についても触れている。さらに附録目録に「新六十種名香名寄・和香木名よせ」を掲載している。

本書の序の筆者靈芝山人とは、大枝の友人、辰巳吉兵衛のことである（28）。この辰巳氏とは『心遠齋香道叢書』新編十『香道随筆一』（元文二年成立）の八項（5）の辰巳氏と同一人物かと察する。巻頭の聞香炉・建置合図の詩句の題者には岩田信安の「江釣隠」の号が見える。

上巻掲載の十品は「花鳥香・蠐螬香・韻室香・結手巻香・競渡香・三径香・朝暮香・三愛香・繩牽香・八陣香」で、この内「韻室香・結手巻香・三径香」以外の七品が大枝作であり、この七品の内「三愛香」以外はすべて盤物である。「韻室香」の作者は先述した大枝の弟の江芳山、「結手巻香・三径香」は大枝の門弟村井方州（28）の作である。

『拾遺愚草』収載の「後仁和寺宮花鳥十二首」に基づくと考えられる「花鳥香」と、『文机談』「駭くらべの事」に拠る「蠐螬香」、袁中郎の七言絶句「甲辰午章觀競渡」を証歌として掲げる「競渡香」については後述する。

「朝暮香」は盤物で、香の聞きにしたがい朝顔と夕顔の立物を立てていく。「繩牽香」は「正月十四日郷里の小兒大繩を引あひて勝たるを吉事とす。」とあり、盤物仕立てで一〇人の童人形が登場し、紅白の糸をないまぜにした繩を、香の聞き次第で引き合うものである。

また「八陣香」は諸葛孔明八陣の事が主題の組香で、盤は夔州府城南の石陣の図をうつしたとあるが、『八陣合変図説』（29）の八陣図と同じものを盤之図として描いている。

下巻は大枝流芳編集、靈芝山人校閲とあり、「香道伝来の事」に始まる十四項、附録に「新六十種名香名寄并小引」「和香木名よせ并小引」がある。十四項の内容は「香道伝来の事・香席不時の香の事・名香焼事・香炉の灰あらためる事・香貯をく事・香携る事・旅香炉の事・志野三の道具の事・敷紙の事・さし札の事同図・香屏風の事・二種の名香の弁・六十一種の名香の説・新焼組香之式」であり、これらは『心遠齋香道叢書』新編十四『香事稽古八十八箇条略註』の内容と重なる所が多い。初心者にも解りやすく噛み砕いて書かれている。

「新焼組香之式」は江芳山によるが、古来の焼組香の意に準えて考案されたものと解説し、焼く香の名を、「大概、四季、恋、雑と歌の組題のごとくに組合、一番の始は春の名ある香しかるべし。終は祝となるべき名ある香しかるべし」さらに、「季の名ある香少くば一炷のみにてても、季の名あるを上に置、次第に恋、雑のたぐひ、又は連歌の付あわせのごとくに名を取合たるもしかるべし。」と記している。これは組香以前の「炷継香」の系譜と考えられ、連歌の方法が香の焼組に反映した事例である。

附録「和香木名寄小引」には『小窓清記』（30）から

深山高居炉香欠くべからず。退休既に久しく、佳品乏絶の人、為に老松柏根枝葉実を取り、搗きてこれを治む。楓肪を研て、これを辱和し、つねに一丸として焚けば、亦清苦を助くるに足れり。

を引用して、この記事を「もろこしにも雑木といへども焚香となすべき証なり。」と述べ、『本草綱目』

(31) より

況んや亦、千年の老狐、千年の枯木を以て燃照するときには真形あらはす。

を引いて、「妖魔を避るの妙あり。」と記述している。大枝は「今余に流布して、好事の人のもて賞する和の香木の名を今ここに記す。」の意図により、二三種の和香木名を挙げている。元文当時の和香木流布の状況を知る貴重な資料である。

『小窓清記』の引用は、『心遠齋香道叢書』新編十三『香事千代之古道』にも見える。『香事千代之古道』は『香道軒の玉水』上巻末頁に「香道の古意古実の事どもを著す」として紹介されているが、出版はされなかった。同頁には、『心遠齋香道叢書』新編十『香道随筆一』巻末収載「江氏新組目録」の内「深緑」（組香集）も広告掲載されているが、これも出版されていない。

## 二 大枝流芳の組香の典拠

### I 「曲水香」について（『香道秋の光』下巻、図版1参照）

#### ○曲水香 小引

#### 流芳組

曲水の宴はもろこしにては、周の世より始り、我国にては顕宗天皇元年弥生上の巳の日、文人詩歌の人、東流のほとりにて盃を上より流し、その盃の我前を通らざる中に、詩を作り、酒宴をなせし故事を、写し侍る。今此香組は、

サヘギラレテ 石 遅 来 心 竊 待 牽 流 過 手 先 遮  
イシニ ヲソク キタレバ コハロ ヒソカニ マチ ヒカレテ ナガレニ ハヤク スグレハ テ マツ サヘギル

と作りし詩の意によれり。

一 四包 二 四包 三 四包

香四種也 右の内一包つゝ試に出す。

客 一包 試なし。

右試過て残十包を焼出すべし。大底十炷香のごとく口で、一炷開き也。盤は水を蒔絵にし、十行に十二目なり。六目の間に瀨あり。波を画き岩を置べし。向には桃花の立物一本を立をき、前より人数ほど金銀の盃を流すべし。始より盃ををき一炷聞て、一間つゝ行なり。客は一人にても二人にても二間たるへし。さて盃六間目の瀨に至り、七間目へ瀨を越る時、聞誤りたる人は、其次の香、聞当るとも盃を通すべからず。又其次の香を聞て後、通すべし。瀨を越る時、聞誤りし過怠なり。礙レ石遅来といふ意なり。六間目にても其次を聞当りし人は、すぐに通すべし。向の桃花の本まで早く盃至りしを勝と定むべし。

包紙は試には筆包を用ひ、出香は硯包の紙を用ゆ。文字の縁によれる也。盤の目は水の巻しにて別つ図のごとし。

大枝は『顯宗紀』の曲水の宴起源（32）についてふれ、『和漢朗詠集』「三月三日付桃」の菅原雅規の漢詩、

石に礙つて遅く来れば心窃かに待つ 流に牽かれて遡く過ぐれば手先づ遮る（33）

を証歌にして組香を考案している。この組香では、巻水蒔絵の盤を使用し、真中七間目に瀨を作り、立浪を描き、この立浪の中に岩の鋸りを置く。はじめ盃を盤の端に置き、一炷聞き

当てると一つずつ流すとし、六間目にて香を聞きちがえると、その次の香を当てても盃を進めない、という規則になっている。これは証歌の「石にさへぎられて遅く来るといふ意なり」と記している。典拠となる証歌の意を盤立物の所作、そしてルールに活かした組香と言えよう。

また試しころみの香包は、筆包の紙を使用し、本香の包紙には硯包の紙を用いるよう指示し、これは「文字の縁によれる」とする記述からは、大枝の拘りが感じられる。

## II 「撰虫香」について（『香道千代の秋』中巻、図版2参照）

### ○撰虫香せんちゅうかう

#### 流芳組

おほやけには九月に行る。あながち式ある事にはあらず。殿上人、逍遙とて嗟峨野などへむかひて虫を籠かごに撰入えらひいれて奉る。是、堀川院の御時より始れるといへり。哥うたに、色くにさが野の虫を宮人の花すり衣ころもきてぞとるなる、忠頼たじよりの歌なり。

一 すゞ虫むし 四包 二 松虫まつむし 四包  
香五種也かうごしゆなり 三 くつは虫むし 四包 四 きりくす 四包

五 はた織おり 四包 ウなし。右之内一包つゝ試しころみに出すべし。

右五包試しころみ終りて残り十五包打つまぜて、内五包取除とりのぞてのこり十包、一炷ちゆうづゝ焼出たきいす。一炷開ちゆうひらきにて勝負しやうぶをなす。連中五人れんちゆうごにんづゝ左右さゆうにわかれきくべし。連中各自一人れんちゆうめいごひとりより香五炷かうちゆうごづゝ出いし、書付かきつけの包紙つみかみ五つと、各自めいごの札ふたの紋もんと引合ひきあわせ、香かうを入置いれをき、盤上ばんじやうの名なに又引合またひきあわせてならべをく。是これを賭かとなし、香かうを聞あて当りし人ひと、

てまへかた  
手前の方より取べし。

かうあたり  
香きゝ当てもはや手前に取終て聞当し香なければ、向の香を取べし。向にも取終てなければ、是を音をきゝて虫を得ずと云なり。香終て取残せし香、盤上にあらば、各自出せし人へ返すべし。盤上の香一包有て二人にても三人にても聞当たらば、此香は香有方のむし籠へ入置、香終てきゝ多き人へ褒美につかはすべし。同じ数聞し人あらば分べし。香数わかつべき程なき時は、貴人老人少年等へ遣すべし。又盤畳紙にて大に拵置、五十の小包の惣包となし、表に虫の絵をかき裏に盤の目を書て用、虫籠は折居、青、赤二つ拵置て、籠の代に用。人形なしにこしらへ置用も、又簡雅にして俗なるぞ。立物の事、初に委し。

ふたうら  
札裏の紋

をみなへし  
女郎花 桔梗 刈萱 花薄 糸萩 白菊 龍胆 藤蘭 牽牛 露草 以上十品

ふたのおもて  
札表

すむし  
鈴虫 三枚 松虫 三枚 轡虫 三枚 蟋蟀 三枚 促織 三枚  
いしやう  
以上十五枚一人分なり。

大枝の言う「殿上人逍遥とて嵯峨野などへむかひて虫を籠に撰入て奉る。是、堀川院の御時より始めるといへり」は、『古今著聞集』巻第十九 草木第二十九の「嘉保二年八月白川上皇鳥羽殿にして前裁合の事」の後半にある、

左右の殿上人、階をはさめて欄干に候て各和歌を講じけり。一番講ぜらるゝ間、右方虫を籠に入

て、一籠たてまつりたりけり。其籠にも歌をつけたり。虫の声に聞入ききいりていと興ある事な也けり。(34)  
に拠るものと考えられる。さらに大枝は、貞治五年(一三六六)十二月二十二日、二条良基が主催した  
「公事五十番歌合」ともいわれる『年中行事歌合』二十八番左方、忠頼朝臣の和歌

色々のさかののむしを宮人の花ざり衣きてぞとるなる(35)

を挙げています。この組香は、連中が左右にわかれて聞いていく。連中は各々五包ずつ香を出して、盤の  
虫の名に合せて置いておく。これを賭物として、香を聞き当てた人は手前から取っていく。香が取り尽  
くされ、香を聞き当てても取る香がなければ、「是を音を聞きて虫を得ずという」としている。香を聞き  
終つてもまだ盤上に香が残っていた時は、虫籠へ入れ置き、聞き数の多い方へ褒美として渡すという規  
則になっている。

『古今著聞集』での「虫を籠に入れてたてまつる」が、盤上での「香を籠に入れる」という所作に反  
映していると考えられる。「盤の花は彩色絵にかくべし。界は金粉なり。」と大枝は指示しており、雛道  
具のような虫籠とともにみやびな演出の盤物と言えよう。

### Ⅲ 「花鳥香」について(『香道軒の玉水』上巻、図版3参照)

○花鳥香くわてうかう 小引 大枝流芳組

むかしより十二月の花鳥くわてうと云て定家卿ていかきやうの哥うたなどあり。世よにしる所ところなり。又また、もろこしにも花鳥争奇くわてうせうきと云  
る書しよありて、花はなと鳥とりの雅がをあらそふことをしるせり。今此組香いまこのくみかうは彼十二月の花鳥かのくわてうを立物たてものとなして、盤上ばんじやう

の勝負となし侍る。

一を花と名付四包 二を鳥と名付四包

香四種也 三を風と名付四包 四を月と名付四包

右各一包つゝ試に出す

右試四包終て、出香十二包打まぜ焼出す。花方、鳥方と左右へわかれ、きくべし。

盤上十二月に応じ、一炷ひらきにして、正月より一ヶ月づゝ十二月迄の勝負をなすべし。

花方より花の香、聞当れば二点、盤も二間すゝむべし。鳥方より鳥の香、聞当れば二点、盤も二間すゝ

む。風月の香は一点、盤も二間すゝむ。花方、鳥方、聞の数をけし合せて点数多ほど、一方よりすゝ

むべし。持ならば、互に点数ほどすゝむ。五間已上にて持となる時は、双方とも勝負の場に立置べし。

さて香をきく時章の月の場、正月ならば睦月、二月ならば如月、とある所にて香をきゝ、当たるは風月

の香にても二点、盤も二間すゝむべし。次第に十二月まで月々の勝負とすべし。記録書様、盤の凶等、

左に記す。

大枝が記す冒頭の「十二の花鳥と云て定家卿の歌などあり。」とは、次に記す、藤原定家の『拾遺愚草』  
収載の「後仁和寺宮花鳥十二首」(36)のことである。

『拾遺愚草』「後仁和寺宮花鳥十二首」

参議藤原

正月柳／内なびき春くるかぜの色なれや日をへてそむる青柳のいと

二月桜／かざしをる道行人のたもとまで桜に匂ふきさらぎの空

三月藤／ゆく春のかた見とやさく藤の花そをだに後の色のゆかりに

四月卯花／白妙の衣ほすてふ夏のきてかきねもたわにさける卯の花

五月廬橘／郭公なくやさ月のやどがほにかならず匂ふ軒のたちばな

六月常夏／おほかたの日影にいとふみな月の空さへをしきとこなつの花

七月女郎花／秋ならでたれにあひみぬをみなへし契やおきし星合の空

八月鹿鳴草／秋たけぬいかなる色とふく風にやがてうつろふもとあらの萩

九月薄／花すすき草のたもとの露けさをすてて暮行く秋のつれなさ

十月残菊／神な月しも夜の菊のにははずは秋のかたみになにをおかまし

十一月枇杷／冬の日は本草のこさぬ霜の色をはがへぬ枝の花ぞまがふる

十二月早梅／色うづむかきねの雪の花ながら年のこなたに匂ふ梅がえ

正月鶯／春きてはいく夜も過ぎぬ朝といでに鶯きある里の村竹

二月雉／かり人のかすみにたどる春の日をまどふ雉のこゑにたつらん

三月雲雀／すみれさくひばりの床にやどかりて野をなつかしみくらす春かな

四月郭公／郭公しのぶの里にさとなれよまだ卯の花のさ月待つ比

五月水鶏／まきの戸をたたくくひなの明ぼのに人やあやめの軒のうつりが

六月鶉／みじか夜のう河にのぼるかがり火のはやくすぎ行くみな月の空

七月鵲／ながき夜にはねをならぶる契とて秋待ちえたる鵲のはし

八月初雁／ながめやる秋の半もすぎの戸にまつほどしるき初かりの声

九月鵲／人めさへいとどふかくさかれぬとや冬まつ霜にうづらなくらん

十月鶴／ゆふ日影むれたつたづはさしながら時雨の雲ぞ山めぐりする

十一月千鳥／千鳥なくかもの河せの夜はの月ひとつにみがく山あゐの袖

十二月水鳥／ながめする池の氷にふる雪のかさなる年ををしの毛ごろも

この和歌は近世において「定家詠 月次花鳥 歌絵」に描かれる（37）など、人口に膾炙した和歌群で、おそらく香の連衆にとっては、共通認識とされていたのではなからうか。

組香では、花方、鳥方にわかれ、月々の和歌に詠み込まれた花と鳥の立物を、それぞれ香の聞きにしたがい盤に立てていく。香を聞く時章に合わせて、その月の香を聞き当てる点と点が二点で、盤の目も二間進めたり、また花方、鳥方で互いの聞きの数と消し合せて、盤中央の勝負の場に進める規則になっている。香数も一炷ひらき一二度で一二ヶ月に因んでいる。この花鳥香では、香札の表に花方は「青柳・紫藤・卯花・尾花・早梅」、鳥方は「春鶯・雲雀・郭公・初雁・千鳥」の文様を描くよう指示されている。一年を通してどの月にも楽しめる「月次絵」の趣向を取り入れた組香と考えられる。

#### IV 「蠟螂香」について（『香道軒の玉水』上巻、図版4参照）

この組香は、「琵琶」「西流」の師範家、藤原孝道・孝時にかかわる音楽史とそのエピソードを『大鏡』

を模した歴史物語の形式で述べた」(38)『文机談』「験くらべの事」に依拠している。この書は、説話的要素を含んだ琵琶の伝書とも言え、作者は孝時の弟子で僧侶の隆円である。

岩佐美代子によれば、「彼は文机に向かつて師説を書写する事を業としたため「文机房」の異名を得、それが書名ともなっている。」「文永年中(十一年、一二七四か)五月三日の跋文があり、なお弘安六年(一二八三)の記事があるので摺筆後多少の増補があつたかと認められる」こと、「鎌倉期に多くの音楽口伝書が成立」した中での「異色作が、『文机談』である」(39)と記述している。

大枝がなぜ「験くらべの事」に依拠した組香を創作したのか、それは不明だが、いずれにしても今回取り上げた香伝書四書の組香の内、異色の作品を原拠とした組香である。ではその記述を見ていこう。

### ○蠟螂香 小引

#### 流芳組

此組はむかし妙観といへる人と孝定と云る人と、妙音院の御前にて蠟螂の出たるに、それを中に置いて、いづれにも琵琶をひかせて我方へ引よせたらんを以て、琵琶の上手と定むべし、と仰せられける事をうつして組侍るなり。

いと名付四包      おつ      なつけ      つみ  
乙と名付四包  
香四種也      ぎやう      なつけ      つみ      右之内一包づゝ試に出す

上と名付一包試なし、客也

右試三包終て出香、十包打まぜ焼出す。一炷びらきにて勝負するなり。妙観方、孝定方と双方へわかれ、きくべし。客独聞三点、二人よりは二点たるべし。盤の上のはこびも聞に同じ。中にかまきりを置

て初はじめき、勝かちし方かたへ先まづ、蝻螂かまきりを向むかしめ、又また勝数多かすおきほど行ゆくべし。又一また炷勝ちうかてば引ひきもどすべし。聞きは双方さうほうの間数かすをけし合あはせ、多方おきかたへ聞き、勝かちし数程かずほどすゝむべし。持もちは動うごかず、終おはりに勝かちし方かたの人形にんぎやうの方かたへ蝻螂かまきりをとまらす。香かうなかなばにても蝻螂かまきりを引ひきつて勝かちたれば、盤ばんの勝負しやうぶは終おはりなり。香かうは残のこらず聞きべし。盤立物ばんたてものの図づ、左ひだりに記しるす。記録きろくは源平香げんへいかうのごとく、妙観方めうくわんがた、孝定方たかさだがたとわけて書かくべし。

この組香では盤中央に蝻螂の立物を立て、連衆は妙観方と孝定方にわかれ、香を聞き当てた方へ、蝻螂を移動させる。聞き数にしたがい双方の間で、蝻螂を引き合い、最後に聞き数の多い方が勝となり、勝ち方の人形に蝻螂を止まらせるという規則である。

『文机談』本文では、この場面はどのように描かれているのだろうか。

ある時に仰せられけるは、「蝻螂の験くらべといふなる事ぞ、けふある事にてあるなれ。いざこの事こゝろみん」とて、いもむしりといふむしをめしよせて、御ふづくゑのうゑにおかせ給ひて、「孝定と博玄と、比巴を弾きて雌雄を決すべし」と御気色ありければ、孝定はさる人にて、心えずはおぼえけれども、主君の仰せなれば、御定にまかせて弾きけり。博玄又身命をすてゝこれをひく。蝻螂この両弾を聞きて、やゝかしらをうごかして耳をそばだつ。この気色をみるに、いとゞ御興ありて、「ひげやひげや」と仰せらる。蝻螂よくよく聞き定めて後、孝定が弾ずる比巴の海老尾よりよぢのぼりて、左の指の拇のうゑに座せり。博玄いろをうしなひて、弾をとゞめつ。仰せて云はく、「この事まことなりけり。もちろんもちろん」とて入らせ給ひぬ。(40)

琵琶の弾きくらべを言いだしたのは、悪左府頼長の次男・師長で、保元の乱に連座しての土佐配流中のできごとである。彼は管絃だけでなく並はずれた才を持ち、妙音院流という一流を立てた人物である。作中の「いもむしり」は蠅螂の異称であり、また博玄とは妙観三郎のことである。この験くらべによって琵琶の名手・孝定は怒り、それ以後琵琶を廃するも、永万元年（一一六五）白河院十種供養に復活している。一方、孝定に破れた妙観は、師長の要略四巻を取り京に逃げ帰り、師長の堪気を受け、妙観が琵琶を弾く事は一切禁止する旨を、御門人一同に触れられてしまう、という顛末である。

香の勝ち方の人形に蠅螂を止まらせる所作は、琵琶の弾きくらべで、いもむしりが孝定の琵琶の海老尾をよじ登り、左指の拇の上に止まったことを活かした所作である。『文机談』が大枝の時代にどれほど読まれていたかはわからないが、蠅螂を判者にしての琵琶の弾きくらべ、という珍しい場面を盤物に再現した遊戯性の高い組香と考えられる。

#### V 競渡香について（『香道軒の玉水』上巻、図版5参照）

大枝は明代後期の詩人、袁中郎の七言絶句「甲辰午章観<sup>ル</sup>競渡」を証歌にして、「競渡香」を創作している。

『荆楚歳時記』に拠れば、

（五月）五日、競渡・菓草摘み是の日、競渡し、雑菓を採る。

按ずるに、五月五日、競渡あり。俗に屈原が汨羅に投ずるの日、其の死所を傷むが為なり。故に並びに舟楫を命じて以て之を拯う。―後略―（41）

とある。競渡とは競舟ともいい、ボートレースのことである。

守屋美都雄は、「競渡を以って楚の詩人・屈原を救うための行事とする」については「明確な断定はできない」（42）としながら、

一般には競渡の起源は屈原の投身に結びつけられる場合が多いけれども、——中略——地方によっては伝説の主人公は異なっている。

と述べ、「そこに人身御供の遺制といった想像も生まれうるわけである。」と記している。また豊穰祈念の「雨乞い」とも関係する行事であることを明記している。

この『荆楚歳時記』は元禄年間には刊行されており（43）、「鬪草香」の主題「百草の戯れ」について、大枝は『雅遊漫録』『鬪草』の項で『荆楚歳時記』の記事を挙げている。では「競渡香」の記述を見てみよう。

### ○競渡香 小引

流芳組

もろこしにて端午の日渡をあらそひ早く岸に船をこぎよせたるを勝とする戯あり。これを競渡といふ。則、古詩にも此事を作れるあり。今此組香は其事実により。

香 四種也 一 四包 二 四包 三 四包 客 三包

右之内、一包づつ試に出す。客は試なし。

右、試三包終て、残十二包、打ませ二包取除て、一包づつ、焼出す。一炷ひらきにて勝負すべし。ウは二間、一人間の差別なく、常の香の当は一間づつすむ。左右へわかれ聞べし。記録書やうは競馬香

に同じ。左方、右方と書べし。

明袁氏が競渡の詩

平湖新漲滑如油。  
我有二敵一綿三一兩幅。

又

十丈紅旛遶樹流。  
也將三裁去掛二船頭。

碧酣樓下水平谿。  
橋上橋下人如螳。

濯足池一辺日正西。  
只愁翻二却孟公堤。

端午の日に行われる実際の競渡では、早く岸に舟を漕ぎよせることが勝であるが、この盤物では、菖蒲の花を一本立て、この花を超えて先に進んだ方を勝としている。これは古来より有り来る組香「競馬香」の規則と同じである。但し「競馬香」では紅葉を立てるが、競渡は端午の催しであることにより菖蒲が立てられる。それはショウブの音が勝ち負けの勝負と相通ずるためとも察せられる。大枝は、立物の紅白の帆船の帆に、袁中郎の七言絶句を書くよう指示しているが、守屋美都雄に拠れば、

今日残っている競渡の例を見ても、龍頭の船を競う場合が多い。明の馮応京の『月令広義』巻十所引の『歳時記』にも「舟を刻して龍と為し、……便ち捷きこと龍の如し……」と見えてくる（44）。

とあり、さらに「競渡はたがいに競いて雨を呼び、水を起す龍の形を象ったものかもしれない。」と述べている。したがって、大枝は何をもって帆船を立物としたのであろうか、という疑問が残る。

また証歌とされた七言絶句「甲辰午章観<sup>レ</sup>競渡」の作者・袁中郎は明代後期の公安派（または性靈派）の優れた詩人であり、兄の伯修、弟の小修とあわせて公安の三袁と呼ばれた人である。元禄九年（一六九六）に『梨雲館類定袁中郎全集』が刊行されているので、大枝がこれを見ていた可能性があると考えられる。また袁中郎は袁宏道の名で『瓶史』（45）を書いており、これは天明元年（一七八一）に刊行されている（46）。

### 三 大枝流芳の組香と文学

『香道秋の光』下巻（上巻に大枝の組香はない）『香道千代の秋』『香道軒の玉水』、これら三書収載の組香の原拠となる文芸作品、主題について整理する（資料A・2、B・1・2・3、Cを参照されたい）。

「六玉川香」は、『拾遺和歌集』『後拾遺和歌集』『千載和歌集』『新古今和歌集』『風雅和歌集』で詠まれた六つの玉川を撰取しての組香であり、「篇突香」は『源氏物語』にも登場する文字遊び「偏つき」を素材とし、「曲水香」は『日本書紀』と『和漢朗詠集』に、そして「関守香」は鶏鳴狗盗の故事に取材した組香であった。

『香道千代の秋』中巻（資料B・1）では、富士山を主題にした「富士香」、『古今著聞集』と『年中行事歌合』から考案した「撰虫香」、蛭合戦による「蛭香」、賭弓が主題の「賄弓香」、加階を扱った「定考香」、初雪見参による「初雪香」、唐の寧王の花護による「花守香」、舞楽がテーマの「続舞楽香」があ

った。この巻には虫合、鷹狩、賭弓、加階、初雪見参、舞楽といった宮中行事に取材した組香が多かった。

『香道千代の秋』下巻之一（資料B・2）には、『古今著聞集』の逸話を素材にした「扇合香」と「絵合香」、子規の忍び音が主題の「忍音香」、『荊楚歳時記』の「鬪草」による「鬪草香」、『礼記』及び司馬温公の『投壺格』に取材した「投壺香」があった。しかも「鬪草」と「投壺」については、『雅遊漫録』でも大枝は多く紙幅を割いている。

『香道千代の秋』下巻之二（資料B・3）では、『古今著聞集』の鴛鴦譚によると考えられる「鴛鴦香」、『源氏物語』「匂兵部卿」による「匂集香」があった。また難波名物として蛭・芦・衛・梅を主題にした「難波名物香」、花・月・嵐・雲・晴が主題の「新花月香」、窓・清・晚・涼・風の漢字五文字を組合せて句を作らせる「詩句香」、花名所による「花名所香」、そして鶯・鶻・鹿・風音を聞く「音信香」というように、特定の文学作品との関わりが窺えない組香もある。珍しいものとしては、清・陳湊子による『秘伝花鏡』巻之六「養鱗介法・金魚」に取材した「金鯽香」が挙げられる。これは『香道千代の秋』下巻之一収載の「鬪草香」「投壺香」とともに、大枝の文人趣味による組香と考えられる。

『香道軒の玉水』上巻には、『拾遺愚草』「後仁和寺宮花鳥十二首」から発想した「花鳥香」、説話的要素をもつ琵琶の伝書『文机談』による「蝸螂香」、明の袁中郎の七言絶「甲辰午章観競渡」による「競渡香」、朝顔・夕顔が主題の「朝暮香」、縄引神事を盤物にした「縄牽香」、そして諸葛孔明八陣の事による「八陳香」があった。

以上列举したように、大枝は様々な文芸作品や事物、行事、故事などに素材を求めて、組香を創作し

た。組香の素材とえば和歌が多くを占めるなかで、「記紀」のような歴史的文学や、説話文学、また説話的要素を有した音楽の伝書、さらに漢詩や中国故事などにも範囲を広げている。簡潔な噛み砕いた文章表現で組香の小引を記し、連衆にとっては、時に難解なものになりかねない文芸作品を易しく解説している。大枝言うところの、女童にも聞香を身近なものとさせるために、組香を考案したのではなからうか。しかも盤物が多く、立物の形象も題材に忠実なものを求め、細部にまで意をこめる彼の姿勢が、組香に臨場感をもたせ、視覚的にも楽しめるものを生み出したと言えよう。大枝は出典文学をよく咀嚼し、組香の中にその文学世界を再現し、さらに遊戯性を加味して、文芸作品を読むことで得られる理解、享受とは異なる、文学享受の方法を実現したと考えられる。

#### おわりに

『心遠齋香道叢書』での大枝の考察は、実技作法・香道具、香木、六国五味、組香典拠などの考証に活かされ、彼の実証的に物事を捉えようとする姿勢が、香組や炷香の数、盤立物の形象、所作などの細部にまで反映していると考えられる。

第一章で詳述した大枝の『香志』における漢籍渉猟は、煎茶や花道において求めたと同様に、香文化の裏付けを必要としたためと察せられるが、殊に香道においては、その扱う香木の産地の特定と焚香の伝承経緯を明らかにしたかったものと考ええる。

大枝は組香考案に際しても、中国文献に素材を求め、文人趣味の香道を模索した。彼は学究的態度でこれら文献と対峙したと考えられ、大枝流芳の明風享受は、江戸中期の唐様流行を背景にした、表層的

明風撰取とは一線を画するものである。

## 第一部第二章 注

- 1 『香道秋の光』刊記（『香志』末尾）「杳熏堂藏版／享保十八癸丑七月吉旦／京師書坊 堀川通高辻上ル町 植村藤右衛門／東都書坊 通石町三丁目 植村藤三郎／撰陽書坊 高麗橋壺丁目 植村藤三郎」。
- 2 『香道滝の糸』刊記「享保十九甲寅正月吉旦／京師書坊 堀川通高辻上ル町 植村藤右衛門梓行／東都書坊 通石町三丁目 植村藤三郎／撰陽書坊 高麗橋壺丁目 植村藤三郎」。
- 3 『香道千代の秋』刊記「元文元丙辰七月吉旦／京師書坊 堀川通高辻上ル町 植村藤右衛門／東都書坊 通石町三丁目 植村藤三郎／撰陽書坊 高麗橋壺丁目 植村藤三郎」。
- 4 『香道軒の玉水』刊記「元文二丁巳九月吉旦／京師書坊 堀川通高辻上ル町 植村藤右衛門梓行／東都書坊 通石町三丁目 植村藤三郎／撰陽書坊 高麗橋壺丁目 植村藤三郎」。
- 5 『香道随筆一』第八項に以下の記述がある。

「津国天王寺伶人、林肥前守殿家に、古木の梅樹あり。辰巳氏、取次にて、余に名をこひ給ふ。因て梢の外と名付。これは続古今集、義孝の哥に、春風のそら成程は梅の花梢の外も香に匂ひつゝと云哥によれり。此香、享保廿一年の春、林氏より西園寺殿広幡殿へ上られ、広幡殿より右の哥を短冊に遊ばされ、林氏へ被下ける。また千種殿より 院御所へ差上られ天覧に入しとや。」
- 6 『香道秋の光』国文学研究資料館蔵マイクロ マ六・一五一・二、益田家本。国立国会図書館本一九八・九三 中本三卷合一冊。附録「香志」欠。『香志』国立国会図書館本二〇九―一〇二 中本一冊。『香道滝の糸』国文学研究資料館蔵マイクロ マ六・三七・一、益田家本。国立国会図書館本一九五

・二〇 二巻合一冊。

『香道千代の秋』国文学研究資料館蔵マイクロ マ六・一五一・三、益田家本。国立国会図書館本二〇九・一〇一 中本四巻合一冊。

『香道軒の玉水』国文学研究資料館蔵マイクロ二〇四・二三九・八 静岡県立図書館蔵 葵文庫。

7 翠川文子は、「当初予定していた『香道千代の秋』（享保十七年冬脱稿）を後まわしにして、『香道滝の糸』出版の企画を入れたのは、忍鎧の『十種香暗部山』の出版部数が少なく同種の書の需要があると見込んだ版元の判断であろう。」（『香道文献目録―所蔵館別―（香道双書 資料1）』清水書院 二〇一五年 四頁）と述べる。

8 『心遠齋香道叢書』新編一『香道会式次第』は、主人と客の香会の手順を記している。

9 江戸時代に桐間を名乗り土佐藩近習家老・奉行職などを勤めた加賀野井家の香道文献が「加賀野井家資料」として高知市民図書館に所蔵されている。資料の殆どは桐間家六代恒卓関連のもので「桐間蔵書」の押印がある。恒卓（一七二七〜一七八九）は、御家流の岩田信安（大枝流芳）に師事し、十七歳から岩田没年と考えられる寛延四年、恒卓二十五歳までの九年間の資料が残されている。資料の中には、『岩田漱芳・桐間蔵人師弟問目録』（高知市民図書館蔵 加賀井家資料六六・一三）のように、恒卓の間に信安の手の入った答書があり、遠隔地の門弟への指導の一端を見ることができるとして貴重である。翠川文子、注7同書 三六八頁。

10 注7同書、四頁。

11 序章注31参照。

- 12 江戸中期、三橋検校作曲の箏組歌。
- 13 「葵」『新編日本古典文学全集 源氏物語②』（小学館 一九九五年）七〇頁。  
「つれづれなるままに、ただこなたにて碁打ち、偏つぎなどしつ日暮らしたまふに、」。
- 14 『香道秘伝書』寛文九年（一六六九）八月野田庄右衛門刊。のち、享保五年（一七二〇）・享保一九年（一七三四）に重版。編者不明。伝書の著者は志野宗信、宗温、建部隆勝、岌翁斎宗入、翠竹庵道三等。  
香道古伝書八種と翠竹庵道三の建部隆勝顕彰文から成る。序章注25参照。
- 15 『桂海虞衡志』国立国会図書館本わ〇八二・三『説郛』卷第六二第九二冊。
- 16 『世法録』国立国会図書館本一六一・一八『皇明世法録』九二卷。
- 17 『太平御覧』国立国会図書館本な・一。
- 18 『三才図会』国立国会図書館本子・七。
- 19 注7同書、四頁。
- 20 『雅遊漫録』国立国会図書館本一・二一・八六。  
『雅遊漫録』（『日本随筆大成23』吉川弘文館 一九七四年）。
- 21 『荊楚歳時記』国立国会図書館本わ〇八二・三『説郛』卷第六九第一〇四冊。
- 22 『礼記』国立国会図書館本一・二・三・G五八K『五経』礼記四卷。
- 23 『投壺格』国立国会図書館本一六三・四『欣賞編』第一四冊。
- 24 『秘伝花鏡』国立国会図書館本特一・一七・一七。
- 25 『金魚養玩草』国立国会図書館本二四五・二一六。

- 26 「源氏香」は「源氏」の名を冠し、「源氏香之図」を有するもので、『源氏物語』の巻名を「香之図」に配した故であり、そのひとつひとつが『源氏物語』の内容と深く関わるわけではない。
- 27 『源氏小鏡』は中世から近世にかけて最も流布したといわれる『源氏物語』の梗概書で、岩坪健『研究叢書』『源氏小鏡』諸本集成』（和泉書院 二〇〇五年）に拠れば、六系統一三本が見られる。
- 28 注7 同書、四頁。
- 29 『八陣合変図説』国立国会図書館本わ〇八二一五『学津討原』第九集第一五〇冊。
- 30 『小窓清記』は不明。
- 31 『本草綱目』国立国会図書館本W三九一―N四〇（一四五）。
- 32 顕宗紀にその記事があるが、持統五年三月甲戌条（三日）の「宴<sub>三</sub>公卿於西<sub>二</sub>庁<sub>一</sub>」がその初例か。『新日本古典文学大系』12 続日本紀一』（岩波書店 一九八九年）補注2・三一「曲水の宴」三〇四頁。
- 33 『新編日本古典文学全集』19 和漢朗詠集』小学館、一九九九年、三八頁。
- 34 『日本古典文学大系』84 古今著聞集』岩波書店、一九六六年、五〇二頁。
- 35 『新編国歌大観』第五卷、角川書店、一九八七年、七二三頁。
- 36 『新編国歌大観』第三卷、角川書店、一九八五年、八一三頁。
- 37 武野恵「近世における定家詠月次花鳥歌絵の展開―吉村孝敬作品を中心に―」（『MUSEUM（東京国立博物館美術誌）』東京国立博物館、一九八五年九月）五頁。
- 「江戸時代の定家詠月次花鳥歌絵の遺品は、筆者が全体像を把握できただけでも十余例にのぼり、作者の流派も、土佐派、住吉派、狩野派、琳派、円山派と広範にわたっている。」

- 38 岩佐美代子『文机談全注釈』（笠間書院、二〇〇七年）四一五頁。
- 39 注 38 同書、四一四～四一五頁。
- 40 注 38 同書、三六二～三六三頁。
- 41 守屋美都雄訳注『東洋文庫 324 荆楚歳時記』（平凡社、一九七八年）一四九頁。
- 42 注 41 同書、一五四頁。
- 43 長澤規矩也『和刻本漢籍分類目錄増補補正版』（汲古書院、二〇〇六年）八三頁。
- 44 注 41 同書、一五二頁。
- 45 『瓶史』国立国会図書館本わ〇八二二三『説郛』卷第四〇第二三三冊。
- 46 注 43 同書、一二九頁。

資料 A - 1 『香道秋の光』中巻 組香一覽

※ 網掛けは『香道蘭之園』附録巻「新組香并組香異説」にも掲載。

組香名	組香作者	題材	出典	香組	花軍香 志野宗信 花軍 (玄宗と楊貴妃)	古今香 不明 歌・鶯・蛙・ 古今和歌集の歌人	吳越香 不明 中国春秋戦国時代の 吳・越国の対立	三夕香 不明 三夕の歌	蹴鞠香 不明 蹴鞠	鶯香 不明 歳寒の三友 「松竹梅」 鶯	六儀香 不明 和歌三神のうち 住吉大社・ 玉津嶋神社	星合香 不明 星合	鬪鶏香 不明 鬪鶏	焼合 不明 花月・嵐	花月香
				香組 盤物 初香一柱「花合」 のち二柱開き八度		二柱開き五度 『古今和歌集』 「仮名序」 (紀貫之)		盤物・香組十柱香 一柱開き	『新古今和歌集』 (寂蓮・西行・ 藤原定家)	盤物 三十柱の三柱過ぎ てウ鶯をまぜて聞 く一柱開き	和歌六歌体 (短歌・長歌・ 混本歌・折句・ 俳諧歌・旋頭歌)	七夕伝説	宮中年中行事 (三月三日)		秘事師伝 二柱ずつ焼合二度

資料A-2 『香道秋の光』下巻 組香一覽

※ゴシックは大枝作で五組、内盤物は二組。網掛けは『香道蘭之園』附録巻「新組香并組香異説」にも掲載。

組香名	組香作者	題材	出典	香組
根合香	大口含翠	菖蒲根合 和歌の題 菖蒲・ 郭公・早苗・恋祝	『古今著聞集』 巻第十九 草木第廿九	盤物・二炷除け置き 一炷開き 六度 持になる時 除け置き 二炷にて勝負
初音香	斎藤如竹	梅（紅白）に鶯		盤物・初香「初音」聞いて折居 に札を入れ置き最後に開く 二炷目より一炷開き十度
随蝶香	大枝流芳	明皇蝶幸伝説	『開元天寶遺事』 「随蝶所幸」	盤物・十二炷より四炷除き一 炷開き八度 残り四炷より二 炷焚合「連理」二炷は捨香
新玉川香	大枝流芳	六玉川の和歌	『拾遺和歌集』（よみ人しらず） 『後拾遺和歌集』（相模） 『千載和歌集』（源俊賴） 『新古今和歌集』（藤原俊成・能因） 『風雅和歌集』（弘法大師）	季の歌が客香 六炷開き
奥立香	江芳山	時鳥の鶯への托卵	『万葉集』	盤物・十二炷之内 二炷を雌雄 客香・鶯一炷で三炷開き 札を 折居に入れ置きこの後三炷目 にて開く これを奥籠といふ その後 一炷開き七度
篇突香	大枝流芳	偏つき(文字遊び)	（『源氏物語』か）	二炷ずつ焼合三度 又は一炷 開き六度 一炷開き
曲水香	大枝流芳	顯宗天皇元年弥生 上巳、曲水の宴	『日本書紀』 『和漢朗詠集』 「三月三日付桃」菅原雅規の漢詩	盤物 香組十炷香
閑守香	大枝流芳	鶏鳴狗盜の故事		六炷開き 閑守方は客香・ 鶏を聞くと黒星
玉橋香	落葉庵直風	天浮橋・雲の梯・ 露の玉橋・占問橋	七夕の星合	一炷開き七度
子日香	山本秀範	小松引き 和歌の五儀	『拾遺和歌集』 『六家秘抄』	盤物・一炷開き五度

※ゴシックは大枝作で九組、その内盤物は六組。

組香名	組香作者	富士香	題材	出典	香組
鷹狩香	大枝流芳	鷹狩	『日本書紀』 仁德天皇四十二年秋九月、鷹甘部起源	盤物 一炷開き十度 二炷捲香	盤物 一炷開き十度 二炷捲香
撰虫香	大枝流芳	虫合	『古今著聞集』巻第十九 草木第廿九 嘉保二年八月白川上皇鳥羽殿にて前裁合の事 『年中行事歌合』二十八番 左 撰虫 (忠頼朝臣) 人を嗜とし、当りの 人の褒美とする	盤物・捨香五包一 炷開き十度 連中 各自五炷出しこ	盤物・捨香五包一 炷開き十度 二炷捲香
三噌香	三上双巒	『秋篠月清集』(藤原良経) 『千五百番歌合』(親阿・藤原俊成) 『拾遺愚草』(藤原定家)	一炷開き三度 二炷捲香	盤物 二炷開き五度	盤物 二炷開き五度
當香	大枝流芳	當合戦		盤物 一炷開き十三度 香一炷瓶子折形に 入れ 勝の方へつ かわす 罰酒の意	盤物 一炷開き十二度
賭弓香	大枝流芳	賭弓 (鏡射) 宮中年中行事(二月十八日)	盤物 一炷開き十三度 香一炷瓶子折形に 入れ 勝の方へつ かわす 罰酒の意	盤物 一炷開き十二度	盤物 一炷開き十二度
定考香	大枝流芳	六位以上 の加階		盤物 一炷開き十度	盤物 一炷開き十度
初嘗香	大枝流芳	初嘗見参		盤物 一炷開き六度	盤物 一炷開き六度
花守香	大枝流芳	唐寧王の 花護			
統舞楽香	大枝流芳	舞楽			

資料B - 2 『香道千代の秋』下巻之一 組香一覽

※ゴシツクは大枝作で五組、その内盤物は四組、傍線は大枝組替。

組香名	組香作者	題材	出典	香組	紅葉香	三上双轡	一炷聞き五度	紅葉香	三上双轡	百人一首	伊勢海 催馬楽	扇合	『古今著聞集』卷第七 能書第八 殿上扇合に行成楽府要文を書きて 敬感に預かる事并びに伊房能筆の事	扇合	大枝流芳	拾貝香	江芳山	大枝流芳	扇合	『古今著聞集』 卷第十一 画図第十六 永承五年四月麗景殿女御絵合の事	一炷聞き四度、これを卯月 と名付け、客香「子規」を聞 けば忍膏、一炷聞き五度、こ れを五月と名付け「子規」を 聞けば己時と記録	盤物 一炷聞き七度 彭祖七百歳に因む	長寿香	三上双轡	菊蕊童	忍音香	大枝流芳	子規の忍び音	一炷聞き四度、これを卯月 と名付け、客香「子規」を聞 けば忍膏、一炷聞き五度、こ れを五月と名付け「子規」を 聞けば己時と記録	盤物 一炷聞き七度 彭祖七百歳に因む	盤物 一炷聞き十度	閼草香	大枝流芳	閼草 草合とも	『荆楚歲時記』(注・杜公瞻 とらせん) 『雅遊漫録』(大枝流芳)	盤物 一炷聞き十度	閼草香	大枝流芳	閼草 草合とも	宮中年中行事	新閼草香	大枝流芳 組替	大枝流芳	投壺香	大枝流芳	『礼記』 『投壺格』(司馬溫公)	盤物 一炷聞き十二度 十二は箭の數に因む 客香「貫耳」 初香当りを「有初」 終一炷当りを「有終」 全当りを「全壺」 当らずを「敗壺」と名付く
-----	------	----	----	----	-----	------	--------	-----	------	------	------------	----	--	----	------	-----	-----	------	----	--	---	-----------------------	-----	------	-----	-----	------	--------	---	-----------------------	-----------	-----	------	---------	--	-----------	-----	------	---------	--------	------	------------	------	-----	------	---------------------	--

資料B - 3 『香道千代の秋』下巻之二 組香一覽

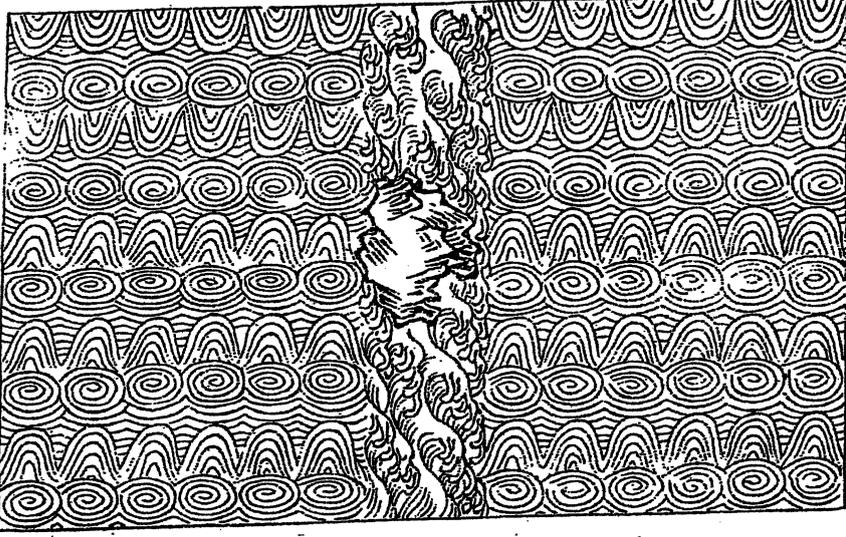
※ゴシツクは大枝作で八組、その内盤物は三組。

組香名	組香作者	大枝流芳	鶴齋譚か	『古今著聞集』卷第二十 魚虫禽獸第三十 馬允其陸奥国赤沼の 「雌雄」と定め 立物の鴛 鴛も番いで動く	八橋香	三上双巒	八橋「かきつばた」	『伊勢物語』 第九段「東下り」	一柱聞き八度	一柱聞き三度 三柱捨香	季の香一柱増しの五柱とし	一柱聞き五度	一柱聞き五度	一柱聞き五度	盤物 香組十柱香 連中二人組を	『古今著聞集』卷第二十 魚虫禽獸第三十 馬允其陸奥国赤沼の 「雌雄」と定め 立物の鴛 鴛も番いで動く	香組
鴛齋香	大枝流芳	鶴齋譚か	『古今著聞集』卷第二十 魚虫禽獸第三十 馬允其陸奥国赤沼の 「雌雄」と定め 立物の鴛 鴛も番いで動く	一柱聞き八度	八橋香	三上双巒	八橋「かきつばた」	『伊勢物語』 第九段「東下り」	一柱聞き三度 三柱捨香	季の香一柱増しの五柱とし	一柱聞き五度	一柱聞き五度	一柱聞き五度	盤物 香組十柱香 連中二人組を	『古今著聞集』卷第二十 魚虫禽獸第三十 馬允其陸奥国赤沼の 「雌雄」と定め 立物の鴛 鴛も番いで動く	香組	
句集香	大枝流芳	句兵部卿	『源氏物語』(紫式部) 「句兵部卿」	一柱聞き三度 三柱捨香	句集香	大枝流芳	句兵部卿	『源氏物語』(紫式部) 「句兵部卿」	一柱聞き三度 三柱捨香	季の香一柱増しの五柱とし	一柱聞き五度	一柱聞き五度	一柱聞き五度	盤物 香組十柱香 連中二人組を	『源氏物語』(紫式部) 「句兵部卿」	句集香	
難波名物香	大枝流芳	難波の名物 蛭・芦・衛・梅	難波の名物 蛭・芦・衛・梅	一柱聞き五度	難波名物香	大枝流芳	難波の名物 蛭・芦・衛・梅	難波の名物 蛭・芦・衛・梅	一柱聞き五度	一柱聞き五度	一柱聞き五度	一柱聞き五度	一柱聞き五度	盤物 香組十柱香 連中二人組を	難波の名物 蛭・芦・衛・梅	難波名物香	
新花月香	大枝流芳	花・月・嵐・雲・晴	花・月・嵐・雲・晴	一柱聞き五度	新花月香	大枝流芳	花・月・嵐・雲・晴	花・月・嵐・雲・晴	一柱聞き五度	一柱聞き五度	一柱聞き五度	一柱聞き五度	一柱聞き五度	盤物 香組十柱香 連中二人組を	花・月・嵐・雲・晴	新花月香	
詩句香	大枝流芳	窓・清・晩・涼・風	窓・清・晩・涼・風	一柱聞き五度	詩句香	大枝流芳	窓・清・晩・涼・風	窓・清・晩・涼・風	一柱聞き五度	一柱聞き五度	一柱聞き五度	一柱聞き五度	一柱聞き五度	盤物 香組十柱香 連中二人組を	窓・清・晩・涼・風	詩句香	
花名所香	大枝流芳	花名所 霧谷・ 芝山・嵐・句桜	花名所 霧谷・ 芝山・嵐・句桜	一柱聞き十度	花名所香	大枝流芳	花名所 霧谷・ 芝山・嵐・句桜	花名所 霧谷・ 芝山・嵐・句桜	一柱聞き十度	一柱聞き十度	一柱聞き十度	一柱聞き十度	一柱聞き十度	盤物 香組十柱香 連中二人組を	花名所 霧谷・ 芝山・嵐・句桜	花名所香	
金魚香	大枝流芳	金魚	『秘伝花鏡』卷之六 「養鱗介法・金魚」 陳湊子	一柱聞き八度	金魚香	大枝流芳	金魚	『秘伝花鏡』卷之六 「養鱗介法・金魚」 陳湊子	一柱聞き八度	一柱聞き八度	一柱聞き八度	一柱聞き八度	一柱聞き八度	盤物 香組十柱香 連中二人組を	『秘伝花鏡』卷之六 「養鱗介法・金魚」 陳湊子	金魚香	
音信香	大枝流芳	鶯・鶉・鹿・風音	鶯・鶉・鹿・風音	一柱聞き八度	音信香	大枝流芳	鶯・鶉・鹿・風音	鶯・鶉・鹿・風音	一柱聞き八度	一柱聞き八度	一柱聞き八度	一柱聞き八度	一柱聞き八度	盤物 香組十柱香 連中二人組を	鶯・鶉・鹿・風音	音信香	
羽衣香	三上双巒	三保の松原 羽衣伝説 鳥の女房	『捜神記』(千寶) 天人方 釣人方に別れ羽衣 を取り合う	一柱聞き八度	羽衣香	三上双巒	三保の松原 羽衣伝説 鳥の女房	『捜神記』(千寶) 天人方 釣人方に別れ羽衣 を取り合う	一柱聞き八度	一柱聞き八度	一柱聞き八度	一柱聞き八度	一柱聞き八度	盤物 香組十柱香 連中二人組を	『捜神記』(千寶) 天人方 釣人方に別れ羽衣 を取り合う	羽衣香	

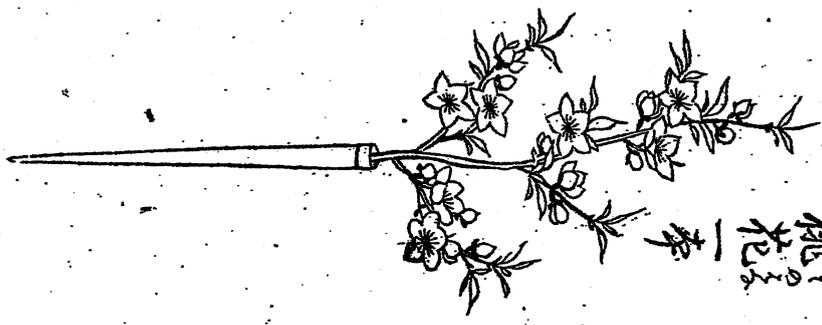
資料C『香道軒の玉水』上巻 組香一覽

※ゴシツクは大枝作で七組、その内盤物は六組。

組香名	組香作者	大枝流芳	花鳥風月	題材	出典	香組
花鳥香	大枝流芳	花鳥風月	『拾遺農草』 「後仁和寺宮花鳥十二首」 (藤原定家) 『花鳥争奇』(志讓)			盤物 一炷開き十二度
端榔香	大枝流芳	験争事 (土佐端榔の 験くらべのこと)	『文机談』(隆円)			盤物 香組十炷香
韻室香	江芳山	韻室	『源氏物語』「賢木」(柴式部) 『三体詩』「華清宮」(杜常)		一炷開き四度 記録の 詩は韻字を除いて書く	
緒手卷香	村井方州	しづのをだまき	『伊勢物語』 第三十二段「倭文の苧環」		無試十炷香 後試を 聞いて本香を考える	
龍渡香	大枝流芳	龍渡	七言絶句「甲辰午節龍渡」 (袁中郎)		盤物 一炷開き十度 二炷捨香	
三径香	村井方州	三径 松菊猶存	蔣詡の故事 歸去來辭(陶淵明)		一炷開き十二度 二炷除け置くは 松菊猶存の義	
朝暮香	大枝流芳	朝顔・夕顔・ 朝露・夕霧			盤物 一炷開き十度	
三愛香	大枝流芳	酒・花・香	『三愛記』(肖柏)		一炷開き三度 六炷捨香	
纏翠香	大枝流芳	小正月纏引き	縄引神事か		盤物 香組十炷香	
八陣香	大枝流芳	諸葛孔明 八陣の事	『八陣合姿図説』(龍正撰) 夔州府城南石陣図		盤物 一炷開き十度 一炷捨香 連中は八人	



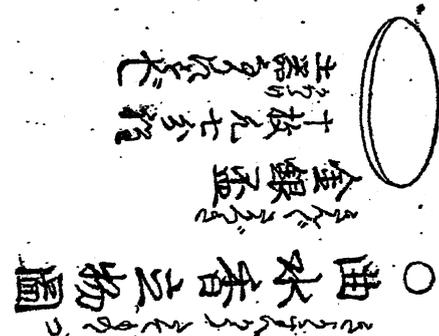
图八  
横十画中二横六  
竖三十画



桃花一季



卷三



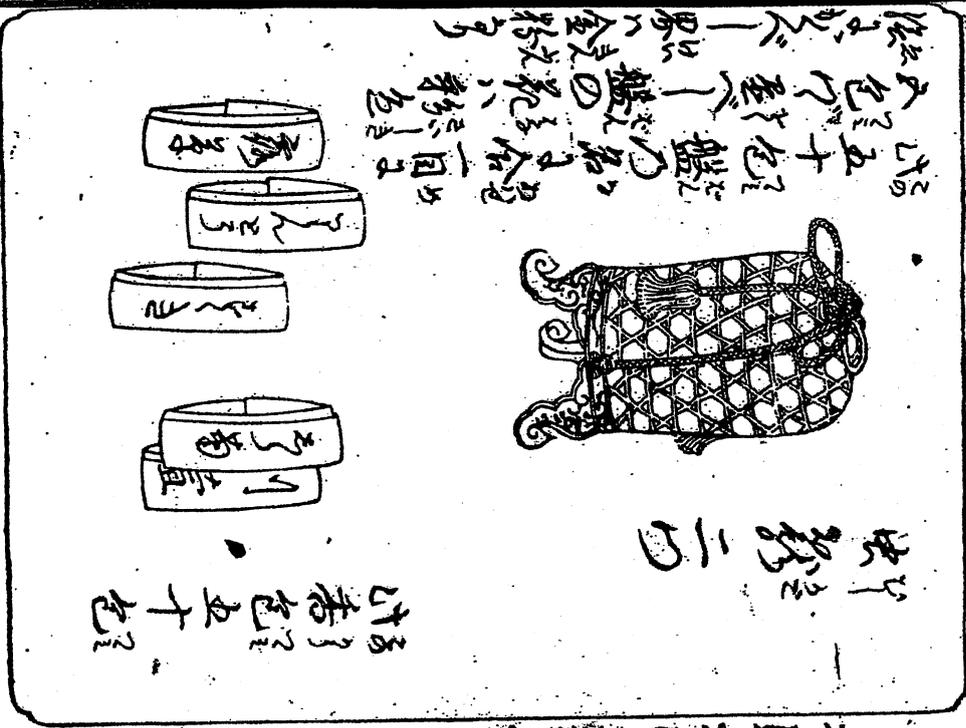
曲水香物图

金銀  
十枚九寸  
生器  
十枚九寸

上十九

上十九

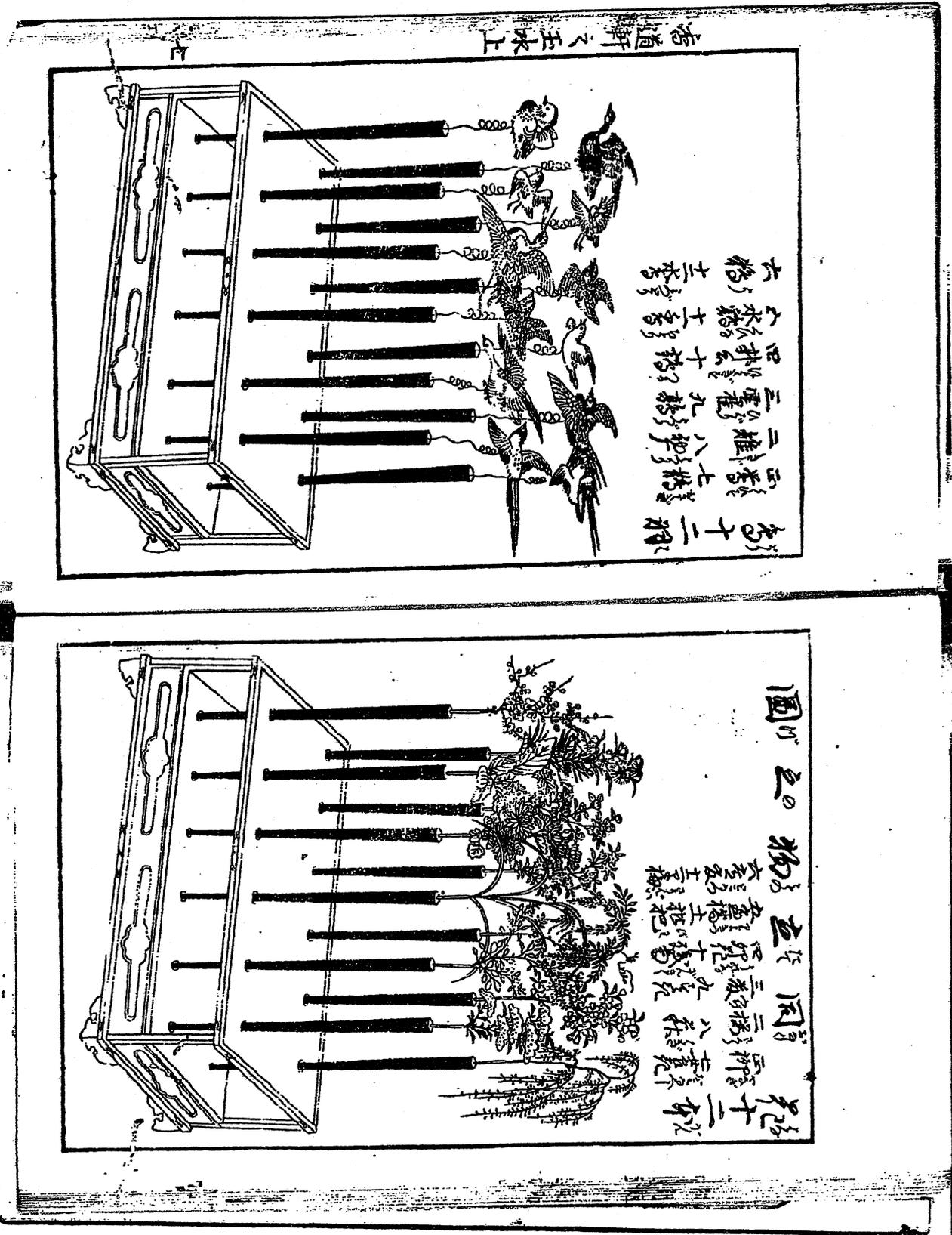
五十二



撰虫香盤之圖

松	松	松	松	松
松	松	松	松	松

五十二



香道軒之五水上  
 十二根  
 三香 七根  
 二雄 八根  
 三雀 九根  
 四排 十根  
 五松 十一根  
 六松 十二根

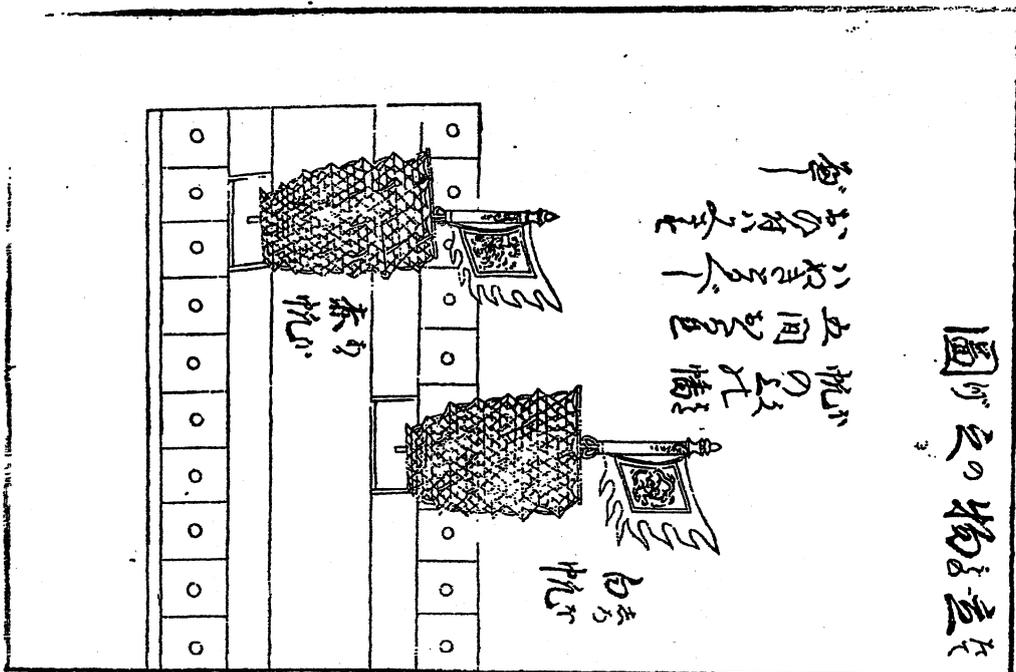
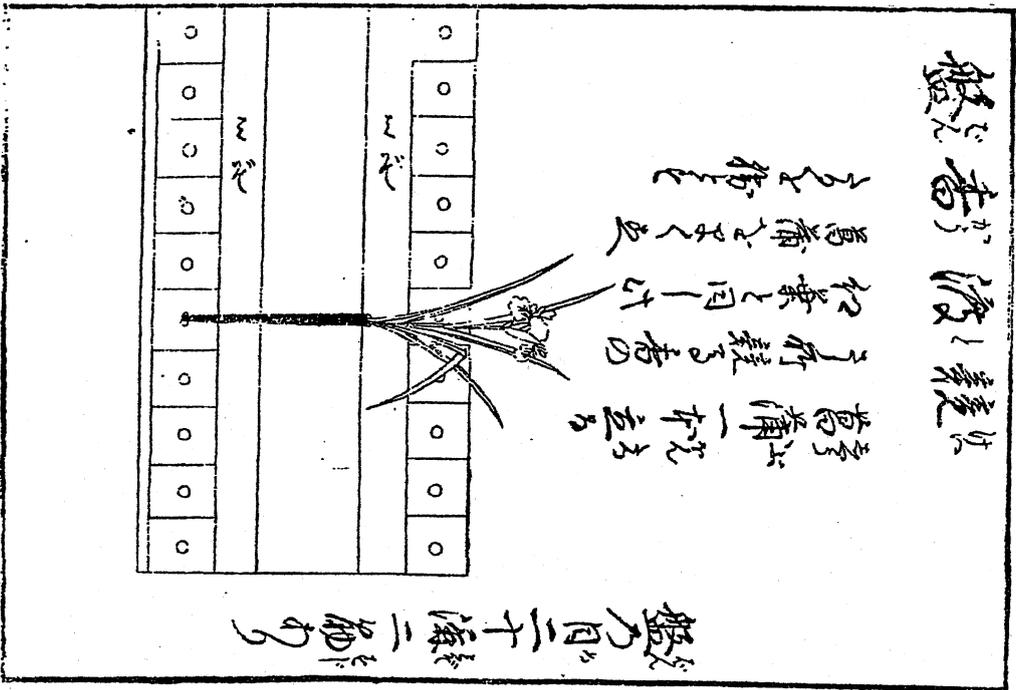
花鳥香  
 十二根  
 一松 十一根  
 二雀 十根  
 三雀 九根  
 四雀 八根  
 五雀 七根  
 六雀 六根  
 七雀 五根

上七才

上六才







右の帆二川子乃と舟一舟あり

新張油十丈紅橋流

我省敵隊二兩橋也將裁去掛帆頭

碧閣樓下水車濯足池名曰西

橋上橋下人如樓只慈翻却亟公擬

第一部第三章 『香名引歌之書』——香名と引歌、和歌を中心に——

はじめに

本章及び次章では『心遠齋香道叢書』後編五『香名引歌之書』(1)を精査して、香名と引歌の関係を探る。

本書は「六十一種之名香」(五九種)「追加」(三三種)「右之外名香」(三〇種)「一木四銘・勅名香」(一一種)として計一三三種の香名を挙げ、その内一〇四種に対し、合わせて八〇首の和歌、二五首の漢詩等を記している。これらは香名の由来として示されたものと考えられ、和歌は『新古今和歌集』に拠るものが二五首と多く、他の勅撰集からも採用され、『拾遺愚草』などの私家集や『伊勢物語』『源氏物語』の歌もみられる。但し今のところ、六首は典拠不明である。漢詩二五首は、唐詩や宋詩等に拠り、典拠不明は一首である。

これらの和歌や漢詩は、一木賞翫から証歌を持つ組香の誕生へと至る、香道における文学受容のひとつの例と考えられる。これらの引歌(2)が、香りの印象を伝えるにあたっていかに機能したのか、を考察したい。本章では和歌について扱い、漢詩については次章で扱う。

まず『香名引歌之書』の概要を説明した上で、香木に和歌のイメージを重ねて享受した例として『五月雨之記』での香り、和歌、香名の関係と、「一木四銘」における香名と引歌の関係を確認する。その後『香名引歌之書』収載の『新古今和歌集』に依拠する和歌二五首を、「にほひ」「香」「かをる」等の語を含む一首と、それらを含まない一四首に分けて考察し、恋の和歌一〇首についても同様の考察を行う。

なお、『香名引歌之書』の調査にあたり、実践女子大学日野図書館蔵『心遠斎香道叢書』後編五を底本として、同内容の国文学研究資料館蔵『香名引歌之書』宮崎詮恭書写本(3)、及び国立国会図書館蔵『名香之記』(4) 収載「香名引証」を参照した。ほかに国立国会図書館蔵『香名引歌考』(5) を検討したが、同書は収載香種三三九種と多いものの、引歌として和歌・漢詩を記すのは内一六三種で、未完成である。引歌も『香名引歌之書』とは異なるものが多く、「一木四銘」の内の「藤袴」を不用とし、勅名香として「フチハカマ蘭三種有」とするなど、『香名引歌之書』とは隔たりのある書である。

## 一 『香名引歌之書』の概要

『香名引歌之書』には以下の識語がある。

右香名引証の書は大川先生より伝ふる所なり。尤誰人の著せる事をしらず。余世上において所々にて是を見る。中古の人の集し書なるべし。其中、うたかはしき事多し。凡香の名の拠を考るに、

太子之納め給ひ法隆寺に有赤梅檀を太子、法隆寺など名付、チウセン蘭奢侍を東大寺と呼、中川和尚の取

て帰朝せられし香をナカガハ中川と名付るの類は其拠正し。其餘此類多しといへども逐一に知るべからず。

今、此書に附る詩歌牽合附会多し。其上広く歌書を見ざる人にや不都合の歌のみ多しといへども、中世より伝る書なればしばらく写して、書中の大意をこゝに記し侍る。

元文三年暮冬上浣再清書

岩信漱芳父記

(花押)

右に拠れば、本書は大枝流芳の香道の師、大口含翠所伝の書であり、中古の人が集めたものであろうこと、著者は広く歌書を見ていなかったらしく付会の歌が多いと記している。「中世より伝る書なれば」の中世が、室町時代頃をさすと考えるならば、本書は、香道が創成されたといわれる室町時代で、六十一種名香を選定した志野宗信の生存期間(室町中期～後期)以降、江戸初期前後までに形作られたものと考えられる。ただし「右之外名香」末尾の「瑞香木」の後に、「賀茂より天和年中に出る岡本備中守やしきより天開アリ」の注記があるので、現在の形は天和以降のものであるが、末尾にあることから加筆の可能性が推測される。

大枝流芳は識語に、元文三年(一七三八)暮冬に再び清書した、と記している。その後、本書は大枝の弟子・宮崎詮恭により寛保二年(一七四二)に書写(注3参照)され、さらに大枝の皆伝の門弟・樋口淳叟道与を経て、明和九年(一七七二)に不朽斎源忠行により書写(注4参照)される。要するにこれらは、師資相伝の産物である。

では『香名引歌之書』の概要を確認する。本書は「六十一種之名香」「追加」「右之外名香」から成る(6)。和歌については参考資料1を、漢詩については参考資料2を、また【表1】『香名引歌之書』引用和歌典拠別一覧、【表2】『香名引歌之書』引用漢詩典拠別一覧、及び和歌を部立分類した【表3】『香

名引歌之書』引用和歌部立分類も併せて参照されたい。【表3】では（ ）内に、「にほひ」「香」「かほる」などの語を含まない和歌の数を示した。では「六十一種の名香」から確認する。

#### 「六十一種之名香」

「名香」とは茶道でいうところの「名物」、つまり由緒ある優れたものという意味を冠した最上質の香である。しかも最も重視されるのが、室町幕府八代將軍足利義政の人命により志野宗信が選んだ六十一種類の名香であり、これは三条西実隆が選んだ六十六種の名香をもとに、選ばれたと伝えられている。

「六十一種之名香」には五九種の香が登場し、その内、和歌を引歌とするもの二〇種、但しこの内一つの香が二首の引歌を持つものが二種（「富士烟」と「菖蒲」）あり、都合二二首である。漢詩を引歌とするものは一六種、その内和歌と漢詩の両方を引歌とするもの二種、引歌なしのもの一五種、香名由来を記したものの八種である。

#### 「追加」

「追加」収載三三種の香名には、「一木四銘」で有名な「柴舟」「初音」も含まれる。しかし同名だからといって、それらが「一木四銘」の香木と同一であると断言はできない。和歌を引歌とするもの二種、漢詩を引歌とするもの六種、和歌と漢詩の両方を引歌とするもの五種、引歌のないもの一種である。

和歌二六首の内、香名「郭公」と「初音」の引歌は同一で、実数二五首となる。なお「端午」の引歌は、「六十一種之名香」の「菖蒲」の引歌二首の内『拾遺愚草』の和歌に同じである。

#### 「右之外名香」

「右之外名香」三〇種の内、和歌を引歌とするものが二七種、引歌なしのもの三種で（7）、漢詩は一首も挙っていない。この二七種の内、香名「梅かえ」の引歌は「六十一種之名香」の「月」と同歌であり、「煙くらへ」の引歌は「六十一種之名香」の「富士烟」と同歌である。

#### 「二木四銘・勅名香」

「一木四銘」（一つの香木が四つの名を持つ）四種と「勅名香」（特定の香木に天皇や上皇が固有の名を付したもの）七種で引歌一首である。なお「一木四銘」「初音」の引歌は、本書「追加」の「郭公」と同歌で、「柴舟」の引歌も、「追加」の「柴舟」と同歌である。また漢詩の引歌はない。

一木四銘とは、もとは一つの香木であった伽羅に四つの銘が付けられたことに由来するもので、その銘は「柴舟」「白菊」「初音」「藤袴」（8）であり、後水尾天皇、小堀遠州、伊達政宗、細川忠興が名付人とされているが、誰がどの銘を付け、どれを所持したかについては諸説ある。

勅名香については、「後水尾院香に名つけさせ玉ふ御製」（9）として、「花の色」「春の山風」「蝉の羽衣」「五月の空」「はなすゝき」「小夜衣」「志」が引歌とともに挙げられる。

杉本文太郎は『香道』（10）で、「後陽成院から引歌証詩等にて、香銘を付せられ、後水尾院、後西院に至って、専ら引歌に依ることが行はれた。」と述べ、これらの香名を挙げているが、個々についていずれの勅名かの言及はない（11）。

【表1】『香名引歌之書』引用和歌典拠別一覧を見ると、八代集からもなく歌が引かれていること、中でも『新古今和歌集』からの引歌が二五首と多いこと、『続千載和歌集』（12）以降の歌集からの引歌は

ないことに気付く。また【表3】『香名引歌之書』引用和歌部立分類によれば、「にほひ」「香」「かをる」の語を含んだ引歌は、全引歌八〇首の内三九首を占める。香りの印象を語る和歌であるため「匂ふ」や「香る」などの語を含むものが八〇首のほぼ半数を占めるが、それらは「六十一種之名香」「追加」の四六首中に三二首と集中しており、「右之外名香」「一木四銘と勅名香」では三四首中七首に過ぎない。このことは、「右之外名香」には漢詩が一首も挙がっていないことなどと併せ、少なくとも「右之外名香」の部分は他の編者の手になることを推測させる。

「にほひ」「香」「かをる」の語を含まない引歌四一首は、「六十一種之名香」に八首、「追加」に六首、「右之外名香」では二五首中二四首、「一木四銘・勅名香」では三首である。

これら四一首中、部立分類不明八首と典拠不明の二首を除いた残り三一首を部立分類すると、恋歌が一〇首で最も多い。要するに『香名引歌之書』収載の恋の和歌一〇首全ては、直接香りを表現する言葉「にほひ」「香」「かをる」を持たない和歌である。

【表2】『香名引歌之書』引用漢詩典拠別一覧によれば、漢詩は「六十一種之名香」「追加」合せて二七首で、今のところその内一六首の典拠が判明している。和歌数八〇首に比すと、漢詩二七首は約三割に過ぎないが、「秋風辞」や『白氏文集』、北宋の王安石、蘇軾、黄庭堅、元の禅僧、了庵清欲等による詩が引用され、『三体詩』に拠るものが三首ある等、知名度の高い作品からの採用であると考えられる。また和歌とともに引歌とされているものが、七首（13）ある。

## 二 『五月雨之記』にみる香りと和歌そして香名

『五月雨之記』は著者未詳の書で、『東山殿御香合』と称する伝本もある。文明一〇年（一四七八）十一月十六日「六種薫物合」と、足利義政主催による同一一年五月二二日「六番香合」が記録されている。但し、判詞は後日書かれたとされ、香会の出席者は記されていない。大枝流芳も『東山殿御香合』と題して「五月雨之記」を編集し寛延元年（一七四八）に刊行している（14）。

香合とは左方、右方に分かれて香木を炷きその優劣を決める遊びである。室町時代初期から徐々に始まったといわれ、参加者が香木を持ち寄り、二人ずつ左右に分かれて名を隠して香木を炷き、香木の種類や名を聞き分け優劣を判定する。香木の善し悪しだけでなく、名や名の由来となる和歌が重要な要素となる。

『香名引歌之書』で『新古今和歌集』を典拠とする二五首の内、「追加」の香名「梅月」の引歌（康資王母）は、『五月雨之記』「六番香合」二番左「ゆきの袖」の香名由来の和歌として登場している。「六番香合」二番左「ゆきの袖」、右「かはら屋」の記述から、香木と和歌、そして香名をめぐる判定がいかに行われたかを確認する。

二番

左 持

雪のそで

右

かはらや

左の香。むめのにほひなどきくこゝちし侍る。すがりすこしにほひうすく侍るなり。右の香。さしとをすやうなるつよきゝ香なり。これはすがりもよろし、しかりとはいへども。左の香には風流なるにほひあり。是もまた香おなじほどなるべし。

左雪の袖は

新古春上康資王母

むめちらす風もこえてや吹つらむかほれる雪の袖にみだるゝ

歌のとりどころも名のとなへもよろしく侍るなり。

右かはらやは

続後撰集二前大納言基良

我ばかりおもひこがれぬかはらやのけぶりもなをぞしたむせ

ぶなる

といふ、うたをとりて、宜しくなづけられたり。我ばかりこの香をばおもひこがれて、したむせぶやうに思ひ侍れども、人はさもおもわじと、此哥をおかしくとりなされたる名にて侍るまゝ、右の勝にて侍るべしと各申ししかど、袖香、梅がかに似て侍よせいあり。なをそれをこへてやといふこゝろあり。左右ともにふかきこゝろあれば、よき持なるべしと申さる人侍りて、持にさだめられき(15)。

左方の香りは、梅の匂いのような香りが評価されるが、すがり(火味の衰えとともに香りが衰えてきた状態)の薄さが欠点と指摘される。右方の香りは刺し通すような強さのある香り、すがりもよい。右方の香の方が良いようだが、左方の香には「風流なるにほひ」がある。したがって左右の香りは同じ程と判定された。「歌の取所も名のとなへもよろしく」は、引歌の撰び方と、風に吹かれて舞い落ちる梅を、雪が袖からはらはらと乱れ落ちるさまに見立てて香名を「ゆきの袖」としたこと、この二点への評

価である。

この歌には「かほれる」という言葉が登場するが、右「かはら屋」の和歌は恋歌（藤原基良『続後撰和歌集』巻第十二恋歌二 七七八）で、匂いに直結する表現は見られない。「我ばかりおもひこがれて」「けぶりもなをぞしたむせぶ」という、恋い焦がれくすぶる思いの歌意は、この香の「さしとをすやうなるつよき香」にふさわしく効果的に働いたと考えられる。しかし「我ばかりこの香をばおもひこがれて、したむせぶやうに思ひ侍れども、人はさもおもわじ」という感慨に転化させた所を評価されて「右の勝にて侍るべし」とある。しかし左方が、梅が香のもつ余情を、「風もこえてや」と表現したところに「ふかきこゝろ」をよみとり、勝負を引き分けにしている。

二番の勝負から、香木の香りよりも香名と和歌が尊重されるということが窺える。名歌であることは前提であるが、和歌を単独で評価するのではなく、その香木になぜその和歌を撰んだかが重要なのである。そしてその和歌のどの言葉を香名に撰ぶのか、「名のとなへ」も含めての判詞である。

今ひとつ六番左「ねぬ夜の夢」と右「やまふき」の記述も確認したい（16）。

六番

左

ねぬよの夢

右 勝

やまふき

左の香、かよろし。すがりもあしからず。しかりといへども、これもかう、あたらしくきこゆ。右の香よろし。いにしへのしゝらにといふとも、おとるまじくきこゆ。すがりもよろし。尤右勝なるべし。左ねぬよの夢は、

続古今夏寂蓮法師 のきちかきはなたちはなのかほりきてねぬよの夢はむかしなりけり  
とり所も名のとなくもよろし。

右の山ふきは 古今春下読人しらず 春雨のにほへる色もあかなくにかさへなつかし山ぶきのはな  
なんなき名なるべし。左ねぬよの夢はよろしといへども、たち花の哥にて名つけ侍る事めづらしげ  
なし。香も名も右の勝になり侍りける。

左方は香りが良く、すがりも悪くないが、「あたらしくきこゆ」と指摘されている。新しいとは熟成が浅いことで香木の欠点である。右方は「いにしへのしゝら」といふとも、おとるまじくきこゆ。」「つまり古い名香「しゝ」と「らに」に比べても劣るまいと評され、さらにすがりもよいと高評価で「尤右勝なるべし。」とされた。

香名「ねぬよの夢」の典拠は、『続古今和歌集』（巻第三夏歌 二四八）寂蓮の和歌で、「とり所も名のとなくもよろし」と評価されている。『古今和歌集』『五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする』（よみ人しらず 巻第三夏歌 一三九）以来、橘の香りはよく取り上げられるが、寂蓮の和歌から「花たちばな」ではなく「ねぬよの夢」を採用したことを評価されたのである。「となへもよろし」は言葉の響きも良いということである。

右「やまふき」は『古今和歌集』（よみ人しらず 巻第二春歌下 一一二二）の歌で、「なんなき名」つまり無難な名付け方だと評価されている。そして、左の「たち花の哥にて名つけ侍る事めづらしげなし」という判断で、結局右「やまふき」が勝となる。やはりここでも、香名と和歌の在り方が重要で、それによって勝負は決められると言えよう。「ねぬよの夢」の名の取り方は良いが、橘の和歌に拠って命名するのはありふれている。つまり和歌の撰び方が月並みである、と評価されている。

『五月雨之記』の序には、香の匂いについては「たゞすくよかによしあしを申なるべし」、香の名付けには「とりところそのよしあしあり。體なきことばなとにてなづくるは、よはきによりてあしとす。」とし、その勝負については「左右たがひにこゝろの底のこらずいひて、勝負を究め」るようにといい、「かうのよろしきより名のよろしきを誉とす」と記している。さらに「後普光園殿説 香にいにしへよりの名ありて、たとへば、らむ（蘭者待）じやしゝなどいふとも、其香合にのぞむ時に、あたらしくなをつけていだす、香合の法なり。幾度のかうあはせに同香を出すといふとも、名をだにあたらしくせば、作者のてがらなるへし。」ともある。いかなる歌を撰び、その和歌からいかに名をとるか、「作者の手柄」という記述からは、和歌と香名の在り方が最重要とされていたことが窺える。

### 三 「一木四銘」の和歌と香名

「一木四銘」は一つの香木（伽羅）が四つの銘と各々の引歌を持つが、これだと香木、引歌、香名の関係が唯一無二のものではなくなってしまう。まず本書記載の命名者と和歌を確認しよう。

後西院勅名「藤袴」の引歌は、藤原家隆『壬二集』「ふちはかまならふ匂ひもなかりけり花は千種の色かはれとも」(後度百首 一四二)で、この香りにならぶ匂いはない、の意と考えられる。「柴舟」の命名者は奥州(伊達) 正宗とされ、謡曲『兼平』「世の中のうきを身につむ柴舟のたかぬさきよりまつこかるらん」で、この香は炷かない前から薫りが深い、との意に解釈できる。さらに、細川幽斎命名「白菊」の引歌は『和歌一字抄 下』「たくひあり(と) 誰かはいわんすへ匂ふ秋より後のしら菊の花」(藤原行宗 一〇二三)で、「すへ匂ふ」より、すがりまでがよく薫る香であると察せられる。「初音」の命名者は小堀遠州とあり、引歌は『金葉和歌集』「聞たひにめつらしければ郭公いつも初音のこゝちこそすれ」(権僧正永縁 卷第二夏部 一一三)で、この香は聞くたびに珍しい薫りがするという意であろう。四首が語る香りの表情をまとめると、この香は炷かぬさきから薫り深く、聞くたびに珍しく感じる匂いで、すがりまでが良く薫り、これにならぶ香木はまたとない、ということである。要するに一つの香木の持つ四つの表情を、それぞれの人が捉え、相応しい和歌を撰び香名を付けた、と解釈できる。つまり香りを聞いた人の感性と和歌への造詣が、一木四銘を産み出したものと考えられる。また言いかえれば、香名は、単に香りの表情や手触りを言い当て、他と区別するためにある名とは異なるもので、香名は香と一対一の関係ではなく、香りの表情からそれを聞いた人が撰んだ和歌の、その言葉のもつ文学的世界に裏付けられたものと考えるべきである。では二五首と最も多い『新古今和歌集』に拠る引歌について精査を行なう。

#### 四 『新古今和歌集』の和歌と香名

『新古今和歌集』からの和歌二五首(17)は、「六十一種之名香」に八首、「追加」に八首、「右之外名香」に九首である。まず「にほひ」「香」「かをる」等の語を含む一首から検討する。資料1を参照されたい。いずれも花に纏わる香りを詠っている。香名の根拠と考えられる言葉に波線を付した。

「春宵」は蘇軾「春夜詩」の「春宵一刻値千金」も引歌であるから、香名「春宵」はこの漢詩から採用されたと言えようが、「春の夜の月」が相乗的に働いての「春宵」と考えられる。

香名「梅月」の引歌は『五月雨之記』『六番香合』二番左「ゆきの袖」の引歌と同歌で、『新古今和歌集』詞書には「二月雪落衣」といふことをよみ侍る」とあり、これは『和漢朗詠集』(尊敬 子日 三〇)「梅花ヲ折リテ頭ニ挿シハサメバ、二月ノ雪衣ニ落ツ」に拠る。康資王母の和歌はこの句境を翻案したものであるから「ゆきの袖」の方が相応しい。「梅月」には「梅発有風報」の詩句(典拠不明)が付されているが、和歌・漢詩とも「梅月」の「月」は見当たらない。『香道蘭之園』一〇巻収載の「名香古歌古詩」(注16参照)が「梅風」の香名に対して同じ和歌を引いていること、和歌・漢詩ともに「梅」と「風」を含んでいることから、『香名引歌之書』の「梅月」は「梅風」の誤写と思われる。

香名「花」の引歌(18)は、詞書「六条摂政かくれ侍りて後、植ゑ置きて侍りける牡丹の咲きて侍りけるを折りて、女房のもとより遣はして侍りければ」の哀傷の返歌であり、「形見としてひとしお悲しみがふかい」ゆえのふかみ草であり、「何なかなかのにほひ」は単に花の匂いではなく、美しい花の色をも詠んでいる。この和歌は、牡丹の匂うような花色と、形見の花としての切ないまでの香りを想起させ、絵画的かつ情調的である。

香名「御幸」の引歌「すえまで匂ふ花なれば」からは、未枯<sup>すが</sup>りまでがよく薫る香であることが暗示される。「御幸」の木処は伽羅（19）であり、『木処気味秘考』（20）の「火末もやさしく聞ゆるなり」という伽羅の達（性質）と符合すると言えよう。

『新古今和歌集』で頻繁に用いられる「本歌取り」によって、引歌のみならず先行歌の興趣が加味されるものもある。香名「橘」の引歌「いかで昔の香にほふらん」は本歌「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」を呼び起こして、「昔の人の香」のイメージを重層的に増幅させている。先行する本歌をも意識した上で、引歌を決めたのであろう。

では次に「にほひ」「香」「かをる」等の言葉を含まない一四首を確認する。資料2を参照されたい。「にほひ」「香」「かをる」など嗅覚に関わる表現を含まない和歌の場合は、聞いた香りが想起させる情景や心象を物語る和歌を撰んだ、と考えられる。そして、この和歌と香名を享受する人たちは、和歌の言葉からは直接に香りを共有できないため、その和歌が描出する文芸的世界を鑑賞することになる。その時、文芸的世界を象徴する香名が付されていることが重要となる。

香名「麓の里」引歌の、峰の桜花を白雲に見間違えるというのは古歌によくある趣向であるが、麓まで花びらが風に舞って散ってきたので花と気付いたということが斬新であり、「麓の里」を香名とすることで情景がより鮮明になる。

香名「うつりし花」は、引歌とともに、その本歌「今朝見れば夜の嵐に散りはてて庭こそ花のさかりなりけれ」（藤原実能『金葉和歌集』巻第一春部 五八）をも享受するならば、「うつりし花」、落花のイメージはより増幅される（21）。

香名「時雨」では引歌の意から、「夕日の光はさしながらも時雨れている」という状況が窺え、「時雨」という香が二面性のある香りを有することを想像させる。

二首の和歌を引歌とする「富士烟」と、その内の一首を引歌とする「煙くらへ」について確認する。「富士烟」の引歌は雑歌中・一六一四番と一六一五番である。先の歌は、天空に立ち上る富士の煙を、仏道修行に燃える自身の志と見て、心を高く構えて生きていこうとする強い思いに裏打ちされた慈円の歌である。しかしいま一首は、風になびく富士の煙は空に消えていくが、それと同じように、どうなっていくかもわからない私の思いであることだ、という感慨を詠んだ西行の歌である。この歌は『西行法師家集』では「恋」部に位置する和歌である。相反する「思ひ」が詠み込まれた和歌を引歌に撰んだわけ、この二首を引いたことには矛盾があると言わねばなるまい。しかし「煙くらへ」に西行の和歌を引いたことは、恋歌としてならば相応しいものと考えられる。なぜなら「煙くらへ」は、『源氏物語』「柏木」女三宮の歌「立ちそひて消えやしなましうきことを思ひみたる煙くらへに」を想起させるからである。

## 五 恋の和歌と香名

『香名引歌之書』収載の恋の和歌は一〇首で、「六十一種之名香」に三首、「追加」に三首、「右之外名香」に四首である。「一木四銘・勅名香」には登場しない。またいずれの歌も「にほひ」「香」「かをる」の語を含まない。

資料3を参照されたい。

恋歌をもつて象られる香りは、和歌と香名を撰ぶ人と、それを鑑賞する人の心象に拠って、享受は多様なものにならざるを得ない。和歌の世界では、恋の喜びを詠ったものは非常に少なく、恋は最終的に成就しないものであり、忍ぶ恋、待つ恋、思ふ恋、嘆きの恋、別れる恋、が詠み込まれるものが多い。したがって『香名引歌之書』に撰ばれた恋の歌も同様である。

まず『古今和歌集』からの引歌三首の内、香名の「有明」引歌の第五句「まちいつるかな」は、大きく意味の変わる異同ではなく誤写と考えられる。歌意から香りを察するに、「有明」は炷き初めはすぐに薫らず、火味が強くなるとともにゆつくりと薫る質の香木なのかもしれない。しかし「有明」の木処は真那賀（22）であるから、その達（性質）は「聞の早くうするが上々なり」（23）と言われ、炷き出しは早く強く出て、やがて薄くなるものが多いことに鑑みると、歌意と齟齬が生じる。

香名「千草」は、引歌の「千草」の意から、一つの香木が様々な香りを有すると解釈するならば、炷き初めからすがりまでに香りが変化する香木と考えることもできる。

『後撰和歌集』に拠る「小野」は引歌と、その本歌「浅茅生の小野の篠原しのぶとも人知るらめや言ふ人なしに」（よみ人しらず『古今和歌集』巻第十一恋歌一 五〇五）とともに、「忍ぶ恋」を表現している。木処は新伽羅（24）で、新伽羅は「其聞の新しき物を言う」（25）とされるが、いかなる香りかは推し量り難い。

『拾遺和歌集』に拠る「手枕」「瑞香木」の引歌は、いずれも人麿の作で、「手枕」は巻第十四恋四の、「瑞香木」は巻第十九雑恋の巻頭歌である。香名「手枕」の引歌第五句は「ふれて物うし」となっているので、『拾遺和歌集』現行歌の「朝寝髪我はけづらじうつくしき人の手枕ふれてし物を」と歌意が変わ

ってしまふ。本書識語で大枝流芳が指摘した「此書に附る詩歌牽合附会多し」にあたり、問題視した箇所かもしれない。また香名「瑞香木」は後水尾院勅名香である。

香名「忍」の引歌は、在原なりける男の若き日の恋が語られる『伊勢物語』第六十五段にも登場し、『古今和歌集』には、第四・五句の異なる「思ふにはしのぶることぞまけにける色には出でじと思ひしものを」（よみ人知らず 五〇三）が収載されている。この歌は「しのぶれど色に出でにけりわが恋はものや思ふと人のとふまで」（平兼盛『拾遺和歌集』卷第十一恋歌一 六二二）の本歌でもある。「忍」にまさる「思ひ」を歌った和歌であるが、香名「忍」の典拠とされている。

「嘆」の引歌は『拾遺愚草』定家の恋十首の内、『拾遺愚草俟後抄』（26）に「あふよをまさる嘆」とはかねてしれども、あふ事の外になぐさめはなければ、いかにせんといへり。」とある。

「にほひ」「香」「かをる」の語を含まない恋の歌を引歌とし、香名を撰んで香りを象するという方法は、「にほひ」「香」「かをる」の語を持つ四季の和歌で香りを表現する方法よりも、遥かに難しい営為と言えよう。しかも恋歌であるからこそ、人の心の琴線に触れ、それぞれが胸の内の恋の記憶に働きかけ、香りを一層鮮烈に印象づける効果があるのではなからうか。

### おわりに

香木の香りと和歌のイメージを重ね合わせて享受する方法がいつ、いかなることを契機に興ったかを確かめるのは難しく、和歌と香を結びつけ香名を付けるといふ営為そのものが、どのような意図から始められたかを特定することは困難である。

本章では『香名引歌之書』の香名と引歌を精査し、これらの和歌が、実体のない香りの印象を伝えるにあたっていかに機能したのかを考察した。香りを享受し引歌を撰び、香名を据えた人、それはごく限られた貴顕であり、香会で香りを共有できた人たちもごく限られていた。そのほかの香りを聞くことのできない人たちは、香名とその引歌を知り、和歌とその歌詞を鑑賞することで、香りを想像し、香りを疑似体験するしかない。このとき重要なのが『五月雨之記』の言うように、「名のよろしき」であり、引歌の存在である。香名は、香りを聞いた人それぞれの感性により選ばれた和歌の、言葉の持つ文学的世界に裏付けられたものと捉えるべきである。和歌は単に和歌として享受されるのではなく、香りの中で享受され、和歌の風景と香りが重ね合わされたと考えられる。

『香名引歌之書』「右之外名香」では、引歌から香名を撰ぶ時に、和歌の言葉をそのまま採るのではなく言葉を変化させているものが七例ある。香名「初草」は引歌「君にとてあまたの春をつみしかば常をわすれぬはつわらびかな」（『源氏物語』早蕨）の「はつわらび」から「初草」が生み出されたものと考ええる。香名「草の原」「有明の空」「うつりし花」については先述の通りである。「嶺こえ」も「みねの雪」「汀のこほりふみわけて君にそまよふ道はまよはず」（『源氏物語』浮舟）の「みねの雪」「ふみわけて」「道」が「嶺こえ」に発展したものである。「関のわらや」「ふもとの里」においては、それぞれの引歌に「わらや」「里」の言葉はないが、それらを付加することで情景をより具体的なものにしていく。和歌の言葉をそのまま香名にするのではなく、その言葉を名詞にする、あるいは和歌の中の言葉と言葉をつなぎ合せて新たな言葉を作り出すなど、歌意を象徴し調和を取りながら、言葉を置き換える方法が見受けられた。組香の「聞きの名目」には、この方法で生み出されたと考えられるものが数多ある。

名香に相応しい和歌を選択して引歌とするという営為が、その後の組香の世界での「証歌」「証詞」「聞きの名目」「誕生の始発であろうと察するが、その解明は今後の課題としたい。いずれにしても『香名引歌之書』は香と和歌のイメージを重ね合わせて享受された一つの例と考えられる。

## 第一部第三章 注

- 1 実践女子大学日野図書館蔵、『心遠齋香道叢書』後編五、外題『香名引歌之書』内題『香名引証』。
- 2 以下本章と次章では、和歌のほか漢詩についても便宜的に「引歌」と呼ぶ。
- 3 国文学研究資料館蔵、ヤ八・三三七・一八『香之書』後編五、外題『香名引歌之書』内題『香名引証』。実践女子大学日野図書館と同文の識語の後に、「寛保二壬戌年 宮崎詮恭筆写」とある。
- 4 国立国会図書館所蔵わ〇八・九（中古叢書第一一五冊のうち）『名香之記』は「香伝制規」「香名引証」から成り、「香名引証」の内容は『香名引歌之書』と同じである。「香名引証」は実践女子大学日野図書館と同文の識語の後に、「明和九年壬辰の季秋朔、於不朽齋閑窓下写畢。源忠行宗雅花押」とある。「香伝制規」識語は、「右香道制規者大枝流芳先生教誨門弟子一卷也。明和九（一七七二）年壬辰孟冬中浣、従樋口淳叟先生伝写、不朽齋源忠行写。」。
- 5 国立国会図書館蔵特一〇〇二・二（香道叢書三七）『香名引歌考』写本。冒頭の香名「難波の春」「朝氣の山」の後に宝暦六年六月とある。
- 6 「六十一種之名香」「追加」「右之外名香」に列挙される香は、「百二十種之名香」や「二百種之名香」の香名と同一のものもある。しかし、香木自体が同一であるか否かを確かめることはできない。
- 7 和歌を引歌としないものは次の三種である。香名「本阿弥」には「薄雲」とあり、これは「本阿弥」という香

が「薄雲」と呼ばれる香であるという意味と解される。また香名「茶屋」には「大伽羅」とその木所が示され、香名「清水氏」には「伽羅ナリ石帯 花洛住人菱や五兵衛と云方ニ伝来」とその由緒が記されている。

8 注5 同書『香名引歌考』では、「初音白菊柴舟は同香也。藤袴は余程位負た香也。」とし、「蘭フチハカマ三種有」として後水尾院勅名「秋ふかみたそかれ時の藤袴匂ひは名乗る心地こそすれ」女院御名「藤はかまならぬ匂ひもなりにけりはなは千種の色まさるとも」、後西院御名「藤はかま草の枕に匂ふ也誰ぬきをけるすかりなるらん」の記載がある。

9 『心遠齋香道叢書』新編十一『薰香名目志』収載「後水尾帝勅名七種御香」には、『香名引歌之書』記載の七種の他に、「後水尾院勅名」として香名「とかめぬ霞」「瀧白玉」「楚弓」「軒漏月」「瑞香木」が挙げられる。また七種の内「五月の空」と同じ引歌で「五月雨雲」とある。

10 杉本文太郎『香道』（雄山閣、一九二九年）四一頁。

11 中村健太郎は平成二十七年七月十八日於「和歌文学会七月例会」発表資料「後西天皇の和歌と諸芸」において、【資料三】歴博蔵・高松宮家伝来禁裏本「後西天皇宸翰御消息」六点を挙げ、これを「勅銘香の香銘とそれぞれの証歌を後西天皇自ら書いた原本と推測」した上で、〈資料三―四・図版⑤〉に「せみの羽衣」を挙げている。さらに『伊呂波名香録』後西院勅銘には「せみの羽衣」が未掲載であることも指摘している。

12 十五番目の勅撰和歌集『続千載和歌集』は文保二年（一二二八）に後宇多法皇の命により二条為世が撰進した歌集である。

13 「六十一種之名香」内、香名「菖蒲」「上馬」と、「追加」内、香名「山桜」「春宵」「梅月」「残雪」「端午」の七首である。但し、「菖蒲」「上馬」「梅月」「残雪」「端午」の漢詩は典拠不明である。

14 『東山殿御香合』大枝流芳校正、寛延元年跋、上坂勘兵衛刊。国立国会図書館蔵一九九〇六一を参照した。

15 『五月雨之記』（『群書類従』第十九輯、続群書類従完成会、一九三二年）五八〇、五八二～五八三、五八五～五八六頁。

16 右「やまふき」の引歌は、『香道蘭之園』第一〇巻収載「名香古歌古詩」収載の香名「春雨」の引歌としても登場している。「名香古歌古詩」は、香名三八種について、二八首の和歌と漢詩八首、連歌発句が引歌として付されたもので、『香名引歌之書』に似ているが小規模である。第二部第五章で詳述する。

17 部立分類では、春八首（春上五首・春下三首）、夏四首、秋下三首、冬一首、賀一首、哀傷一首、恋三首（恋一より二首・恋三より一首）、雑四首（雑上二首・雑中二首）である。

18 『香名引歌之書』で香名「嘆」、「花」の引歌は入れ替わって記載されている。引歌二首を記載した左脇に朱で「右之引歌前後錯乱せるなるへし」と書入れがある。「嘆」の引歌は「いかにせんあふ夜をまさるなけきにてまたそれならぬなくさみもなし」（藤原定家『拾遺愚草』閑居百首恋十首 三七六）である。

19 『心遠齋香道叢書』続編七『香之記 名香目録』（内題『香之書』）の「名香木所分類」に伽羅六一種、新伽羅一五種、羅国三三種、真那蛮一六種、真那賀二八種が収載され、「御幸」は伽羅とある。

20 『心遠齋香道叢書』新編七『木処気味秘考』「伽羅」の項に、「伽羅勿論、古き香を貴む。古き香は、静にして

しとりなく、火末もやさしく聞ゆるなり。」とある。

21 本歌の詞書には、「落花滿庭といへることをよめる」とある。

22 注19 同書、「有明」は真那賀とある。

23 注20 同書、「真那賀」の項に「古人の説に真那賀は聞の早くうするが上々なり。」とある。

24 注19 同書、「小野」は新伽羅とある。

25 注20 同書、新伽羅の項に「古人新伽羅といふ、物世に行はるゝ新古をいふにあらず。其聞の新しき物を云。」とある。

26 『拾遺愚草古注（下）』三弥井書店、一九八九年、一〇五頁。

参考資料1 『香名引歌之書』引用和歌一覽

六十一種之名香 一二首

\*和歌と漢詩を引歌に持つもの

三芳野 みよしのゝ吉野は花の宿そかしさてもふりせず匂ふ山かな  
 盧橘 五月雨に花たちはなのかほる夜は月すむあきのさもあらはあれ  
 富士烟 世の中を心たかくもいはふかなふしの烟を身の思ひにて  
 菖蒲\* 風になひくふしの烟の空に消てゆくゑもしらぬわか思ひかな  
 うちしめりあやめそかほる郭公鳴やさつきの雨の夕くれ  
 橘の花ちる風にあらねともふくにはかほるあやめ草かな  
 梅の花たか袖ふれし匂ひそと春やむかしの月にとはゝや  
 月 白雲の春はかさねてたつた山小倉のみねに花にほふらん  
 龍田 八雲たつ出雲八重垣妻こめにやえかきつくるその八重かきを  
 八重垣 仙人の折袖にほふきくの露うちほらふとも千代はへぬへし  
 賀 今年より花咲そむるたち花のいかてむかしの香に匂ふらん  
 橘 花かたみかなふ人の手多あれはわすられぬらん数ならぬ身は  
 花形見 下もみしかつちる山の夕しくれぬれてや鹿の独なくらん  
 夕時雨 朝ねかみ我はけつらしうつくしき人の手枕ふれて物うし  
 手枕 今こんといひしはかりに長月の有明の月をまちいつるかな  
 有明 千代までの大宮人のかさしとや雲井のさくら匂ひ初らん  
 雲井 紅に匂ふはいつら白菊の枝もたはゝにふるかとそ見ゆ  
 紅 春の花雲の匂ひにはつせ山かはらぬ色そそらにはつかし  
 初瀬 風かよふ寢覺の袖の花の香にかほるまくらのはるの夜のゆめ  
 寢覺 たくひなき思ひいてはの桜かなうす紅の花のほひは  
 薄紅 たとへてもいはむかたなし月影にうすくもかけてふれる白雪  
 薄雲 香をとめて問人あるをあやめ草あやしく駒のすさめなりけり  
 上馬\*

追加 一二四首

空蟬 うつせみの身をかへてける木の本に猶人からのなつかしきかな  
 玉鉾 たか袖も匂ひやすらん玉ほこのゆくての梅のはなの下風  
 春風 わか袖にうつしゑふかき梅か香をよそにちらさぬ春風そふく  
 百敷 もゝしきにかはらぬものか梅の花おもてかさせる匂ひなりけり  
 御幸 枝ことすえまて匂ふ花なれはちるも御幸のみゆるなるらん  
 鳥羽玉 うは玉のよの間の風の朝戸出におもふにすきて匂ふ梅か香  
 山吹 一重たにあかぬ匂ひをいとゝしく八重かさなれる山ふきのはな  
 蘭 やとりせし人のかたみの藤はかまわすられかたき香に匂ひつゝ  
 乙女 天津風さはりし雲は吹とちつ乙女のすかた花に匂ひて  
 思 仙洞様 ふしのねのけふりは猶も立のほるうへなきものはおもひなりけり  
 忍 新告 おもふにはしのふることそまけにけるあふにしかへはさもあらはあれ  
 暗部山 梅の花にほふ春辺はくらふ山やみにこゆれとしるくそありける  
 九重 折てみるかひもあるかな梅の花けにこゝのへの匂ひまさりて  
 郭公 聞たひにめつらしければほとゝきすいつもはつねのこゝちこそすれ  
 柴船 世のわさのうきを身につむ柴舟のたかぬさきよりまつこかるらん  
 初音 右郭公の哥に同じ  
 白菊 くれなひに匂ふかうへのしら菊は折ける人の袖かとも見よ  
 山陰 水無月とすゝしかりけり山かけのなに匂ふものやひむろなるらん  
 花の香 花の香を匂はす宿に<sup>こ</sup>め<sup>ゆ</sup>は色にめすとや人のとかめん  
 嘆 形見とて見れはおもひにふかみ草何なかゝのほひなるらん  
 花 いかにせんあふ夜をまさるなけきにてまたそれならぬなくさみもなし  
 (朱) 右之引歌前後錯乱せるなるへし

梅月\* 梅ちらす風もこ<sup>へ</sup>花<sup>て</sup>や吹つらんかほれる雪の袖にみた<sup>る</sup>札

残雪\* 朝日影匂ふる山のさくらはなつれなくきゆる雪かとそ見る  
山桜\* 句ふらん花の都のこひしくて折に物うき山桜かな  
端午\* たち花の花ちる風にあらねともふくにはかほるあやめ草かな  
春宵\* 大空は梅の匂ひにかすみつゝくもりもはてぬ春の夜の月  
(六十一種之名香「菖蒲」引歌と同歌)

右之外名香 二五首

岩ねの松 うこきなき岩根の松にちきりてもたれか千歳のたねをまきけん  
初草 君にとてあまたの春をつみしかは常をわすれぬはつわらひかな  
小野 あさちふのおのゝしのはらしのふれとあまりてなとか人のこひしき  
須磨 あまかつむなげきの中に塩たれていつまですまの浦になかめん  
かゝり火 うかひ舟たかせさしこすほとなれやむすほゝれゆくかゝり火のかけ  
草の原 夏草はしけりにけりな玉ほこのみち行人もむすふはかりに  
こてふ はなそのゝこてふにはさてさそとかむなとゝよそめをあかぬなるへし  
有明乃空 なか月もいく有明になりぬらんあさちか月のいとゝさえゆく  
うつりし花 けふたにも庭をさかりとうつる花きえずはありと雪にとも見よ  
かつらの里 かつら川かさしの花のかけ見へてきのふのふちそけふは恋しき  
野々宮 神かきはしるしの杉もなきものをいかにまかへておれるさか木そ  
煙くらへ 風になひくふしの煙の空に消てゆくへもしらぬわかおもひかな  
(六十一種之名香「富士烟」引歌と同歌)  
有明 帰雁今はのこゝろあり明に月と花との名こそおしけれ  
時雨 柴の戸に入日のかげはさしなからいかにしくるゝ山辺なるらん  
三笠山 いかはかり神し心とみかさ山二葉の松の千代のけしきを  
嶺こえ みねの雪汀のこほりふみわけて君にそまよふ道はまよはず  
尾上里 年もへぬいのるちきりははつせ山おのえのかねのよそのタくれ  
関のわらや 是やこのゆくも帰るもわかれてもしるもしらぬも逢坂の関  
位山 くらひ山花を待こそ久しければるのみやこに年はへしかと

宇治川 ふもとをほう治の川霧立こめて雲井に見ゆるあさひ山かな  
千草 秋の野にみたれてさける花の色のおくきに物をおもふころかな  
麓の里 ふもとまでおのへの桜ちりこすはたなひく雲と見てや過まし  
梅かへ 梅の花たか袖ふれし匂ひそとはるやむかしの月にとはゝや  
(六十一種之名香「月」引歌と同歌)

七夕 一とせにひと夜とおもへと七夕のあひ見る秋のかきりなきかな  
あさかほ おほつかなたれとかしらん朝きりのたえまにみゆるあさかほの花  
立田山 花ならて名こそ聞ゆれ立田山匂ひの色をみするもみし葉  
瑞香木 乙女子か袖ふる山のみつかきにひさしき世よりおもひそめてき

一木四銘・勅名香 九首

藤はかま 藤はかまならふ匂ひもなかりけり花は千種に色かはれとも  
柴船 世の中のうきを身につむ柴舟のたかぬさきよりまつこかるらん  
(追加「柴船」引歌と同歌)  
白菊 たくひあり誰かはいわんすへ匂ふ秋より後のしら菊の花  
初音 聞たひにめつらしければ郭公いつも初音の心地こそすれ  
(追加「初音」引歌と同歌)  
花の色 千世をへてそこまで澄る池水にふかくもうつる花の色かな  
春の山風 尋つる花のあたりに成にけり匂ひにするし春の山かせ  
蝉の羽衣 蝉の羽の夜の衣は薄けれと移り香よりも匂ひぬるかな  
五月の空 かり初に軒の菖蒲も時しあれは五月の空に匂ひことなる  
花すゝき 花薄ほのかに聞は秋霧の立野の末に男鹿なくなり  
小夜衣 小夜衣こは世にするき匂ひかなあやめをむす草の枕に  
志 よし野山やまよりふかき物や有と心に問は心なりけり

【表1】『香名引歌之書』引用和歌 典拠別一覧 全香名数一三三三種 全歌数八〇首

『新勅撰和歌集』										
『新古今和歌集』	龍田・寢覚・菖蒲・橘・夕時雨・賀・富士烟・煙くらべ	盧橘・薄雲			上馬	手枕		八重垣・花形見・有明	六十一種香 59種・歌 22首	
	春宵・梅月・残雪・歎・思・忍・百敷・御幸		山吹	郭公(初音)	山桜	九重		蘭・暗部山	追加香 32種・歌 24首	
あさかほ	有明・麓の里・うつりし華・草の原・かゝり火・宇治川・有明乃空・時雨・尾上の里(富士烟)	位山		三笠山		七夕・瑞香木	小野・関のわら屋	千種	右之外香 30種・歌 25首	
		春乃山風		(初音)				蝉乃羽衣	一木・勅香 11種・歌 9首	
1	25	4	1	2	2	4	2	7	計	

『伊勢物語』	紅	『千五百番歌合』	月	『堀河百首』		『壬二集』		『拾遺愚草』	三芳野・菖蒲・初瀬	『秋篠月清集』		『山家集』	薄紅	『続千載和歌集』	雲井	『続古今和歌集』		『続後撰和歌集』		六十一種香 59種・歌 22首
白菊				山陰				烏羽玉・乙女・花(端午)												追加香 32種・歌 24首
			(梅かえ)															かつらの里		右之外香 30種・歌 25首
					藤袴			小夜衣・志					花すゝき		花乃色					一木・勅香 11種・歌 9首
2	1	1	1	1	6	2	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	計

典拠不明和歌	謡曲『兼平』	『和歌一字抄』	『源氏物語』	
薄紅				六十一種香 59種・歌 22首
玉鉾・春風	柴舟		空蟬・花乃香	追加香 32種・歌 24首
岩ねの松・こてふ・立田山			初草・須磨・野々宮・嶺こえ	右之外香 30種・歌 25首
五月乃空	(柴船)	白菊		一木・勅香 11種・歌 9首
6	1	1	6	計

釈教	雑	恋	哀傷	賀	冬	秋	夏	春	
0	2 (2)	3 (3)	0	2	0	1 (1)	5	5	六十一種之名香
1	2	3 (3)	1	0	0	1	2 (1)	8	追加
0	3 (3)	4 (4)	0	1 (1)	1 (1)	4 (4)	2 (2)	3 (3)	右之外名香
0	1	0	0	1 (1)	0	2 (1)	0	1	一木四銘・勅名香
1	8 (5)	10 (10)	1	4 (2)	1 (1)	8 (6)	9 (3)	17 (3)	合計

【表3】『香名引歌之書』引用和歌 部立分類  
※（ ）内は「にほひ」「香」「かをる」等の語を含まない和歌

合計	典拠不明	分類不明	
20 (7)	0	2 (1)	六十一種之名香
24 (6)	2 (0)	4 (2)	追加
25 (24)	3 (2)	4 (4)	右之外名香
9 (3)	1	3 (1)	一木四銘・勅名香
78 (40)	6 (2)	13 (8)	合計

資料1 『新古今和歌集』依拠の和歌 「にほひ」「香」「かほる」等の語を含む一首

(「にほひ」「香」「かほる」に傍線、香名の由来と考えられる詞に波線を付す)

>

追加 春宵 大空は梅の匂ひにかすみつゝくもりもはてぬ春の夜の月  
藤原定家 卷第一春歌上四〇

追加 梅月 梅ちらす風もこへてや吹つらんかほる雪の袖にみたるゝ  
康資王母 卷第一春歌上五〇

六十一 龍田 白雲の春はかさねてたつた山小倉のみねに花にほらん  
藤原定家 卷第一春歌上九一

追加 残雪 朝日影匂ひふる山のさくらはなつれなくきゆる雪かとそみる  
藤原有家 卷第一春歌上九八

六十一 寢覚 風かよふ寢覚の袖の花の香にかほるまくらの春の夜のゆめ  
藤原俊成女 卷第二春歌下一一二

六十一 菖蒲 うちしめりあやめそかほる郭公鳴やさつきの雨の夕くれ  
藤原良経 卷第三夏歌二二〇

六十一 橘 今年より花咲そむるたち花のいかてむかしの香に匂ひらん  
藤原家隆 卷第三夏歌二四六

六十一 賀 仙人の折袖にほふきくの露うちはらふとも千代はへぬへし  
藤原俊成 卷第七賀歌七一九

追加 花 形見とて見れはおもひなげきのにふかみ草何なか／＼のにほひなるらん

藤原重家 卷第八哀傷歌七六八

追加 百敷 もししきにかはらぬものか梅の花おもてかさせる句ひなりけり

源公忠 卷第十六雑歌上一四四四

追加 御幸 枝ことにすえまて句ふ花なれはちるも御幸の見ゆるなるらん

藤原師通 卷第十六雑歌上一四五四

資料2 『新古今和歌集』依拠の和歌 「にほひ」「香」「かをる」等の語を含まない一四首

(香名の由来と考えられる詞に波線を付す)

右之外 有明 返雁今はのこゝろあり明に月と花との名こそおしけれ  
藤原良経 卷第一春歌上 六二

右之外 麓の里 ふもとまておのへの桜ちりこすはたなひく雲とみてや過まし  
藤原顕輔 卷第二春歌下 一二四

右之外 うつりし花 けふたにも庭をさかりとうつる花きえすはありと雪にとも見よ  
後鳥羽院 卷第二春歌下 一三五

右之外 草の原 なつ草はしけりにけりな玉ほこのみち行人もむすふはかりに  
藤原元真 卷第三夏歌 一八八

右之外 かゝり火 うかひ舟たつせさしこすほとなれやむすほゝれゆくかゝり火のかけ  
寂蓮法師 卷第三夏歌 二五二

六十一 夕時雨 下もみちかつちる山の夕時雨ぬれてや鹿の独なくらん  
藤原家隆 卷第五秋歌下 四三七

右之外 宇治川 ふもとをほう治の川きり立こめて雲井に見ゆるあさひ山かな  
藤原公実 卷第五秋歌下 四九四

右之外 有明乃空 なか月もいく有明になりぬらんあさちか月のいとゝさえゆく  
慈円 卷第五秋歌下 五二一

右之外 時雨 柴の戸に入日のかけはさしなからいかにしくるゝ山辺なるらん  
藤原清輔 卷第六冬歌 五七二

追加 思ふしのねのけふりは猶も立のほるうへなきものはおもひなりけり  
藤原家隆 卷第十二恋歌二 一一三二

右之外 尾上の里 年もへぬいのるちきりははつせ山おのえのかねのよその夕くれ

藤原定家 卷第十二恋歌二 一一四二

追加 忍 おもふにはしのふることそまけにけるあふにしかへはさもあらはあれ 在原業平 卷第十三恋歌三 一一五一

六十一 富士烟 世の中を心たかくもいはふかなふしの烟を身の思ひにて 慈円 卷第十七雑歌中 一六一四

六十一 富士烟 右之外煙くらへ

風になひくふしの烟の空に消てゆくゑもしらぬわか思ひかな 西行法師 卷第十七雑歌中 一六一五

資料3 『香名引歌之書』 収載 恋の和歌一〇首

(香名の由来と考えられる詞に波線を付す)

六十一 花形見 花かたみかなふ人の手多あれはわすられぬらん数ならぬ身はよみ人しらず 『古今和歌集』 卷第十五恋歌五 七五四

六十一 手枕 朝ねかみ我はけつらしうつくしき人の手枕ふれて物うし 柿本人麿 『拾遺和歌集』 卷第十四恋四 八四九

六十一 有明 今こんといひしはかりに長月の有明の月をまぢいつるかな 素性法師 『古今和歌集』 卷第十四恋歌四 六九一

追加 思 ふしのねのけふりは猶も立のほるうへなきものはおもひなりけり 藤原家隆

『新古今和歌集』 卷第十二恋歌二 一一三二

追加 忍 おもふにはしのふることそまけにけるあふにしかへはさもあらはあれ 在原業平

『新古今和歌集』 卷第十三恋歌三 一一五一

追加 嘆 いかにせんあふ夜をまさるなけきにてまたそれならぬなくさみもなし 藤原定家

『拾遺愚草』 閑居百首 恋十首 三七六

右之外 小野 あさちふのおのゝしのはらしのふれとあまりてなとか人のこひしき 源 等

『後撰和歌集』 卷第九恋一 五七七

右之外 尾上の里 としもへぬいのるちきりははつせ山おのえのかねのよその夕くれ 藤原定家

『新古今和歌集』卷第十二恋歌二 一一四二

右之外 千草 あきの野にみたれてさける花の色のちくさに物をおもふころかな 紀貫之

『古今和歌集』卷第十二恋歌二 五八三

右之外 瑞香木 乙女子か袖ふる山のみつかきのひさしき世りにおもひそめてき 柿本人麿

『拾遺和歌集』卷第十九雑恋 一一一〇

第一部 第四章 『香名引歌之書』―香名と引歌、漢詩を中心に―

はじめに

前章に続き『香名引歌之書』の引歌が、実体のない香りの印象を伝えるにあたっていかに機能したのかを、漢詩を中心に考察する。漢詩を引歌とするものは「六十一種之名香」「追加」に集中し、合せて二十七首、その内典拠不明一首、都合一六首（「六十一種之名香」に九首、「追加」七首）の典拠は判明する。漢詩の引歌は、和歌のそれに比較すると、約三割に過ぎない。

ただし、和歌と漢詩の両方を引歌とする香が、「六十一種之名香」に二種（「菖蒲」「上馬」）あり、「追加」には五種（「梅月」「残雪」「山桜」「端午」「春宵」）ある。この内、「梅月」「春宵」については前章で検討した。

【表2】『香名引歌之書』引用漢詩典拠別一覧によれば、漢の武帝「秋風辞」や白居易、王安石、蘇軾、黄庭堅の詩、『三体詩』所収の唐詩に拠るもの等が見られる。これらの漢詩がどのような理由で引歌とされたのかを検討する。

一 漢詩と香名

「六十一種之名香」の内、引歌の典拠が明らかでない「蘭子」「紅塵」「十五夜」「白梅」「枯木」「隣家」「寒梅」「二葉」と、「追加」の内「生微涼」「山桜」「白鷺」「染衣」「清香」「悦」について取り上げる。

「六十一種名香」内

「蘭子」

「蘭子」の引歌は、漢の武帝「秋風辞」である。

秋風辞

秋風起兮白雲飛 草木黃落兮雁南歸

蘭有秀兮菊有芳 懷佳人兮不能忘

泛樓船兮濟汾河 橫中流兮揚素波

簫鼓鳴兮發棹歌 歡樂極兮哀情多

少壯幾時兮奈老何

右の「蘭有秀兮菊有芳（蘭に秀でたる有り、菊に芳しき有り）」に拠るが、この句で蘭と菊は同格に扱われているので、この詩句を香名「蘭子」の典拠としたのは不審である。

「紅塵」

「紅塵」の引歌は、唐杜牧「過華清宮絶句」である。

長安回望繡成堆 山頂千門次第開

一騎紅塵妃子笑 無人知是荔枝來

一騎の紅塵妃子笑う、荔枝の到着に微笑む楊貴妃を詠んだ一節である。伽羅の名香として珍重された「紅塵」に相応しい華やかさが窺えるが、紅みを帯びた香木であった可能性をも想像させる引歌である。

## 「十五夜」

『白氏文集』「八月十五夜」詩、

### 三五夜中新月色 二千里外故人心

を引く。百二十種之名香に伽羅「十六夜」があるが、「十五夜」については木処も不明である。この詩は『源氏物語』須磨巻で源氏が「二千里外故人心」と誦じ、『和漢朗詠集』巻上「十五夜付月」にも引かれている。人口に膾炙した詩であるため、共通認識が得易い引歌であり、香名と言えよう。

## 「白梅」

宋蘇軾「七年九月広陵自り召還シテ復タ浴室ノ東堂ニ館ス。八年六月、会稽ヲ乞テ将ニ出沒シ、公詩ヲ乞フ、乃チ復タ前韻ヲ用フ三首」の一首

### 夢遶吳山却月廊 白梅盧橘覺猶香

を引く。明曆二年（一六五五）京都植村吉右衛門刊本『東坡集注』（1）に拠れば、

杭州梵天寺有三月廊数百間 寺中多白楊梅盧橘

とあり、白梅ではなく白楊梅（しろやまもも）のことである。楊梅は六月に暗紅紫色で松脂臭のある果実を結ぶ。「白梅」の木処は真那蛮である。真那蛮特有のツンとした刺激臭を捉えての「白梅」という命名ならば相応しいと言えるが、白い梅としての「白梅」とすると、大枝識語の「此書に附る詩歌牽合附会多し」に該当しようか。

「枯木」

『三体詩』卷一、七言絶句、唐杜牧「念昔遊」(2)を引く。

李白題詩水西寺 古木廻巖樓閣風

半醒半醉游三日 紅白花開山雨中

詩では「古木」であり「枯木」ではない。『香道蘭之園』十卷「名香目録」に、

古木 又は枯ニ作

との記述があるので、「古木」あるいは「枯木」の両様の表記が使われていたものと推測できる。この漢詩で香っているのは山雨の中に開く紅白の花であるが、風がその香りを、巖を廻る古木に運んでくると想像したものか。

「隣家」

『三体詩』卷一、七言絶句、唐王駕「晴景」(3)を引く。

雨前初見花間葉 雨後兼無葉底花

蛺蝶飛來過牆去 却疑春色在隣家

晴景とは晩春の景であり、雨前とは二四節季の穀雨の前、新暦四月二〇日頃のこと、春の最後を意味する。穀雨の前には花の間に葉が見え、穀雨の後には葉の裏に花は無い。揚羽蝶も香りを求めて飛んで来るが、花無き我が家の牆を過ぎ去って、春色は隣家に在るかと思う、の意である。この詩に香りは不在である。香りが不在の漢詩をもって春の名残の香りを想像させる趣向は、秀逸と考えられる。

## 「寒梅」

『三体詩』卷一、七言絶句、唐彦謙「韋曲」(4)を引く。

欲写愁腸愧不才 多情練漉已低摧

窮郊二月初離別 独倚寒村颯野梅

王重栄の死を悼む作者彦謙の、王羲之の故事「晋の世が乱れた時、終日花を拈って香りを嗅ぎ終日語らなかつた」に仮託しての、「独り寒村に倚って野梅を颯ぐ」である。

「寒梅」の木処は真那蛮とあるが、一般に真那蛮の香りは「辛」「苦」の中に爽やかさ、涼しさがあるとされ、尖った梅肉のような酸味も特徴の香木なので「寒梅」は相応しい命名と言える。この詩が典拠ならば、「寒村」と「野梅」の二語から新たに「寒梅」の名を生み出したものであろう。

## 「二葉」

「梅檀香自二葉」は、諺「梅檀は二葉より香ばし」である。この原拠は『観仏三昧海経』の「梅檀ハ根芽漸々成長シ、綾ニ樹ヲ成サント欲シテ香氣昌盛ナリ」と考えられている。英雄は小児の時から凡人より勝れているという喩であり、池上尚(5)に拠れば、初出例は『保元物語』に見られ、その後の軍記物語で好んで使用された、とのことである。「二葉」の木処は「古き羅国」(6)と付注があり、『名香目録』「香木比喩」(7)には「羅国 武家」とあるので、香名「二葉」は妥当な選択と言える。

## 「追加」内

「生微涼」

香名は、『全唐詩』卷四「夏日聯句」

人皆苦炎熱（人は皆炎熱に苦しむ

我愛夏日長 我れ夏日の長きを愛す

薰風自南来 薰風南より来たり

殿閣生微涼（殿閣微涼を生ず）

が典拠と考えられる。唐の文宗皇帝が前半二句を詠み、後半二句を文人、柳公権が詠んだ。第三句「薰風自南来」は禅語として初風炉の茶席によく掛けられる。園悟克勤が「如何なるか是諸仏出身の処」の問いに対して「薰風自南来 殿閣生微涼」と示衆し、それを聞いた大慧宗杲が言下に大悟したこと有名である。

この「夏日聯句」に宋蘇軾が諷諫の意をもってつけた追句

一為居処移（一たび居の為に移されて

苦楽永相忘 苦楽を永く相忘る

願言均此施 願わくば言わん 此の施しを均しくして

清陰分四方 清陰を四方に分かたんことを）

と相まって享受されていたものと察する。「微涼を生ず」は「清陰」の香りを想起させる。

『心遠齋香道叢書』新編十一『薰香名目志』に拠れば、「生微涼」は、「家康公御名」とある。

「山桜」

宋王安石の七言絶句「山桜」(8)を引く。

山桜抱石蔭松枝 (山桜 石を抱いて松枝に蔭す)

比並余花発最遲 余花に比並して発くこと最も遅し

頼有春風嫌寂寞 さいわいに春風の寂寞を嫌うあり

吹香渡水報人知 香を吹き水を渡り人に報じて知らしむ

前章で扱わなかったが「山桜」は、

匂ふらん花の都のこひしくて折に物うき山桜かな

上東門院中将『後拾遺和歌集』卷第一春上 九二

も引歌とし、漢詩ともども山桜を香らせている。『香道蘭之園』十巻収載「名香古歌古詩」では、この和歌を引歌として香名「都」が登場している。「山桜」は二百種名香目録に、「都」は百二十種名香目録にそれぞれ挙げられている。「山桜」の木処は不明だが、「都」は伽羅とある。恐らく、「山桜」「都」は共通の引歌ながら、香木は別物と考えるべきであろう。

「白鷺」

宋黄庭堅『山谷詩集』卷一「演雅」(9)を引く。

鷓鴣(茲偏に鳥)密伺魚蝦便 (鷓鴣(茲偏に鳥)は密かに魚蝦の便りを伺う)

白鷺不禁塵土澆

白鷺は塵土の澆すを禁ず)

香名「白鷺」の木処は不明であるが、「白鷺」の語には清廉潔白な印象がある。色が香名に含まれる場合、先述の「紅塵」同様に、香木の色合いを踏まえている可能性も考慮すべきである。

### 「染衣」そめぎぬ

引歌は、唐李正封「詠牡丹」の

国色朝酣酒 天香夜染衣

丹景春醉容 明月問帰期

で、『香名引歌之書』「国色初酣酒」の「初」は誤写と考えられる。国色天香（天香国色も同義）は、牡丹の色・香の優れている形容であり、牡丹の別名でもある。「染衣」の木処は伽羅であり、百花の王、牡丹の名は相応しい。「染衣」、衣を染める、を香名に付すことで伏籠をも想起させ、香を薫きしめる行為そのものに即した命名と言える。

### 「清香」

元の禅僧、了庵清欲の漢詩（『了庵清欲禅師語録』所載、題「痴絶翁所賡白雲端祖山居偈忠蔵主求和」）を引く。

閑居無事可評論 一炷清香自得聞

睡起有茶飢有飯 行看流水坐看雲

この詩に拠ったとすれば、「清香」は一炷の香を詠んだ詩句からそのまま採ったもので、命名の仕方が平凡と言える。しかし、了庵清欲の墨蹟が茶道の世界で珍重されたことを考えると、彼の詩は共通認識を得ていたのかもしれない。

### 「悦」

『法華経』序品、「梅檀香風 悦可衆心」が引歌である。「梅檀ノ香風、衆心ヲ悦可ス。」は釈迦が靈鷲山で『法華経』を説こうとした時、梅檀の香風が吹いて聴聞の大衆（僧徒）の心を喜ばせた、それを弥勒が怪しんで、文殊師利に問うた言葉である。『心遠斎香道叢書』新編十一『薫香名目志』には、漢詩とともに「勅名」と記されているが、いずれの帝の勅名かは不明である。

### おわりに―漢詩が語る香り

第三章では、和歌を中心に香名と引歌の関係を検討した。『五月雨之記』に見られるように、香木の香りに相応しい引歌を撰んで、その引歌から香名を採る方法と、既に香木自体に名が付されていて、その言葉に相応しい引歌を撰ぶ方法の二通りが考えられる。それぞれの香名と引歌が、そのいずれの方法に拠るものかを特定することは困難である。しかし、香木の景色（木目や色合いのこと）から、先に香名が付されたと考えられるものがあり、「鷓鴣斑」はその例に挙げられよう。『香道蘭之園』十卷「名香きゝ方」（10）に

鷓鴣斑 きゝに不同あり。木の見やうあり。木色黄にして、鳥の毛のまだらあり。

とある。『桂海虞衡志』志香に「鷓鴣斑香—中略—色褐黒而有白斑、点点如鷓鴣臆上毛」（11）とあるように、香木の色合いと模様から、中国の南方に産する鳥、鷓鴣の背部にある柿色の斑点を想起して、香名が付けられたものである。『香名引歌之書』「鷓鴣斑」引歌の典拠は不明であるが、添え書きの「又山谷カ詩ニ 香我鷓鴣斑」は以下に拠るものと推定される。

螺甲割崑崙耳、香材屑鷓鴣斑

黄庭堅「有恵江南帳中香者戲答六言詩」（12）

「香材屑鷓鴣斑」の「屑」を脱し、「材」が「我」に誤写されたのではなからうか。この詩は、香の鷓鴣斑を詠んだものである。「鷓鴣斑」は、香木の景色に因んで先に「鷓鴣斑」と名付けられ、その後、漢詩が引歌に据えられたものと察する。

「紅塵」については、紅みを帯びた香木であった可能性をも想像させる引歌である、と先述したが、『香道蘭之園』十卷「名香きゝ方」に、

紅塵 伽羅也。きゝ少はやく出て、香ぬるし。ちとからき所あり。煙尾東大寺ひずえに似たり。

此香は楊貴妃のとめ香と世にいひ伝えたり。

とあり、この伝承から、『香名引歌之書』では、楊貴妃を詠んだ漢詩で「紅塵」の語を含む漢詩を選択し

たのかもしれない。したがって和歌を引歌とする香名の場合と同様に、その方法は一様ではないものと考えられる。

『心遠齋香道叢書』新編十一『薰香名目志』に拠れば、本書収載の漢詩を引歌とする香木は、次のように分類できる。

「御家之六十六種之名」内「五十種」 斜月 二葉 早梅 上馬 白鷺

「十種香」 紅塵 古木

「御家之百三十種之名」 清香 山桜

「志野氏六十一種之の香之名」 鷓鴣斑 楊貴妃 白梅 蘭子 卓 十五夜 隣家

「佐々木道誉の所持之名香」 寒梅 残雪 端午

「いろは寄」 蠟梅 生微涼 染衣 悦 梅月 玄宗

「菖蒲」「春宵」は見当たらない。また『薰香名目志』や『名香目録』など古来諸本に諸説あり、いずれが正統な分類であるかは判断しがたい。しかし、香名「生微涼」は、先述の通り「家康公御名」の記載があることから、『香名引歌之書』漢詩を引歌とする香の内、その命名は新しいものと考えられる。

## 第一部第四章 注

- 1 長澤規矩也編『和刻本漢詩集成』第十一輯 宋詩篇第一輯（汲古書院、一九八四年）二八八頁。
- 2 『漢文大系』第二卷（富山房、一九一〇年）三七頁。
- 3 注2同書、二七頁。
- 4 注2同書、一二頁。
- 5 池上尚「成句「梅檀は二葉より」」述語部分の変遷―カウバシからカンバシへ―『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊20号―1、二〇一二年九月。
- 6 『香名引歌之書』『二葉』の引歌である漢詩の下に「古き羅国」と注がある。木処についての付注があるのは「二葉」のみである。

『心遠齋香道叢書』続編七外題『香之記 名香目録』（内題『香之書』）の「名香木所分類」に、「六十一種之名香」内「二葉」は羅国とある。以下、本章にて木処が示されるものは、すべて本書による。
- 7 注6『心遠齋香道叢書』続編七『香之記 名香目録』『木所比喻』に、「東大寺 公家、太子 僧之司、中川 地下人、真南伽 女、羅国 武家」とある。
- 8 注1同書、七〇頁。
- 9 注1同書、第十四輯 宋詩篇第四輯（一九七五年）二九三頁。
- 10 「名香目録」の内、十種の香、追加六種他、全二〇種の香木の特徴を列挙する。
- 11 「鷓鴣斑」（『大漢和辞典』卷十二、一九五九年）八六八頁。

12  
注  
11  
に  
同  
じ。  
。

參考資料2

『香名引歌之書』引用漢詩等一覽

\*和歌と漢詩を引歌に持つもの

六十一種之名香

紅塵 一騎紅塵妃子笑

枯木 古木回巖樓閣風

菖蒲\* 菖蒲露亦香

鷓鴣斑 錢塘鷓鴣綠

吳淞鷓鴣斑

又山谷力詩二 香我鷓鴣斑

楊貴妃 楊氏四香閣

知応待貴妃

斜月 清談月已斜

白梅 白梅慮橘トク覚猶香

臘梅 臘尽明朝作老梅

蘭子 蘭有秀書兮菊有芳

卓 卓上狡狴怒欲飛

丹霞 丹霞燒木仏

十五夜 三五夜中新月色

隣家 却疑春色在隣家

寒梅 独倚寒村驕野梅

二葉 梅檀香自二葉

早梅 早梅別置春

上馬\* 上馬下鴛食一槽

追加

生微涼 人皆苦炎熱 我愛夏日長

熏風クニ自南來 殿閣生微涼

染衣 国色初酣酒 天香夜染衣

悦 梅檀香風悦可衆心

玄宗 広寒香世界 一夜坐玄宗

清香 一炷清香自得聞

梅月\* 梅発有風報

残雪\* 梅落残雪香

白鷺 白鷺不禁塵上汚

山桜\* 山桜抱石映松枝

端午\* 端午菖蒲馥

春宵\* 春宵一刻直千金



	六十一種香 59種・漢詩 16首	追加香 32種・漢詩 11首	計
『三体詩』『念昔遊』杜牧 「晴景」王駕 「韋曲」彦謙	枯木 隣家 寒梅		3
「白雲端祖山居偈」了庵清欲		清香	1
『詩話補遺卷一』『音眩』陰譚	鷓鴣斑		1
その他 『法華經』序品 諺（原拠は『観仏三昧海経』 禅録（『祖堂集』など）	二葉 丹霞	悦	2
出典不明	菖蒲・楊貴妃・斜月・臘梅・卓・ 早梅・上馬	玄宗・梅月・残雪・端午	11

## 第二部 菊岡沾涼の香道伝書を通して

### 第二部 第一章『香道蘭之園』の成立と概要

#### 一 『香道蘭之園』の成立

享保・元文の頃、数々の香道伝書が京都・大坂で成立した中(1)、『香道蘭之園』(2)は菊岡沾涼により江戸で取りまとめられた伝書で、香道の古法の集大成である。本書の中心は組香の集成であるが、室町時代以来の香道の歴史、組香以前の炷継、空炷の香についても忠実に伝承している。

「香の伝来」「香の規模」「十炷香の法」「香の拵え方」といった香道の基礎知識からなる一巻にはじまり、二〜九巻および附録巻に二三四の組香が収載されている。組香の主題となる和歌や物語の言葉を証歌、証詞として用い、ときには人形などの立物を使った盤物という組香も登場している。十巻においては香道具の詳細な図示と解説がなされ、「名香目録」「名香古歌古詩」「薫香名目」「薫香薬種製法」などが掲載されている。

ここで一巻の「十炷香の本原」の最終部分で語られる本書成立の経緯(資料1傍線部)を要約する。

正保・慶安(一六四四〜一六五二)の頃、京都に住み堂上方に出入りして、様々な組香を伝授し、香道の達人と世に知られていた鈴鹿周斎(3)は、延宝(一六七三〜一六八一)の初め江戸に下ってきた。また香に熟達し、公卿に仕えていた衣山鞞負丞宗秀(4)も、職を辞して江戸に下り、周斎の世話でその近所に住いを設けた。この二人から香道の伝授を受けたのが山下弘永(5)で、弘

永から栗本穩置（6）に香の奥義は伝わったのである。

十卷末の奥書には次のようにある（「A」から「E」の記号を付す）。

延宝五丁巳春自鈴鹿周齋授之

山下弘永〔A〕

宝永七庚寅八月自弘永授之

栗本穩置〔B〕

斯書原本一時之艸稿而前後錯雜

穩置患之菊岡房行加力精訂旧稿

始斯書大成名曰蘭園

享保十八壬丑八月上旬自穩置授之

菊岡寄邦〔C〕

元文四巳未九月下旬自寄邦授之

中村昌平〔D〕

皆元文四未炆向東窓菊岡崔下菴沾涼書之〔E〕

〔A〕〔B〕にはそれぞれ、延宝五（一六七七）年鈴鹿周齋から山下弘永へ、宝永七（一七一〇）年山

下弘永から栗本穩置への、詳しい伝授の年月が記されている。

周斎が、香道家として生活を営むことを期して江戸に下ったとすると、香道がその頃江戸において定着し、それを享受する人口があったと考えるべきであろう。山下弘永について詳細は解らないが、栗本穩置については奥書「C」の部分から、周斎より伝授されたことをまとめた「一時之艸稿」の「錯雑」を穩置が患い、菊岡房行（沾涼）の力を借りて旧原稿を精訂し、『蘭園』と名付けた経緯が理解できる。

享保一八（一七三三）年に穩置より伝授された菊岡寄邦（晴行）は、沾涼（房行）の兄である。

さらに「D」には元文四（一七三九）年に中村昌平が菊岡寄邦から授けられたこと、「E」には元文四年に菊岡沾涼が書写したことが記されている。「D」は「E」の前にあるが、「E」が秋なのに対し九月下旬であり、「E」より後の記入かもしれない。ただし、中村昌平については不明である（7）。

「C」と「E」に見える菊岡沾涼（8）は、延宝八（一六八〇）年七月に生れ、延享四（一七四七）年一〇月に六八歳で亡くなっている。伊賀上野の人で、はじめ飯束氏を名乗ったが、のちに母方の実家菊岡家に養子に出され、名を房行とした。その後、養父菊岡行尚に実子が誕生したため、自ら望んで江戸へ出て神田に居を定め、売薬（一説には経師）を家業とした。俳諧を内藤露沾（9）に学び、俳諧師として活動するかたわら、和漢の学に通じ、『江戸砂子』のような江戸時代を代表する江戸の地誌をはじめ、考証的な著作など二十余冊を書き残しており、多方面で活躍した知識人であったようだ。したがって栗本穩置にその編集能力を買われたのであろう（10）。

この奥書の記述から、十七世紀後半に京都から江戸に香道が流れてきた経緯が読み取れる。また本来堂上のものであった香道が、江戸で売薬（あるいは経師）を生業とした菊岡沾涼により取りまとめられ

たことは、当時の身分制度でいう「工商」にあたる階層、地下へと香の文化が流れた一つの記録と言えるのではなからうか。

また香道流派という視点から見ると、鈴鹿周斎は堂上に出入りしていた香人であるので、「御家流」の人である。「御家流」は、三条西実隆、烏丸光広、油小路隆基、猿島家胤、大口含翠と相伝し、含翠に伝わった頃に堂上から地下に移り、それまで公家の間では「当流」と呼んでいたものを、含翠以降の流れを「御家流」と称するようになったと言われる（11）。本書に見られる、延宝から元文に至る六〇余年の相伝は、三条西家に始まる御家流系譜との関係も認められず、鈴鹿周斎からの相伝系譜は、関東に分派した「御家流」と考えられる。

さらに奥書から、伝承の方式が「師資相伝」（12）形式であることが解る。雅楽や能楽のように家芸として世襲するものは「一子相伝」が貫徹されてきたが、茶の湯、立花、香道など、遊芸というジャンルに括られるものの多くは、当初「師資相伝」の形式をとっていた。この「師資相伝」という形式は、分裂分派を招きやすい。家元制を組織した「志野流」とは対照的に、江戸後期まで「師資相伝」形式を踏襲していった「御家流」は、それゆえに家元制度を確立することはできず、「師資相伝」の繰り返し、やがて自己分裂をとげ衰微することに繋がったと言えよう。

本書の成立に関して、鈴鹿周斎の伝える所を栗本穩置の意を汲んで整理し、『蘭之園』という書名を付けたのは沾涼であるが、彼一人の著作ではなく、何代かに亘って書き継がれたものと察せられる。しかし相伝を受けられる者だけにこうした書を授けるので、ごく限られた人たちの間で受容されたものと言え、それゆえ『香道蘭之園』も香道のテキストとして広く普及したものではなかったと考えられる。

なお本書は御家流の伝書である（13）が、他流の組香をその流派名とともに紹介したものもあり、自流のみに拘る偏狭な流派意識はあまり感じられない。また第一部第二章で触れたが、『香道蘭之園』附録巻掲載組香の内一六組は、大坂で大枝流芳により刊行された『香道秋の光』収載の組香である。いずれにしても京都・大坂が香道の主流であった時代に、『香道蘭之園』が江戸で取りまとめられた香道伝書であること、さらに、「源氏千種香」が本書にしか見られない組香であることが注目に値すると言えよう。「源氏千種香」については、第四章で詳述する。

## 二 『香道蘭之園』の概要

『香道蘭之園』は、一〇十巻及び附録巻の全十一巻から成る。一巻は「香の伝来・香の十徳并香の祖・香の規模・十炷香の本原」など香の歴史に関する記事、続いて「十炷香の法・香元の鏝・乱箱置合・折居並方・香札仕舞方・香の法度令・香の拵方・灰の押方・継香の事・空炷の事・香の置やうの図」など手前や作法に関する決まり事が記述されている。

「香の伝来」「香炉の灰や烟」の記述は、慶長八年（一六〇二）池三位丸自筆本『香之書』（14）や、奥書に元禄九年（一六九六）書写とある志野流四世蜂谷宗吾輯録の『香道規範』（15）と類似性が見られる。また鴨香炉、獅子香炉などの扱いについては、天正三年（一五七五）曲直瀬道三が建部隆勝の伝授を書写し、寛文九年（一六六九）に西田庄兵衛が開板した『香道秘伝書』（16）や『香道規範』と同様な記述が多数見られる。

一巻巻末「空炷の香の置やう」は、香木の割り方に「序破急の香」があること、それら長さの異なる

香木の置き方など、現在では不明となつてしまつた焼炷香についての記事であり、これらは池三位丸『香之書』に既に同様の記述がある。これらのことは、本書が鈴鹿周斎を経て伝授された旧稿を取りまとめたものであることの証左となろう。

二〇九巻及び附録巻に収載される全二三四の組香の内、八・九巻「源氏千種香」五三組を除くと、一八一の組香がある。中国文芸作品に依拠すると考えられるものが一一組、中国と日本の文芸作品に関連が窺えるものが四組、日本の文芸作品に依拠するものが八六組、依拠する文芸作品が明確には窺えないものが八〇組である。しかし、この八〇組を主題別に分類すると、和歌集の部立に似た様相を呈し、文学の影響が皆無とは考え難い。

証歌の有無で整理すると、二〇七巻と附録巻の一八一の組香の内、証歌が据えられている組香は四三組（その内訳は、和歌を証歌とするもの四〇組、漢詩を証歌とするもの二組、和歌と漢詩を証歌とするもの一組）、和歌の五つの句を香名に付しているもの四組で、合計四七組であり、残り一三四の組香には証歌は据えられていない。証歌を持つ組香四三組の内、『夫木和歌抄』由来の組香が二四組で、約五割六分を占めている。しかし証歌がない組香でも、香名や聞きの名目、札名、連衆名から依拠する文芸作品を特定できるものが殆どである。

『蘭之園』八・九巻は、現在、他の香道伝書には見られない「源氏千種香上・下」五三の組香に費やされている。『源氏物語』に関わる組香と言え、ば、「源氏香之図」で有名な「源氏香」が人口に膾炙されているが、「源氏香」はその香之図に『源氏物語』の巻名が付されているだけで、物語内容との深い繋がりはない。「源氏千種香」は『源氏物語』巻々の場面を捉え、物語の和歌を証歌、地の文を証詞や聞き

名目に用い、組香の仕組に物語を取り入れて、香りを聞き当てながら、物語世界をより深く楽しめるように考えられた組香である。

七巻巻末には「名香合」として、文龜元年（一五〇一）五月二十九日、志野宗信家において牡丹花肖柏、帰牧菴玄清ら十士により催された十番香合の記録「志野名香合」が掲載されている。これは第一部で扱った『心遠齋香道叢書』に正編三『名香合記』として収載される。

十巻は、「香道具寸法・小道具寸法・折居寸法」等、詳細な図とともに解説がなされ、「源氏香絵色紙」「香棚」等、彩色も美しい。香道具の形なども流派や年代によって変化しているので、これらの図や寸法は、元文当時の香道具を知る貴重な資料である。また「名香目録」として十種の香、五十種の香、百二十種の香など、「名香の聞き方」「本所六国」など香木に関する記事がある。さらに「名香古歌古詩」として名香とその引歌となる和歌や漢詩が記されている。「名香古歌古詩」については第五章で詳述するが、これは第一部第三・四章で述べた『香名引歌之書』と同様に、名香に和歌、あるいは漢詩を付けたものである。しかし『香名引歌之書』に比べ小規模であること、また香名が同じでも引歌が異なること、引歌に連歌が使用されることなど、『香名引歌之書』とは興趣を異にする。終りに、「薫香名目」「匂袋名目」「薫香薬種製法」など薫物・匂袋関連の記事がある。

附録巻は「新組香并組香異説」として二六の組香を収載し、第一部第二章で述べた通り、その内一八組は、大坂で大枝流芳により刊行された『香道秋の光』収載「中古より有来組香」一〇組の内六組と、大枝流芳の新組香五組、その他の人による新組香五組、『香道滝の糸』収載「古十組」に含まれる組香二組である。最巻末に、「右条新組の香、或異説の組香これに限るべからず。品々ありといへどもそのひと

つふたつを記す。是判本に載する所也。此外新組追て印行の目録あまたあり。鈴鹿の家流はかつて用ひず。然れども其虚実をあらはさんがため、崔下菴書。」と記されている。「鈴鹿の家流は」と断わるのは、鈴鹿以外の家流、つまり大口含翠を師と仰ぐ大枝流芳の御家流の存在を指し、その大枝により享保末頃から盛んに上梓されていた香道伝書を意識しての発言と考えられる。

先に『香道蘭之園』は、組香の集成を中心にした香道古法の集大成と記した。本論第二部では、『香道蘭之園』を精査検証して、『香道蘭之園』における文学享受について考察したい。第二章では、二、七巻及び附録巻収載の組香における文芸享受について、いかなる文芸作品を原拠としているかだけでなく、座の遊芸として、組香が連衆にいかん享受されたかを詳述する。第三章では、組香と『夫木和歌抄』について、『夫木和歌集抜書』との関わりに焦点を当てて考察する。また『香道蘭之園』のみが収載する「源氏千種香」には、現行の『源氏物語』内容と異なる事象が存在する。それらの事象と聞きの名目を精査し、「源氏千種香」成立における依拠本について、第四章で論述したいと考える。

## 第二部第一章 注

1 京都では、志野八世蜂谷宗栄・九世宗先による『香道箇条目録』、空華庵忍鎧による『十種香暗部山』、『香会余談』、大坂では本論文第一部で扱った大枝流芳による『香道秋の光』、『香道千代の秋』、『香道滝の糸』、『香道軒の玉水』が見られる。

2 『香道蘭之園』宮内庁書陵部所蔵御所本（一六三・八八五）十卷五分冊、附録一卷一冊。縦二九・二センチ、横二一・二センチ。楮紙袋綴、全四九一丁。一面およそ十行書き。蔵印「御府」。五分冊の表紙は鬱金色秋草文様、附録巻は茜色波文様で保存状態も良く美麗本。ほかに国立国会図書館所蔵本と宮内庁書陵部所蔵の別写本（二〇七・一五七）を参照したが、本稿の論述に影響するような内容の異同はない。

3 鈴鹿周斎 香道家 生没年未詳。正保く延宝（一六四四く一六八一）頃の人。周斎と称す。

4 衣山鞠負丞宗秀 生没年不詳。姓は「いやま」とも「きぬやま」とも読め、特定できない。

（神保博行『香道の歴史事典』柏書房 二〇〇三年）三五く三五二頁。

5 山下弘永 生没年不詳。―中略―江戸に香道が伝わった初期の香人の代表ともいえる人物か。

（『角川茶道大事典』角川書店、二〇〇二年）一三七四頁。

6 栗本穩置 生没年不詳。紫甘翁穩置・雪朝ともいう。

7 国立国会図書館所蔵本と宮内庁書陵部所蔵の別写本（二〇七・一五七）の奥書「D」と「E」の間には、「元文五庚申四月十一日自昌平授之 樺山久寛」の記述がある。

8 真島望「菊岡沾涼の俳諧活動」〔成城国文学〕第20号、二〇〇四年三月の「俳諧活動を中心とした事蹟（年譜）」一三〇～三三三頁。

9 江戸時代中期の俳人。―中略―江戸麻布の自邸で月次俳諧を催し、松尾芭蕉とも親交があった、と言われる。『日本史諸家系図人名辞典』（講談社、二〇〇二年）四五三頁。

10 真島望「菊岡沾涼の絵入俳書」〔成城国文学〕第24号、二〇〇八年三月）五三頁。

「絵俳書も『綾錦』も、過去にわずかに散在した要素を端緒として、それを自らの編著の糧としたという点で、完全な独創ではなかったにせよ、むしろ見るべきは、それを高度にかつ大衆受けする書として昇華せしめる卓抜な編集能力なのである。」

11 本論文序章参照。

12 西山松之助は『家元の研究』で「完全相伝」と名付けているが、本論文では「師資相伝」と称する。

13 本書一卷後半の作法の記述からも「御家流」であることが窺える。

14 西山松之助校注『香之書』（『日本思想大系 近世芸道論』岩波書店、一九七二年所収）。

15 『香道規範』国立国会図書館本一八九・一八七（香道伝書24）香道全般の儀式・作法・故実を記録した香伝書。

16 『香道秘伝書』著者は志野宗信、宗温、建部隆勝、岌翁斎宗入、翠竹庵道三。香道古伝書八種と翠竹庵道三の建部隆勝顕彰文から成る。

資料 『香道蘭之園』一卷 十炷香の本原

(一)内は国会図書館本により補う)

一 夫十炷香は組香の本元也。文亀の頃、室町家贈相国の時、三々九葉に一花を加へて、これを十炷香とす。もろ／＼の組香は此十炷香を根とせり。さるによつて組合にしたかひ、別の香札を用ゆる事ありといへとも、多くは十炷香の札を以為所よろしきとす。そのころ沙弥真相、志野宗信、牡丹花肖柏、一流を發し、組香二十余品あり。亦、志野宗信志野入道不寒齋宗温、父の跡を繼。其後、元和寛永の頃、後水尾の皇すゐみぎ○女院の御所、相ともに此道にふかく好ませ給ひ、此御宇に至て万国より佳種を奉りて奇品満てり。其御代にこそあまたの組合香をなさしめ給ふとなり。凡一百余品といへとも、日々夜々の御遊なりしかは、その際限あらざるに、その中に勅作あり、院作あり、或は博陸大尉の生まれ玉ひし香あり。月卿雲客こゝろ／＼に作せられ、折にふれ節にしたかひ叡覽に備へられしより、多くの組香世にひろまれりとそ。

茲に正保慶安のころ鈴鹿周齋王城の地に住んで、やんことなきかたに入て諸家の組香をつたへ承りて、此道に就て香道の深秘をきはめ、世にしられたる深者也。延宝のはしめ東都に來りぬ。又衣山靱負丞宗秀は堂上方につかへて香道にふかし。周齋と交りを厚うしけり。後に仕を辞し、これも江都にくたり、周齋にたよりして住む所をほとりにす。此両師より更伝ふる所は山下氏弘永世人也。弘永より伝ふは、栗本穩置と弘永息一学に、鈴鹿の奥儀は残れり。然るに中世香道しはらく盛んならざるにや、其道を失ひ組香の名のみありて其品あきらかならざる事おほし。

近代また香道流布あるにおみて古銘をかりて新作せしめ、印本の異説あり。これらは信するにたらず。先の両師はあらたになせる組香をかたく制す。寛永の頃の組香二百余品あり。これに事のたら

すと「いふ事なし。何そあらたになす事あらんや。また」近代の香道者、いにしへの志野流相阿弥流といふに准して自流をたつる人多し。香道におゐてはあるへからず。先師、香の奥儀極めたれとも自分の流儀を立るにあらず。古法を師とするもの也。たゞ古実を守るを以、香道の本意たるへしとの教なり。

香の極秘は十百炷に満たるにて、門葉に伝ふへしと先師の掟也。紫甘翁門人菊岡寄邦誌

同門崔下庵書之

## 第二部 第二章 『香道蘭之園』組香と文学

はじめに

本章では『香道蘭之園』収載組香の原拠となった文芸作品を精査し、いかなる作品が組香の素材として用いられたのかを検証するとともに、組香での文芸享受の様相を考察する。

『香道蘭之園』二巻く七巻、八・九巻、附録巻に二三四の組香が収載されている(1)。ただし八・九巻「源氏千種香」(五三組)については『源氏小鏡』との関係を中心に第四章で詳述することとし、本章では、都合一八一の組香について検討する。

菊岡沾涼が「新組香異説」と位置付けた附録巻収載二六組の内、一八組を確認しておく。これらは、『香道秋の光』(享保一八年七月刊)収載「中古より有来組香」六組と大枝作の新組香五組、その他の人による新組香五組、そして『香道滝の糸』(享保一九年刊)収載「古十組」に含まれる二組である。

『香道秋の光』

中巻 中古より有来組香なり十品内六品

花軍香 三夕香 蹴鞠香 鶯香 六儀香 鬪鷄香

下巻 新組十品(流芳組五、その内、盤物は二)

根合香 初音香 随蝶香 新玉川香 菓立香 篇突香 曲水香 関守香 玉橋香 子日香

『香道滝の糸』「古十組」の内

三炷香 住吉香

組香には証歌といって、主題となる和歌または漢詩が据えられるものがあり、この場合、その原拠と

考えられる文芸作品は明らかである。また香名や聞きの名目の言葉が、和歌の詞や物語の地の文、漢詩の一節、能楽の詞章である場合も、容易に依拠するものを特定できる。本章で扱う一八一の組香中、和歌を原拠とするものは八六組、中国文学を原拠とするものは一一組、和歌と中国文学両者に関連するのは四組である。残る八〇組には依拠する文芸作品が明確には窺えない。これらの組香は、自然の景物や、季節の行事、物尽し、神事、易占、あるいは蹴鞠や鷹狩といった遊戯をもとに考案された組香もあり、典拠は様々である。そこで、これらを主題別に分類して【表1『香道蘭之園』二〇七巻及び附録巻収載組香 主題別一覧】にまとめ、証歌、香名、聞きの名目から原拠と考えられる文芸作品が特定できるものは【表2『香道蘭之園』二〇七巻及び附録巻収載組香 原拠文芸作品別一覧】にまとめた。その結果表1は、和歌集の部立に似た様相を呈するものとなった。なお組香名の頭に付した算用数字は、翻刻本『香道蘭之園』における組香の通し番号である。

### 一 主題別分類に拠る組香

表1の組香について確認する。古十組とはごく初期に登場した組香で、文学的主题を持たない、あるいは表層的文学享受の組香である。また古十組は、伝書に拠ってその十組の組み合わせが異なる(2)が、いずれの伝書にも、十炷香、花月香、宇治山香、小鳥香、小草香は見られる。『香道蘭之園』草木香は小鳥香や小草香と同類である(3)。古十組の内、最も基本的香組の1十炷香、2無試十炷香、3炷合十炷香を解説しておく。

1十炷香は、試ありの三種各三包と試無し of 客香一包の計一〇包をうちまぜて、一炷聞きを行い、香

の出方を当てていく。**2**無試十炷香は、十炷香と香組は同じだが、試無しで一〇包を聞き、香の出方を当てる。**3**炷合十炷香は、一度に二炷ずつ香を焚き、都合五回聞いて香の出方を当てる。これが「三箇之大事」(4)の内、「焼合香之式」及び「連理香之秘事」へと繋がる香組と考えられる。

古十組内、唯一、特定の和歌享受が見られる組香が**11**宇治山香である。**11**宇治山香は五種の香名に、喜撰法師の「我庵は都のたつみ鹿ぞ住む世を宇治山と人はいふなり」(5)の五句を付し、五種をうちまぜて、その内の一炷のみを聞き、答えるというしくみである。したがって**11**宇治山香は表2に含めた。

古十組以外の組香を主題別に分類すると、和歌集の部立に似た様相を呈するものとなる。春を主題にしたものが多く冬に属するものはない。春、夏ともに花や鳥を素材に、それらの名を香名に付している。

**40**玉椿香は寛永の「椿」ブームが産み出した組香の可能性も窺える。また連衆の名に藤や波に関わる名所歌枕を指定する**128**藤浪香や、**218**根合香では答えの札銘に、安積沼、堀江等、沼沢地の名所が指定される。秋には七夕を扱った**106**・**107**東山殿流星合、**108**・**109**星合香、**224**玉橋香もある。

賀に分類した盤物**86**雛鶴香は、亀と名付けた香を当て、鶴の鋳を盤上の州浜に象った蓬莱山に載せることを勝ちとする(6)。また**104**恋路香では、名残一炷を「きぬぎぬ」と名付けて答える規則である。

雑に分類した組香の**28**三乎みつがひとつ一香は、試ありの香、もちゐ(餅)だけを聞く。「みつがひとつ」は、『源氏物語』葵卷(7)の「三日の夜の餅」にまつわる秘事である。

物尽しに分類した**31**手枕香は香の聞きにしたがい、新まくら、長まくら、松がね枕等の聞きの名目で答え、**47**衣手香は衣尽し、**92**雨中香は雨尽しの聞きの名目が指定される。**150**煙競香は炭窯、富士、漁火等の札で答える。

20名所香は、吉野方、龍田方に別れて競う盤物であり、聞き手の名に三輪、音羽、小夜等を指定する70山路香等もある。日本三景が主題の73三景香は香名を陸奥、丹後、安芸とし、三景の由来を、通説により寛永二十年（一六四三）、林鷲峰の『日本国事跡考』（8）の記述に始まるとすれば、三景香の成立はこれ以降ということになる。

和歌三神が主題の214六儀香や流鏑馬神事を扱った154馬競香、216十疋立競馬香、宮中行事の139・213鬪鶏香、遊びに分類した42・220蹴鞠香や127鷹狩香などはすべて盤物で、聞香とともに、視覚的に臨場感を味わう遊戯性の高いものである。また易占とした44八卦香は、その香の出方で乾なら「久方の天」、坤なら「あらがねの土」等枕詞で答えるため、文芸との関わりが皆無とは言いがたい。また219篇突香（『香道秋の光』下巻収載、大枝作）は、『源氏物語』葵巻「偏つきなどしたまひつつ、日暮らしたまふに」に由来する。

表1は、依拠する文芸作品が特定できないものを、その主題別に分類したが、和歌集の部立に似た様相―春、夏、秋、四季、賀、恋、雑―を呈している。また名所歌枕を聞き手の名や札名とする藤浪香や根合香、山路香等の存在、和歌三神をめぐる盤物や、指定された枕詞で答える八卦香、三平一や偏つきという詞から『源氏物語』の場面が想起されるもの等、これら組香の背景には、何らかの文芸作品との繋がりが窺え、文学的享受が皆無とは考え難い。

## 二 依拠文芸作品別分類に拠る組香

次に表2の組香を確認する。表2は証歌、香名、聞きの名目から原拠と考えられる文芸作品が特定で

きるもの一〇一組である。まず目を惹くのは『夫木和歌抄』に拠る二四組、次いで『古今和歌集』の一  
九組、『新古今和歌集』九組、『源氏物語』九組、『伊勢物語』七組である。

一〇一の組香の内、証歌の据えられている組香は四三組で、和歌のみ四〇組（この内出典不明一組）、  
漢詩のみ二組、和歌と漢文に拠るもの一組である（9）。その内『夫木和歌抄』由来の組香は二四組で、  
約五割六分を占める。『夫木和歌抄』由来の組香については第三章で詳述するため、表2には含めたが、  
表3【『香道蘭之園』二く七巻及び附録巻収載組香 依拠文芸作品別 文芸享受の様相一覽】では省略し  
た。

表2に拠れば、勅撰集では八代集が比較的多いのはもとよりとして、少数ながら『続後撰和歌集』『続  
古今和歌集』『続千載和歌集』『風雅和歌集』『新後拾遺和歌集』を原拠とした組香がある。中でも『古今  
和歌集』由来の組香は一九組と多く、和歌を証歌とするもの、証歌の歌詞を香名や聞きの名目にしたも  
の、仮名序や真名序の文章、古今伝授に依拠する組香もある。

『新古今和歌集』と『源氏物語』に拠る組香は各々九組である。本章では扱わない『香道蘭之園』八・  
九巻収載「源氏千種香」五三組をも含めて数えるならば、『源氏物語』由来の組香は六二組で最多となる。  
しかし、本章で扱う『源氏物語』由来の組香は「源氏千種香」に比べ、表層的『源氏物語』享受の組香  
と言える。『伊勢物語』に依拠する組香は七組で、井筒香や顔よ花香は能楽「井筒」「杜若」の影響も窺  
える。また『七十一番職人歌合』に拠る黒木香や、漢籍、故事に拠る組香も存在する。表3【『香道蘭之  
園』二く七巻及び附録巻収載組香 原拠文芸作品別 文芸享受の様相一覽】（『夫木和歌抄』由来の組香  
は第三章で詳述のため省略、ただし、80牡丹競香、147雪香は複数証歌欄に収載）も参照されたい。

## I 証歌が据えられている組香

組香の主題となる証歌は、単独の場合と複数の場合がある。しかも複数の歌集に跨がって、証歌を求めた組香もある。表3に拠れば、証歌が単独の組香は一二組ある（内一組は和歌典拠不明、注9参照）。各組香は、証歌に拠る香名や聞きの名目、あるいは札名を伴い、さらに証歌の意を盤物の所作に反映させる等、その文芸世界をより鮮やかに描出している。その例をいくつか挙げる。

### ① 単独証歌の組香

**98**初雁香は「秋風にはつかりがねぞ聞こゆる誰がたまづさをかけて来つらむ」（紀友則『古今和歌集』巻第四秋歌上 二〇七）を証歌とし、香の聞きにしたがい雁の立物を、陸と浪を描いた盤上に進ませ、十間目に至ると雁に玉章をかけて、「誰がたまづさをかけて来つらむ」を視覚的に表現する。盤物 **115** 弥生香は「流れてはいもせの山の中に落る吉野の川のよしや世の中」（よみ人しらず『古今和歌集』巻第十五恋歌五 八二八）を証歌とし、妹山、背山方に別れ、香の聞き次第で、官女、衣冠人形を進め、盤上の吉野川を越える。人形なしの時は、立物の蒼桜を開き桜に立てかえて吉野桜を視覚的に楽しむ。これは歌舞伎「妹背山婦女庭訓」の舞台を髣髴させる。**46**新月香は、『和漢朗詠集』白居易「三五夜中新月色 二千里外故人心」を証歌とし、香名は「楽天・阮籍（10）」である。曲水の宴を再現した **232** 曲水香は、第一部第二章で述べた『香道秋の光』下巻収載の大枝作の組香である。

「一たきにさももえやすき小原木のあかしもはてす入かたの月」（『七十一番職人歌合』九番右 三四）を証歌とする盤物 **131** 黒木香には、黒木（小原木）を頭にのせた賤女と牛人形が登場する。香の聞き次第で黒木を下ろし綾の巻物に付けかえ、賤女に花を持たせ、さらに香を当てれば、しほり戸の内へ牛とも

ども引きいれ「里着」と名付け勝ちとなる。『七十一番職人歌合』は中世後期に成立したとされ、職人の姿絵と和歌そして判詞を伴う歌合である。明暦三年（一六五七）、延享元年（一七四四）に板本が刊行されているので、これら板本での流布が、黒木香考案の動機となった可能性も考えられる。

## ② 複数証歌の組香

複数の証歌を持つ七組は、同一歌集に拠る**56**五色香（『拾遺愚草員外』）、**83**三夕香（『新古今和歌集』）、複数の歌集にわたる**105**歌合香、**111**みちのく香、**134**玉川香、**147**雪香、そして漢文と和歌に拠る**80**牡丹競香である。**56**五色香については後述する（**80**牡丹競香、**147**雪香は第二部第三章で詳述）。

**105**歌合香は、『古事記』『古今和歌集（仮名序）』『万葉集』『古今和歌六帖』から各一首を証歌とし、和歌の詞を香名に付し、奇数番目に出た香を上、偶数番目の香を下、とし、連衆は左右に分かれて、上の句と下の句の両方を聞くことに主眼を置く。聞香に歌合の趣を撰取した組香である。**134**玉川香は、六玉川の和歌を『拾遺和歌集』『後拾遺和歌集』『千載和歌集』『新古今和歌集』『風雅和歌集』に求めている。六玉川は宝暦頃（一七五一〜一七六四）に、三橋検校により箏曲組歌になり、地唄、長唄、清元等、音曲に撰取され、美人画の題材にもなる等、江戸中期から後期にかけて流布していく。組香での撰取はこれらの魁と言えようか。盤なしの**111**みちのく香は、西行と能因の和歌が証歌として利用され、香名と札名にも和歌の詞が使われる（11）。

和歌とともに漢詩が証歌とされた組香は『香道蘭之園』の内、**80**牡丹競香のみである。『夫木和歌抄』慈鎮の和歌「夏木立庭の野すちの石のうへにみちて色こきふかみ草哉」と『古文真宝後集』卷之二「説

類」収載の宋の人、周茂淑「愛蓮説」の「李唐よりこのかた世人甚だ牡丹を愛す」を証歌とする。「愛蓮説」は蓮を愛でるものであり、その中の牡丹に関する一文の採用には、強引の感が否めない。

## II 証歌提示のない組香

証歌の提示が無い組香は五四組と多い。しかし、香名や聞きの名目、あるいは札名、連衆名から証歌を特定できるものが殆どである。

### ① 香名・聞きの名目、あるいは札名、連衆名から証歌が解るもの

23 人麝香、 35 松梅香、 37 松山香、 38 因幡山香、 43 雁金香、 100 古今集香、 132 歌仙香、 144 武蔵野香、 229 恋題香等がこれに該当すると考えられる。100 古今集香と 132 歌仙香は、香組を操作して香の出方による数を、古今集二十卷、三十六歌仙に当てはめた組香である。ここでは 100 古今集香と 132 歌仙香を確認し、恋題香については後述する。

香の出方による数を利用した 100 古今集香は、試ありの一と二の香、各一包、試なしの香三種各一包、合計五包をうちまぜ、試ありの一と二だけを聞いていく。五炷の内、一と二の出る位置は二十通りとなるため、その出方によって、古今集二十卷の各巻頭歌の詞に拠る聞きの名目が指定されている。和歌中の詞をそのまま抜き出したものの他に、詞と詞をつなぎ合せて新たな言葉を作り出し、聞きの名目とした五例が見られる。

年の内の春 年の内に春は来にけり一年を去年とやいはん今年とやいはん

(在原元方 卷第一春歌上 一)

めに見ぬ秋

秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる

(藤原敏行 巻第四秋歌上 一六九)

峯の松

立ち別れ因幡の山の峯に生ふる松としきかばいま帰り来む

(在原行平 巻第八離別歌三六五)

おもひの夢

思ひつゝ寝ればや人の見えつらん夢と知りせばさめざらましを

(小野小町 巻第十二卷恋歌二 五五二)

春のながめ

起きもせず寝もせで夜を明かしては春の物とてながめ暮しつ

(在原業平 巻第十三恋歌三 六一六)

132 歌仙香は三十六歌仙の和歌と作者が題材の組香で、それぞれの作者名と初句を、ともに聞きの名目としている。この三十六歌仙和歌の組合せは伝本によって、いく通りにも異なりを見せるが、歌仙香が採用しているのは、「中、近世を通じて最も広く流布した典型的な一首歌仙本の本文」(12)とされる、伝本の多い拾穂抄型系統(正徳四年(一七一四)刊、北村季吟『歌仙拾穂抄』の系統)と考えられる。

## ② 盤立物の造型から原拠とする文芸作品が窺えるもの

48 野飼香、136 木樵香、234 随蝶香等が該当する。48 野飼香は、唐人の牛飼と馬飼人形が登場し、花山方と桃林方に分かれて香を聞く。これは『書経』「武成」の一節「馬を崑山の南に帰し、牛を桃林の野に放つ」を原拠とする造型と考えられる。また136 木樵香は、初手(最初)の香を「伐木」、次に当たる香を「丁々」と名付け、盤鏝は花の山、泰山と樵人形である。「伐木」「丁々」は、『詩経』「小雅」の「伐木」、「木を伐ること丁々たり」を原拠とするものと考えられる。「木をこりて帰る心」により、泰山の麓に立

て置いた樵人形を手前の舎りに向けて進ませる。

### ③ 複数の文芸作品、場面を原拠とするもの

36 末広香、71 (四巻)・225 (附録巻) 舞楽香が挙げられる。36 末広香は、聞きの名目に「末広・五明・手なれ草・かはほり」等、扇の異称が登場する。しかしその発想の原点は『源氏物語』夕顔巻で、聞きの名目には「五条わたり・夕がほのはな・なでしこの母」も見られる。また東屋巻で浮舟に琴を教えようかと考える薫が朗誦した「班女が閨の中の秋の扇の色 楚王の台の上の夜の琴の声」(尊敬『和漢朗詠集』上冬三八〇)に拠る「はん女が閨・だんせつ」の聞きの名目も見られる。団雪は『文選』卷二十七「怨歌行」に拠る。したがって末広香は、複数の文芸作品を原拠とし、聞きの名目とともに四炷香之図を伴うものの、『源氏物語』享受の様相は希薄である。71 (四巻)・225 (附録巻) 舞楽香は紅葉賀巻と花宴巻を混合した、華やかさを追究した盤物である。

次に、証歌提示はないが、特定の文芸作品を原拠とすることが明らかな組香を確認する。

### ④ 特定の文芸作品に拠ることが明らかなもの

イ 『古今和歌集』「仮名序」「真名序」「古今伝授」に拠るもの

「仮名序」に拠る 27 難波香、34 山吹香、85 六歌仙香、110 古今香、「真名序」に拠る 93 六儀香、「古今伝授」に拠る 49 三鳥香、103 鳥合香が挙げられる。『古今和歌集』はその和歌が、証歌、香名、聞きの名目に採用されるだけでなく、歌人の名も聞きの名目や連衆名に用いられ、さらに仮名序や真名序の記述が盤物に仕立てられる等多用されている。また古今伝授を撮取した組香もあり、特に 49 三鳥香での「古今伝授の鳥なれば、其誠をしらぬ心也」に拠る、答えの札を故意に打ちかえる方法は、組香という遊戯に

取り入れられた「古今伝授」の一つの在りようを示していると考えられる。

#### ロ 『源氏物語』に拠るもの

8 源氏四節香、24 源氏香、59 美人香、76 源氏四町香、117 系図香、118 三種香がある。8 源氏四節香や76 源氏四町香は、香名あるいは聞きの名目、札名に源氏と女君たちの名があるばかりで、物語内容との関連は稀薄である。59 美人香は聞きの名目に女君の名とともに「赤ぞめ衛門・いづみ式部・小野の小町・清少なごん・紫しきぶ」が並び、香名「桂の黛・遠山の眉・花の唇」等の象る美人という括りである。古十組にも含まれる117 系図香(13)は、「古法源氏香」あるいは「古式源氏香」(14)と呼ばれ、香之図名に「兵部卿宮・岩もる中将・薫大将・式部卿宮・紅梅大臣・夕霧大将・頭中将・落葉宮・蔵人少将・空蟬内侍・御息所・紅葉大臣・夕顔内侍・花散里内侍・女三宮」が付されている。しかし「紅葉大臣」は物語に登場しないし、「空蟬・夕顔・花散里」は内侍ではない。いずれにしても「源氏香」が現行の五本の縦線の図に五十二の巻名をつけて定着するまでに(15)、『源氏物語』に拠る様々な名を持つ香之図が存在したと考えられ、この「古法源氏香」もその内の一つと言えよう。これらの組香は、『源氏物語』を原拠としながらも、散漫且つ表層的享受の組香である。

#### ハ 『伊勢物語』に拠るもの

『伊勢物語』が典拠と考えられる組香は34 山吹香、65 東路香、66 井筒香、89 宇津山香、91 芥川香、101 顔よ花香、223 四炷香の七組である。先に『古今和歌集』に拠るとした34 山吹香は『伊勢物語』第一二二段の和歌(16)との関連も考えられる。65 東路香、91 芥川香は聞きの名目に、89 宇津山香は香名に、223 四炷香は香之図名に伊勢詞が使われ、中でも65 東路香は東下り章段から二一の聞きの名目を生み出して

いる。これらについては後述する。また**66井筒香**、**101顔よ花香**は能楽に依拠する組香の項で後述する。

**223四炷香**には「これは系図香の事也」と付され、四炷香香之図名は、概ね『伊勢物語』の詞による(17)。

#### ⑤ 能楽に拠るもの

**51相生香**、**66井筒香**、**69詩歌香**、**101顔よ花香**、**148石橋香**の五組である。特に盤物は能楽の舞台面を模したと考えられる造型のものがある。『伊勢物語』第二三段に拠る盤物**66井筒香**は、業平方と井筒方に分れて香を聞く。立物は業平と井筒人形、長方形盤の中央に井桁を据え、香の当りにしたがい人形を進め、井桁の際、十間目に到着すると右方へ一むら薄を植える。その後、香を聞き当てても人形は進めず、その当りを「水鏡」と名付ける。水鏡の勝が三度出ると香はまだ残っていても盤の勝負は終る。しかし水鏡で二度負けると負け方の薄は取られる。盤上の景色は正に能「井筒」の舞台である。「水鏡」は『伊勢物語』には見られない言葉で、これは能楽「井筒」地謡の「互ひに影を水鏡」に拠るものと考えられる。**101顔よ花香**には、『伊勢物語』第九段に拠る香名「杜若」「八橋」「蜘蛛」がある。「白」は同段「雪いと白う降り」に拠る可能性が考えられ、香名「紫」は『伊勢物語』に見当たらない。顔よ花とは杜若の異名であるが、これも『伊勢物語』には見当たらない言葉である。能楽「杜若」、ワキ旅の僧の詞章「時を忘れぬ花の色、顔佳花とも申すやらん」が原拠と考えられる。「杜若」最終の地謡「袖白妙の、卯の花の雪の、夜もしらしらと、明くる東雲の、浅紫の、杜若の、花も悟りの」に白と紫の対比が窺える。香名「白」「紫」はこの詞章に拠る可能性も考えるべきである。唐獅子、牡丹、蝶の鎊が登場する盤物**148石橋香**は、清涼山、石橋の傍らで獅子が牡丹に遊び戯れる、能楽「石橋」終盤の風情を盤上に再現している。

以上、依拠文芸作品別分類に拠る組香を確認した。次に**56 五色香**と**229 恋題香**を例に、組香においていかに文芸享受が行われるかを確認、考察する。

### 三 組香における文芸享受

組香は座の遊芸である。連衆一〇人で、香元と執筆を中心に四角く座して香を聞く。香元が焚いた香炉を連衆に回し、連衆各々が香を聞き、香りとともに組香の主題なり証歌による文芸世界を味わい、香を聞き当て、規則にしたがい答えを出していく。証歌が提示される五色香と、香名、札名（表裏）だけの提示で証歌が提示されない恋題香を例に、聞香の場において文芸享受がいかに行われるかを考察する。

#### 五色香における和歌享受

定家卿五色和歌（18）を証歌とする五色香の記述を確認する。

一青 二包、試なし。二黄 三赤 四白 五黒 二包づゝ試あり。  
右十包打合、二炷きゝ也。

一人きゝ二点、ウの一人きゝ三点、二人より一点。

青々 翠簾の葵 黄々 小がねの露

赤々 峰のもみち葉 白々 遠山さくら

黒々 むは玉の髪

二二 深みとり 三三 花むらさき

一五	瑠璃	一四	うす縹
五一		四一	
二三	濃くちは	二四	うす香色
三二		四二	
二五	こい鈍色	三四	薄紅梅
五二		四三	
三五	山鳩色	四五	うすゝみ
五三		五四	

定家卿五色和歌

川竹の葉こしの色にまよママふかな玉のすたれにかゝる葵は

枝かはす岸の山吹花ちりてこかねの露に浪そ越えける

しくれつる雲の日かけに染られて紅葉をちらす峯のこからし

しら雲の八重たつ岑の山桜そらにもつゝく滝つ川波ママ

むは玉のやみのうつゝにかきやれとなれてかひなき床の黒髪

青・黄・赤・白・黒の五色は、陰陽五行説での基本色である。試なしの青が客香、つまりウで、連衆の中で一人だけが聞き当てる点と三点もらえる規則である。試ありの香も一人聞きならば二点とある。答えの言葉、聞きの名目は、同色の時は、証歌の言葉を採用し、二色が異種の場合は、その二色を混ぜた時に生れる色名による。概ね組香では、香の出順を問うものが多いが、五色香では、二色が異種の場合、その二色を混ぜた時に生れる色名を聞きの名目にしてしているため、香の出順の前後を問うてはいない。

では、同色の場合の聞きの名目から確認する。

川竹の葉まかごしの色にまかよふかな玉のすだれにかゝる葵は（『拾遺愚草員外』三八九）

枝かはす岸の山吹花ちりてこがねの露に浪ぞ越えける（同書 三九〇）

しぐれつる雲も日かげに染られて紅葉をちらす峯のこがらし（同書 三九一）

しら雲の八重たつ岑の山桜そらにもつゞく滝つ川波風（同書 三九二）

むば玉のやみのうつゝにかきやれどなれてかひなき床の黒かみ（同書 三九三）

聞きの名目「小がねの露」は、和歌中の詞をそのまま採用している。「翠簾の葵」は、「川竹の葉ごしの色」と「玉のすだれにかゝる葵」から作られた言葉であり、「峯のみみぢば」は「紅葉をちらす峯のこがらし」から木枯らしに吹き散らされるもみぢ葉の紅を象徴して生れた言葉と考えられる。「遠山ざくら」も「しら雲の八重たつ岑の山桜」の眺望から連想された言葉であり、「むば玉の黒髪」は「むば玉のやみ」と「床の黒髪」から、より一層の漆黒を導き出している。ここでは和歌の風景とそこに詠み込まれた色彩が重ね合わされて、聞きの名目が付けられたと考えられる。香名を青、黄、赤等と言われてもそれは観念的なものに過ぎないが、その色を詠み込んだ和歌とともに香りを聞くことで、和歌の風景が具体的なイメージを呼び起し、和歌による聞きの名目が、色彩を印象づける。

第一部第三章で詳述したが、引歌から香名を取る時に、和歌の詞をそのまま使うのではなく、その詞を名詞にする、あるいは和歌の中の詞と詞をつなぎ合せて新たな言葉を作り出すといった、歌意を象徴

し調和をとりながら、詞を置き換える方法が用いられていた。組香の聞きの名目においても、同様な手法が見られ、それら聞きの名目は、その依拠する和歌世界を端的に描出している。五種の香りと、証歌の語る色、そして香の組合せによる一五の色にまつわる聞きの名目が登場し、嗅覚と視覚に働きかける彩り豊かな組香と言える。

### 恋題香における和歌享受と共通認識

『香道蘭之園』附録巻収載、恋題香は、『心遠斎香道叢書』後編二『古組香十品』収載「恋題香」と同一である。大枝流芳（岩田漱芳）識語に拠れば「恋題香」は中古組香とある。この組香は、試ありの「初恋・忍恋・待恋・別恋」各一包、試なし「逢恋」一包の合計五包を一炷聞きする、という簡単な香組である。しかし札打の札（表は連衆名、裏は答えとなる歌詞）に恋歌の趣向が凝らされている。『蘭之園』では附録巻の扱いで記述が簡略なため、『心遠斎香道叢書』「恋題香」の記述も援用する。では札の打ちようを確認する。

初恋と聞時は 玉たれの隙の札打へし

待恋と聞時は 更行鐘の札打へし

忍恋と聞時は 谷の埋木の札打へし

別恋と聞時は 暁の鶏の札打へし（『蘭之園』では「あかつき起」）

逢恋と聞時は 頼む行末の札打へし

札の裏右の通、一人分五枚つゝなり。札の表、紋は

岩間の水 袖しからみ こぬ夜あまた 重る衣 人目つゝみ 見はてぬ夢 根すり衣

鹿伏野へ 歌の恨 藻住虫

恋題香に証歌は記されていない。しかし札表の連衆名、札裏の言葉は、すべて恋歌の歌詞に拠るものである。その依拠すると考えられる恋歌の例を挙げてみる。

札裏

初恋 玉だれの隙

吹く風にわが身をなさば玉すだれひま求めつつ入るべきものを

『伊勢物語』第六十四段 玉すだれ

忍恋 谷の埋もれ木

思へどもいはでの山に年をへて朽ちやはてなむ谷のむもれ木

藤原顕輔『千載和歌集』卷第十一恋歌一 六五一

待恋 更行鐘

待つ宵に更けゆく鐘の声聞けばあかぬ別れの鳥はものかは

小侍従『新古今和歌集』卷第十三恋歌三 一一九一

別恋 暁の鶏

暁のゆふつけどりのおなじねにくたびつらきわかれしつらむ

藤原基隆『続古今和歌集』卷第十三恋歌三 一一五五

暁起き

おく霜の暁おきをおもはずは君がよどのによがれせましや

よみ人しらず『後撰和歌集』卷第十三恋五 九一四

逢恋 たのむの末

契りきなさてやは頼む末の松まつにいく夜の波はこえつつ

藤原雅経『明日香井和歌集 下』恋十五首歌合 一一〇八

札表

岩間の水

谷川の岩間の水をわけてゆくをとにのみやは聞かむと思ひし

平兼盛『詞花和歌集』卷第七恋上 一九一

袖のしがらみ

涙河落つる水上はやければ塞きぞかねつる袖の柵

紀貫之『拾遺和歌集』卷第十四恋四 八七六

洩らさばや忍びはつべき涙かは袖のしがらみかくとばかりは

源有房『千載和歌集』卷第十一恋歌一 六八〇

こぬ夜あまた

頼めつつこぬ夜あまたになりぬれば待たじと思ふぞ待つにまされる

柿本人麻呂『拾遺和歌集』卷第十三恋三 八四八

かさなる衣

あやなくも隔てけるかな夜を重ねさすがになれし中の衣を

光源氏『源氏物語』葵 一三〇

人目つゝみ

思へども人目つゝみの高ければかはと見ながらえこそ渡らね

よみ人しらず『古今和歌集』卷第十三恋歌三 六五九

たぎつ瀬のはやき心をなにかも人目つゝみの堰とどむらむ

よみ人しらず『古今和歌集』卷第十三恋歌三 六六〇

見はてぬ夢

命にもまさりて惜しくあるものは見果てぬゆめの覚むるなりけり

壬生忠岑『古今和歌集』卷第十二恋歌二 六〇九

根すり衣

春日野の若むらさきのすりごろもしのぶの乱れかぎりしられず

『伊勢物語』初段 初冠 一

恋しくは下にを思へ紫の根摺りの衣色にいづなゆめ

よみ人しらず『古今和歌集』卷第十三恋歌三 六五二

鹿ふす野べ

牡鹿臥す夏野の草の道をなみしげき恋路にまどふころかな

坂上是則『新古今和歌集』卷第十一恋歌一 一〇六九

## 歌の恨

うらみわびほさぬ袖だにあるものを恋にくちなむ名こそをしけれ

相模『後拾遺和歌集』卷第十四恋四 八一五

## 藻に住虫

海人の刈る藻に住む虫のわれからと音をこそ泣かめ世をば恨みじ

典侍藤原直子朝臣『古今和歌集』卷第十五恋歌五 八〇七

この他にも依拠すると考えられる和歌が想定できる。この組香に参加する連衆は、札の表裏の歌詞から、それにまつわる恋歌を想起できなければ、この組香を楽しむことはできないと言っても過言ではあるまい。おそらく当時の連衆たちには、共通認識としてこれら恋歌が存在したのだろうと推察する。証歌提示による制約がないため、香りを聞いて想起する恋の和歌はそれぞれに異なり、多様なものとなる。そして出香者も初恋、待恋、忍恋、別恋、逢恋の恋歌を鑑みて、六国から各々に相応しい香木を選択しなければならぬ。恋歌の持つ恋の情趣を香りで象徴することは、香木の香りを聞いて、その香りが想起させる恋歌を撰び香名を付けることと逆の営為である。出香者が選んだ香木の香りと、連衆の想起する恋の情趣とが、必ずしも同調するとは限らない。しかも香包を打ちまぜることで、いずれの香が出てくるかの予測はできない。香りを聞き、恋歌に思いを馳せ、様々な思惑が交錯した末に札を打って答えるのである。嗅覚により捉えた香りのイメージを、文芸的教養が裏付けるその瞬間にこそ、組香でしか味わえない遊びが存在するのである。『蘭之園』において、証歌が提示されない組香は五四組と多い。しかも依拠する和歌を様々に考えさせる恋題香のような組香は、文学性の高い組香と考えられる。

#### 四 香名、聞きの名目等、言葉の採用方法 — 『伊勢物語』において—

次に『伊勢物語』を原拠とする組香を例に、香名、聞きの名目等の言葉が、物語の中からどのように採用されたかを検討する。

『伊勢物語』から採られた香名、聞きの名目、香之凶名の数を表4【『伊勢物語』章段別、香名・聞きの名目・香之凶名の数】にまとめた。**65東路香**（聞きの名目）、**89宇津山香**（香名）、**101顔よ花香**（香名）、**223四炷香**（香之凶名）で共通することは、第九段東下りの詞を多く採り入れている点である。特に**65東路香**は、第七段いとどしく、第八段浅間の嶽、第九段東下り、第一〇段たのむの雁、第一二段武蔵野、第一三段武蔵鏡、第一四段姉齒の松、第一五段しのぶ山にかけて詞を採り入れており、要するに東下り章段に集中している。

では香名、聞きの名目、香之凶名は、『伊勢物語』の和歌、地の文、いずれからの採用か、詞の形はどのように決められたのかを確認する。資料『伊勢物語』詞の採用を参照されたい。芥川香に採用されたと考えられる部分に波線、東路香についての部分に傍線、宇津山香、顔よ花香、四炷香については網を掛けた。芥川香、東路香、宇津山香、顔よ花香、四炷香での香名、聞きの名目、香之凶名の典拠と考えられる『伊勢物語』での詞は、和歌由来のもの一四、地の文を由来とするもの二六、その両方の由来が考えられるもの五である。表5【『伊勢物語』和歌・地の文 依拠一覧】を参照されたい。地の文由来のものは、和歌由来のもの約一・八五倍である。また地の文由来のものが多いのは第六段芥川と第九段東下りである。これらは『伊勢物語』の詞そのままではなく、詞の形を変え、あるいは複数の詞を一つにまとめて名詞化されている。

芥川香

雨もいたう降りければ ↓ しきる雨

神さへいといみじう鳴り・神鳴る ↓ なる神

鬼はや一口に食ひてけり ↓ 鬼一口

東路香

むかし、男ありけり ↓ むかし男

伊勢、尾張のあはひの海づら ↓ 伊勢尾張の海

浅間の嶽に煙の立つ・浅間の嶽に立つ煙 ↓ 浅間の煙

蔦、かへでは茂り ↓ 蔦楓の茂り

富士の山を見れば、五月のつごもりに ↓ さ月の富士

塩尻のやうになむありける ↓ しほじりの山

宇津山香

わが入らむとする道はいと暗う細きに ↓ 細道

顔よ花香

雪いと白う降り ↓ 白

地の文の複数の詞をまとめて名詞化したものは、芥川香三例、東路香六例、宇津山香、顔よ花香は各一例、合計一一例である。しかも東路香、宇津山香、顔よ花香の計八例はすべて第九段に拠るものである。

中世文学における『伊勢物語』受容について、謡曲の詞章を例に、小山順子（19）は、

キーワードとして機能する〈詞〉とは、広く知られ、それが物語の文脈の中でどのように用いられているのかという理解、さらに、文脈を代表しうる詞であるという認識が共有されているものでなくてはならない。地の文からの詞の摂取が、九段に集中しているのも、九段が『伊勢物語』の中で最も愛好され、広く受容された章段であったからである。

と指摘している。聞香の連衆にとって、座においての共通認識は不可欠であるから、組香においても同じ現象が生じたと考えられる。

言葉を採用時、地の文の内容に則しながら、五音ないし七音の語にまとめるといふ方法は、『香道蘭之園』八・九巻収載「源氏千種香」での聞きの名目や香名でも見られる事象（第二部第四章参照）であるが、『伊勢物語』由来のこれら組香では、より短い音数の名詞にまとめられているものもある。

第一部第三章で述べたが、引歌から香名を採用する場合と同様に、『伊勢物語』由来の組香の香名、聞きの名目、香之凶名は、地の文からも詞を採り出し、あるいは詞と詞をつなぎ合せて新たな言葉を作り出し、文意、文脈を象徴するように詞を置き換えるなどの方法がとられている。

おわりに

以上『香道蘭之園』収載組香一八一組（全二三四組の内「源氏千種香」五三組を除く）について、文学受容の様相を確認した。一八一組の内八〇組は、依拠する文芸作品が明確には窺えないもので、主題別分類したところ、和歌集の部立に似た様相―春、夏、秋、四季、賀、恋、雑―を呈している。また連

衆名、札名等に名所歌枕が使用され、指定された枕詞や歌詞が聞きの名目とされる等、組香の背景に文芸作品との繋がりが窺え、文学的享受が皆無とは考えにくいことが判明した。

文芸受容の様相を精査すると、証歌が据えられている組香が四三組、和歌の五句を香名にしている組香が四組、証歌提示のない組香が五四組である。証歌が据えられている組香では、単独証歌に拠るものと複数証歌に拠るものがあり、香名や聞きの名目あるいは札名を伴って、その和歌世界をより鮮やかに描出している。盤立物の所作に証歌の歌意を反映させたものもある。証歌提示のない組香では、香名や聞きの名目、札名、連衆名から証歌が判明するもの、盤立物の造型から原拠とする文芸作品が窺えるもの、複数の文芸作品や場面に依拠するものが存在する。また香組や香の出る数等を利用して、依拠する文芸作品を特定する工夫も見られた。

組香は座の遊芸である、と先述した。連衆一〇人で、香元と執筆を中心に四角く座して香を聞く、この形態は連歌の座に類似している。連歌師たちにとって、連歌興行の際に、古典や和歌の文芸的教養は必須であり、一座の共通認識なくして連歌を詠み継ぐことは不可能である。

組香と言えば十炷香（有試と無試がある）が多く行われてきたが、文芸を主題や証歌に取り込んだ組香が考案されて、『蘭之園』や『心遠斎香道叢書』、板本の香道伝書に多くの組香が収載されたのである。組香で証歌提示がない場合、連衆は、香名や札名、聞きの名目や香組、時に聞き手の名から、その背景にある主題、組香が立脚する文芸作品を看取しなければならない。連衆一座の共通認識と価値観を基盤として、それぞれが香りを聞き、己が文芸的教養を駆使して、回答を導き出すのである。強いて言うならば、香を聞きはすしても、文芸的造詣によって、正解にたどり付けることも起り得る。したがって組

香享受において、文芸的教養は欠くべからざるものである。以上のことを鑑みれば、組香は聞香を伴う座の文芸と捉えられるかもしれない。

## 第二部第二章 注

1 翻刻本『香道蘭之園』では、組香でない七巻収載の「名香合」二種にも番号を振っているため通し番号が<sup>236</sup>までとなっているが、組香の実数は二三四である。

### 2 『香之記序』（細川玄旨幽齋）

十炷香 花月香 宇治山香 小鳥香 小草香 郭公香 系凶香 十炷香焼合 源氏香 鳥合香  
『十種香暗部山』（空華庵忍鎧）

十炷香 花月香 宇治山香 小鳥香 小草香 競馬香 矢数香 名所香 源氏香 連理香

### 『香道秘伝書』（宗入）

十炷香 花月香 宇治山香 小鳥香 小草香 郭公香 系凶香 十種香焼合 源平香 鳥合香  
『香道蘭之園』

1 十炷香 2 無試十炷香 3 炷合十炷香 4 花月香 5 二炷開華月香 6 競香 11 宇治山香

14 小草香 15 小鳥香 16 草木香 26 矢数香 122 旗香 123 源平香

3 14 小草香、15 小鳥香、16 草木香は、よく知られる基本的香組である。あらかじめ、草の名や鳥の名を連衆に知らせておく。例えば小草香でも、四炷が全て異香なら「あさがほ」と答えさせ、一炷と四炷が同香で二炷と三炷が異香なら「さきくさ」と答える、という規則である。

4 「三箇之大事」とは「焼合香」「木処気味」「連理香」のことで、『心遠齋香道叢書』新編十二『焼合香秘伝』（内題「焼合香秘伝書」）収載「十炷香焼合之記」に詳しい。「連理香之秘事」は秘事ゆえか『心

遠齋香道叢書』には見当たらない。

5 『古今和歌集』卷第十八雜歌下 九八三。

6 この蓬萊山の鏝には盆景の影響が窺える。

7 「葵」『新編日本古典文学全集 源氏物語②』（小学館、一九九五年）七三頁。

「さても子の子はいくつか仕うまつらすべうはべらむ」と、まめだちて申せば、「三つが一つにてもあらむかし」とのたまふに。」。

8 「松嶋、此島之外有小島若干、殆如盆池月波之景、境地之佳、与丹後天橋立、安芸巖島為三処奇観」『日本国事跡考』国文学研究資料館蔵マイクロ三〇・六六四・五。

9 出典不明一組は136木樵香（盤物）である。木樵香は盤立物の造型と香名から『詩経』「小雅」の「伐木」が原拠と察せられるが、典拠不明の証歌「ちる花を薪のうへに吹かけて嵐をもたぬ山人もなし」も付されている。また証歌が提示されない組香は五四組、和歌の五句を香名とするものが四組ある。

10 『白氏文集』卷一四律詩「八月十五日夜、禁中に独り直し、月に対して元九を憶う」の一節。阮籍は竹林七賢の一人、恐らく組香作者の間違いであり、阮積が正しい。

11 証歌が記されない盤物112みちのく香は、「道のべに清水流るる柳陰しばしとてこそ立ちどまりつれ」（西行法師『新古今和歌集』卷第三夏歌 二六二）の「柳陰しばしとてこそ立ちどまりつれ」に拠り、香を聞き当ても西行人形を進ませず、鏝の柳の下に立ち止まらせる。これも、歌意を反映させた盤立物の所作と言える。

12 新藤協三『新典社研究叢書 三十六歌仙叢考』（新典社、二〇〇四年、三三八、三五四、三五八〜三五

九頁)。

13 117系図香は、四本の縦線と同香を結ぶ横線から出来る香之図のみで回答する組香である。系図香とは四種の香各四包、合計十六包を用意する。それを打ち混ぜ、その中から無作為に四包のみを取り出し、順に炷き出す。連衆は各々、名乗紙に右から四本の縦線を引き、同香と思つたもの同士を横線で結ぶ。

この縦線と横線に抛る図を「香之図」と呼び、その組み合わせは十五通りとなる。十五通りの「香之図」にはそれぞれ名が付けられる。「香之図」の形状が系図に似ることに抛り、系図香と呼ばれる。

14 早川甚三『文学と香道』(あるむ、二〇〇七年)。

15 本間洋子「源氏香の誕生」(『中世後期の香文化―香道の黎明―』思文閣出版、二〇一四年、二二九頁)

「具体的な銘は特定できないものの、『源氏物語』の内から銘を付けた「香図」が近衛尚通によって永正十三年(一一五―一六)に成立していたこと、また、それには右京大夫細川高国の提案があったことなどが明らかとなった。」

16 山城の井手の玉水手にむすびたのみしかひもなき世なりけり『伊勢物語』第一二二段 井手の玉水。

17 四炷香之図名は「うみかぶり(初段)・葎の宿(第三段)・春日野(初段)・むさし野(第一二・四一段)・武蔵鏡(第一三段)・すまの浦(「須磨」で第一一三段)・住よし(第一一七段)・人はし(第九段)・志賀の里・明石の浦・三吉野(第一〇段)・宮城野・関の鳥・都鳥(第九段)・逢坂山」である。志賀の里、明石の浦、宮城野、関の鳥、逢坂山は、物語中に見られない言葉である。

18 この和歌は、摂政太政大臣藤原良経の試みた五色和歌に対し、同題で詠むように定家が要請されたことによる。『拾遺愚草員外』十五首歌収載。

19 小山順子「後柏原天皇御会」「伊勢物語詞連歌」の位相」

『文学』隔月刊第12巻・第4号、岩波書店、二〇一一年七月―八月。

【表1】『香道蘭之園』二〜七巻及び附録巻収載組香 主題別一覽

頭数字…組香通し番号

分類	組香名	古十組	春	夏	秋	四季	賀	恋
		1 十炷香 2 無試十炷香 3 炷合十炷香 4 花月香 5 二炷開華月香 6 競香 14 小草香 15 小鳥香 16 草木香	30 初春香 40 玉椿香 41 水仙香 52 黃鸝香 57 摘草香 63 花筏香 120 桜狩香 121 陽炎香 141・211 初音香 228 鶯香	12・13 水草香 113・114 郭公香 128 藤浪香 152 葵香 218 根合香	21 住吉香 61 紅葉狩香 106・107 東山殿流星合 108・109 星合香 224 玉橋香	33 四季香 53 三光香 77 風香 79 桂香 81 菓香	7 祝香 78 老松香 86 雛鶴香	104 恋路香

分類	雜 物 名 所 和歌三神 神事 宮中行事 易占 系図 言葉遊び 遊び
組香名	25 鴛鴦香 28 三平一香 96 明暮香 116 雌雄香 31 手枕香 47 衣手香 92 雨中香 150 煙競香 20 名所香 62 清水香 70 山路香 73 三景香 95 八景香 126 三笠山香 215 寝物語香 217 弥生香 230 玉川香 22 玉津島香 214 六儀香 154 馬競香 216 十疋立競馬香 139・213 鬪鷄香 44 十二支香 68 八卦香 97 陰陽香 222 三炷香 84 文字合香 149 三文字香 219 扁突香 226 一二三香 42・220 蹴鞠香 127 鷹狩香

【表2】 『香道蘭之園』二、七巻及び附録巻収載組香 原拠文芸作品別一覽

頭数字…組香通し番号

後撰和歌集	古今和歌集 假名序 真名序 古今伝授	伊勢物語	催馬楽	万葉集	古事記 歌謡	文芸作品名 組香名
88 逢坂香 132 歌仙香	49 三鳥香 93 六儀香 27 難波香 229 恋題香 11 宇治山香 23 人麿香 37 松山香 38 因幡山香 43 雁金香 98 初雁香 100 古今集香 115 弥生香 132 歌仙香 142 追儼香	34 山吹香 65 東路香 66 井筒香 89 宇津山香 91 芥川香 101 顔よ花香 223 四炷香	74・75 催馬楽香	17 若浦香 105 歌合香 147 雪香 233 巢立香 229 恋題香	105 歌合香 54 三輪香	組香名

千載和歌集	詞花和歌集	金葉和歌集	後拾遺和歌集	和漢朗詠集	源氏物語	枕草子	小大君集	拾遺和歌集	和泉式部日記	文芸作品名
67 水鳥香 134 玉川香 229 恋題香	135 錦木香 132 歌仙香 236 住吉香 229 恋題香	72 小式部香	37 松山香 111・112 みちのく香 134 玉川香 229 恋題香	35 松梅香 36 末広香 46 新月香 232 曲水香	8 源氏四節香 24 源氏香 36 末広香 59 美人香 71・225 舞楽香 76 源氏四町香 117 系図香 118 三種香	9 清氏四節香 153 曙香	132 歌仙香	132 歌仙香 134 玉川香 227 子日香 229 恋題香	229 恋題香	組香名

夫木和歌抄	明日香井和歌集	続古今和歌集	十訓抄	続後撰和歌集	宝治百首	拾遺愚草員外	新古今和歌集	山家集	文芸作品名
140 皐月香 87 七種香 143 川浪香 147 雪香 151 みあれ香 10 千とせ香 18 船路香 29 秋草香 39 鶺鴒船香 45 菊合香 119 虫撰香 50 風音香 124 神路香 58 草苺香 125 石清水香 64 貝合香 129 衣更着香 80 牡丹競香 133 子日香 82 何鳥香	229 恋題香	144 武蔵野香	145 鸚鵡香	147 雪香	229 恋題香	56 五色香	83・221 三夕香 111・112 みちのく香 132 歌仙香 134 玉川香 137 浦路香 144 武蔵野香 229 恋題香	229 恋題香	組香名

伝承歌	能楽	七十一番職人歌合	題林愚抄	六条家秘抄	新後拾遺和歌集	風雅和歌集	続千載和歌集	古今和歌六帖	文芸作品名
138 葛葉香	51 相生香 66 井筒香 69 詩歌香 101 顔よ花香 148 石橋香	131 黒木香	19 御祓香	227 子日香	130 衛香	134 玉川香	146 嵐山香	105 歌合香	組香名

愛蓮說	開元天寶遺事	白氏文集	長恨歌	杜甫詩	文選	陶淵明詩	漢書	故事 鷄鳴狗盜	史記	書經	詩經	中国文芸作品
80 牡丹競香	214 随蝶香 55 扇軍香 235 花軍香	46 新月香	60 比翼香 155 連理香	136 木樵香	36 末広香	212 菊水香	43 雁金香 98 初雁香	231 関守香	32 吳越香	48 野飼香	136 木樵香	組香名

【表3】『香道蘭之園』二〜七巻及び附録巻収載組香 原拠文芸作品別 文芸享受の様相一覽

凡例 ( ) … 証歌提示がなくとも、香名や聞きの名目、あるいは札名から証歌が類推できる。

\* … 特記事項

『夫木和歌抄』由来の組香は第三章で詳述のため省略するが、80 牡丹香、147 雪香は複数証歌蘭に収載

原拠文芸作品	単独証歌	複数証歌	証歌提示無し	香名	聞きの名目	札名	連衆名	盤物	所作	備考
古事記 歌謡 54 三輪香 105 歌合香		○		○						
万葉集 17 若浦香 105 歌合香 147 雪香 233 巢立香 229 恋題香	(○)	○ ○		○ ○ ○ ○	○	○		○		
催馬楽 74 催馬楽香 75 催馬楽香			○		○		○*	○		催馬楽曲名
伊勢物語 34 山吹香 65 東路香		(○)	○ ○	○	○					



和泉式部日記 229 恋題香	後撰和歌集 132 歌仙香 88 逢坂香	古今和歌集 仮名序 27 難波香 34 山吹香 85 六歌仙香 105 歌合香 110 古今香 93 六儀香 真名序 古今伝授 49 三鳥香 103 鳥合香	原拠文芸作品
	(○)		単独証歌
(○)	(○)	(○) (○) ○ (○) * *	複数証歌
○	○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	証歌提示無し
		○ ○ ○ ○ ○ *	香名
	○ ○	○ *	聞きの名目
○		○ ○	札名
○		○ *	連衆名
		○ ○	盤物
			所作
	三十六歌仙	三鳥之大事 三鳥之大事 和歌の六体 歌人名 六歌仙の歌人評	備考

源氏物語 8 源氏四節香 24 源氏香 36 末広香 59 美人香 71 舞樂香 225 舞樂香 76 源氏四町香	枕草子 9 清氏四節香 153 曙香*	小大君集 132 歌仙香	拾遺和歌集 132 歌仙香 134 玉川香 227 子日香 229 恋題香	原拠文芸作品
			(○)	単独証歌
(○)		(○)	(○) ○ (○)	複数証歌
○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○	○	○ ○ ○	証歌提示無し
○ ○ ○	○ ○		○	香名
○ ○ ○ ○ ○ (香之図) ○ (香之図) ○ *	○ ○	○	○ ○ ○ *	聞きの名目
○ ○ ○			○ ○ ○ * 1	札名
	○		○	連衆名
○ ○			○	盤物
○ ○			○ * 2	所作
女君・女流歌人名	清氏曙香とも	三十六歌仙	六玉川 三十六歌仙 1 和歌の五儀 2 小松引き	備考

金葉和歌集 72 古式部香	後拾遺和歌集 37 松山香 111 みちのく香 112 みちのく香 134 玉川香 229 恋題香	和漢朗詠集 35 松梅香 36 末広香 46 新月香 232 曲水香	源氏物語 117 系凶香 118 三種香	原拠文芸作品
(○)		○ ○ (○)		単独証歌
	(○) ○ (○) ○ (○)	(○)		複数証歌
○	○ ○ ○ ○	○ ○	○ ○	証歌提示無し
○	○ ○	○		香名
	○*	○ ○ (香之凶)	○ ○ (香之凶)	聞きの名目
	○ ○	○		札名
	○			連衆名
	○	○		盤物
	○	○		所作
	六玉川			備考



続千載和歌集 146 嵐山香	古今和歌六帖 105 歌合香	明日香井和歌集 229 恋題香	続古今和歌集 144 武蔵野香	十訓抄 145 鸚鵡香	続後撰和歌集 147 雪香	宝治百首 229 恋題香	拾遺愚草員外 56 五色香	新古今和歌集 144 武蔵野香 229 恋題香	原拠文芸作品
○				(○)					単独証歌
	○	(○)	(○)		○	(○)	○	(○) (○)	複数証歌
		○	○	○		○		○ ○	証歌提示無し
○	○		○	○	○		○	○	香名
	○		○		○		○	○	聞きの名目
		○				○		○	札名
		○				○		○	連衆名
									盤物
									所作
									備考

伝承歌		能楽	七十一番職人歌合	題林愚抄	六条家秘抄	新後拾遺和歌集	風雅和歌集	原拠文芸作品
138 葛葉香		51 相生香	131 黒木香	19 御祓香	227 子日香	130 衛香	134 玉川香	
			○	○	(○)	○		単独証歌
							○	複数証歌
○	○ ○ ○ ○ ○				○			証歌提示無し
○	○ ○			○	○			香名
		○				○	○*	聞きの名目
	○				○* 1			札名
	○							連衆名
	○	○	○		○			盤物
		○*			○* 2			所作
	能「杜若」	能「高砂」 水鏡 能「白楽天」			2 小松引き 1 和歌の五儀		六玉川	備考

白氏文集	長恨歌	文選	陶淵明詩	漢書	故事	史記	詩經	書經	原拠文芸作品
46 新月香	155 連理香 60 比翼香	36 末広香	212 菊水香	98 初雁香 43 雁金香	231 関守香	32 吳越香	136 木樵香	48 野飼香	
○			(○)	○ (○)					単独証歌
		(○)							複数証歌
	○	○	○	○	○	○	○	○	証歌提示無し
○									香名
		○(香之図)	○	○					聞きの名目
○									札名
					○				連衆名
				○		○	○	○	盤物
				○*					所作
	秘伝ゆえ詳細不明			初雁が玉章を持つ			和歌証歌典拠不明		備考

愛蓮説 80 牡丹競香	開元天寶遺事 234 随蝶香 55 扇軍香 235 花軍香	原拠文芸作品
	(○)	単独証歌
○		複数証歌
	○ ○ ○	証歌提示無し
	○	香名
		聞きの名目
	○	札名
		連衆名
○	○ ○ ○	盤物
		所作
『夫木和歌抄』証歌	扇軍香と同じ心か	備考

【表4】『伊勢物語』章段別、香名・聞きの名目・香之図名の数

第十四段	第十三段	第十二段	第十段	第九段	第八段	第七段	第六段	第三段	初段	
										山吹香
2	1	2	2	10	2	1				東路香
										井筒香
				4						宇津山香
							6			芥川香
				3						顔よ花香
	1	1	1	2				1	2	四炷香

\*井筒香には、香名、聞きの名目として詞はないが、依拠は明らかなため○印とした。

第百二十二段	第四十一段	第二十三段	第十五段	
1				山吹香
			1	東路香
		○*		井筒香
				宇津山香
				芥川香
				顔よ花香
	1			四炷香

【表5】『伊勢物語』和歌・地の文 依拠一覧（表中の詞は香名、聞きの名目、または香之図名）

第十五段	しのぶ山								和歌 14	地の文 25（「あづまのかた」は重複するため1に数える）	和歌と地の文 5
第十四段	桑子 きつにはめなで										
第十三段	武蔵燈	武蔵燈	武蔵野	三よし野の里	三よし野の里	あづまのかた 浅間の煙	伊勢尾張の海	露 芥川 しきる雨 なる神 鬼一口	むかし男		武蔵燈
第十二段	武蔵野 わか草	武蔵野	武蔵野								武蔵野
第十段	三芳野 たのむの雁										
第九段	宇津の山辺 かのこまだら 都鳥				あづまのかた 八はし 蜘蛛 かきつばた 山 細道 葛 楓						都鳥
第八段	浅間の煙										浅間の煙
第七段											
第六段	露 しら玉										露
章段											

資料『伊勢物語』詞の採用

『新編日本古典文学全集12 伊勢物語』（小学館、一九九四年）一一七～一二七頁より抜粋。

凡例…波線―芥川香、傍線―東路香、網掛け―宇津山香、顔よ花香、四炷香

第六段 芥河

むかし、男ありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗みいでて、いと暗きに来けり。芥河といふ河を率て行きければ、草の上に置きたりける露を、「かれはなにぞ」となむ男に問ひける。ゆく先おほく、夜もふけにければ、鬼ある所ともしらで、神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ、―中略―

はや夜も明けなむと思ひつゝゐたりけるに、鬼はや一口に食ひてけり。「あなや」と言ひけれど、神鳴るさわぎに、え聞かざりけり。―中略―

白玉か何ぞと人の問ひし時つゆとこたへて消えなましものを

これは、二条の後の、いとこの女御の御もとに、仕うまつるやうにてゐたまへりけるを、―後略―

第七段 かへる浪

むかし、男ありけり。京にありわびてあづまにいきけるに、伊勢、尾張のあはひの海づらをゆくに、浪のいと白く立つを見て、

いとどしく過ぎゆく方の恋しきにうらやましくもかへる浪かな  
となむ、よめりける。

第八段 浅間の嶽

むかし、男ありけり。京やすみ憂かりけむ、あづまの方にゆきて、すみ所求むとて、友とする人、ひとりふたりしてゆきけり。信濃の国、浅間の嶽に煙の立つを見て、信濃なる浅間のたけに立つけぶりをちこち人の見やはとがめぬ

第九段 東下り

むかし、男ありけり。その男、身をえうなきものに思ひなして、京にはあらず、あづまの方にすむべき国もとめにとてゆきけり。もとより友とする人、ひとりふたりしていきけり。道しれる人もなくして、まどひいきけり。三河の国、八橋といふ所にいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河のくもでなれば、橋を八つわたせるによりてなむ、八橋といひける。——中略——

その沢に、かきつばたいとおもしろく咲きたり。——中略——  
ゆきゆきて、駿河の国にいたりぬ。宇津の山にいたりて、わが入らむとする道はいと暗う細きに、葛かへでは茂り、もの心細く、すずろなるめを見ることがと思ふに、修行者あひたり。——中略——京に、その人の御もとにとて、文かきてつく。

駿河なるうつの山辺のうつつにも夢にも人にあはぬなりけり  
富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いと白うふれり。

時知らぬ山は富士の嶺いつとてか鹿子まだらに雪のふるらむ  
その山は、ここにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたらむほどして、なりは塩尻のやうになむありける。

なほゆきゆきて、武蔵の国と下つ総の国との中に、いと大きな河あり。それをすみだ河といふ。

—中略— 渡守に問ひければ、「これなむ都鳥」と言ふを聞きて、

名にしおはばいざ言問はむみやこどりわが思ふ人はありやなしやと

とよめりければ、船こぞりえて泣きにけり。

#### 第十段 たのむの雁

むかし、男、武蔵の国までまどひありきけり。—中略— すむ所なむ、人間の郡、みよしのの里なりける。

みよしののたのむの雁もひたぶるに君が方にぞよると鳴くなる

むこがね、返し、

わが方によると鳴くなるみよしののたのむの雁をいつか忘れむ

となむ。—後略—

#### 第十二段 盗人

むかし、男ありけり。人のむすめを盗みて、武蔵野へ率て行くほどに、ぬすびとなりければ、国の守にからめられにけり。—中略—

武蔵野は今日はな焼きそ若草のつまもこもれりわれもこもれり

とよみけるを聞きて、女をばとりて、ともに率ていにけり。

#### 第十三段 武蔵鐙

むかし、武蔵なる男、京なる女のもとに、「聞ゆれば恥づかし。聞えねば苦し」と書きて、うはが

きに、「むさしあぶみ」と書きて、おこせてのち、音もせずなりにければ、京より、女、

武蔵鎧さすがにかけて頼むには問はぬもつらし問ふもうるさし — 後略 —

第十四段 くだかけ

むかし、男、陸奥の国にすずろにゆきいたりにけり。 — 中略 —

なかなか恋に死なずは桑子にぞなるべかりける玉の緒ばかり

歌さへぞひなびたりける。 — 中略 —

夜も明けばきつにはめなでくだかけのまだきに鳴きてせなをやりつる — 後略 —

第十五段 しのぶ山

むかし、陸奥の国にて、なでふことなき人の妻に通ひけるに、あやしう、さやうにてあるべき女ともあらず見えなければ、

しのぶ山しのびてかよふ道もがな人の心のおくも見るべく — 後略 —

第二部 第三章 『香道蘭之園』組香と『夫木和歌抄』

―『夫木和歌集抜書』との関係について―

はじめに

夏木だち庭の野すぢの石のうへにみちて色こきふかみ草かな 慈円

『新編国歌大観 第三卷 私家集編I歌集 拾玉集』 二二二二二

この慈円の歌は、『夫木和歌抄』（『新編国歌大観 第二卷 私撰集編 歌集』三一―二）に収載されている。そしてこの歌の「庭の野すぢ」を「庭の野すり」とする

夏木立庭の野すりの石のうへにみちて色こきふかみ草かな

が、香の伝書『香道蘭之園』牡丹競香の証歌（1）として挙げられている。「野すぢ」とは「野筋」のことで、「造園用語。庭園に造りだす野山の風景」と『角川 古語大辞典 第四卷』（一九九四年、九八四頁）にあり、この和歌が出典表記『拾玉集・二』とともに用例として記載されている。「野すり」という言葉は確認できない。したがって香道実技の場で、この歌は不審とされてきた。

『香道蘭之園』には二・三・六の組香が掲載されているが、『夫木和歌抄』由来の和歌を証歌とする組香は二・四である。牡丹競香以外にも、組香証歌と『夫木和歌抄』収載の和歌を比較すると、小異が確認される例があるので、それらを精査検証してみた。

結論からするならば、二・四の組香証歌はいずれも『夫木和歌集抜書』に収載の和歌であること、また異同のある証歌は、『夫木和歌抄』が直接の典拠ではなく西順自筆本『夫木和歌集抜書』に端を発した

可能性があること、さらには、『夫木和歌集抜書』の特定の板本に依拠したらしいこと、などである。本章ではその異同の経緯を詳らかにするとともに、従来語られてきた文学上での『夫木和歌抄』享受だけではなく、「香道」の世界でも『夫木和歌抄』『夫木和歌集抜書』が享受されていた事実を明らかにしたいと考える。

まず『夫木和歌抄』由来の和歌を証歌とする二四の組香を提示し、それらの内容について簡単に触れたのち、『香道蘭之園』諸本(2)間での証歌の異同について確認する。

次に、これら二四の証歌について、『夫木和歌抄』写本三本(3)間での異同を確認する。そして『香道蘭之園』と『夫木和歌抄』写本三本間での異同を提示する。

その後、二四の和歌について、『夫木和歌抄』写本三本と板本一本(4)間での異同を確認し、次に『夫木和歌抄』板本と西順自筆本『夫木和歌集抜書』(5)そして『夫木和歌集抜書』板本(6)間での異同を精査する。これらを踏まえたのち『香道蘭之園』の証歌に異同が生じた経緯を纏めてみる。

#### 一 『夫木和歌抄』由来の証歌を持つ二四の組香のこと

では、『夫木和歌抄』由来の和歌を証歌としている二四の組香について述べていくことにする。これらは『香道蘭之園』の二巻から七巻に収載されている。先に二〇七巻に一五七の組香(名香合二組を含むため、実質組香は一五五組)が、付録巻に二六の組香が収載されていると述べたが、このうち証歌が据えられている組香は四三組、和歌の五つの句を香銘につけているものが四組、残りの一三四組に証歌はない(7)。つまり証歌のある組香四三組のうち、二四組が『夫木和歌抄』由来のもので、約五割六

分を占めているということである。

なお漢用数字は巻数、算用数字は『増補改訂版 香道蘭之園』（尾崎左永子・薫遊舎校注、淡交社、二〇一三年）における組香の通し番号である。

二巻に10千とせ香、18船路香、29秋草香、三巻に39鶉船香、45菊合香そして50風音香が、四巻には58草苧香と64貝合香、五巻は80牡丹競香、82何鳥香、87七種香、90花蝶香、94橘香、99蛩香そして102早苗香の七つ、六巻は119虫撰香、124神路香、125石清水香、129衣更着香、そして七巻は133子日香、140臯月香、143川浪香、147雪香、151みあれ香の五つで、計二四組である。

これら二四の組香それぞれの内容について簡単に触れておく。

**10千とせ香**は香名を「琴引草・常盤草・二葉の松」、札打の札名に「高砂・住江・唐崎・武隈・姉和」など松に関わる歌枕をつけており、「松」が主題である。**18船路香**は盤物で香の聞きにしたがい五艘の帆かけ船を進ませて勝負する。**29秋草香**は香名に「朝露・夕露」、札名は「しをに（紫苑）・りんどう・ききよう・女郎花・かるかや・小くるま」など秋草づくしである。**39鶉船香**は鶉飼が主題の盤物で、舟に乗り鶉縄を手にまいた鶉飼人形が登場する。**45菊合香**も盤物で、紅白に別れて香を聞き、当たりの次第で紅白の菊を盤に立て、「着綿」と名付けた香の聞き方は口伝となっている。**50風音香**は長・半方に別れて香を聞き、「入相の鐘・更行鐘・暁の鐘・寝よとの鐘・霜夜のかね」といった聞きの名目が決められている。**58草苧香**は鎌を持った草苧童人形を香の聞きにしたがい盤を往復させ、ゴール間近で鎌を笛に持ち替えさせる。**64貝合香**は左貝、右貝と名付けた香とともに聞いたら蛤と答え、忘貝と空貝と名付けた香は聞き捨てる規則である。**80牡丹競香**も盤物で、香が当たれば紅白の牡丹を立て、はずすと花

なし牡丹に立てかえていく。**82**何鳥香は、香の出方によって決められている聞きの名目「ナ・ニ・ト・リ・鶯・時鳥・雁金・千鳥」で答える。**87**七種香は春の七草が聞きの名目に据えられていて若菜摘みが題材である。**90**花蝶香は官女人形が登場する盤物で、官女に持たせた桜の折枝に、香の当たり次第で金銀の蝶をとまらせる。**94**橘香は試みありの香「あやめ・蓬」に試みなしの香「たち花」を打ちまぜて聞き、「たち花」を聞き当てることに主眼を置く。**99**螢香は十炷香の変形で、香包を宇治方・瀬田方と名付けて聞いていく。**102**早苗香は早乙女人形を香の聞きに従い後退りさせて早苗を盤に植える所作とし、十株植えつくした人形には団（うちわ）を持たせて休息させる。**119**虫撰香も香の次第によって「松むし・小がね虫・轡むし・はたおり」など虫の名の聞きの名目で答える。**124**神路香は千木に因んだ試みありの香「内・外」と試みなしの「御柱」という香を組み合わせて聞いていく。**125**石清水香は石清水放生会が主題の組香である。**129**衣更着香は、燕が飛来し、雁が帰る月とされている如月の名を冠した組香で、それ故に香名が「乙鳥」と「帰雁」となっている。**133**子日香は試みありの香「若菜・雪・梅・鶯」各二包ずつ計八包を打ち混ぜてから二包ずつ結び合せて聞いていく。**140**臯月香は一名菖蒲香とも呼ばれ、「さうぶ・よもぎ・蘆橘・時鳥」と名付けられた香の出方によって聞きの名目が決められている。**143**川浪香も一名川水香と呼ばれる組香で、香名と札名ともに「山・谷・川・水」で、「水」の香を聞きあてたら「山・谷・川」の札で答え、「水」と答えると失点する。**147**雪香は、富士と越のしら山、そして比良の雪が主題である。**151**みあれ香は上賀茂神社での神迎えの御阿礼神事が主題である。

では『夫木和歌抄』由来の二四の組香、それぞれの証歌を見てみよう。証歌対照表Aを参照されたい。

『香道蘭之園』諸本、宮内庁書陵部所蔵一六三・八八五（以下、宮一六三と略称）および二〇七・一五七（宮二〇七と略称）、国立国会図書館本（国会本と略称）を比較すると、七卷147雪香に異同がある（傍線は筆者による）。宮一六三は「さゝ浪やひらの山嵐」で、宮二〇七と国会は「さゝ浪やひら山嵐」となっている。また宮二〇七と国会本の雪香には「さゝ浪のひらの山かせ海ふけは釣するあまの袖かゝるみる」の和歌が記載されている（8）。この歌も『夫木和歌抄』卷第廿三雑部五の和歌で『夫木和歌抄』（後述の写本三本及び板本）では第五句が「袖かへるみゆ」となっている。この歌と『香道蘭之園』写本三本がともに証歌として先との共通項は「ひらの山」であつて、147雪香の主題である雪に因んだ歌ではない。推測するに宮二〇七と国会本は、菊岡沾涼による原本が作られた後の写本の段階で後補されたとも考えられる。また『夫木和歌集抜書』に、この和歌は見られない。さらに補足すると、147雪香での証歌には作者名も記載されている。組香では証歌に作者名を記載することはまず無いので、珍しい例である。

これら二四の組香証歌について『香道蘭之園』写本三本間で、ここに記した以外の異同は見られなかった。

## 二 『香道蘭之園』 収載二四の組香と 『夫木和歌抄』 『夫木和歌集抜書』

『香道蘭之園』組香証歌二四首について、『夫木和歌抄』写本三本間での異同を確認しておこう。『夫木和歌抄』細川家永青文庫本は以下、永青文庫本と略称、宮内庁書陵部所蔵桂宮本は桂宮本と略称、静嘉堂文庫本を底本とした『新編国歌大観』は静嘉堂文庫本と略称する。

『香道蘭之園』五卷82何鳥香で証歌とされている、『夫木和歌抄』卷第廿七雜部九動物部上・鳥「なそもかく人の心のうかれ鳥わかれもよほす声をたつらん」の第五句が、永青文庫本と静嘉堂文庫本が「声をたつらん」で桂宮本は「こゑをたつねん」となっている。この歌は「洞院撰政家百首」（『新編国歌大観 第四卷』一九八六年）収載、後朝恋五首大殿（光明峰寺入道撰政Ⅱ九条道家）の内の一首で「なぞもかく人の心のうかれ鳥わかれもよほす声をたつらん」（一一八八）である。したがって永青文庫本と静嘉堂文庫本が出典原歌に忠実と言えよう。『香道蘭之園』何鳥香の証歌も宮一六三、宮二〇七、国会本ともに「声をたつらん」となっている。

次に『香道蘭之園』五卷87七種香の証歌とされている和歌は、『夫木和歌抄』卷第一春部一若菜、権僧正公朝の歌で、永青文庫本と桂宮本が「君かためな<sub>ゝ</sub>のあしたのな<sub>ゝ</sub>草になをつみそへむよろつ代の春」で、静嘉堂文庫本は「君がためなら<sub>ら</sub>のあしたの七草に」である。『夫木和歌抄』の集付では「六帖題」（『新撰和歌六帖』（『新編国歌大観 第二卷』前掲書）となっているが、「六帖題」には見当たらない歌である。『香道蘭之園』七種香の証歌も宮一六三、宮二〇七、国会本ともに「七の朝の七草に」である。

また102早苗香の証歌「さなへとる御田のうへめもいろくに袖をつらねて祝ふけふかな」は、『夫木和歌抄』卷第七夏部一早苗、従二位家隆の歌で、永青文庫本と桂宮本は「うへめも」、静嘉堂文庫本は「うゑめも」と表記されている。

124 神路香の証歌「神路山玉かきこして見わたせは杉間に高きちきのかたそき」は、『夫木和歌抄』卷第廿四雜部十六神祇、僧正行意の歌で、桂宮本と静嘉堂文庫本には「神路山たまかきこしに見わたせは

杉間にたかきちきのかたそき」で収載されているが、永青文庫本には見当たらない。

次に『香道蘭之園』七卷140皐月香の証歌「あやめ草こゝのふしを|やとゝのへて玉のよと野にけふはふくらん」は、『夫木和歌抄』巻第七夏部一菖蒲、後徳大寺左大臣の歌で、「文治六年女御入内和歌」（『新編国歌大観 第五卷』一九八七年）菖蒲の内の一首（一〇七）である。永青文庫本では「あやめ草こゝのふし|すや」で「す」の字母は「春」と書かれ、桂宮本では「た|このよとのにけふはふくらん」となっているが、いずれも誤写と推定される。ここで扱った組香証歌二四首の内、この五首以外の和歌について、永青文庫本、桂宮本、静嘉堂文庫本の間には異同はなかった。

ではここで、これら二四首について『香道蘭之園』と『夫木和歌抄』写本三本との間での異同を確認しておこう。

『香道蘭之園』10千とせ香・18船路香・29秋草香・45菊合香・50風音香・58草荊香・64貝合香・90花蝶香・94橘香・125石清水香・129衣更着香・133子日香・140皐月香・143川浪香・151みあれ香の十五については異同は認められない。では異同のある九つの組香39鶉船香・80牡丹競香・82何鳥香・87七種香・99螢香・102早苗香・119虫撰香・124神路香・147雪香の証歌を次に挙げる。

39鶉船香証歌は「此川に小夜ふけぬらし桂人う繩手にまき船|みたすなり」となっていて『夫木和歌抄』写本三本の第五句「舟|くたすなり」と異なる。80牡丹競香は本稿冒頭でも述べたが、第二句「庭の野|すち」であるべきところが「庭の野|すり」となっている。先に触れた82何鳥香の第五句「こゑを|たつらん」で『夫木和歌抄』桂宮本と異なり他の二つの写本と同様である。87七種香についても先に触れたが、『夫

木和歌抄』永青文庫本・桂宮本と同様で「七の朝の」である。

99 蛩香証歌については『香道蘭之園』三本ともに「夏むしの身をこかしけるひかりこそ闇にまよはぬしるへなりけれ」となっているが、『夫木和歌抄』写本三本は「身をともしける」である。102 早苗香では『香道蘭之園』三本ともに「御田のうへめも」で『夫木和歌抄』永青文庫本、桂宮本と同様である。119 虫撰香では『香道蘭之園』三本ともに「住なれしもの野原や忍ふらんうつす虫屋に虫のわふなる」で、『夫木和歌抄』写本三本の「虫のわふるは」と異なる。124 神路香は『香道蘭之園』三本ともに「神路山玉かきこして見たせは」であるが、『夫木和歌抄』写本二本（桂宮本・静嘉堂文庫本）ともに「たまかきこしに」である。これも先に触れたが、147 雪香では『香道蘭之園』宮一六三が「さゝ浪やひらの山嵐」で、他の二本は『夫木和歌抄』写本三本と同様に「さゝ浪やひら山おろし」である。

次にこれら二四首について、『夫木和歌抄』写本三本と板本一本間での異同を確認する。

『夫木和歌抄』の板本は、寛文五年刊本系統として「寛文五乙巳年正月吉辰 烏丸通下立売下ル町 野田庄右衛門板行」「両替町通二條上ル町 桂彦右衛門板行」「皇都書肆 出雲寺文治郎 吉田四郎右衛門 葛西市郎兵衛」のいずれかがある。『細川家永青文庫叢刊夫木和歌抄（上・下）』（前掲書）の「解題」において福田秀一は「寛文五年に板行され（野田庄右衛門刊。その後、桂彦右衛門及び出雲寺文治郎が求板刊行）」と記されているので、本稿では野田庄右衛門板と先の写本三本とを比較した。

ここで扱う二四首についてみると、巻第廿七雑部九動物部上鳥の歌が板本では「なそもかく人の心のうかれとりわかれもよほす声をたつねん」で、写本の桂宮本と同じであった。また巻第一春部一若菜の

歌は写本の永青文庫本・桂宮本と同様に「君かためな<sub>レ</sub>のあしたの七草に猶つみそへんよろつ代の春」であった。巻第七夏部一早苗の歌は板本では「みたのうへめも」で写本の永青文庫本、桂宮本と同様であった。これ以外の和歌二一首について、写本三本と板本の間には異同はない。

次に、組香証歌二四首について、『夫木和歌抄』野田庄右衛門板と西順自筆本『夫木和歌集抜書』そして『夫木和歌集抜書』深江屋太郎兵衛板および天和二年板との異同を精査する(9)。

連歌師の西順(10)は自筆本『夫木和歌集抜書』の跋文(延宝二年季秋日)で、「夫木抄大部たるによりて見たす事のいとまおしければ」と『抜書』を書いた動機を記している。福田安典は「近世期における『夫木和歌抄』―抜書を中心に―」(11)で、「ここに、板本での享受という側面とは次元の異なる『夫木抄』の近世的享受が誕生する余地がある。すなわち『抜書』による『夫木抄』享受が始まったのである。」と述べている。

『香道蘭之園』の証歌二四首はいずれも西順自筆本『夫木和歌集抜書』(以下、西順自筆本と略称)に収載されていた。そして『夫木和歌抄』板本と西順自筆本との間で異同があったのは、次の四首である。対照表Bを参照されたい。

まず、本稿冒頭で触れた『夫木和歌抄』巻第八夏部二牡丹の和歌について見てみよう。『夫木和歌抄』板本では「庭の野すち」であるが、西順自筆本では「庭の野すり」になっている。

次に『夫木和歌抄』写本の段階で異同があった巻第七雑部九動物部上鳥の和歌の第五句について見ると、西順自筆本は「こゑをたつねん」と記した「ね」にミセケチを施し、小さく「ら」の字を記して

いる。

また卷第一春部一若菜の歌は、『夫木和歌抄』板本が「なゝのあしたの」であり、西順自筆本は「七の朝の」と表記している。

特に注目したいのは、卷第十四秋部五虫、光俊朝臣の歌の第五句である。『夫木和歌抄』写本三本、板本ともに「むしのわふるは」であったものが、西順自筆本では「虫のわふなる」に変更されており、微妙にニュアンスが変わってくる。

福田安典が前掲論文(11)で「西順のしたこと」として「①誤写による「新歌の創出」、②新歌題の創出」の二点を挙げているが、西順は牡丹と虫の和歌において、誤写による「新歌」の創出を行なったといえよう。

では『夫木和歌集抜書』板本はどのような記述になっているであろうか。板本には管見の限り、延宝二年、深江屋太郎兵衛(12)板(以下深江屋板と略称)と田原屋平兵衛板(田原屋板と略称)、天和二年板、そして天和二年板の後印と考えられる菊屋喜兵衛板、そして菊屋板の後刷りと考えられる三都書林による板がある。ただし、田原屋板は深江屋板と同板と考えられるので深江屋板と天和二年板を用いた。引き続き対照表Bを参照されたい。

ではさきに『夫木和歌抄』板本と西順自筆本との精査で取り上げた四首について見てみよう。巻第八夏部二牡丹の歌は深江屋板、天和二年板ともに「庭の野すりの」であり、巻第廿七雑部九動物部上鳥の歌も両板ともに「こゑをたつらん」である。

また巻第一春部一若菜の歌についても、両板ともに「七の朝の」であり、巻第十四秋部五虫の歌も両板ともに「わふなる」となっている。

では、巻第八夏部二鵜河「此川にさ夜更ぬらし桂人うなは手にまき舟くたす也」について見てみよう。この歌は、『夫木和歌抄』写本三本・板本、西順自筆本、『夫木和歌集抜書』深江屋板ともに「舟くたすなり」で異同はないが、天和二年板では第五句が「舟ミたす也」とも読める表記となっている。「く」の字の字母は「久」であり、変体仮名表記の場合、「久」の第一画目「ノ」を残す字体のものがある。天和二年板の「く」はこの表記で書かれている。しかも第一画目「ノ」の頭の筆意が強くされ、続く「く」の初めの部分の筆意も強いために、「ミ」を続け書きしたように見えてしまっている。このことが『香道蘭之園』における「船みたす也」の表現を生んだ原因ではないかと推測される。『香道蘭之園』では三本ともに、文字自体「み」の字を使用している。ただし「船みたす也」になると歌意が不可解なものとなってしまふ。ここで精査した五首以外の歌については、深江屋板と天和二年板の二本間に異同は見られなかった。

またここで『香道蘭之園』の原本が作られた時に誤写されたと考えられるものについて押さえておく。対照表 A を再度参照されたい。『夫木和歌抄』写本三本との異同確認でも触れた 99 螢香証歌が『香道蘭之園』三本ともに「身をこかしける」と記されていること、<sup>124</sup> 神路香証歌も三本ともに「玉かきこして」と記されていること、これらは『香道蘭之園』のみに見られることなので『香道蘭之園』の誤写と考えられる。

それでは以上のことを踏まえて『香道蘭之園』の証歌に異同が生じた経緯を纏めてみる。異同があったものは二四首の証歌の内、次の五首である。

39 鶉舟香の「此川にさ夜更ぬらし桂人うなは手にまき船みたす也」は『夫木和歌集抜書』天和二年板の表記による影響がうかがえ、80 牡丹競香の「夏木立庭の野すりの石のうへにみちて色こきふかみ草かな」は、西順自筆本『夫木和歌集抜書』と、『夫木和歌集抜書』深江屋板・天和二年板における記述が反映した可能性が推測される。

また82 何鳥香「なそもかく人の心のかれ鳥別れもよほす声をたつらん」の第五句「たつらん」は、『夫木和歌抄』写本桂宮本以外の二写本、『夫木和歌抄』野田板、そして西順自筆本ではミセケチ処置と「ら」が付字されていたこと、さらに『夫木和歌集抜書』深江屋板・天和二年板ともに「らん」であったことに拠るものと考えられる。

87 七種香「君がため七の朝の七草に猶つみそへんよろつよのはる」の「七の朝は」、『夫木和歌抄』写本永青文庫本・桂宮本、『夫木和歌抄』野田板、そして西順自筆本、『夫木和歌集抜書』深江屋板・天和二年板に準ずるものである。

さらに119 虫撰香「住なれしもの野原や忍ふらんうつす虫屋に虫のわふなる」結句部分「わふなる」についても、西順自筆本での記述「わふなる」に端を発しての『夫木和歌集抜書』板本での「わふなる」であり、それが虫撰香証歌として受容されたのではないだろうか。

本論文第二部第一章で『香道蘭之園』の成立について、「鈴鹿周斎の伝える所を栗本穩置の意を汲んで整理し、『蘭之園』という書名を付けたのは沾涼であるが、彼一人の著作ではなく、何代かにわたっ

て書き継がれたものと察せられる」と記したが、掲載されている組香の考案者は複数であったと推定される。そして80牡丹競香と119虫撰香が、西順自筆本『夫木和歌集抜書』での記述に端を發したものと仮定すると、この二つの組香は延宝二年（一六七四）以後に成立したと考えられよう。39鶉船香については『夫木和歌集抜書』天和二年板の「天和二壬戌年仲春下旬」（一六八二）を待っての成立という可能性が高くなると考えられる。

#### まとめ

本稿で精査した二四の組香証歌は、すべて西順自筆本『夫木和歌集抜書』、天和二年板『夫木和歌集抜書』掲載の和歌と一致していた。さらに80牡丹競香の証歌「夏木立庭の野すりの石のうへにみちて色こきふかみ草かな」と119虫撰香証歌「住なれしもの野原や忍ふらんうつす虫屋に虫のわふなる」が西順自筆本『夫木和歌集抜書』での記述に端を發したものと仮定すると、この二つの組香は、延宝二（一六七四）年以後に成立したのではないか。

また39鶉船香証歌「此川に小夜ふけぬらし桂人う繩手にまき船みたす也」については、『夫木和歌集抜書』天和二年板の表記による可能性が高いとすれば、鶉船香は「天和二壬戌年仲春下旬」（一六八二）以降の成立と推測できる。

『夫木和歌集抜書』板本の跋文で西順は「連歌初学の人くとしころ懇望ありて、つけあひなとに其たよりあるへからん歌ともを一々題を残さすすこしつゝかき出侍りぬ」と述べている。したがってこの書は和歌を鑑賞するためではなく、連歌の付合のための書として、連歌愛好者のために編集されたテキスト

ト本と考えられる。西順自筆本が延宝二（一六七四）年に著され、同年に俳諧関係の書肆として特徴を持つ深江屋（13）と田原屋から板行され、その八年後の天和二（一六八二）年に重板され、後印の菊屋板、さらには三都書林板と板が重ねられたわけである。

「和歌文学が印刷に付されるのは近世になってからのこと」と市古夏生は『近世初期文学と出版文化』（14）で記し、さらにその歌書の種類として、勅撰集、『夫木和歌抄』などの私撰集、家集、歌合、定数歌、歌論、注釈書、秘伝書と多岐に渉る歌書の需要が少なからずあったことを指摘している（同頁）。こうした近世の出版文化を背景に、連歌・俳諧の流行も相まって多くの俳書や、連歌・俳諧のためのテキストが出版されたと考えられる。

これら組香の考案者が、西順自筆本『夫木和歌集抜書』と天和二年板『夫木和歌集抜書』、その両方を見た可能性は否定できないが、複数のもを見た可能性よりも、重板され流布していた板本を見た可能性の方が高いと考えられる。したがって天和二年板によって、これら組香の考案された時期の上限が推定できるのではなからうか。

本章で先述したが、『香道蘭之園』掲載組香で証歌の据えられている組香四三組のうち、二四組が『夫木和歌抄』由来のもので、約五割六分を占めるということ、そしてその二四首はすべて西順自筆本『夫木和歌集抜書』、天和二年板『夫木和歌集抜書』掲載の和歌と一致していたこと。また神保博行は、組香において「証歌の出現は、江戸時代に入ってからのことなのである。」（15）と述べるのみでその根拠は示していないが、近世の出版文化の産物であるこれら板本との関わりが、証歌出現の発端となった可能性も考え得る。

『夫木和歌抄』の享受といえ、それ以後の勅撰集に多少とも資料となつてその形成に与つたこと、室町以後の類題歌集や歌枕書類にも多くの歌を提供したこと、さらに連歌の付合や証歌の検索に利用されたりしたことなどが先行研究で指摘されている（16）。これらを『夫木和歌抄』の第一次享受と捉えるならば、板本による流布を経たその先の、西順による自筆本『夫木和歌集抜書』の出現は第二次享受と言えよう。そして80牡丹競香の証歌「庭の野すち」が「庭の野すち」に、119虫撰香の証歌「虫のわふる」が「虫のわふるは」に改められることがなかったということは、福田安典が指摘（11）するところの「『抜書』による『夫木抄』享受」の結果であり、「『抜書』によつてのみ『夫木和歌抄』に触れた人間」が「浩瀚な『夫木抄』を見ることもないままに」、これらの組香を考案したということになるのではなからうか。連歌や俳諧の人々と同様な享受がなされた実例と言えよう。したがって、『香道蘭之園』のこれらの組香は『夫木和歌抄』の近世的享受による産物であり、第三次享受と考えられる。

## 第二部第三章 注

1 増補改訂版『香道蘭之園』（淡交社 二〇〇三年）「解題」（四四七頁）で尾崎左永子は「本書の組香も、実際に『夫木和歌抄』を典拠としたものが多いのかもしれないが、できるだけその歌の生まれた時代に近い出典を見出すよう心がけた。」と記している。したがって18船路香は『千五百番歌合』、64貝合香『山家集』、102早苗香『任二集』、124神路香『万代和歌集』、133子日香『新選六帖題和歌』という出典表記をしている。これらの組香を含めて本稿で扱う二四の組香証歌は『夫木和歌抄』収録の和歌である。しかし後述するように和歌に変形が見られるものがあることなどから、夫木和歌抄が典拠としたものを元にしたとは考えにくい。

2 本章では宮内庁書陵部所蔵御所本『香道蘭之園』（一六三・八八五）を底本とし、宮内庁書陵部所蔵（二〇七・二五七）の別写本と国立国会図書館本を参照した。

3 『夫木和歌抄』については細川家永青文庫本（『細川家永青文庫叢刊 夫木和歌抄（上・下）』一九八三年）、宮内庁書陵部所蔵桂宮本（『圖書寮叢刊 夫木和歌抄一〜五』一九八四、一九八五、一九八六、一九八七、一九八八年）、静嘉堂文庫本を底本とした『夫木和歌抄』（『新編国歌大観 第二卷 私撰集編 歌集』一九八四年）を用いた。

4 『夫木和歌抄』板本については、寛文五年 野田庄右衛門刊『夫木和歌抄』（国文学研究資料館所蔵タ2・119・1〜37）三十七冊、縦二七・七センチ、横一七・七センチ、表紙紺色無地、題簽左上「夫木和歌抄」楮紙袋綴、全二〇〇四丁、一面十行、詞書数行、作者名一行、和歌一行「寛文五乙巳年正月

吉辰刊。烏丸通下立賣下ル町野田庄右衛門」を用いた。

5 延宝二年 西順自筆本『夫木和哥抄拔書』（愛媛大学図書館蔵 鈴鹿文庫五二七デジタル画像）を用いた。

6 延宝二年 深江屋太郎兵衛刊『夫木抄拔書』（国文学研究資料館蔵タ2・238・1〜4）四冊、縦二七・三センチ、横一九・五センチ、表紙縹色無地、題簽右上「三十一共四卷」楮紙袋綴、全一六〇丁、一面十四行、和歌、作者名で一行「延宝二年季秋桑門西順／大坂呉服町書林深江屋太郎兵衛開板」と天和二年『夫木和歌集拔書』（国文学研究資料館蔵タ2・122）一冊、縦一五・五センチ、横一一・五センチ、表紙薄茶刷毛目、題簽左上「夫木和歌集」楮紙袋綴、全二五〇丁、一面九行、和歌、作者名で一行、を用いた。跋文卷末に「天和二壬戌年仲春下旬」とあるが板元が表記されていない。これと同板の弘前図書館蔵（272・40・1）跋文卷末には「天和二壬戌年仲春下旬／菊屋喜兵衛板」とある。菊屋喜兵衛は、『改訂増補 近世書林版元総覧』（二九二頁）に拠れば、「宝永の開業。」とあるので菊屋板は後印と思われる。

作成においては適宜改行した。

7 連歌寄合の書において証歌は、「ある表現が和歌に存在することの証明として掲げる歌の意味でとりうるものであるということ」（鈴木元「連歌寄合と本歌、証歌」『文学』岩波書店、二〇一一年、第12巻・第4号、一四六頁）と記されている。香道組香の証歌とは意味するところが異なる。

8 147 雪香はこの他にも証歌が据えられている。「富士の根にふりおく雪はみな月のもちに消れはその夜ふりけり」高橋虫麻呂『万葉集』卷三雑三二〇、「きぬかへにさこそは雪のつもるらめ名にふりにけ

る越のしら山」安嘉門院甲斐『続後撰和歌集』巻第八冬五一七、の二首であるが、『夫木和歌抄』由来の和歌ではないので本稿では触れない。また129衣更着香も、出典未詳歌「行ちかふそらにつはめのあるはなくなきは数そふはつかりの声」が証歌として据えられている。

『香道蘭之園』には、二首以上の和歌が証歌として据えられる組香がいくつか存在する。その中には、三夕香のように複数歌で一組になるようなものが使われる場合もある。また80牡丹競香では慈鎮の和歌と漢詩の一文で証歌の働きを果たしている。和歌と漢詩の組合せはこの一例のみである。この漢詩は、『古文真宝後集』巻之二「説類」収載の宋の人・周茂叔による「愛蓮説」の一節「自<sub>二</sub>李唐<sub>一</sub>来<sub>二</sub>夕世人<sub>一</sub>甚<sub>二</sub>ダ愛<sub>二</sub>牡丹<sub>一</sub>」である。

9 西順自筆本『夫木和歌集抜書』と板本『夫木和歌集抜書』の間においては、跋文は異なるも、そのほかの異同はない。

10 「僧侶・連歌作者。元和二年（一六一六）生、没年未詳。元禄六年（一六九三）七八歳で生存。同年までに没か。大坂堂島に住す。」（『国書人名辞典 第二巻』岩波書店 一九九五年 三二二頁）。

11 福田安典『夫木和歌抄 編纂と享受』（人間文化研究機構国文学研究資料館、二〇〇七年）二七〇頁。

12 雲英末雄「深江屋太郎兵衛の出版活動」（『江戸文学』15、一九九六年五月）に拠れば、「深江屋の出版活動の最盛期は延宝後期における、大坂談林の俳書の出版にあつたといえるであろう。」（四六頁）とあり、参照されたい。

13 注11前掲書、二七四頁。

14 市古夏生『近世初期文学と出版文化』（若草書房、一九九八年）二八三頁。

- 15 神保博行 『香道の歴史事典』 (柏書房、二〇〇三年) 五〇頁。
- 16 福田秀一 「夫木和歌抄」 『中世和歌史の研究 続編』 (岩波出版サービスセンター、二〇〇七年) 二  
三九頁。

図1 『夫木和歌集拔書』 深江屋板 (国文学研究資料館蔵)

十月よき世更わく柱人ふかきよみ侍舟の子也 先後

図2 『夫木和歌集拔書』 天和二年板 (国文学研究資料館蔵)

十月よき世更わく柱人ふかきよみ侍舟の子也 先後

夫木和歌抄由来の和歌を証歌とする『香道蘭之園』収録組香 証歌対照表 A (番号:『国歌大観』歌番号)

卷数・組香名・番号	宮内庁書陵部一六三八八五	宮内庁書陵部二〇七・一五七	国会図書館本	夫木和歌抄 卷・部・題・作者・番号
二・10・千とせ香	さき草の三ツ葉よつはに枝かはす 松のちとせは君かまにく	さき草の三葉よつはに枝かはす 松の千とせは君かまにく	さき草の三葉よつはに枝かはす 松の千とせは君かまにく	卷第廿九・雑部十一植物下 松・俊恵法師 一三七一四
二・18・船路香	高砂や漕のく船も打むれて風やす けなる浪のうへかな	高砂や漕のく船も打むれて風やす けなる浪のうへかな	高砂や漕のく船も打むれて風やす けなる浪のうへかな	卷第卅三・雑部十五 船・具親朝臣 一五七八四
二・29・秋草香	いかはかりあたにちるらん秋風の はけしき野への露草の花	いかはかりあたにちるらん秋風の はけしき野への露草の花	いかはかりあたにちるらん秋風の はけしき野への露草の花	卷第十一・秋部二 秋花・俊頼朝臣 四五五三
三・39・鶺鴒船香	此川に小夜ふけぬらし桂人 う繩手にまき船みたす也	此川に小夜ふけぬらし桂人 う繩手にまき船みたす也	此川に小夜ふけぬらし桂人 う繩手にまき船みたす也	卷第八・夏部二 鶺鴒河・光俊朝臣 三一四五
三・45・菊合香	垣根なる菊のきせわたけさ見れは またき盛の花咲にけり	垣根なる菊のきせわたけさ見れは またき盛の花咲にけり	垣根なる菊のきせわたけさ見れは またき盛の花咲にけり	卷第十四・秋部五 菊・信実朝臣 五九八九
三・50・風音香	吹よはるたえまくにきこゆ也 入相のかねをうつむ山かせ	吹よはるたえまくにきこゆ也 入相のかねをうつむ山かせ	吹よはるたえまくにきこゆ也 入相のかねをうつむ山かせ	卷第卅二・雑部十四 鐘・後鳥羽院御製 一五二三七

卷数・組香名・番号	宮内庁書陵部一六三八八五	宮内庁書陵部二〇七・一五七	国会図書館本	夫木和歌抄 卷・部・題・作者・番号
四・58・草苳り香	みまき野の草かり笛のわらはこゑ あなかまとのみよそへてそきく	みまき野の草かり笛のわらはこゑ あなかまとのみよそへてそきく	みまき野の草かり笛のわらはこゑ あなかまとのみよそへてそきく	卷第卅二・雑部十四 笛・信実朝臣 一五二二四
四・64・貝合香	今そ知る二見の浦のはまくりを 貝合とておほふなりけり	今そ知る二見の浦のはまくりを 貝合とておほふなりけり	今そ知る二見の浦のはまくりを 貝合とておほふなりけり	卷第廿五・雑部七 浦・西行人 一一五九三
五・80・牡丹競香	夏木立庭の野すりの石のうへに みちて色こきふかみ草かな	夏木立庭の野すりの石のうへに みちて色こきふかみ草かな	夏木立庭の野すりの石のうへに みちて色こきふかみ草かな	卷第八・夏部二 牡丹・慈鎮和尚 三一一二
五・82・何鳥香	なそもかく人の心のうかれ取り 別れもよほす声をたつらん	なそもかく人の心のうかれ取り 別れもよほす声をたつらん	なそもかく人の心のうかれ取り 別れもよほす声をたつらん	卷第廿七・雑部九動物上 鳥・光明峯寺入道撰政一二五六四
五・87・七種香	君かため七の朝の七草に 猶つみそへんよろすよのはる	君かため七の朝の七草に 猶つみそへんよろすよのはる	君かため七の朝の七草に 猶つみそへんよろすよのはる	卷第一・春部一 若菜・権僧正公朝 二二〇
五・90・花蝶香	おもしろや花にむつるゝからてふ のなれはや我もおもふあたりに	おもしろや花にむつるゝからてふ のなれはや我もおもふあたりに	おもしろや花にむつるゝからてふ のなれはや我もおもふあたりに	卷第廿七・雑部九動物下 蝶・源仲正 一三一四〇

卷数・組香名・番号	宮内庁書陵部一六三八八五	宮内庁書陵部二〇七・一五七	国会図書館本	夫木和歌抄 卷・部・題・作者・番号
五・94・橘香	あやめふく蓬の宿の夕風に 匂ひすゝしき軒の橘	あやめふく蓬の宿の夕風に 匂ひすゝしき軒の橘	あやめふく蓬の宿の夕風に 匂ひすゝしき軒の橘	卷第七・夏部一 橘・衣笠内大臣 二六九四
五・99・蛩香	夏むしの身をこかしけるひかりこ そ闇にまよはぬしるへなりけれ	夏むしの身をこかしけるひかりこ そ闇にまよはぬしるへなりけれ	夏むしの身をこかしけるひかりこ そ闇にまよはぬしるへなりけれ	卷第八・夏部二 蛩・寂連法師 三一九三
五・102・早苗香	さなへとる御田のうへめもいろ くゝに袖をつらねて祝ふけふかな	さなへとる御田のうへめもいろ くゝに袖をつらねて祝ふけふかな	さなへとる御田のうへめもいろ くゝに袖をつらねて祝ふけふかな	卷第七・夏部一 早苗・従二位家隆卿 二五三四
六・119・虫撰香	住なれしもとの野原や忍ふらん うつす虫屋に虫のわふなる	住なれしもとの野原や忍ふらん うつす虫屋に虫のわふなる	住なれしもとの野原や忍ふらん うつす虫屋に虫のわふなる	卷第十四 秋部五 虫・光俊朝臣 五五七六
六・124・神路香	神路山玉かきこして見わたせは 杉間に高きちきのかたそき	神路山玉かきこして見わたせは 杉間に高きちきのかたそき	神路山玉かきこして見わたせは 杉間に高きちきのかたそき	卷第卅四・雑部十六 神祇・僧正行意 一五九七八
六・125・石清水香	石清水すみはしめけん月影の みつの衣のかけそうつりし	石清水すみはしめけん月影の みつの衣のかけそうつりし	石清水すみはしめけん月影の みつの衣のかけそうつりし	卷第卅四・雑部十六 神祇・衣笠内大臣 一五九八七

七・151・みあれ香	あふひ草かさり車のけしきまで けふはことなる物見とそきく	あをひ草かさり車のけしきまで けふはことなる物見とそきく	あをひ草かさり車のけしきまで けふはことなる物見とそきく	葵・民部卿為家卿 二四九六
七・147・雪香	さゝ浪やひら山風海かけて ひとつになひく雪の白雲	さゝ浪やひら山風海かけて ひとつになひく雪の白雲	さゝ浪やひら山風海かけて ひとつになひく雪の白雲	卷第十八・冬部三 雪・民部卿為家卿 七三四二
七・143・川浪香	底すみて浪こまかなるさゝれ水 渡りやられぬ山川の影	底すみて浪こまかなるさゝれ水 渡りやられぬ山川の影	底すみて浪こまかなるさゝれ水 渡りやられぬ山川の影	卷第廿六・雑部八 水・西行上人 一二五三一
七・140・皐月香	あやめ草九節をやとゝのへて 玉のよとのにけふはふくらん	あやめ草九節をやとゝのへて 玉のよ殿にけふはふくらん	あやめ草九節をやとゝのへて 玉のよ殿にけふはふくらん	卷第七・夏部一 菖蒲・後徳大寺左大臣二六四七
七・133・子日香	けふは又雪まのをはきつみませて 野への若菜のかすやまさらん	けふは又雪まのをはきつみませて 野への若菜のかすやまさらん	けふは又雪まのをはきつみませて 野への若菜のかすやまさらん	卷第一・春部一 若菜・信実朝臣 二八一
六・129・衣更着香	めつらしくつはめ軒端にきなるれ は霞かくれに雁帰る也	めつらしくつはめ軒端にきなるれ は霞隠れに雁帰る也	めつらしくつはめ軒端にきなるれ は霞かくれに雁帰る也	卷第三・春部三 燕・野宮左大臣 一〇五三
巻数・組香名・番号	宮内庁書陵部一六三八八五	宮内庁書陵部二〇七・一五七	国会図書館本	夫木和歌抄 巻・部・題・作者・番号

『夫木和歌抄』野田庄右衛門板・『夫木和歌集拔書』西順自筆本・『夫木和歌集拔書』深江屋太郎兵衛板及び天和二年板 対照表 B

『香道蘭之園』 卷数・組香名・番号	『夫木和歌抄』 野田庄右衛門板	『夫木和歌集拔書』 西順自筆本	『夫木和歌集拔書』 深江屋太郎兵衛板	『夫木和歌集拔書』 天和二年板	『夫木和歌抄』 卷・部・題・番号
二・10・千とせ香	さきくさの三葉四葉に 枝かはす松の千とせは きみかまにく	さき草の三葉四葉に 枝かはす松の千とせは 君かまにく	さき草の三葉四葉に 枝かはす松の千とせは 君かまにく	さきくさの三葉四葉に 枝かはす松の千とせは 君かまにく	廿九・雑十一 松・一三七一四
二・18・船路香	高砂やこきのくふねも うちむれて風やすけなる なみのうへ哉	高砂やこきのく舟も うちむれて風やすけなる 浪の上哉	高砂やこきのく舟も うちむれて風やすけなる 浪の上哉	高砂やこきのく舟も うちむれて風やすけなる 浪の上かな	卅三・雑十五 船・一五七八四
二・29・秋草香	いかはかりあたにちるらん あき風のはけしき野への 露くさの花	いかはかりあたにちるらん 秋風のはけしきのへの 露草の花	いかはかりあたにちるらん 秋風のはけしきのへの 露草の花	いかはかりあたにちるらん 秋風のはけしきのへの 露草の花	十一・秋二 秋花・四五五三
三・39・鶺鴒船香	このかはにさよふけぬらし かつらうなはてにまき 船くたす也	此川にさ夜更ぬらし 桂人うなは手にまき 舟くたす也	此川にさ夜更ぬらし 桂人うなは手にまき 舟くたす也	此川にさ夜更ぬらし 桂人うなは手にまき 舟みたす也	八・夏二 鶺鴒河・三一四五

『香道蘭之園』 卷数・組香名・番号	『夫木和歌抄』 野田庄右衛門板	『夫木和歌集抜書』 西順自筆本	『夫木和歌集抜書』 深江屋太郎兵衛板	『夫木和歌集抜書』 天和二年板	『夫木和歌抄』 卷・部・題・番号
三・45・菊合香	かきねなるきくのきせわた けさみれはまたきさかりの 花咲にけり	垣ねなる菊のきせ綿 けさみれはまたき盛の 花咲にけり	垣ねなる菊のきせ綿 けさみれはまたき盛の 花咲にけり	垣ねなる菊のきせ綿 けさみれはまたき盛の 花咲にけり	十四・秋五 菊・五九八九
三・50・風音香	吹よはるたえま／＼に きこゆなり入あひのかねを うつむ山風	吹よはるたえま／＼に きこゆなり入あひのかねを 埋む山風	吹よはるたえま／＼に きこゆなり入あひのかねを 埋む山風	吹よはるたえま／＼に きこゆなり入相のかねを 埋む山風	廿二・雑十四 鐘・一五二三七
四・58・草荊香	みまきのゝ草かりふえの わらは声あなかまとのみ よそへてそきく	みまきのゝの草かり笛の わらはこゑあなかまとのみ よそへてそきく	み牧野の草かり笛の わらはこゑあなかまとのみ よそへてそきく	み牧野の草かり笛の わらはこゑあなかまとのみ よそへてそきく	廿二・雑十四 笛・一五二二四
四・64・貝合香	いまそしるふたみのうらの はまくりをかひあはせとて おほふ也けり	今そしる二見の浦の 蛤をかひ合せとて おほふなりけり	今そしる二見のうらの 蛤をかひあはせとて おほふなりけり	今そしる二見のうらの 蛤をかひあはせとて おほふなりけり	廿五・雑七 浦・一一五九三

『香道蘭之園』 巻数・組香名・番号	『夫木和歌抄』 野田庄右衛門板	『夫木和歌集抜書』 西順自筆本	『夫木和歌集抜書』 深江屋太郎兵衛板	『夫木和歌集抜書』 天和二年板	『夫木和歌抄』 巻・部・題・番号
五・80・牡丹競香	夏木立庭の野すちの 石のうへにみちて色こき ふかみ草哉	夏木立庭の野すりの 石の上にもちて色こき 深見草哉	夏木立庭の野すりの 石の上にもちて色こき 深見草哉	夏木立庭の野すりの 石の上にもちて色こき 深見草哉	八・夏二 牡丹・三一・一二
五・82・何鳥香	なそもかく人の心の うかれとりわかれもよほす 声をたつねん	なそもかく人の心の うかれ鳥別もよほす こゑをたつねん	なそもかく人の心の うかれ鳥別もよほす こゑをたつらん	なそもかく人の心の うかれ鳥別もよほす こゑをたつらん	廿七・雑九 鳥・一二五六四
五・87・七種香	君かためな <sub>レ</sub> のあしたの 七草に猶つみそへん よろつ代の春	君かため七の朝の 七草に猶つみそへん 万代の春	君かため七の朝の 七草に猶つみそへむ よろつよの春	君かため七の朝の 七草に猶つみそへむ よろつよの春	一・春 若菜・二二〇
五・90・花蝶香	おもしろや花にむつる <sub>レ</sub> からてふのなれはや 我も思ふあたりに	おもしろや花にむつる <sub>レ</sub> から蝶のなれはや 我も思ふあたりに	おもしろや花にむつる <sub>レ</sub> から蝶のなれはや 我もおもふあたりに	おもしろや花にむつる <sub>レ</sub> から蝶のなれはや 我もおもふあたりに	廿七・雑九 蝶・一三一四〇

『香道蘭之園』 卷数・組香名・番号	『夫木和歌抄』 野田庄右衛門板	『夫木和歌集拔書』 西順自筆本	『夫木和歌集拔書』 深江屋太郎兵衛板	『夫木和歌集拔書』 天和二年板	『夫木和歌抄』 卷・部・題・番号
五・94・橘香	あやめふくよもきのやとの 夕風にほひすゝしきの きのたち花	あやめふく蓬の宿の 夕風に匂ひ涼しき 軒の橘	あやめふく蓬の宿の 夕風に匂ひすゝしき 軒の橘	あやめふく蓬の宿の 夕風に匂ひすゝしき 軒の橘	七・夏一 橘・二六九四
五・99・蛩香	夏むしの身をともしける ひかりこそやみにまよはぬ しるへ也けれ	夏虫の身をともしける 光こそ闇にまよはぬ しるへなりけれ	夏虫の身をともしける 光こそ闇にまよはぬ しるへなりけれ	夏虫の身をともしける 光こそ闇にまよはぬ しるへ也けれ	八・夏二 蛩・三一九三
五・102・早苗香	さなへとるみたのうへめも いろくの袖をつらねて いはふけふ哉	さなへとる御田のうへめも 色くの袖をつらねて 祝ふけふ哉	さなへとる御田のうへめも 色くの袖をつらねて 祝ふけふ哉	さなへとる御田のうへめも 色くの袖をつらねて 祝ふけふ哉	七・夏一 早苗・二五三四
六・119・虫撰香	すみなれしもの野はらや しのふらんうつすむしやに むしのわふるは	住なれしもの野原や 忍ふらんうつす虫やに 虫のわふなる	住なれしもの野原や 忍ふらんうつす虫やに 虫のわふなる	住なれしもの野原や 忍ふらんうつす虫やに 虫のわふなる	十四・秋五 虫・五五七六

『香道蘭之園』 卷数・組香名・番号	『夫木和歌抄』 野田庄右衛門板	『夫木和歌集抜書』 西順自筆本	『夫木和歌集抜書』 深江屋太郎兵衛板	『夫木和歌集抜書』 天和二年板	『夫木和歌抄』 卷・部・題・番号
六・124・神路香	神ち山たまかきこしに みわたせは杉間にたかき ちきのかたそき	神道山玉かきこしに みわたせは杉まに高き ちきのかたそき	神道山玉かきこしに みわたせは杉まに高き ちきのかたそき	神道山玉かきこしに みわたせは杉まに高き ちきのかたそき	廿四・雑十六 神祇・一五九七八
六・125・石清水香	いはし水すみはしめけん 月影の三つのころもに かけそうつりし	石清水すみはしめけん 月影のみの衣に 影そうつりし	石清水すみ始めけん 月影の三つの衣に かけそうつりし	石清水すみ始めけん 月影の三つの衣に かけそうつりし	廿四・雑十六 神祇・一五九八七
六・129・衣更着香	めつらしく燕軒はに きなるれは霞かくれに 雁かへるなり	めつらしく燕軒はに きなるれは霞かくれに 雁かへるなり	めつらしくつはめ軒はに きなるれは霞かくれに 雁かへるなり	めつらしくつはめ軒はに きなるれは霞かくれに 雁かへるなり	三・春三 燕・一〇五三
七・133・子日香	けふはまた雪間のをはき つみませて野へのわかなの かすやまさらん	けふは又雪まのをはき つみませてのへのわかなの かすやまさらん	けふは又雪まのをはき つみませてのへのわかなの かすやまさらん	けふは又雪まのをはき つみませてのへのわかなの かすやまさらん	一・春一 若菜・二八一



## 第二部 第四章 「源氏千種香」の依拠本を探る

はじめに

「源氏千種香」は、元文年間に成立したと考えられる香の伝書『香道蘭之園』の八・九巻に掲載されている組香で、『源氏物語』五十四帖のうち「桐壺」「夢浮橋」を除いた五十二帖を題材としている。この「源氏千種香」は、他の香の伝書や組香集には見られない珍しい組香である。

香における源氏文化とえば、その意匠「源氏香之図」が独り歩きして知られるところとなった「源氏香」が有名で、香会でもよく行われるが、「源氏千種香」の興行はあまり聞かない。筆者は香会で「源氏千種香」の組香を体験し、「源氏千種香」が、「源氏香」よりも、はるかに原典の『源氏物語』と深く関わった組香であることを知った。しかし、個々の組香を精査してみると、原典の『源氏物語』と明らかに異なる事象があることに気づいた。例えば、物語には見られない和歌が証歌とされていたり、物語にはない言葉が聞きの名目に使われていたり、巻の順序が違っていたり、重要な場面での登場人物の欠落等、必ずしも忠実な物語の再現はなされていないのである。

ではなぜこのような現象が起きたのか。組香における物語内容の改編には、何らかの根拠となるものが存在したのではないかと考えた。香道の歴史を顧みると、その創成に、連歌師や連歌に嗜みの深い人物が多く関わったこと（1）に気づく。一方連歌の隆盛にともない、『源氏物語』の言葉（源氏寄合）を用いた句が数多く詠まれ、その教則本として『源氏物語』の梗概書が機能したことから、「源氏千種香」も原典『源氏物語』を直接の典拠としたのではなく、いずれかの梗概書を経て考案されたものなの

ではないか、と推測した。

そこで、まず巻順の異同を手がかりに各種の梗概書を調査したところ、中世から近世にかけて最も流布したといわれる『源氏小鏡』（以下『小鏡』と略称）のそれとほぼ同じであることに気づいた。さらに『源氏小鏡』の第一系統（古本系）第一類京都大学本（伝持明院基春筆。以下古本系京都大学本と略称）（2）の記述に、「簾木香」の証歌や、「玉葛香」「梅枝香」「若菜香下」などの組香内容との共通点が見出され、さらに聞きの名目についても『源氏小鏡』の寄合と同一のものがあることに気づいた。本稿では、「源氏千種香」における『小鏡』受容の一面を指摘し、『小鏡』の諸本と比較しつつ、中でも古本系京都大学本系統が「源氏千種香」の依拠本である可能性を探りたい。

まず「源氏千種香」の概要を述べ、第一節で巻順および「簾木香」「玉葛香」「梅枝香」「若菜香下」の内容と『源氏物語』原典との相違を検証した上で『小鏡』との関連を提示する。第二節では聞きの名目について『小鏡』諸本の寄合と比較、精査検証し、「源氏千種香」における『源氏小鏡』享受の様相を明らかにしたい。

なお、本稿では宮内庁書陵部所蔵御所本『香道蘭之園』（一六三・八八五）を底本とし（3）、『源氏小鏡』については岩坪健による『源氏小鏡』諸本集成（4）と岡見正雄による『古典文庫 良基連歌論集三』所収本「光源氏一部連歌寄合之事」（5）を用いた。また、『源氏物語』本文の引用は『新編日本古典文学全集 源氏物語』（6）に拠る。

### 「源氏千種香」の概要

「源氏千種香」は、『源氏物語』五十四帖のうち「桐壺」「夢浮橋」を除いた五十二帖を題材とした組香である(7)。「桐壺」「夢浮橋」に対応する組香がない点については、「源氏香」と同じである。

「源氏香」は香五種を各々五包用意し、その二五包のうち任意の五包を炷く。五炷を五本の縦線であらわし、その内同じ香があれば、線の頭を横線で結ぶ。よって回答の可能性が五二となり、この数から源氏五十四帖を連想し、その初巻と最終巻を除き、各巻に図柄をあてはめたのが「源氏香之図」である。その図柄の面白さがもてはやされ、源氏意匠として絵画や工芸の世界に寄与したと言えようが、「源氏香」は物語の内容との関連性を持つものではない。

一方「源氏千種香」は、物語の巻々の場面を捉え、証歌や証詞を用いたり、あるいは盤物に仕立てて、香の聞きにしたがい人形に物語に因んだ所作(8)をさせたりと、組香の仕組みに物語を取り入れて、香りを聞き当てながら、物語をより深く楽しめるように考えられた組香である。「源氏千種香」のうち、盤物は一三で、女楽(若菜香下)や五節の舞姫(乙女香)、絵合(絵合香)、薫物合(梅枝香)、春秋の争い(胡蝶香)や鷹狩り(御幸香)など王朝風俗が展開する場面や、車争い(葵香)、住吉詣(漂漉香)、石山詣(関屋香)、蹴鞠での垣間見(若菜香上)、宇治の姫君との邂逅(橋姫香)といった、物語の転換点に主題を求めている。いわゆる宇治十帖の初めの巻「橋姫香」を最後に盤物は登場しない。これとは逆に、物語後半の組香では証歌が多く用いられ、その場面の情趣や、登場人物の心情描出に機能しているものもある。また香組において、聞捨や捨香といった規則を使って、登場人物の死や離別、不在などの喪失感を演出(9)しているものもある。

では第一節で、巻順と、「簀木香」「玉葛香」「梅枝香」「若菜香下」の組香内容を精査し、『源氏物語』原典との相違を押さえながら、『源氏小鏡』諸本との関連をみてみよう。

## 第一節

### I 巻順のこと

現行の『源氏物語』では、「蓬生」「関屋」の順であるが、「源氏千種香」では「関屋香」「蓬生香」の順であり、同じく現行の「紅梅」「竹河」も、「竹川香」「紅梅香」の順になっている。注4前掲書所載の『小鏡』諸本では、これらの巻の順序は次のようになっている。

#### 第一系統（古本系）

第一類 京都大学本（伝持明院基春筆）

せきや・よもきふ たけかは・紅梅

第二類 宮内庁書陵部本

せき屋・よもきふ たけ川・こうはい

第四類 国会図書館本（古活字版）

せき屋・よもきふ 竹川・紅梅

#### 第二系統（改訂本系）

神戸親和女子大学本（無刊記整版）

関屋・蓬生 竹川・紅梅

#### 第三系統（増補本系）

第一類 光源氏一部連歌寄合之事

せきや・よもきふ たけ河・こうはい

第二類 都立中央図書館本（三井寺聖護院系統）

よもきふ・関屋 竹河・紅梅

国文学研究資料館本（道安系統）

関屋・蓬生 竹川・紅梅

第三類 天理図書館本

せきや・よもきふ\*1 たけかは・こうはい

第四系統（簡略本系）

神宮文庫本

関屋・よもきふ 竹川・紅梅

大阪市立大学本

せきや・よもきふ 竹川・こうはい

第五系統（梗概中心本系）

天理図書館本（伝飛鳥井宋世筆）（せきや）よもきふ\*2 竹かは・こうはい

京都大学本（飛鳥井重雅筆）

よもきふ・関屋 紅梅・竹川

天理図書館本（連蔵筆）

せきや\*3

第六系統（和歌中心本系）

京都大学本

蓬生・関屋 竹川・紅梅

\*1 「せきや」「よもきふ」の順であるが、「せきやよもきふの次也」「よもきふせきやのまへ」と割注付き。

\*2 目次には「十一、みをつくしならひ、せき屋、よもきふ」とあり、本文に「ならひ、よもきふ」とあるが、「せき屋」の本文はない。

\*3 「一、せきやのまきと云事。……」の次は「二、うすくものにうゐんは、……」と続き、「よもきふ」は見当たらない。

「関屋」「蓬生」の巻順については、第三系統第二類都立中央図書館本、第五系統京都大学本、第六系統京都大学本が「蓬生」「関屋」となっており、「竹河」「紅梅」については、第五系統京都大学本だけが「紅梅」「竹川」となっていた(10)。「源氏千種香」は、「関屋香」「蓬生香」「竹川香」「紅梅香」の順であることから、この順番で書かれた『源氏小鏡』を使った可能性があると考えられる。

なおここに見られる巻順の揺れに関して、古本系第一類京都大学本の「紅梅」の本文末(注4前掲書、六三頁)に、

又、かほる中しやうのならひ、こうはい、たけかわともいへり。又たけかわを、まついふ事あり。  
おなしことなれば、いたくあんす<sup>案</sup>へからす。

という文章がある。

また、稻賀敬二は「五十四帖成立異聞」(11)二二二頁で、

蓬生・関屋の順と、関屋・蓬生の順と、どちらの読み方を採るかは、平安時代の末頃、すでに二つの立場が併存していた。いずれも末摘花・空蟬という女性の後日譚を扱うエピソードで一巻をなしている。それを長編の流れのどこへ位置づけるか、古来問題が多かったようである。

と記しており、参考となる。

## II 「箒木香」証歌のこと

まず「源氏千種香」の「箒木香」の内容を見てみよう。（傍線部は筆者による）

箒木 三包。試みあり。 園原 伏屋 三包つゝ。試みなし。

此の九包打合、三結にして三炷開き也。三度にきく。

但、外二炷は前後かまはず。三炷の内、箒木はかりをきゝて、園原、伏屋はきゝ捨也。三炷の内、箒木一炷あれば木の札、

箒木二炷ある時は林の札、三炷共に箒木の時は森の札。三炷の内に箒木なくは木陰の札也。又、三炷十にて小記録にも書も有。

二炷有時 林名

その原や伏屋におふる名のうきうきにあるにもあらずきゆるはゝきゝ

「箒木香」では、証歌に因んだ箒木・園原・伏屋と名付けた香木三種を用いる。本香（ゲーム本戦）開始前に箒木の試みがあるので、箒木は計四包の用意が必要である。本香では、箒木・園原・伏屋を三包ずつ用意し、この九包を打ちませた後、三包ずつ三組にわけ、それを一組ずつ聞いていく。三包聞いたら、その中に試みで聞いて覚えておいた香り、箒木があるかどうかを考えて、札を打つ。三包の内に

箒木が一つあったら「木」の札を、二つなら「林」の札を、三つとも箒木だったなら「森」の札を出し、一つも箒木がなかったら、「木陰」の札を出す。そしてこれを三度繰り返すというルールである。園原や伏屋が出て答えない聞き捨てである。

さて、ここで証歌となっている和歌は『源氏物語』諸本や諸注釈書には見当たらない歌であり、『源氏物語』諸本での空蟬の歌、

数ならぬ伏屋におふる名のうさにあるにもあらず消ゆる帚木

とは第一句が異なり、第三句も一部分が異なっている。では『小鏡』諸本ではどうであろうか。

第一系統（古本系）第一類 京都大学本（伝持明院基春筆）

そのはらやふせやにおふる名のうさにあるにもあらずきゆるははき

第一系統（古本系）第二類 宮内庁書陵部本

そのはらやふせやにおふる名のうさにあるにもあらずきゆるははき

第一系統（古本系）第四類 国会図書館本

そのはらやふせやにおふる名のうさにあるにもあらずきゆるははき

第二系統（改訂本系）神戸親和女子大学本

かすならぬふせやにおふる名のうさにあるにもあらずきゆるははき

第三系統（増補本系）第一類 光源氏一部連歌寄合之事

そのはらやふせやにおふる名のうさにあるにもあらずきゆるははき

第三系統（増補本系）第二類 都立中央図書館本

そのはらやふせやにおふるなのうさにあるにもあらずきゆるはゝきゝ

第三系統第二類 国文学研究資料館本

その原やふせやにおふる名のうさにあるにもあらずきゆるはゝきゝ

第三系統第三類 天理図書館本

其原やふせやにおふる名のうさに有にもあらず消るはゝきゝ

第四系統（簡略本系）神宮文庫本

その色<sup>(イ)</sup>やふせやに生る名のうさにあるにもあらずきゆる帚木

第四系統 大阪市立大学本

其はらやふせやにおふる名のうき<sup>(イ)</sup>に有にもあらず消るはゝきゝ

第五系統（梗概中心本系）天理図書館本（伝飛鳥井宋世筆）

そのはらやふせやにおふる名のうさにあるにもあらずきゆるはゝきゝ

第五系統 京都大学本（飛鳥井重雅筆） この歌の記載なし

第五系統 天理図書館本（連蔵筆）

そのはらやふせやにおふるなのうさにあるにもあらず<sup>(イ)</sup>ぬきゆるはゝきゝ

第六系統（和歌中心本系）京都大学本 この歌の記載なし

という結果であった。

なおこの歌の記載のない第五系統京都大学本では、

はゝ木ゝの心もしらて其原のみちにあやなし(マ)まとひける哉

同じく第六系統京都大学本では、

はゝきゝの心をしらてその原の道にあやなくまとひつる哉

の歌が載せられている。この歌は、空蟬の「数ならぬ」の歌の直前にある源氏の歌であり、いわゆる青表紙本での「帚木の心をしらでその原の道にあやなくまとひぬるかな」とは、助詞や助動詞が微妙に異なる部分がある。

伊井春樹は、『源氏小鏡』での第一句「そのはらや」について（注2前掲書、八〇四頁）、

異文発生の原因としては、古註釈書で指摘する本歌との関連が考えられる。『紫明抄』を例にする  
と、「かずならぬふせやにおふる云々」の歌の注記として、

そのはらやふせやにおふるはゝ木ゞのありとは見れどあはぬ君かな 源重之

しなのゝくにゝ、そのはらやふせやといふ所にあるなり、はゝきゞに両説あり、

（以下略）

と説明する。これを見てすぐに、「そのはらやふせやにおふる」までの上句が、『小鏡』の引用歌とまったく一致しているのに気がつくだろう。作者は所持した物語本文の行間に、典拠とした歌を古注などから書き込んでいたのであり、ダイジェスト化する際目移りなどにより、それに引きずられて新たな異文を作り出してしまったと考えるのが妥当ではないか。そのような異文を持つ伝本が

つて存在したとするよりも、合理的な解釈だと思ふ。  
と論じている。

「簾木香」考案者が、何の根拠もなく、『源氏物語』と異なる「その原や伏屋におふる名のうきにあ  
るにもあらずきゆるはゝきゝ」を証歌に用いたとは考えにくく、考案の際に、「そのはらやふせやにお  
ふる」ではじまる『源氏小鏡』のテキストを用いたものと推測される（12）。

### Ⅲ 「玉葛香」衣配りのこと

「玉葛香」は、年の暮れに源氏が紫の上とともに、女性たちの正月用の晴着をととのえ、それぞれの  
年齢や容貌、性格にふさわしい衣装を見立てて配る、衣配りの場面を組香にしている。玉鬘卷（一三五  
～一三六頁）では、

紅梅のいと紋浮きたる葡萄染の御小桂、今様色のいとすぐれたるとはかの御料、桜の細長に、艶  
やかなる搔練とり添へては姫君の御料なり。浅縹の海賦の織物、織りざまなまめきたれどにほひ  
やかならぬに、いと濃き搔練具して夏の御方に、曇りなく赤きに、山吹の花の細長は、かの西の  
対に奉れたまふを、上は見ぬようにて思しあはず。

—中略—

かの末摘花の御料に、柳の織物、よしある唐草を乱れ織るも、いとなまめきたれば、人知れずほ  
ほ笑まれたまふ。梅の折枝、蝶、鳥飛びちがひ、唐めいたる白き小桂に濃きが艶やかなる重ねて、

明石の御方に、思ひやり気高きを、上はめざましと見たまふ。空蟬の尼君に、青鈍の織物、いと心ばせあるを見つけたまひて、御料にある梶子の御衣、聴色なる添へたまひて、同じ日着たまふべき御消息聞こえめぐらしたまふ。

というように、衣装の色だけでなく、紋様や織、襲ねについてまで言及している。では、「玉葛香」について見てみよう。（傍線部は筆者による）

一赤 二紅梅 三紅井 四白 五縹 六柳 七梶 各一包つゝ。皆試あり。  
ウ色 七包。試なし。

右は色の七包に、赤、紅梅等の七包を一包つゝ結ひ合、二炷きゝ也。  
二炷の始に色と出るは、みな衣配りの札を打也。

但、衣配の伝授ハ四つの色に打やうあり。  
伝授なき人ハ只きぬ配りの札を打へし。

赤ト色	紫のうへ	紅梅ト色	むめ壺
白ト色	明石のうへ	縹ト色	花ちる里
柳ト色	末つむ花	梶ト色	うつせみ
紅井ト色	玉かつらの内侍		
色ト何	皆衣配り也		

札の銘 表は常の紋なり。

紫 梅 明 花 末 蟬 玉 七枚（七枚）つゝ、都合七十枚。

外に今やう ゆるし かとり おちち（おちち）くり（くり）（13） 各七枚つゝ、都合二十八枚。  
但、此四色の札は打やうの習ひあり。

本香（ゲーム）では、赤・紅梅・紅井・白・縹・柳・梔と名付けた香木七種一包ずつ（試があるので二包ずつ用意）と、色と名付けた香木一種七包を、赤と色、紅梅と色、紅井と色というように結び合せ、その二包を打ちまぜてから炷いていく。二炷の始めに色が出たら、「衣配り」という札で答え、例えば赤と色、紅梅と色、あるいは白と色という順序で香が出たら、指示通りの聞きの名目、紫の上、梅壺、あるいは明石の上に准じて、それぞれ「紫」「梅」「明」の札で答える。香会の連衆は一〇人制が基本なので、札数が多くなる。「今やう・ゆるし・かとり・かいねり」の四種の札の打ち方は習いであるときれていて、伝授事であるため、今となつてはどのようなものなのか不明である。

いずれにしても、ここでの衣配りは、人物と衣装の色の組合せだけで、物語よりも簡素化されている。加えて、物語では紫の上に当てられている紅梅が梅壺（物語のこの場面には登場しない）に配され、紫の上には赤が配されており、また「曇りなく赤きに、山吹の花の細長」を配られた玉鬘に「紅井」が当てられているように、物語の記述とは相違がある。

では『小鏡』では、どのような記述がされているだろうか。古本系京都大学本を引いてみよう（注4 前掲書、三八〜九頁）。

しはすのすゑに、源氏の御かたより、御かた／＼の正月のさうそく(装束)、くはらせたまふ。まつ、むらさきのうへゝあか色。御むすめのひめきみの御かたへ、こうはい(紅梅)。またかつらの御かたへ、くれなゐ。あかしの御かたへ、しろき。はなちるさとへ、はなた(縹)。すゑつむへ、やなき。うつせみのあまのもとへ、くちなし色。これを、「きぬくはり」といふ。心へへし。

—中略—

きぬの事はんには、「玉かつら」「くれなゐ色ふかく」などいふ事は、事によりてつけへし。このまきならず、きぬの色に、「かとり」「ゆるし色」「いまやう色」などいふ事あり。けしからず、ひし(秘事)と申ならはしたり。「かとり」とは、みついろのすゝしなり。かちやうのことなれば、「かとり」といふ。「いまやう色」とは、こうはいを、はるいふなり。「ゆるしいろ」とは、こうはいを、こきくれなゐよりは、ちと、うすけれど、ゆるすといゑり。「ねりぬき」は、いみしくくわし(華飾)よくのものなるを、ゆるすといへり。「おちくる色」と、いふ事あり。これ又ひし(秘事)といふ。こきくれなゐの事なり。

両者を比較すると、人物と色の組合せは、「御むすめのひめきみの御かたへ、こうはい」以外、すべて一致している。特に物語と「玉葛香」で相違していた、紫の上―赤、玉鬘―紅、という組合せが「玉葛香」と共通していることは注目される。

なお「玉葛香」での「むめ壺」が、梅壺女御（もとの齋宮の女御） 後の秋好中宮ならば、すでに宮

中の方（「絵合」巻で冷泉帝に入内）なので、衣配りの対象外である。ここでは「むめ壺」ではなく、明石の姫君でなければならぬ。後述するように、女樂が主題の「若菜香下」（盤物）においても、明石の女御（衣配りでの明石の姫君）であるべき位置に、「梅壺人形」が登場している。「源氏千種香」で、明石の姫君または後の明石の女御が登場する組香は「玉葛香」と「若菜香下」だけであるが、どちらにおいても「むめ壺」と誤ってしまったのであろうか。この点は問題として残るものの、しかし「玉葛香」と『小鏡』の密接な関連性は明らかであろう。

また「今やう・ゆるし・かとり・おちくり」の札（そのうち「かとり」は玉鬘巻の原文にはない）が「玉葛香」で用いられることについても、『小鏡』が「かとり」「今やう色」「ゆるし色」や「おちくる色」を特に取り上げて解説していること（14）の影響と見てよいのではなからうか。これらの札打ちが「習ひ」とされて、詳らかに記されていないのも、『小鏡』の「ひし（秘事）と申ならはしたり」の記述が反映して秘伝となった可能性もあろう。

なお古本系京都大学本以外の諸本での「衣配り」の記述は、色が違うものや、明石の御方が登場しないものもあり様々であるが、第三系統第一類光源氏一部連歌寄合之事、第二類国文学研究資料館本、第四系統大阪市立大学本、第五系統京都大学本は、第一系統京都大学本と全く同じである。凡例及び資料1を参照されたい。

#### IV 「梅枝香」薫物合のこと

「梅枝香」は、盤物仕立てであり、たきもの 炷物を持った人形が登場する華やかな組香である。薫物合が主題

の「梅枝香」は、香遊びである「源氏千種香」にとって、とても重要な組香と言えよう。しかし、「梅枝香」には大切な登場人物である朝顔の前斎院が登場しないこと、さらに、薰衣香調合のはずの明石の御方が黒方という取り合せになっていること、この二点が不審であるとして問題視されてきた。

では、「梅枝香」について見てみよう。(傍線部は筆者による)(図版1)

一 二 三 三包つゝ。試あり。      ウ 三包。試なし。

此十二包打合、一炷開也。二人つゝ五組にわかる。

たき物合の相手

源氏の人形	上童 <small>わらわ</small> の人形一	炷物を持	銘はじゝう
紫上の人形	同一	同	〃 梅花
明石上の人形	同一	同	〃 黒方
花散里の人形	同一	同	〃 荷葉
兵部卿の人形	同一	書物を持	批判

盤の目二十間 みそ五筋

はしめ名の人形と上童の人形、それ／＼の組と向合て立ル也。兩人楽にすゝみて、名の人形と上童と一ところへはやくよるを一の勝とす。たとへは一組両方ともに十とをきけは、十間目にて行合也。是則一の勝也。たき物を合せたるといふ心にて、人形ハ向合て一所に立置。其後香ハきゝて記録には記し、人

形ハうこかぬ也。又、一方あたりつよく十五間行、一方五間ならで行され共、十五間目にて両方行合也。これもおなしく勝なり。一二の勝すめは、香は残りたるとも、それかきりにて盤のせうふは終る也。

但、批判の組は各別なれば、一二の勝に成りたる共、其時は三までのせうふあるへし。

三炷のつゝけきゝは五間すゝむ。点はやはり三点。ウのあたりは多少かまはず二間すゝむ。点も二点。其外、一人きゝ二人きゝの差別なし。

五組の人形に聞き手が二人ずつついて、香を聞き当てていく。「薫物を合せる」の心から、盤の両端に、名の人形（源氏ゝ兵部卿の五つ）と童人形を向かい合せに立て置いて、香の当否にしたがい、盤の上を歩ませ、早く行き合うことを勝としている。

物語では、源氏より薫物の調合を依頼された朝顔の前斎院から、黒方と梅花が届く。源氏は黒方と侍従、紫の上は黒方・侍従・梅花、花散里は荷葉を一種、そして明石の御方は薫衣香を調合する。二月一日の夕暮れに兵部卿宮を判者にしての薫物合が行われ、朝顔の前斎院の黒方、源氏の侍従、紫の上の梅花、花散里の荷葉、明石の御方の薫衣香が炷かれる。

「梅枝香」では、物語と異なり朝顔の前斎院の人形は登場せず、また明石上の人形と向かい合う童人形は、薫衣香ではなく黒方を持っている。それでは『小鏡』での、薫物合の場面はどのように記述されているだろうか。古本系京都大学本は次の通りである（注4前掲書、四五頁）。

やかてその夜、かの（登兵部卿）ほたるひやうふきやうのみやは（判者）はんしやにて、御かた／＼のたきものを、心

みさせたまふ。たき物のいろに、はい花ほう(梅花方)、むらさきのうへ、あはせたまふ。くろほう(黒方)、あかしのうへ、あはせ給ふ。かゑう(荷葉)のほう、花ちるさと。しろう(侍従)、源氏あはせ給ふ。いつれも、とり／＼におもしろし。中にも、はいくわは、そのころのおりにあひて、おもしろしと、さためられき。

右のようになっていて、「梅枝香」での人物と薫物の組合せと符合しており、朝顔の前齋院が見えないことも共通する。但し、当該本の「むめかえ」の冒頭（注4前掲書、四四〜五頁）は次のような記述である。

このまき、梅かえといふ事、正月つこもりころ、源氏のおと(大臣)の六てういんにて、たき物あはせあり。是は、あかしのうへの御はらの御むすめ、はるみやにまいりたまふ御いそきなり。かう(香)とも、おんかた／＼へくはりて、いとみあわせたまふ。せん(前齋院)さいゐんと申は、かのあさかほのさいゐん、源氏に心つよくて、やみし人なり。この御かたより、ちりすきたるむめのえたに、おん文つけて、こんるりのつほに、たき物いれて、五は(巻)のえたにつけ、しろきつほにも、たき物いれて、むめをゑりて、つけられたり。むすひつけたるいとのかま、なよひかに、えならず、おもしろくしな(しなされたりカ)たれたり。そのうたに、

52 花のかはちりにしえたにとまらねとうつらん袖にあさくしまめや  
と、ありしなり。「たきもの」といふ事には、

五はのまつ。つけられし文。

など、いふへし。

ちりすきたる梅のえた。なよひかな(マ)いと。るりのつほ。

など、あるへし。

ここでは、朝顔の前斎院から薫物二種が届けられており、物語に忠実である。さらに「たきもの」といふ事には」として、届けられた薫物の容器や飾りの描写を踏まえた寄合の詞も提示している。それなのに、なぜか薫物合の場面では、朝顔の前斎院は排除されてしまったのである。

薫物とは、中国からその調合法が伝えられ、沈木を主成分とし、植物性・動物性の香料を粉末にしたものや、保存のための甲香（貝香）を加え、蜜や梅肉で練り合わせて好みの匂いにする練香のことである。香料の調合具合によりそれぞれ名付けられた「梅花」「荷葉（蓮）」「菊花」「落葉」「侍従」「黒方」は、「六種(むくさ)の薫物」と称され有名である。薫物の処方は『薫集類抄』（15）に詳しい。

物語では明石の御方が六条院の戌亥の冬の町に定めおかれていたので、「梅枝香」では、冬の薫物の黒方を童人形に所持させているのか、と香の実技の場では考えられてきた（16）。しかし、物語では『薫集類抄』に登場する合せ香の名手、朱雀院、公忠朝臣の名を挙げて、「百歩の方など思ひえて、世に似ずなまめかしさをとり集めたる」（四〇九頁）薫衣香を、明石の御方に調査させている。また源氏には仁明天皇によって禁制とされた「承和の御いましめの二つの方」（四〇四頁）である侍従と黒方を調査させ、紫の上にも「八条の式部卿（本康親王）の御方」（四〇四頁）で黒方・侍従・梅花を調査させて

いる。この史実上の仁明天皇、朱雀院、八条宮、公忠朝臣と受け継がれた薫物の系譜（17）をないがしろにしての、「梅枝香」での人物と薫物との組合せは、甚だ合点のいかぬことであった。しかし明石の上に黒方を当てることと、朝顔の前斎院が登場しないことの一致を踏まえると、『小鏡』を典拠として「梅枝香」を考案したのではないかと推測される。

なお、第一系統京都大学本以外の諸本での「薫物合」は、他の古本系二本と第三系統都立中央図書館本、第四系統神宮文庫本、第五系統天理図書館本（伝飛鳥井宋世筆）も京都大学本と同様であるが、第二系統（改訂本系）神戸親和女子大学本では明石の御方が薫衣香となり（第三系統国文学研究資料館本・天理図書館本も）、また朝顔の前斎院は黒方となって薫物合の場面に登場し（国文学研究資料館本も）、誤りが正されている（資料2）。このことについては、伊井春樹が（注2前掲書、八五〇頁）、

これは改訂本系の方が正しいのであって、また古本系で脱落していた権斎院を加えているのは、歌の異文を訂正したと同じように、梗概本文においてもその改訂に際しては、青表紙本を詳細に見て  
いって誤りを正していったと考えられる。

と記している。

ところでこの『小鏡』「むめかえ」本文末（注4前掲書、四五頁）に、興味深い部分がある。

又たきものに、「も<sup>（百歩）</sup>あゆみ」といふ事あらは、なにそと、おもふへからず。これは、とをくま

て、にほふ心ねなり。たきものゝな(名)にては候はす。又たきものを、みきは(行)にうつむといふ事あるへし。たき物あはせは、なつ(夏)ふゆ(冬)かはりて、うつむ事あり。それもく(御)にしたかひて、つけへし。わたとのゝしたより、いつるみつに、うつむ。御(御)か(溝)わみ(水)つになすらへて、なといふ事もあるへし。くはしくは、むめかえのまきにあるへし。いつくまでも、むめたき物はい(梅)く(花)わなれば、むめかえといふなり。

ここでは、まず「百歩の香」について説明し、さらに練り合わせた薫物を水のほとりに埋め、熟成させるという方法についても言及している。物語でも源氏は、薫物合の直前に、西の渡殿の下から流れている遣水の汀近くに埋めさせておいた二種の薫物を、惟光の宰相の子の兵衛尉に取り出させている。この『小鏡』の作者は、「くはしくは、むめかえのまきにあるへし。」としながらも、「たき物あはせは、なつふゆかはりて、うつむ事あり。」として、物語からだけでは知り得ない薫物作りに関する知識を示している。

『薫集類抄』下「埋日数。付埋所。」(注15前掲書、五五一頁)の項には、諸家の処方が掲げられているが、先に紹介した公忠朝臣の処方を挙げるなら、

黒方。侍従。春秋五日。夏三日。冬七日。埋之梅樹下。

と記されている。『小鏡』作者は、季節による薫物調査方法の違いを知っていたのである。

伊井春樹は、『小鏡』の作者について(注2前掲書、八二七〜八頁)、

南北朝期において連歌に精通し、しかも河内家の源氏学を継承した人物が『小鏡』の作者だったと考えられるが、私は今のところ二条良基を想定している。

と記している。想定通りならば、薫物の知識を有していて当然であると考えられる。

#### V 「若菜香下」女樂のこと

「若菜香下」も盤物仕立てであり、女樂の華やかな場面を組香にしている。四人の女君たちの奏でる四つの樂器、そして女君たちの容姿を喻えた花木、それぞれが他に置き換えられない組合せである。ここでの問題点は、唱歌した人物である。では「若菜香下」を見てみよう。(傍線部は筆者による)(図版2)

一 二 三 三包つゝ。試あり。ウ 三包。試なし。  
此十二包打合、一炷開き也。

#### 女樂

人形一ツに二人組也。

女三宮人形	小道具	琴一	柳一枝
紫上人形	〃	和琴一	桜一枝
梅壺人形	〃	小ノ琴一	藤一枝
明石上人形	〃	琵琶一	橘一枝

源氏人形 小道具なし。これは声歌の役なり。

盤の目十五間 みそ五筋

はしめ人形を盤の端に立置、一組兩人ともに当レは一間すゝむ。一人あたりたるはすゝます。また兩人ともにあたらされは一間退く。

五間目に至れば琴、和琴、それ／＼の持の道具を、五間目の所へかさりてすゝむ也。

十間すゝめは柳、桜の花、その所へかさる也。

十二間目に至るを一の勝とし、其後は香をきく斗也。

源氏は小道具なし。すゝみやうは右に同じ。但、真中のみそに立ル也。

三炷のつゝけきゝは五間すゝむ。其外はウも一間也。

香の聞きにしたがい人形を歩ませ、それぞれの楽器や花を飾るといふもので、みやびな組香である。念のため、物語の「若菜下」女樂の場面（一八七、一九〇～一頁）を確認しよう。

秘したまふ御琴ども、うるはしき紺地の袋どもに入れたる取り出でて、明石の御方は琵琶、紫の上に和琴、女御の君には箏の御琴、宮には、かくことごとしき琴はまだえ弾きたまはずやとあやふくて、例の手馴らしたまへるをぞ調べて奉りたまふ。

—中略—

御琴どもの調べどもとのひはてて、掻き合はせたまへるほど、いづれとなき中に、琵琶はすぐ

れて上手めき、神さびたる手づかひ、澄みはてておもしろく聞こゆ。和琴に、大将も耳とどめたまへるに、なつかしく愛敬づきたる御爪音に、搔き返したる音のめづらしくいまめきて、さらに、このわざとある上手どもの、おどろおどろしく搔きたてたる調べ調子に劣らずにぎははしく、大和琴にもかかる手ありけりと聞き驚かる。

—中略—

箏の御琴は、物の隙々に、心もとなく漏り出づる物の音がらにて、うつくしげになまめかしくのみ聞こゆ。琴は、なほ若き方なれど、習ひたまふ盛りなれば、たどたどしからず、いとよく物に響きあひて、優になりにける御琴の音かなと大将聞きたまふ。拍子とりて唱歌したまふ。院も、時々扇うち鳴らして加へたまふ御声、昔よりもいみじくおもしろく、すこしふつつかにもものしき気添ひて聞こゆ。

右の「女御の君」は明石の女御であるが、「玉葛香」衣配りでも触れたように、「若菜香下」では明石の女御であるべき位置に梅壺人形が登場している。また物語では、唱歌したのは主に夕霧の大将で、源氏はときどき扇をうち鳴らしていっしょにお謡いになったというのであり、「若菜香下」で源氏を唱歌の役としたのは物語から隔たっている。

では、『小鏡』ではどのように書かれているだろうか。古本系京都大学本を引いてみよう（注4前掲書、五〇〜一頁）。

うち／＼心みんとて、はるのよの、のとかにかすめるよ、御かた／＼をよひたてまつりて御かく(楽)あり。これを女かくといふ。ゆふきりの大しやう、みすのとなて、御こと(琴)はかりとゝのへて、まいりたまふ。女三のみや、きんのこと。

—中略—

むらさきのうへ、わこん。女御殿、しやうのこと。あかしのうへ、ひわ。源氏、しやうかし給(唱歌)ふ。 —中略—

さて、いつれを(もカ)、とり／＼におもしろし。そのとき、かの御すかたともを、はなにとへさせたまふ。まつ女三のみやの御かたを、のそかせ給へは、二月中の五日はかりに、あをやきの、わつかにしたりはしめて、うくひすのはかせ(羽風)にも、なひきぬへく、あへかに見え給ふ。さくらのほそなかに、御くしは、ひたりみきりより、こほれかゝりて、やなきのいと(藤)のさましたり。むらさきのうへは、おほきさなど、よほとにて、やうたい(藤)、あらまほしく、わたりにも、にほひみちて、はなといはゝ、さくらにたとへて、はるのあけほの(藤)に、かすみのまより見ゆる、か(藤)はさくらの心ちす。これそ、かきりなき御さまなる。女御のきみは、こたかききしより、かたはらにならふはななく、さきこほれたる、ふちの心ちして、よしありて見えたまふ。かゝる中に、あかしのうへは、けをさるへけれども、あらまほしく、もてつけて、五月まつ花たちはなの、花もみも(美)、おしおりたる心ちす。

右のように古本系京都大学本では、「源氏、しやうかし給ふ。」となっている。「若菜香下」の考案者

は、おそらくこのような記述によって、唱歌した人物を源氏としてしまったのではなからうか。

女楽の席に登場させられる夕霧は、野分巻での思いがけない紫の上の垣間見以来、紫の上に心ひかれ、その後の物語の中では、六条院を第三者の視座から客観視する人物として描かれていると考えられる。御簾の外から女君たちの楽の音と「御けはひ」を聞いて、それぞれの人となりを想像する夕霧ゆえに、高まる感興に拍子をとって、唱歌したのではないだろうか。しかし『小鏡』では、「ゆふきりの大しやう、みすのとなて、御ことはかりとゝのへて、まいりたまふ」と言及されるだけで、女楽の場面からは外されてしまっている。「若菜香下」に夕霧が登場しないのは、『小鏡』における夕霧の存在の矮小化と関わりがあると思われる。

なお、第一系統京都大学本以外の諸本でも、唱歌したのは源氏となっているが（ただし「女楽」の記述がない第四系統大阪市立大学本、第五系統諸本、第六系統本を除く）、第一系統宮内庁書陵部本などでは、楽器や花木の記述が一部欠けており、「源氏千種香」と完全には対応しない。詳細は資料3を参照されたい。

### 第一節のまとめ——「源氏千種香」と『源氏小鏡』諸本の関係の整理——

「源氏千種香」の巻順、「箒木香」「玉葛香」「梅枝香」「若菜香下」の内容について、『小鏡』諸本と比較した。その結果明らかになったことをまとめてみる。

一「源氏千種香」の「関屋香」「蓬生香」「竹川香」「紅梅香」のならば順と巻序が同じである『小鏡』は、第一系統第一類京都大学本・第二類宮内庁書陵部本・第四類国会図書館本（古活字版）、第二系

統神戸親和女子大学本（無刊記整版）、第三系統第一類光源氏一部連歌寄合之事、第二類国文学研究資料館本・第三類天理図書館本、第四系統神宮文庫本・大阪市立大学本であった。

二「箒木香」の証歌は、このままの形では『源氏物語』諸本や諸注釈書には見当たらないが、『小鏡』の多くの系統では「箒木香」と同じ形で載せている。ただし整版本である第二系統神戸親和女子大学本だけは物語本来の形であり、第五系統のうちの京都大学本（飛鳥井重雅筆）と第六系統京都大学本にはこの歌が見られない。

三「玉葛香」衣配りでは、人物と衣装の組合せが物語よりも簡素化されていて、人物と衣装の色だけで表現されているが、明石の姫君であるべきはずが「むめ壺」とされていることを除けば、人物と衣装の色の組合せは、第一系統京都大学本、第三系統第一類光源氏一部連歌寄合之事、第二類国文学研究資料館本、第四系統大阪市立大学本、第五系統京都大学本とすべて一致する。

四「梅枝香」薰物合では、物語と異なり薰物合の場面に朝顔の前斎院は登場せず、また人物と薰物の組合せでも、明石の御方は薰衣香でなく黒方になっている。これは、第一系統三本、第三系統都立中央図書館本、第四系統神宮文庫本、第五系統天理図書館本（伝飛鳥井宋世筆）の記述と一致する。

五「若菜香下」の女楽で、女君たちの担当する楽器と、女君たちを喩えた花木は物語と同じであるが、夕霧ではなく源氏が唱歌した人物とされていることは物語と異なる。楽器・花木・唱歌者の三点で「若菜香下」と一致する記述を持つのは、第一系統京都大学本、第三系統第一類光源氏一部連歌寄合之事、

第二類都立中央図書館本・国文学研究資料館本、第四系統神宮文庫本である。

以上に検証した「源氏千種香」の記述と『小鏡』諸本の関係を資料4【「源氏千種香」の記述と『源氏

小鏡』諸本の関係」にまとめた。

資料4に見る通り、「源氏千種香」が『源氏物語』と異なる点を持つ巻順、「箒木香」証歌、「玉葛香」衣配り、「梅枝香」薰物合、「若菜香下」女樂、のすべてにおいて「源氏千種香」と一致するのは、注4前掲書所収の『源氏小鏡』諸本のうちでは、第一系統（古本系）第一類京都大学本のみであった。それに次いでは、小異はあるものの、全く異なる項目や当該の記述を欠く項目を含まない点で、第四系統（簡略本系）神宮文庫本に近い。しかし神宮文庫本の「箒木香」証歌の「その色や」は単純な誤写として処理できるとしても、「玉葛香」の「柳」と「柳うら」の相違は無視できない。全体として、京都大学本系統より神宮文庫本系統の方が依拠本に想定するにふさわしいとは言えないであろう。

では第二節で「源氏千種香」の聞きの名目と『源氏小鏡』諸本の寄合とを比較、精査検証して、「源氏千種香」における『源氏小鏡』享受の様相を明らかにしたいと考える。

## 第二節

第二節では、「源氏千種香」に登場する聞きの名目に『源氏小鏡』の寄合と同一のものがあることに注目し、『小鏡』諸本の寄合と比較し、精査検証しつつ、中でも古本系京都大学本系統が、「源氏千種香」の依拠本である可能性を探りたい。

まず、組香における聞きの名目の機能を、実例を挙げて述べ、その後「源氏千種香」の「須磨香」を中心に、聞きの名目と『小鏡』諸本の寄合との関連を提示し、続いて『源氏小鏡』の地の文から生まれたと考えられる聞きの名目を複数紹介して、「源氏千種香」における『源氏小鏡』享受の様相の一端を明らかにしたい。

なお本節においても、『源氏小鏡』については岩坪健氏による『源氏小鏡』諸本集成』と、岡見正雄氏による『古典文庫 良基連歌論集三』所収本「光源氏一部連歌寄合之事」を用いる。

### I 組香における聞きの名目の機能―「宇治山香」と「花散里香」を例に

組香では、その題材となる文学に因んだ言葉が香木につけられ（香名または香銘）、香を聞き当てて回答する時の言葉も、あらかじめ指定されることがある。これが聞きの名目である。盤物ではたいいてい香名も一・二・三といった番号で表現され、答える時その番号で答え、聞きの名目は使われないことが多い。盤物とは盤立物ともいい、盤上で立物と呼ばれる人形や花、鳥などの様々な形象を、香を聞き

当てるごとに移動させて楽しむもので、視覚的な遊戯性を高めるものとして生まれた組香である。東福門院和子の後水尾天皇への入内を契機に江戸中期にかけて流行したとも言われる（神保博行『香道の歴史事典』柏書房、二〇〇三年、四〇九頁）。盤物では立物そのもの（意匠）が、主題となる文学作品の場面を視覚的に再現し、香の聞きにしたがい立物に物語に因んだ所作（6）をさせるなどして、物語場面の臨場感を演出するため、聞きの名目が必要とされないとも考えられる。

まずは『香道蘭之園』二巻収載の「宇治山香」を例に、聞きの名目が組香においていかに機能するかを見てみよう。「宇治山香」は喜撰法師の歌「我が庵は都のたつみしかぞ住む世を宇治山と人はいふなり」を題材にした組香であり、初心者にも解り易いので香席でよく行われる組香である。（ルビは筆者による）

一 我庵は 二 都のたつみ 三 しかぞすむ

四 世をうち山と 五 人はいふなり

おのく一包つゝ、外に試有。

右五包打合、その内一炷きちゆう、跡は捨香すてこうなり。

一の香ならば我庵、二はみやこのたつみと、香の出やうにしたがひ小記録に書出ス也。  
試の小包の上に歌を書。

本香の小包は中に歌を書。おくの折込の所に書也。

小記録 都のたつみ 名

「宇治山香」では、五種の香木を用い、喜撰法師の和歌の五つの句を香銘としてつける。本香の前にこの五種を連中、即ち香の聞き手に、試として香りを聞かせ、本香では、この五包を打ちませた後、その内の一包だけを撰んで炷き出す。残りの四包は「捨香」なので、炷き出さず香りを聞かない。連衆は、五種の内、どの香が炷かれたのかを考えて、その香銘を小記録（回答用紙）に記して答える。「宇治山香」は、喜撰法師の和歌が香銘と聞きの名目の両方に使われた例であり、五包の内一包だけを炷き出すのは、喜撰法師の歌がこの一首だけ遺されているという通俗的理解に拠るものと考えられる（18）。また「宇治山香」は、最初期の組香「古十組」と呼ばれる、最も古い段階に成立したと考えられる十の組香の内の一つでもある。「古十組」の他の組香は頓知的な要素が強く、文学性は希薄である。また証歌やそれに因んだ香銘などはなく、一・二・三といった番号で答えるものが多い。組香が単に香りを聞き当て、嗅覚を競う即物的なものに終らなかつたのは、ひとえに文学との邂逅があつたからであり、「宇治山香」は「古十組」の内の一つでありながら、喜撰法師の和歌を前提としたことで、文学的興趣を深める聞香への過渡的様相を含んだ組香と考えられる。

では「源氏千種香」の組香では、聞きの名目がどのように機能してくるのか。「宇治山香」と同じように、和歌の五句を聞きの名目に使う「花散里香」で見よう。

無試別香 五包、一二三四五と五品。

試あり同香 五包、これをウとす。

右試なしと試ありと一包つゝ、二包結び合、五結にして二炷きゝ也。

試なしはきゝ捨の香也。記録にもかゝず。

一番ニウ何 立はな 二番ニウ何 香をなつかしみ

三番ニウ何 ほとゝきす 四番ニウ何 はなちる里

五番ニウ何 尋てそとふ

跡ニ出ルウ 皆中川也。

試み無し of 五種の香五包と試み有りの同香ウ（19）・五包から一包ずつを取り、二包を一結にして、これを五結つくる。そしてこの五結それぞれを炷き出す時に、二包を打ちまぜる。連衆は二炷聞きを五行うことになる。そしてそれぞれの二炷の香の出る順番によって、五行の内の一順番に、ウ・試無しの順で香が出たら「立はな」と答え、二番目にウ・試無しの順で香が出たら「香をなつかしみ」というように答えていく。もしも、試無しの香・ウの順で香が出たならば、いつでも「中川」と答えるという規則である。

ここでの聞きの名目は源氏の麗景殿の女御に呼びかけた和歌、

橘の香をなつかしみほととぎす花散る里をたづねてぞとふ  
（花散里卷 光源氏）

に抛り、「中川」は、源氏が麗景殿の女御を訪れる途中で、中川あたりの昔なじみの女に消息を入れる場面での女の返歌に由来する。

ほととぎす言問ふ声はそれなれどあなおぼつかな五月雨の空（同巻 中川のほとりの女）

この組香での試無しの香は―本戦前に香りを聞いていないから、はつきりとしないうこと―「あなおぼつかな」であり、試有りのウの前に試無しの香が出た時は、すべて「中川」と答えるのである。聞きの名目「中川」から物語での中川の女の返歌が連想されなければならない。したがって、聞きの名目が組香での肝要な言葉であり、背後にある文学的興趣を担う象徴的言葉として機能し、連衆一座の共通認識の基盤となるのである。

## II 「須磨香」の聞きの名目と『源氏小鏡』の源氏寄合

「源氏千種香」では一二の盤物以外、四一の組香で聞きの名目が指定されている。その聞きの名目は、巻名に拠るもの、物語の登場人物に拠るもの、証歌に因んだもの、物語本文から採られたものなどがある。しかし、物語には出てこない言葉が登場したり、物語の和歌を典拠としながらも名詞化されているもの、物語内容に則しながら、五語ないし七語にまとめられているものなど、様々である。しかも、それらの中には『源氏小鏡』の寄合と同一のものが存在している。そして、寄合の言葉が物語の進行に従って並べられているのと同様に、聞きの名目もほぼ時系列に並んでいる。

では「源氏千種香」の「須磨香」を例に、聞きの名目と源氏寄合を比較してみよう。

「須磨香」には、『源氏物語』本文には見出せない言葉五例（庭のやり水・みちのく紙・花の盃・波こしもて・柴の煙）が聞きの名目となっている。これは、聞きの名目を持つ四一の組香中で最多であり、注目すべき例である。その内の三例（庭のやり水・みちのく紙・花の盃）は『小鏡』諸本の寄合と一致

し、一例（柴の煙）は『小鏡』の地の文から生まれた聞きの名目と考えられる。

一方、『小鏡』は、本文と歌によって綴られる第五系統本（梗概中心本系）と歌を多数増補した第六系統本（和歌中心本）では、寄合の言葉が省かれている（20）。したがって本稿では『小鏡』第一系統本から第四系統本、十本における「すま」の源氏寄合との関連を確認する。「須磨香」は左記のように記されている。（強調部が聞きの名目で、筆者による。）

一 二 四包つゝ、試あり。 源氏 二包、試なし。

右一二、二包つゝ四包の中へウを一包入、五包つゝにして五包を前とし、五包を後とす。

前五包、二炷きゝ一度、三炷きゝ一度、五包を両度にきく也。後の五包も同前也。

二炷きゝの時、

一一 若木の桜 一二 庭のやり水 一二 松のはしら

二一 竹の垣 ウ 源氏 ウ 須磨

三炷きゝの時、

ウ 源氏 ウ 須磨

ウ一二 伊勢の使 ウ一二 みちのく紙 一ウ二 花の盃

二ウ一 友ちとり 一一一 頭中将 一一二 ねさめの床

二二一	巳の日の祓	二二二	ひち笠雨	一二二	四方の嵐
二二一	波こしもて	二二二	柴の煙	一二一	立来ル浪

これら聞きの名目は、物語の「須磨には、いとど心づくしの秋風に」で始まるあたりから、須磨での寓居の様子、三位中将となつた頭中将の訪問、三月上巳の祓いの日、暴風雨に襲われる場面まで（一九八〜二一九頁）の広範囲から採用されている。この組香では、前後二回、五炷の香を二炷聞き、三炷聞きで味わうのだが、二炷聞きでは、源氏の須磨の家居のあり様を思い浮べ、三炷聞きでは源氏の閑居のわびしさや都の人々との消息のやりとり、三位中将の訪れや弥生巳の日の禊、そして突然の暴風雨などの場面がイメージされていく。

先述の通り、「庭のやり水」「花の盃」「波こしもて」「柴の煙」は物語本文に見出せない言葉であり、「みちのく紙」は「陸奥国紙」の形で末摘花巻、賢木巻、明石巻、蓬生巻、玉鬘巻、胡蝶巻、若菜上巻、橋姫巻、宿木巻に各一例ずつ見出せるものの、肝心の須磨巻には登場しない。

「若木の桜」「松のはしら」「友ちとり」「ねさめの床」「ひち笠雨」「四方の嵐」は物語本文の表現と一致するが、「竹の垣」「伊勢の使」「巳の日の祓」「立来ル浪」は、若干、改変されている。即ち、「竹の垣」は物語の「竹編める垣しわたして」に基づき、「伊勢の使」は「かの伊勢の宮へも御使ありけり」、「巳の日の祓」は「弥生の朔日に出で来たる巳の日、「今日なむ、かく思ふことある人は、禊したまふべき」と、なまさかしき人の聞こゆれば、海づらもゆかしうて出でたまふ。いとおそろかに、軟障ばかりを引きめぐらして、この国に通ひける陰陽師召して、祓せさせたまふ」から、生まれた言葉ではなか

ろうか。また「立来ル浪」は「枕をそばだてて四方の嵐を聞きたまふに、波ただここもとに立ちくる心地して」を踏まえた表現と考えられる。また「波こしもて」は「波ただここもと」の誤写という可能性もある。

しかし、組香の考案者がこれらの言葉も創作したのであるか。

では次に、『小鏡』第一系統本から第四系統本「すま」の寄合を見てみよう（資料5参照）。

第一系統京都大学本では、四七の寄合が登場し、そのうち「わかきのさくら・にはのやりみつ・まつのはしら・ともちとり・ねさめのとこ・よものあらし・たちくるなみ・みちのくかみ・はなのさかつき・ひちかさ雨・みの日のはらい」の一語が「須磨香」の聞きの名目と一致する。同じく第一系統宮内庁書陵部本では、「わかきのさくら・庭のやり水・まつのはしら・ともちとり・ねさめのとこ・よものあらし・みちのくかみ・みの日のはらい」の八語が一致。国会図書館本でも「若木のさくら・松のはしら・ともちとり・ねさめのとこ・伊勢の使・みちのくかみ・ひちかさ雨」七語が一致した。第二系統神戸親和女子大学本でも一一語、第三系統光源氏一部連歌寄合之事では一〇語、第三系統都立中央図書館本では五語、国文学研究資料館本では九語、天理図書館本では四語が、第四系統の神宮文庫本では一〇語、大阪市立大学本では一二語が一致（資料1）。

『小鏡』諸本「すま」巻収載の寄合数を見ると、第三系統（増補本系）都立中央図書館本が二八語で最も少なく、同じく第三系統光源氏一部連歌寄合之事が九六語と最も多かった。それ以外の諸本の寄合の数を平均すると、約四八語であり、個々の寄合に小異はあるものの大きな違いは認められない。このことについて、伊井春樹は、

〔源氏小鏡〕 和歌は青表紙本による改訂という、後人の手が明らかに加えられたが、（寄合の）詞の方は一語一語本文から検索してその異文の有無を調べるのが困難だったのであろう、ほとんど無修正のまま継承されている。（注2前掲書、九四三頁）

と記している。なお（ ）内は筆者による補記である。

では、「竹の垣」「伊勢の使」「巳の日の祓」「立来ル浪」について見てみよう。第二系統神戸親和女子大学本は「たけのかき」、第四系統大阪市立大学本では「竹のかき」、第一系統京都大学本では「竹かき」、国会図書館本では「たけかき」、第一系統宮内庁書陵部本と第三系統光源氏一部連歌寄合之事と国文学研究資料館本では「竹あめるかき」、第四系統神宮文庫本では「竹のすかき」となっている。第一系統宮内庁書陵部本と第三系統光源氏一部連歌寄合之事および国文学研究資料館本は、『源氏物語』の「竹編める垣しわたして」に忠実と言えよう。

「伊勢の使」については、第一系統国会図書館本が「伊勢の使」、第三系統光源氏一部連歌寄合之事が「いせのつかい」、天理図書館本が「伊勢のつかひ」であり、第四系統神宮文庫本には「伊せのつかひ文」とある。

「巳の日の祓」は、第一系統京都大学本と宮内庁書陵部本に「みの日のはらい」、第三系統光源氏一部連歌寄合之事に「みの日のはらひ」、第四系統大阪市立大学本に「みの日のはらひ」、第二系統神戸親和女子大学本は「みの日のはらへ」、第四系統神宮文庫本は「巳の日のはらへ」、第一系統国会図書館本

には「はらひ」と「みの日」に分割された形で載る。

「立来ル浪」については、第一系統京都大学本と第二系統神戸親和女子大学本が「たちくるなみ」、第三系統国文学研究資料館本と第四系統大阪市立大学本が「立くる波」、同じく第四系統神宮文庫本が「立ちくる波」であった。第一系統宮内庁書陵部本では「浦なみ立くる」、国会図書館本では「おちくるなみ」となっていた。

「竹の垣」「伊勢の使」「巳の日の祓」「立来ル浪」は小異はあるものの『小鏡』の寄合に合致するのである。

では、『源氏物語』には見出せない言葉「庭のやり水」と「花の盃」はどのように解釈できるのだろうか。

「庭のやり水」は、第一系統京都大学本が「にはのやりみつ」。第三系統光源氏一部連歌寄合之事が「にわのやりみつ」。第一系統宮内庁書陵部本、第三系統国文学研究資料館本、第四系統大阪市立大学本が「庭のやり水」。第二系統神戸親和女子大学本と第四系統神宮文庫本が「庭の遣水」となっている。また第一系統国会図書館本では「やりみつ」となっていた。

第一系統京都大学本のこの部分では、

わかきのさくら。にはのやりみつ。にはのくき。松のはしら。いしのはし。竹かき。

これらはすまのいゑゐのしきなり。(仕儀)(注4前掲書、二三頁)

と記されている。「にはのくき」も「にはのやりみつ」同様に、青表紙本や河内本、別本の諸本からは

見出せない言葉である。

また「花の盃」も『小鏡』第一系統京都大学本では、

おなしなみた。雲ゐにひとり。くろこま。こまふる。はなのさかつき。

これらは、中し(中将)やうのおはしたるときの事ともなり。

と記され、これは『源氏物語』での、源氏と三位の中将による

御土器まゐりて、「酔ひの悲しび涙灑ぐ春の盃の裏」ともろ声に誦じたまふ。(須磨卷、二一五頁)

に拠って生じた寄合と考えられる。「花の盃」については、第三系統国文学研究資料館本以外の『小鏡』九本に見出される。第一系統京都大学本と第二系統神戸親和女子大学本では「はなのさかつき」、第三系統都立中央図書館本は「花のさかつき」、第四系統神宮文庫本は「花盞」、大阪市立大学本は「花の盃」と記されている。また、第一系統国会図書館本では「花のさかき(さかつきカ)」と記されている。第一系統宮内庁書陵部本と第三系統光源氏一部連歌寄合之事には「はるのさかづき」、天理図書館本では「春のさかつき」となっていて、物語の「春の盃の裏」に忠実であると言えよう。

物語の須磨卷には登場しない「みちのく紙」については、第三系統光源氏一部連歌寄合之事に「五六まいそかしみちのくのかみ」。第二系統神戸親和女子大学本と第三系統天理図書館本を除く七本には、

「みちのく紙」そのままの形で見出された。「波こしもて」という寄合は存在しない。このように、『源氏物語』本文には見出せない「庭のやり水」「みちのく紙」「花の盃」が、『源氏小鏡』諸本の寄合と一致を見ることは、単なる偶然であるとは考えにくい。

物語には登場しない言葉で、『源氏小鏡』諸本の寄合と一致する聞きの名目は、「須磨香」以外にも複数見られるので、次に挙げてみる。

「夕顔香」の「荒れたる宿」は、物語では末摘花巻と花散里巻にそれぞれ「荒れたる宿」が一例ずつ、濔標巻に「あれたる宿」が一例の合計三例が見られ、夕顔巻には見えない。「蓬生香」にも「あれたる宿」は聞きの名目として登場し、『源氏小鏡』の「ゆふかほ」巻、「よもきふ」巻には、寄合として「あれたるやと」が挙げられている。

また物語の賢木巻では、「浅茅が原もかれがれなる虫の音に」「風いと冷やかに吹きて、松虫の鳴きかしたる声も」という記述はあるが、「むしの声」という言葉は存在しない。『小鏡』諸本「さかき」巻を見ると、第一系統京都大学本、第一系統宮内庁書陵部本、第二系統神戸親和女子大学本に「むしのこゑ」の寄合が見られる。近い言葉として「むしの音」という寄合があるのは、第三系統光源氏一部連歌寄合之事、都立中央図書館本、国文学研究資料館本であり、「松むし」は、第一系統から第四系統の『小鏡』一〇本すべてに登場し、「かれ／＼なるむしの音」が第三系統国文学研究資料館本に一例見られた。

同様に「明石香」の「むかへ船」「追風」「三とせの別」、「初音香」の「五はの松」、「篝火香」の「夕闇」「秋の初風」、「野分香」の「風のとむらひ」、「巻柱香」の「火取りの灰」、「竹川香」の「花の賭物」、「椎本香」の「宇治の中宿」、「早蕨香」の「都へ出ル」、「浮船香」の「泥障敷」「里びたる犬」なども、

『源氏物語』それぞれの巻には、そのままの形では見出せない言葉であるが、『小鏡』諸本には寄合として登場している(21)。

また聞きの名目の中には、『小鏡』の寄合の言葉を分割して成立したと考えられるものもある。「柏木香」の「誰か世」「蒔し種」は『小鏡』の「たか世にまきしたね」(22)を「誰か世」と「蒔し種」に分けたものと考えられる。『小鏡』第一系統京都大学本、第一系統宮内庁書陵部本、第三系統光源氏一部連歌寄合之事、国文学研究資料館本には「たか世にまきしたね」、第一系統国会図書館本では「たか世にか、まきしたね」、第二系統神戸親和女子大学本では「たかよにまきし種」、第三系統都立中央図書館本は「たかよにか、まきしたね」、第四系統神宮文庫本は「誰か世には種まきし」、第四系統大阪市立本は「たか世にか。まきしたね。」とあり、第三系統天理図書館本は寄合にこの言葉が登場していない。第一系統国会図書館本、第三系統都立中央図書館本、第四系統大阪市立大学本それぞれの寄合の段階で、すでに分割の兆しが窺えるようである。

「竹川香」の「碁の勝」「碁の負」も、『小鏡』の「このかちまけ」<sup>(註)</sup>が二つに分割された例ではなからうか。第一系統京都大学本、第一系統国会図書館本は「このかちまけ」、第二系統神戸親和女子大学本は「碁のかちまけ」、第四系統大阪市立大学本も「碁のかちまけ」、第三系統都立中央図書館本に「このせうぶ」、第四系統神宮文庫本も「碁の勝負」、第三系統国文学研究資料館本には「碁。かちまけ。」、第一系統宮内庁書陵部本は「このかけ物」であった。第三系統光源氏一部連歌寄合之事と天理図書館本には地の文に碁打ちのことは記述されるものの、寄合としては登場しない。

また『小鏡』の寄合の一部分を聞きの名目にしたと考えられるものもある。それは「早蕨香」の「古

郷の名残」である。『小鏡』第一系統京都大学本には「こきやうのなこりのおしき心ねを、つけさせ給ふへし。」という記述があり、ここから「古郷の名残」が生まれた可能性があるのではなからうか。第一系統宮内庁書陵部本では「ふる里のなこりおしき心ねをすへし。」、第二系統神戸親和女子大学本は「ふるさとの名残のおしき心ねをつくへし。」、第三系統光源氏一部連歌寄合之事には「ふるさとのなこりおしき心ねを付べし」、都立中央図書館本は「ふるさとのなこりおしき心をつけへし。」、第四系統神宮文庫本では寄合として「古里の名残」が登場し、第一系統国会図書館本と第三系統国文学研究資料館本、第三系統天理図書館本、第四系統大阪市立大学本には該当の記述は見られなかった。

本節では「須磨香」の聞きの名目と『源氏小鏡』の源氏寄合との関連を糸口に、「須磨香」以外でも、『源氏物語』に登場しない言葉や、そのままの形では見出せない言葉を、聞きの名目として使っていること、それらの中には、『源氏小鏡』諸本の寄合と同一のものが存在することを提示した。

では次に、『小鏡』の寄合や「なにがしと、つけへし。」と指示された言葉からではなく、『小鏡』の地の文から生まれたと考えられる聞きの名目を検討したい。したがって、寄合の言葉は省かれていて本文と歌によって綴られる第五系統本（梗概中心本系）、歌を多数増補した第六系統本（和歌中心本）をも含めた一四本の『小鏡』諸本を用いて考察する。

□ 『源氏小鏡』地の文から生れたと考えられる聞きの名目

「須磨香」の「柴の煙」、「明石香」の「只ならぬ身」、「朝顔香」の「いつき」、「神のいかき」、「篝火香」の「夏の遅月」、「巻柱香」の「大姫君」、「浮船香」の「あらはれ文」、「九条わたり」、「こだま」、「小

野の尼」について、『小鏡』諸本の地の文との関連を考えたいと思う。これら聞きの名目は、いずれも『源氏物語』本文や『小鏡』諸本の寄合に見出されない言葉である。

### 1 「須磨香」の「柴の煙」

先に取り上げた須磨香の聞きの名目の内、「柴の煙」は、『源氏物語』には見られない言葉であり、かつ『小鏡』諸本須磨巻の寄合にも登場していない。まず、物語ではこの場面がどのように描かれているかを見ておこう。

煙のいと近く時々立ち来るを、これや海人の塩焼くならむと思しわたるは、おはします背後うしろの山に、柴といふものふすぶるなりけり。(須磨巻、二〇七〜二〇八頁)

次に、この場面の『小鏡』諸本の地の文を次に挙げてみる。

#### 第一系統京都大学本

又、すまに「しは」といふ事は、おはしますうしろのやまにたつけふりを、なにそとたつね給へは、しはといふ物おrikくふるけふりなり。

#### 第一系統宮内庁書陵部本

又、すまに「しは」といふは、ゐたまへるうしろの山に立けふりを、なにそとたつね給へは、しはといふ物ふすふるけふり也。

第一系統国会図書館本

ところは、ゆきひらの中なこん、このうらになかされて、「もしほたれつ」と、よみけん所、ちかき程なれば、うしろの山にたつけふりを、御らんしなれぬ事なれば、「何そ」とたつねたまへは、しはおりくふるなり。

第二系統神戸親和女子大学本

又、すまに、「しは」といふことは、おはしますうしろの山に、たつけふりを、なにそとたつね給へは、しはといふ物、折くふるけふりなりと、御覧しなれず、

第三系統光源氏一部連歌寄合之事

又、しばという物とは、おはしますうしろの山にたつけふり、何そとたつね給へは、しばといふ物を、おりくぶるた木々のけふり也、といふけんしいまた御らんしなれずして、

第三系統都立中央図書館本

うしろの山にけふりたつを、「なにそ」とたつねさせ給へは、「しはといふ物、おりくふるけふりなり」と申。

第三系統国文学研究資料館本

これは、おはしますうしろの山にたつ煙を、「なにそ」ととひ給ふに、「柴といふもの、おりくふる、薪のけふりなり」といふ。

第三系統天理図書館本

又、柴と云物、折くふる。けんし、いまた御らんしたまはず、うしろの山にあたりて、けふり立、

めつらかにおほして、

第四系統神宮文庫本

又、「しは」といふ詞は、後の山に立煙を、何そとたつね給へは、柴といふ物、折くふる煙也。

第四系統大阪市立大学本

又、須磨に、「柴」といふことあり。「うしろの山に立煙」など付へし。

第五系統天理図書館本（伝飛鳥井宋世筆）

「うしろの山にたつけふりは、なにそ」とゝひ給へは、「しはといふ物、おりくふる也」と申せは、御覽しなれすして、御歌あり。

第五系統京都大学本（飛鳥井重雅筆）

うしろの山にたつけふり、何そととひ給ふに、柴やく煙、源氏いまた御覽しなれす、あそはし給ふ。

第五系統天理図書館本（連蔵筆） 該当記述なし。

第六系統京都大学本

該当記述なし。

これらを見ると「しは」と「うしろの山にたつけふり」が繰り返され、第四系統大阪市立大学本では「柴」といふことには、「うしろの山に立煙」など付へし。」と指示している。これらのことから、「しは」と「けふり」を用いて「柴の煙」という聞きの名目が生まれた可能性も考えられるのではなからうか。

2 「明石香」の「只ならぬ身」

まず「明石香」の題材となる場面を確認しておく。迎えの船をよこした入道によって嵐から救い出された源氏が、明石の浦の館に移り、入道の希望を入れて、岡辺の宿に住む入道の娘・明石の君に文を送り、やがて二人は結ばれる。しかし、都の許しがおりて急遽、源氏は帰京することになり、身ごもった明石の君に琴を残して、明石の浦をあとにした。

「只ならぬ身」は懐妊の身をいう婉曲表現であるから、明石の君を指しているわけだが、『源氏物語』の明石巻には「ただならぬ」という言葉は見られず、「ただならず」が四例あり、いずれも明石の君の懐妊をほめかす場面で使われているのではない。一例目の「ただならず」は、紫の上の返歌の書きぶりについての描写、二例目は、都にのこされた紫の上の源氏に寄せるひとかたならぬ思いの深さを、三例目は、入道の娘を源氏に取り持ったいきさつを人々に噂される良清の穏やかならぬ思いを、そしてあと一例は、源氏と再会したものの、明石の君をめぐっての源氏の裏切りを恨む紫の上の描写で、この言葉は使われている。『小鏡』諸本の寄合にも「只ならぬ身」は存在しない。物語本文は明石の君の懐妊をどのように描いているのだろうか。

そのころは夜離れなく語らひたまふ。六月ばかりより心苦しき気色ありて悩みけり。

(明石巻、二六三頁)

では「只ならぬ身」という言葉は、どこから登場してきたのであろうか。『小鏡』諸本の該当部分を挙げて見る。

第一系統京都大学本

さて、このむすめ六月ころより、たゞならずなりたりしを、御らんしをきて、八月にみやこへめしかへされたまふ。

第一系統宮内庁書陵部本

さて、かのむすめ、六月よりたゞならず成しを御らんしおきて、八月にみやこへめし返され給ふ。

第一系統国会図書館本

さて、此ひめ、六月の頃より、たゞならずなりしを、おきて、その年の八月に、みやこへめしかへされ給ふ。

第二系統神戸親和女子大学本

扱このむすめ、六月のころより、たゞならずなりたりしを御覽しをきて、八月に都へめしかへされ給ふ。

第三系統光源氏一部連歌寄合之事

さて、このむすめ、みな月の比よりたゞならずなりたりしを御らんじおきて、げんじ、八月にみやこへめし返し給ふ。

第三系統都立中央図書館本

かのむすめ、六月ころより、たゞならずありしを御らんしをきて、八月にみやこへめしかへされ給ふ。

第三系統国文学研究資料館本

さて此娘、六月の頃より、たゞならず成たりしを御らんして、源氏は八月に都へめしかへされ給ふ。

第三系統天理図書館本

姫君、六月の頃より、たゞならず御らんしをきて、八月、宮こへめしかへされ給ふ。

第四系統神宮文庫本

さて此むすめ、六月の頃より、たゞならずなりしを御覽しおきて、八月に都へめしかへされ給ふ。

第四系統大阪市立大学本

かのむすめ、たゞもなくなり給へは、明石にとゞめをきまいらせて、其御はらに出来給ふ姫宮を、相くして後に、都へめしのほせ給ひて、出来給ふひめ宮をは、源氏の御はからひにて、紫のうへの御子になしまいらせて、つゐに、とうくうの后になしまいらせられけり。

第五系統天理図書館本（伝飛鳥井宋世筆）

かのむすめを、あかしのうへといふ。この御はらに、ひめ君いてき給ふ。

第五系統京都大学本（飛鳥井重雅筆）

さて此姫、六月頃よりたゞならず候へは、入道よろこひ、かきりなく候へは、八月、都よりちよく（勅使）したちけるは、源氏も此姫君に名残おしくおほしめし、

第五系統天理図書館本（連蔵筆）

さて、入道のむすめのはらに、ひめきみ一人うまれたまふ。あかしの中くふとは、これなり。

第六系統京都大学本

さて、御方、はやたゝならず成給ふ。

『小鏡』一四本のうち、第五系統天理図書館本（伝飛鳥井宋世筆）と第五系統天理図書館本（連藏筆）に、「たゝならず」の言葉が見出せなかったが、第四系統大阪市立大学本の「たゝもなくなり給へは」も含めて、一二本の『小鏡』地の文で「たゝならぬ」が明石の君の懐妊を表す言葉として使われていた。『小鏡』地の文の描写が反映しての聞きの名目「只ならぬ身」となったのではなからうか。

### 3 「朝顔香」の「いつき」と「神のいかき」

「朝顔香」は、「見しおりの露わすられぬ朝顔の花のさかりは過やしぬらん」が証歌に据えられた組香で、「いつき・おりゐ・あさがほ・盛り過・加茂・神のいかき・桃菌」が聞きの名目に指定されている。このうち「いつき」と「神のいかき」は、『源氏物語』の朝顔巻では見られない言葉である。物語では、「いかき」は「斎垣」で賢木巻に一例と若菜下巻に一例、「いつき」は「賀茂のいつき」で賢木巻に一例見られる。しかもこの二語は『小鏡』朝顔巻の寄合としても登場していない。

『小鏡』諸本の該当部分を見ると、次のような記述となっている。

#### 第一系統京都大学本

このさいゐん、かものいつきにておはしましゝ。かみのいかきのうちまでも、御心にかけて申しかよはせ給へとも、

#### 第一系統宮内庁書陵部本

此齋院、かものいつきにておはしませし、神のゐかきの内までも、御心にかけて申かよはせ給へとも、

第一系統国会図書館本

此のさいゐんと申は、かものいつきにておはせしを、神のゐかきのうちまでも、御心にかけて申、かよはせ給へとも、

第二系統神戸親和女子大学本

さいゐん、かものいつきにおはしまし、かみのいかきのうちまでも、御心にかけて、申かよはせ給へとも、

第三系統光源氏一部連歌寄合之事

かのさいゐん、かものいつきにておはしまし、時、かみのいがきの中までも、御心にかけて、申かよはせ給へとも、

第三系統都立中央図書館本

此さいゐん、かものいつきにておはします、かみのいかきのなかまでも、御心にかけてかよはせ給へとも、

第三系統国文学研究資料館本

かのさいゐん、賀茂のいつきのみやにておはしまし、時、神のいかきのうちまでも御心かけて申かよはせ給へとも、

第三系統天理図書館本

權のさい院とて式部卿の宮の姫君、加茂のいつきの宮とておはしける、おりゐの後、さきのさい  
んと申。―中略― 此こゝろは、神のゐかきのうちまても、心にかけて給へ供、

第四系統神宮文庫本

此齋院、<sup>(かもカ)</sup>かりに齋に<sup>(マ)</sup>にておはしまし、かみのゐ垣のうち迄も、御心にかけて申かよはせ給へとも、  
第四系統大阪市立大学本

あさかほのさいゐんとて、式部卿の宮の御むすめ、かものいつきにそなはり給ひしか、おりゐさせ  
給ひて、さきのさいゐんとそ申ける。

第五系統天理図書館本（伝飛鳥井宋世筆）

かものさい院にておはしける時、神のゐかきのうちまても御心にかけて申かよはせ給へとも、  
第五系統京都大学本（飛鳥井重雅筆）

あさかほの齋院とて、式部卿の姫君、かものいつきにておはしまし、おりゐさせ給ひて、―中略―  
此齋院を、神のいかきのうちまても、御心にかけて申かよはせ給へとも、

第五系統天理図書館本（連蔵筆）

かものさいいんにたちたまふ。しかるに、しきふきやううせたまへは、さいいんいつきのみやをい  
てゝ、御ふくのほど、もゝそのにすみたまふ。

第六系統京都大学本

賀茂の齋院、おりゐさせ給ぬ。

右のような結果で、第三系統天理図書館本と第四系統大阪市立大学本、第五系統京都大学本（飛鳥井重雅筆）の描写が似ており、第一系統京都大学本から第三系統国文学研究資料館本、そして第四系統神宮文庫本、第五系統天理図書館本（伝飛鳥井宋世筆）の合計九本がほとんど同じ文言であった。寄合としては、第一系統から第四系統の『小鏡』諸本で、「あさかほ」「もゝその」「こころつよき」などが挙げられていた。「いつき」「神のいかき」も、『小鏡』地の文から生まれた聞きの名目と考えられようか。

#### 4 「篝火香」の「夏の遅月」

「篝火香」は「かゝりひに立そふ恋の煙こそ世にはた<sup>本マ</sup>へせぬほのをなりけれ」が証歌に据えられ、琴を枕に、源氏が玉鬘に添い臥す場面が題材の組香である。香組も、試み無しのウ「篝火」を聞き当てると高得点が得られるルールとなっている。聞きの名目は「夕やみ・琴を枕・夏の遅月・たそかれ・玉かつら・秋の初風・源氏・恋の煙・かゝりひ」である。このうち、『源氏物語』本文にも『小鏡』寄合にも見出せない言葉が、「夏の遅月」である。物語では、証歌とされた和歌のすぐ前に源氏の言葉として、

「絶えず人さぶらひて点しつけよ。夏の、月なきほどは、庭の光なき、いとものむつかしく、おぼつかなしや」とのたまふ。（篝火巻、二五七頁）

とあり、この描写から「夏の遅月」が生まれたものかと推測した。しかしここでは「月なきほどは」で、「遅い」の語は見当たらない。では『小鏡』諸本の描写を見てみよう。

第一系統京都大学本

なつの夜の月、をそくいつるころ、御まへに、かゝりひともして、御ことなど、おしへさせ給ひけるときの御うたに、

第一系統宮内庁書陵部本

夏の夜の月おそく出る頃、御まへにかゝり火とほして、ことなどおしへさせ給ふとて、

第一系統国会図書館本

月なきころにて、御まへのやりみつに、かゝりなきも、させ給ひし、此事なり。

第二系統神戸親和女子大学本

夏のよの月なきころ、すこしくもれるけしきに、篝火をともして、御琴などを調させ給ふ。

第三系統光源氏一部連歌寄合之事

なつのよの月おそくいづる比、御まへにかゝりひともして、御ことおしへさせ給ひける時の御歌に、

第三系統都立中央図書館本

なつの夜、月おそくいづるころ、御せん（前）にかゝりひとほして、御ことなど、をしへ給ふとて、

第三系統国文学研究資料館本

夏の夜の月、をそく出るまゝに、御まへにかゝり火をともして、御琴をゝしへさせ給ふ時のうたに、

第三系統天理図書館本

夏の夜の月ほそく出る頃は、御前へかゝり火とほして、御琴をしへ給ふときの歌、

第四系統神宮文庫本

夏の夜の、月おそく出る頃、御前に篝火をともして、御ことを調へさせ給ひけるに、  
第四系統大阪市立大学本

夏の夜の、月ほそく出る頃、御前にかゝり火ともして、物などおしへさせ給ひ、其時の御歌也。

第五系統天理図書館本（伝飛鳥井宋世筆） 該当記述なし。

第五系統京都大学本（飛鳥井重雅筆）

夏頃なれば、夜月おそく、いて給ふに、御前にかゝ火ともして、御ことなどおしへさせ給ふとて、  
第五系統天理図書館本（連蔵筆） 該当記述なし。

第六系統京都大学本

さて、月おそくいづる夜、御まへにかゝりたかせて、琴などをしへたてまつり給ひける時、

夏の夜の月が遅く出る、という記述は、第一系統京都大学本、宮内庁書陵部本、第三系統光源氏一部  
連歌寄合之事、都立中央図書館本、国文学研究資料館本、第四系統神宮文庫本、第五系統京都大学本  
（飛鳥井重雅筆）、第六系統京都大学本の八本に見られた。第三系統天理図書館本と第四系統大阪市立  
大学本の「月ほそく出る頃」の記述は、書写本ゆえの誤写の可能性もあるのではなからうか。

いずれにしても、八本の『小鏡』に共通する「夏の夜の月おそく」から、「夏の遅月」という聞きの名  
目が生じた可能性が考えられる。

## 5 「巻柱香」の「大姫君」

「巻柱香」は、玉鬘のもとに出かけようとしていた鬚黒に、北の方が突然錯乱して火取の灰を浴びせかける事件が題材である。香組は三炷香と同じであるが、試みなしの三種の香を五包ずつ用意し、打ちまぜた後、三包ずつ五度聞くという、かなり難しい組香である。

聞きの名目は「ものゝけ・火とりの灰・ひげくろ・大姫君・巻柱の君」で、大姫君の語が誰を指すのかが不審であった。またこの事件の場面では巻柱（『源氏物語』では真木柱）は登場しないので、聞きの名目に「巻柱」が並ぶのは唐突な感じもする。物語巻名由来の、鬚黒の邸を去るにあたっての真木柱の詠歌の場面ではなく、組香ゆえに、「火取りの灰」が登場するドラマティックな場面が選ばれたと言えようか。ところが、物語の真木柱巻には「大姫君」は見当たらない。貴人の長女を意味する「大姫君」という言葉が登場するのは、匂兵部卿巻である。

大殿の御むすめは、いとあまたものしたまふ。大姫君は春宮に参りたまひて、

（匂兵部卿巻、一九頁）

ここでの大姫君とは夕霧の娘をさしている。貴人の娘ということならば、真木柱、そして式部卿の娘である鬚黒の北の方も該当者となりうる。すでに「巻柱」は聞きの名目に登場しているので、ここでは、鬚黒の北の方を指しているであろうか。『小鏡』諸本の記述から、誰のことであるかがわかった。

第一系統京都大学本

むらさきのうへには、へち別腹はらの御あね、しき式部卿ふきやうのみやの大ひめきみにて、

第一系統宮内庁書陵部本

紫のうへにはへちはらの御あね、しきふ卿のひめ君にて、

第一系統国会図書館本

御おや、むらさきのうへのちゝ兵部卿の宮也。この北の方、むらさきのうへにも御あねそかし。

第二系統神戸親和女子大学本

むらさきの上には、別腹の御あね、式部卿の宮の大ひめ君にて、

第三系統光源氏一部連歌寄合之事

むらさきの上には、べつふくの御あね、しきぶきやうの宮のおふひめぎみにて、

第三系統都立中央図書館本

むらさきのうへのへつはらの御あね也。しきふきやうのひめきみにて、

第三系統国文学研究資料館本

もとの北のかたは、しきふ卿の宮の姫君にて、むらさきのうへの御ためには、はらかはりの御あねなり。

第三系統天理図書館本 該当記述なし。

第四系統神宮文庫本

紫の上には、別腹の御姉、式部の四の宮の姫君にて、

第四系統大阪市立大学本 該当箇所なし。

第五系統天理図書館（伝飛鳥井宋世筆） 該当記述なし。

第五系統京都大学本（飛鳥井重雅筆） 該当記述なし。

第五系統天理図書館本（連藏筆）

このまきはしらのむすめのはは、むらさきのうへの御あねなり。

第六系統京都大学本 該当箇所なし。

第一系統京都大学本と第二系統神戸親和女子大学本に「大ひめきみ」、第三系統光源氏一部連歌寄合之事に「おふひめきみ」の言葉があり、式部卿の娘で紫の上の腹違いの姉である、鬚黒の北の方を指していることがわかった。北の方は式部卿の長女であるので、第四系統神宮文庫本での「式部の四の宮の姫君にて」は誤りである。いずれにしても、「大姫君」が聞きの名目に採用されたのは、地の文にこの言葉があったからこそで、『小鏡』享受の明らかな例とも言えるのではなからうか。

## 6 「浮船香」の「あらはれ文」「九条わたり」「こたま」「小野の尼」

「浮船香」は香組（組香のテーマに沿って、香りでその情趣をよりよく表現するための香木の選択や組合せのこと）に物語が反映されていて、趣き深い組香である。まず「浮船香」の記述から紐解こう。

（傍線部・\*は筆者による。）

一 二 三 三包つゝ、試あり。ウ 三包、試なし。  
 右十二包打合、二包つゝむすひ合、二炷きゝ也。かほる方、匂ふ宮方両方へわかる。  
 二炷の組合の名目、両方の記録かはる也。

かほる方

- |    |     |    |      |    |        |
|----|-----|----|------|----|--------|
| 一一 | 宇治橋 | 二一 | なかき契 | 三一 | 絶せしを   |
| 一二 | 浪越る | 二二 | 末の松  | 三二 | 待らんとのみ |
| 一三 | 左近* | 二三 | 薫の使  | 三三 | 家作りする  |

匂宮方

- |    |       |    |       |    |       |
|----|-------|----|-------|----|-------|
| 一一 | 年ふとも  | 二一 | あらはれ文 | 三一 | 侍従    |
| 一二 | かはらん物 | 二二 | 泥障敷   | 三二 | 宮の使   |
| 一三 | 橋の小嶋  | 二三 | 里ひたる犬 | 三三 | 九条わたり |

両方ともに同じ名目

- |    |    |    |      |
|----|----|----|------|
| ウ一 | ウ二 | ウ三 | 浮船   |
| 一ウ | 二ウ | 三ウ | こたま  |
| ウウ |    |    | 小野の尼 |

かほる

宇治橋のなかき契りは絶せしをあやふむかたに心さわくな

匂ふみや

年ふともかはらん物かたちはなの小嶋かさきにちきる心は

試有りの三種の香九包と、試み無しの一種香三包の計一二包を、打ちませた後、二包ずつむすび合せ、二炷聞きを六回行う。連衆は、かほる方と匂ふ宮方にわかれて勝負していく。物語に沿って、かほる、匂ふ宮それぞれに相応しい聞きの名目が設定されていて、筋立てを追いながら、聞香が楽しめる仕組みになっている。

まずここで注目したいのは、証歌に据えられたかほるの歌である。この歌は現行の『源氏物語』では、次のようになっている。

宇治橋の長きちぎりは朽ちせじをあやぶむかたに心さわぐな

(浮舟卷、一四五―一四六頁、傍線部は筆者による)

これは青表紙本に拠るものなので、三句目が証歌のそれとは異なっている。このことについて、伊井春樹は次のように指摘している。

『小鏡』は当初別本の源氏物語によって作成された。というのは『小鏡』の作者が所持したのは別本であり、それによってダイジェスト化したというのである。それは第一系統本に引用された和歌が、別本の異文を持っているのによって容易に知ることができる。

うぢばしのながきちぎりはたえせじをあやぶむかたにこゝろさはぐな（浮舟一八八八七）とある「たえせじ」の箇所が、改訂本系では「くちせじ」と青表紙本に訂正されているが、異文の方は別本の高松宮家本・陽明家本・国冬本に一致する。（注2前掲書、八四一〜八四二頁）

したがって、「浮船香」の証歌も別本の異文を持つものをテキストとして用いた結果であり、既に指摘した「箒木香」証歌のことも照らし合わせると、「源氏千種香」考案に際し、古本系『小鏡』が介在した可能性を考えざるをえない。

第一系統京都大学本、国会図書館本、第四系統神宮文庫本は「うちはしのなかきちぎりはたえせしとあやぶむかたに心さはくな」。第三系統光源氏一部連歌寄合之事、都立中央図書館本、天理図書館本、第四系統大阪市立本は「うちはしのなかきちぎりはたえせしをあやぶむかたにこゝろさはくな」。第五系統天理図書館本（伝飛鳥井宋世筆）は「うち橋のなかき契りはたえにしをあやぶむかたに心さわくな」。第二系統神戸親和女子大学本と第三系統国文学研究資料館本は「宇治橋のなかきちぎりはくちせしをあやぶむかたにこゝろさはくな」。第六系統京都大学本は「あやぶむかたに心さわくな」と脇に朱書つきで「宇治橋の長き契は絶せしを朽せぬものと猶たのめとや」とある。なお、第一系統宮内庁書陵部本、第五系統京都大学本（飛鳥井重雅筆）、天理図書館本（連蔵筆）には該当和歌の記述はない。

では聞きの名目を見ていこう。かほる方の「浪越ゆる」「末の松」「待つらんとのみ」は、薫の詠歌

波こゆるころとも知らず末の末待つらんとのみ思ひけるかな

(浮舟巻、一七六―一七七頁)

による。

「左近」(『香道蘭之園』宮内庁書陵部本及び国会図書館本)は、浮舟の乳母子「右近」の間違いと考えられる。匂宮方の「侍従」も「右近」とともに浮舟に近侍する者である。匂宮びいきの侍従に対して薫の長所を認め、薫と匂宮の間で苦悩する浮舟を慰めつつも戒める「右近」をかほる方の聞きの名目に、薫よりも匂宮に心ひかれ、匂宮の従者時方とも親しくなる「侍従」を匂宮方の聞きの名目に据えるところは、気が利いていて面白い。

「薫の使」「宮の使」は物語に見られない言葉であるが、『小鏡』の「大将のつかひと、みやの御使と、たひ／＼行あひしかは」によるものと考えられる。「家作りする」も『源氏物語』本文には見られない言葉である。これも『小鏡』諸本の「殿つくり給ふ」や「いそきむかへ奉らんと、つくろひたまふ」「家をつくり給ふ」に拠ろうか。

では「あらはれ文」「九条わたり」「こたま」「小野の尼」について見ていこう。

「あらはれ文」は、薫、匂宮、双方の従者のはち合せに始まる、密事露見の鍵となる浮舟の手紙のことであり、それは大内記の手を経て、匂宮が読みふける「赤き色紙のいときよらなる」(浮舟巻、一七三頁)文のことである。物語に「あらはれ文」の言葉はなく、『小鏡』の寄合には、「あらはるゝ心」はあるが「あらはれ文」はない。しかしこの「あらはるゝ心」の前に次のような文言がある。

第一系統京都大学本

みやの御つかひの、あらはれしおりの文の色は、さくらにつけて、あかきしきしなり。

第一系統宮内庁書陵部本 該当記述なし。

第一系統国会図書館本

宮の御使あらはれし文の色かみ、さくらに付けて、あかきれうし(料紙)なり。

第二系統神戸親和女子大学本

宮の御つかひの、あらはれしおりの文の色は、さくらに付て、あかきしきし也。

第三系統光源氏一部連歌寄合之事

みやの御つかひの、あらわれしよりふみのいろは、さくらにつけて、あかき色かみ也。

第三系統都立中央図書館本

みやのつかひ、あらはれしおりの文のかみのいろは、さくらにつけて、あかきかみなり。

第三系統国文学研究資料館本

宮の御つかひ、あらはれし文の色は、桜につけて、あかきしきしなり。

第三系統天理図書館本

宮の使のあらはるゝより、其み(いろ)やは、さくら、あかき色のかみ也。

第四系統神宮文庫本

宮の御つかひのあらはれし折のふみの色は、赤(料紙)きれうし、桜に付し也。

第四系統大阪市立大学本 該当記述なし。

第五系統天理図書館（伝飛鳥井宋世筆）

みやのつかひのあらはれそめし折の文は、さくらにつけて、かみの色あかきしきしなり。

第五系統京都大学本（飛鳥井重雅筆） 該当記述なし。

第五系統天理図書館本（連蔵筆） 該当記述なし。

第六系統京都大学本 該当記述なし。

右のように「あらはれしおりの文」「あらはれし文」「あらはれそめし折の文」と小異はあるが、これらが「あらはれ文」の由来ではなからうか。宮の御使が現れたことと、文によって秘密が露見したこと。この二つの意味をもたせる、所謂、掛詞の機能を果たしているとも言えよう。

次に「九条わたり」について考えてみる。物語本文では、薫の浮舟引き取りに、先手を打ちたい匂宮が、隠れ家を画策する場面で、

わが御乳母の遠き受領の妻にて下る家、下つ方にあるを、「いと忍びたる人、しばし隠いたらむ」と語らひたまひければ、いかなる人にかはと思へど、大事と思したるにかたじけなければ、「さらば」と聞こえけり。

（浮舟巻、一六三頁）

の記述があるが、ここでは「御乳母の、遠国の受領の妻となって下国する者の家が下京にあるので」ということで、「九条わたり」の言葉は登場していない。しかし、『小鏡』諸本を見ると次のような記述が

ある。

第一系統京都大学本

みやは、「それよりさきに、むかへとりて御心のまゝに」と、おほして、御めのとのいゑ、九てうわ(条)たりにあるところへ、うつろはせなど、人しれずかまへ給へは、

第一系統宮内庁書陵部本

みやは又、そえよりさきにむかへとらんと、こしらへ給ふを、

第一系統国会図書館本

宮は、それよりさきにむかへとりて、心のまゝにとおほして、「御めのとのいゑ、九条あたりに有所へうつろはん」など、人しれずかまへ給へは、

第二系統神戸親和女子大学本

宮は、「それよりさきにむかへとりて、御心のまゝに」とおほして、御めのとのいゑ、九条あたりなる所へうつろはせなどと、人しれずかまへ給へは、

第三系統光源氏一部連歌寄合之事

みやわ、それよりさきに、むかへとりて心のまゝに、と思して、御めのとのいへ、九でうわたりにある所へ、うつろはせなどして、人しれずかまへ給へは、

第三系統都立中央図書館本

宮は、「それよりさきにむかへとりて、御心のまゝに」とおほしめし、御めのとのいへ、九条わたりにある所へうつろはせたてまつらんと、人しれずかまへ給へは、

第三系統国文学研究資料館本

宮は、「それよりさきにむかへとりて、御心のまゝにも」とおほして、御めのとの家、九条わたりにある所へうつろはせなんと、人しれすかまへ給ふ。

第三系統天理図書館本

宮は、それよりさきにむかひとりて、心のまゝにとおほしめして、「御めのとの家ゐ九条わたりに有所へ。」として、人しれすかまへ給へは、

第四系統神宮文庫本

宮は、「それより先にむかへとりて、御心のまゝに」と思召て、御めのとの家、九条わたりにある所へ移ろはせなと、ひとしれすかまへ給ふ。

第四系統大阪市立大学本 該当記述なし。

第五系統天理図書館（伝飛鳥井宋世筆）

みやの御かたよりは、それよりさきにむかへとりて御心のまゝにとあり。

第五系統京都大学本（飛鳥井重雅筆） 該当記述なし。

第五系統天理図書館本（連蔵筆） 該当記述なし。

第六系統京都大学本

宮の御方より、それよりさきに忍ひとらせ給ひ、御めのとの家、九条わたりにある所に移し給ひ、人しれすませ給へは、

右のように、該当記述のないものを除いて、第一系統宮内庁書陵部本と第五系統天理図書館本（伝飛鳥井宋世筆）以外の諸本九本に「九条わたり」の言葉があった。物語での「下つ方」が「九条わたり」と具体性を帯びた原因の所在は、これらの記述に拠ったものと考えられる。

では最後に、「こたま」と「小野の尼」について見てみよう。

『源氏物語』本文で「こたま」は、蓬生巻の末摘花が住む常陸の宮邸の荒廃ぶりに一例、手習巻で見される浮舟の描写に三例、夢浮橋巻で、薫に浮舟発見時の様子を語る僧都の言葉に一例、計五例がある。浮舟をめぐる描写での「こたま」は、いずれも手習巻以降の登場である。「小野の尼」という言葉は物語には見られず、「小野にはべりつる尼ども」が手習巻（三四六頁）にある。地名を指す用例での「小野」は、夕霧巻に三例、手習巻に二例、夢浮橋巻に二例。「こたま」「小野の尼」ともに浮舟巻には見られない言葉である。

『小鏡』諸本では、この二語はどこで登場してくるのであろうか。

第五系統京都大学本（飛鳥井重雅筆）を除く一三本の『小鏡』は、浮舟巻の後半に、浮舟入水の間を描き、浮舟は「こたま」に誑かされ攫われ（第一系統宮内庁書陵部本に「こたま」に攫われたの文言はない）、平等院のうしろの大きな木のもと（うしろ戸、としているものもある・第四系統大阪市立大学本）に捨てられていたのを、初瀬詣での帰途、平等院に宿泊していた「小野の尼」に助けられ、小野の庵に連れていかれその後、出家した、と記述している。

第五系統京都大学本（飛鳥井重雅筆）の浮舟巻は、他の一三本の『小鏡』に比べ話が短く、次のような内容である。中の君に寄せた新年の挨拶の文面から、匂宮に居所を知られた浮舟が、薫をよそおい宇

治を訪れた匂宮に強引に奪われる。その事実には苦慮する右近であるが、一夜明けても匂宮は帰らない。翌々朝ようやく、名残を惜しみつつ京へ帰る匂宮と浮舟の間で交わされる和歌の記述で終わっている。

『源氏物語』本文では、浮舟入水の場面は、小野の庵で介抱され意識を回復した浮舟が、失踪前後のことを回想する手習巻にあり、浮舟発見の場面も、回想場面に先立つ手習巻で描かれている。また物語では「宇治院」とされ、「平等院」とは書かれていない。ともあれ、第五系統京都大学本（飛鳥井重雅筆）以外の一三本の『小鏡』浮舟巻が、『源氏物語』手習巻の話を先取りする構成になっている。手習香を待たずして、浮船香の聞きの名目に「こたま」と「小野の尼」が登場することと関係があると考えられる。因みに手習香の聞きの名目は「小野・山里・引板の音・軒の紅梅・手習の君」であり、全て物語本文に見られる語である。

以上、物語本文や『小鏡』諸本の寄合に見出されない言葉で、『小鏡』地の文との関係が窺える十例の聞きの名目を検討した。

### 第二節のまとめ―「源氏千種香」聞きの名目と『源氏小鏡』諸本の関係の整理―

Ⅱで「須磨香」を中心に、聞きの名目と『小鏡』諸本の寄合との関連を提示し、Ⅲでは、『小鏡』地の文から生まれたと考えられる一〇例の聞きの名目を検討した。その結果明らかになったことをまとめてみる。

一、「源氏千種香」では、四一の組香で聞きの名目が指定されている。その聞きの名目は、巻名に拠る

もの、物語の登場人物に拠るもの、証歌に因んだもの、『源氏物語』本文から採られたものなどがある。物語の和歌を典拠としながらも名詞化されたもの、物語内容に則しながら、五語ないし七語にまとめられたものなど様々である。そして、それらの中には、『源氏小鏡』諸本の寄合と同一のものが存在している。寄合の言葉が物語の進行に従って並べられているのと同様に、聞きの名目もほぼ時系列に並んでいる。

二、『源氏物語』本文には見られない言葉や、そのままの形では見出せない言葉が、聞きの名目として使われ、それらの中にも『源氏小鏡』諸本の寄合と同一のものが存在している。

三、『小鏡』の寄合の言葉を分割して生まれたと考えられる聞きの名目や、寄合の言葉の一部分を聞きの名目にしたと考えられるものがある。

四、『小鏡』諸本の寄合や「なにがしと、つけへし。」と指示された言葉からではなく、『小鏡』の地の文から生まれたと考えられる聞きの名目が複数存在する。

資料6【「源氏千種香」の記述と『源氏小鏡』諸本との関係】に見る通り、本節でとりあげた一〇例において「源氏千種香」と一致するのは、『源氏小鏡』諸本集成』所収の『源氏小鏡』のうちでは、第一系統（古本系）京都大学本のみであった。但し「浮船香」証歌が「絶えせしと」（傍線は筆者による）になっていた。第一系統（古本系）京都大学本に次いでは、第四系統（簡略本系）神宮文庫本が近いが、これも「浮船香」証歌が「絶えせしと」になっていた。これらは単純な誤写として処理できるとしても、神宮文庫本には「卷柱香」の聞きの名目の根拠と考えられる「大姫君」の言葉がなく、「式部の四の宮の姫君」とされている記述は無視できない。

おわりに

『源氏物語』と異なる点を持つ巻順、「筥木香」証歌、「玉葛香」衣配り、「梅枝香」薫物合、「若菜香下」女楽の全てにおいて、第四系統神宮文庫本は、小異はあるものの、全く異なる項目や当該の記述を欠く項目を含まない点で、第一系統京都大学本の次点であった。しかし神宮文庫本の「筥木香」証歌の「その色や」は単純な誤写としても、「玉葛香」の「柳」と「柳うら」の相違がある点で、「源氏千種香」の依拠本と想定するにふさわしいとは言えなかった。

なお、『源氏小鏡』諸本集成』で、『古典文庫 良基連歌論集三』に一本が翻刻されているため省略された第三系統（増補本系）第一類『光源氏一部連歌寄合之事』（『古典文庫』所収本）によれば、「柴の煙」から「小野の尼」の一〇例ともに、古本系京都大学本と一致した。

しかしこれも、「梅枝香」薫物合の記述が不完全であるので、やはり「源氏千種香」の依拠本にはない。

以上の例のみによって、古本系京都大学本の系統を「源氏千種香」の依拠本と断言するのは飛躍があるとしても、それに近いものを用いたかという見当づけは可能である。具体的な依拠本を絞り込むことは今後の課題として残るにせよ、現在と異なり誰もが容易に『源氏物語』の原典を目にすることはできなかつたであろうことや、中世・近世を通じて盛んに作られた『源氏物語』の梗概書の中で、『源氏小鏡』は特に多く愛読されたらしく、加えて香に関わった人には連歌の人が多かったことに鑑みると、『源氏物語』原典から直接「源氏千種香」が考案されたのではなく、そこに梗概書そして連歌の教則本とし

ても機能した『源氏小鏡』の介在があった可能性は十分あろう。

また『小鏡』地の文から生まれたと考えられる聞きの名目の存在については、聞きの名目成立までに源氏寄合が展開していったのと同様な過程を踏んだのではないかと考えた。

寺本直彦「源氏寄合」(23)に拠れば、

源氏寄合も源氏の和歌を本歌とするものがまず見られるのであり、連歌の寄合が和歌の本歌取と相似た性格をもつことが見出される。

とし、それがさらに、(同書、四八五頁)、

和歌の本歌取が、和歌を中心とする場面の詞句、ひいては和歌を離れた地の文に及んでいく現象は、連歌寄合にもいつそう自由に見られる。

と記している。

「源氏千種香」の聞きの名目には『小鏡』と同一のものもあれば、『小鏡』の地の文から考案された可能性のあるものもあった。「源氏千種香」の聞きの名目の多くが、『源氏小鏡』の源氏寄合から撰取されたとして、それは受動的かつ消極的な『小鏡』享受であり、さらに『小鏡』地の文から取り入れた言葉を使って、新たな聞きの名目を生み出したのならば、それは能動的で積極的な『小鏡』享受と言える

のではなからうか。それら聞きの名目は、物語の主題に関わる重要な場面だけでなく、派生的な枝葉とも言える場面をも髣髴とさせる言葉であり、物語理解を深め、聞香に文学的情趣を付与し、連歌寄合同様に、連衆一座の共通理解の基盤となる機能を果たしていると考えられる。

「源氏千種香」が『源氏小鏡』古本系京都大学本系統かそれに近い本を使って考案されたとするならば、「源氏千種香」の原型は、『源氏小鏡』が版本によって読まれるようになる以前、室町時代には出来上がっていた、という推測もできるのではなからうか。

伊井春樹は、

『源氏小鏡』は当初連歌用書の機能を持った書として出現したはずだが、読者の方は卷々の内容を知るダイジェスト版として多分に享受していった。(注2前掲書、九八一頁)

と述べている。もしも『源氏小鏡』が「源氏千種香」の典拠として機能したのだとすれば、それは香という知的遊戯世界での『源氏小鏡』享受であり、源氏文化の世俗化への一役を担ったと言えよう。

注(第二部第四章)

1 宗祇、牡丹花肖柏、三条西実隆、村田珠光など。

2 伊井春樹が『源氏物語注釈史の研究 室町前期』(桜楓社、一九八〇年)「第二部 中世源氏学の周辺領域第一章『源氏小鏡』の成立と影響」の第二節の「要旨」(八二九頁)で、

『小鏡』の原初形態はおよそ百十数余の歌を持つ本文だったと思われるが(第一系統本、古本系)、室町中期になって青表紙本により全面的に異文が正され、歌や本文も増補された(第二系統本、改訂本)。これが江戸期になっては各種の版本として流布することになる。このほか古本系からの派生本として、第三系統本(増補本)・第四系統本(簡略本)・第五系統本(梗概中心本)・第六系統本(和歌中心本)に分類することができるとができる。

とし、第二節の本文、終盤(八七八頁)においては、

現存本は古本系に位置づけられた『小鏡』が原初形態であり、他の系統本はそれから派生していると認定することができるであろう。

と述べ、さらに第二節の注(3)(八八〇頁)において、第一系統(古本系)第一類 京都大学本の伝承筆者・持明院基春について、次のように判断している。

古本系諸本において、基春本は古形を保ち信頼するに足る善本だと思っている。持明院基春は基信の二男、

天文四年（一五三五）七月美濃で没した。八十三歳（公卿補任）。当時の文化人として和歌・連歌を嗜み（新撰菟玖波集に二句入集）、多くの本を書写もしている。『源氏物語』関係については、『口伝抄』（宮内庁書陵部蔵）・『仙源抄』（京都大学図書館蔵・天理図書館蔵）などの識語にその名が見える。この指摘をもとに、岩坪健は、『源氏小鏡』諸本集成（注4後掲）の解題（七六八頁）で、この古本系京都大学本について、

その底本（京都大学附属図書館蔵）の書写年代は、おおよそ基春が活躍した頃と見てよからう。と論じている。

3 ほかにも国立国会図書館蔵本と宮内庁書陵部蔵本の別写本を参照したが、本稿の論述に影響するような内容の異同はない。

4 岩坪健編『研究叢書325 『源氏小鏡』諸本集成』（和泉書院、二〇〇五年）。

5 「光源氏一部連歌寄合之事」は、『源氏小鏡』第三系統（増補本系）第一類にあたり、『古典文庫 第九十二冊 良基連歌論集三』（校者・岡見正雄、一九五五年）に翻刻・収載されているので、前掲注4同書では省略されている。

6 『新編日本古典文学全集 源氏物語①～⑥』（小学館、一九九四～一九九八年）。

7 関屋巻に関して「関屋香」と「盤物関屋香」があるので、「源氏千種香」の実際の組香数は五三となる。また「紅葉賀香」には「盤物にてなす時は舞楽香を用ゆ」とあり、『香道蘭之園』四巻に「舞楽香」がある。この

組香は「花宴」と「紅葉賀」両巻の内容を合せて考案された組香で、春秋優劣論を踏まえた香組である。本稿では、八・九巻所載の「源氏千種香」を研究対象としたので、今回は触れない。

8香の聞きに従い、碁石（空蟬香）や絵（絵合香）を取り合う、花（胡蝶香）や鳥（御幸香）を人形に持たせる、御簾を巻き上げる（橋姫香）、短冊を交わす（漂漉香、関屋香盤物）など。

9「箒木香」では、主題となる「箒木」と名付けた香だけを聞き、あとは聞き捨てる。亡き藤壺への追慕が主題の「薄雲香」や紫の上の死を捉えた「御法香」、罪におのき亡くなる柏木とその幼子が主題となる「柏木香」でも、香りを聞き捨てている。また「椎本香」では、宇治八宮の出家と遷化による姫君たちとの別れを、聞き捨てと捨て香で表現し、「手習香」でも香を捨てることで浮船の不在を描出している。さらに「東屋香」では、捨て香が何であったかを考えるという趣向で、隠れ家に居る浮船を訪う薫に相応しい演出である。

10なお『源氏小鏡』の巻の順序が、古本系をはじめ多くの伝本で現行と異なり、一部の伝本では現行と一致することについては、伊井春樹（注3前掲書、八〇二〜三頁）が、

『小鏡』の依拠した『源氏物語』本文が別本であったことは、巻序や引用された歌・詞などによって明らかである。ところが後世いく人もの手を経ることによって、歌や本文が増補されたり、別本の異文が青表紙本によって訂正されるなど次第に変貌していった。

と述べている。

11 稲賀敬二『『源氏物語』とその享受資料』（笠間書院、二〇〇七年）。

12 なお第三句が、「箒木香」では「名のうきに」と記されており、第四系統大阪市立大学本の「名のうきに」と一致しているが、大阪市立大学本が「源氏千種香」の依拠本ではありえないことは、後で取り上げる「梅枝香」および「若菜香下」において、「源氏千種香」に対応する記述を欠いていることから明らかである。「さ」と「き」はしばしば誤写を起しやうい文字であり、共通の誤写による偶然の一致と考えられる。

13 尾崎左永子・薫遊舎『増補改訂版 香道蘭之園』（淡交社、二〇一三年、三三〇頁）「玉葛香」翻刻では、「かいねり」となっているが、本稿の底本とした宮内庁書陵部所蔵御所本（一六三・八八五）では「おちちくり」、宮内庁書陵部所蔵の別写本（二〇七・一五七）では「ほちちり」となっている。おそらく三本ともに「おちくり」の間違いであろうと考えられる。

14 これは、注4前掲書所収の諸本のうちでは、第五系統天理図書館本（二本）・第六系統京都大学本を除くすべての本に見られ、注5前掲書にも見られる。

15 十二世紀に集成された薫物の史料で、藤原定長（寂蓮法師・一一三九？～一二〇二）の撰とも言われる。『群書類従』遊戯部所収『薫集類抄』上の末文（『群書類従』第十九輯、五四一頁）には、「刑部卿範兼卿奉勅抄集之也」とあり、また『薫集類抄』下の末文（同書、五六一頁）には「右薫集類抄以寂蓮法師真跡転写」とあり、作者は特定できない、と考えられる。

16 注13前掲書、三四九頁の「梅枝香」の解説にも、「黒方は本来「冬の香」であるから、冬の町に住み「冬の御方」とよばれる明石上の作ったものとするこの組香の配慮も、故のないものではない。」と記されている。

17 仁明天皇と八条宮本康親王（仁明天皇第七皇子）は親子であり、源公忠朝臣は朱雀院に仕えていた人で、三十六歌仙の一人でもある。また彼の母・滋野直子は、『薫集類抄』上に「此二者不伝男。是承和仰事也。延喜六年二月三日。典侍滋野直子朝臣所献也。」とある（注15前掲書、五三〇頁）。

18 喜撰法師の和歌については、『古今和歌集』入集の「わがいはは宮このたつみしかぞすむ世をうち山と人はいふなり」（九八三番）の他に、玉葉集「このまよりみゆるは谷の蛸かもしさりにあまの海へゆくかも」（四〇〇番）も喜撰法師の作とされている。

「この歌とても、すでに東常縁の『東野州聞書』で疑問視しており、喜撰法師作を疑う人が多い。」

（山下正治「喜撰法師考」『立正大学 国語国文』第24号、一九八八年三月、七五頁）

「わがいはは」の歌一首が『古今和歌集』に入集していることが、「一首だけ遺されている」という通俗的理  
解につながったものと推測される。

19 花散里香では、試み有りの香が客香・ウとなっているが、これは異例のことであり、通常は、試み無しの香が客香・ウとされる。この点がこの組香の誤解されやすい所でもある。

20 第五系統（梗概中心本系）京都大学本（伝飛鳥井重雅筆）「関屋」には「寄合」の言葉が残されている部分があり（岩坪健編『源氏小鏡』諸本集成、六七〇頁）、また「寄合」の言葉は記されないまでも、「賢木」には「あかぬ別の心を、伊勢の事によそへて付べし」（同書、六六六頁）といった、付合の心得を説く箇所も見出される。この点については、伊井春樹が前掲注2同書八七三頁で指摘している。

21 『源氏物語』明石巻には「むかへ」「御むかへ」が各一例、「追風」の言葉はなく、「三年」が一例ある。初音

巻には「五葉の枝」とあり、篝火巻に「夕闇」はない。「夕闇」の語が登場するのは空蟬巻、蛩巻に各一例。

また篝火巻では「秋になりぬ。初風涼しく吹き出でて」とあるが「秋の初風」はない。野分巻でも「端の方に突いゐたまひて、風の騒ぎばかりをとぶらひたまひて、つれなく立ち帰りたまふ。」とあるが、「風のとむらひ」の語はない。真木柱巻には「火取り」二例、「御火取」が一例。竹川巻には「桜の賭け物」が一例。

「宇治の中宿」は、椎本巻には「宇治のわたりの御中宿のゆかしさに」で登場。早蕨巻に「都へ出ル」はない。浮舟巻では「障泥といふものを敷きて下ろしたてまつる。」「里びたる声したる犬どもの出て来てののしるもいと恐ろしく」とある。

22 柏木巻の源氏の詠歌「誰が世にか種はまきしと人間はばいか岩根の松はこたへむ」から寄合が生まれたものと察せられる。

23 寺本直彦『源氏物語受容史論考』（風間書房、一九七〇年）四七九頁。

『源氏小鏡』資料1・2・3の凡例

\*表中の番号は各々、左記の『源氏小鏡』に対応する。

1～4、6～14は岩坪健編『研究叢書』325『源氏小鏡』諸本集成』収録  
5は、『古典文庫 良基連歌集三』所収本

- 1 第一系統 (古本系) 第一類 京都大学本 (伝持明院基春筆)
- 2 第一系統 (古本系) 第二類 宮内庁書陵部本
- 3 第一系統 (古本系) 第四類 国会図書館本 (古活字版)
- 4 第二系統 (改訂本系) 第二類 神戸親和女子大学本
- 5 第三系統 (増補本系) 第一類 光源氏一部源氏寄合之事
- 6 第三系統 (増補本系) 第二類 都立中央図書館本 (三井寺聖護院系統)
- 7 第三系統 (増補本系) 第二類 国文学研究資料館本 (道安系統)
- 8 第三系統 (増補本系) 第三類 天理図書館本
- 9 第四系統 (簡略本系) 神宮文庫本
- 10 第四系統 (簡略本系) 大阪市立大学本
- 11 第五系統 (梗概中心本系) 天理図書館本 (伝飛鳥井宋世筆)
- 12 第五系統 (梗概中心本系) 京都大学本 (飛鳥井重雅筆)
- 13 第五系統 (梗概中心本系) 天理図書館本 (連藏筆)
- 14 第六系統 (和歌中心本系) 京都大学本

空蟬の尼	末摘花	花散里	明石の御方	玉鬘	明石の姫君	紫の上	
くちなし色	やなき	はなた	しろき	くれなゐ	こうはい	あか	1
くちは	やなき色	花た		しろき	こうはい	あかつき色	2
くちなし色	やなきうら	はなた色のきぬ			しろき小袖	あかいろのきぬ	3
		あさはなたのかいふのもん、をりさまなまめきたれと、にほひやかならぬに、いとこきかいねりくして		くもりなく赤き山ふきの花のをりものも、ほそなか	さくらのほそなかに、つやゝかなるかいねり取そへて	紅梅のいといたく、もんうきたるに、ゑひそめの御こうちきいまやう色のすくれたる	4
くちなし色	やなきいろ	花だ	しろききぬ	くれなひ	こうばい	あか色	5
くちなし色	柳色	はなた色	しろききぬ	くれなゐ	こうはい	あかき色	7
くちなし色	やなき色	はなた	あさはなたの色	くれない	こうはい	こうはいのもん、いとからめきたるゑひ染めのこうちき、いまやう色のすくれたる	8

空蟬の尻	末摘花	花散里	明石の御方	玉鬘	明石の姫君	紫の上	
くちなし色	柳うら	花田色	しろき色	紅	紅梅	あか色	9
くちなし色	柳色	はなた	しろき	紅	こうはい	赤色	10
くちなし色	柳色	はなた色	色 <small>（白きいろカ）</small> きいろのきぬ	紅	こうはいのきぬ	あか色のきぬ	11
くちなし	柳色	はなた	白地	くれなひ	紅梅	赤色	12

### 6 第三系統第二類 都立中央図書館本（三井寺聖護院系統）

きぬくばりといふ事、たまかつらのまきのすゑにあるなり。これは、十二月のすゑに、けんしの御かたより、正月のし（装束）やうそくのために、色々のきぬをさま／＼したてゝ、ひろぶた（広蓋）にをきかさねて、むらさきのうへ、だいし（大持）やうにおほせられけるは、「これ御らんしあてゝ、人々のしなにしたかひて、に（合）あふやうにおほしめし、あてかわせ給へ」と申させたまへは、さらはとて、あか色、（紅梅）こうはい、くれなゐ、しろこそて、はなた（縹）、やなきうら、くちなし色、此色くあなたこなたへ御ぬしにしたがひて、まいらせ給ふ中に、あかしのうへの御かたへは、色もわかうつくしき（選り）ゑりて、まいらせ給ふ。むらさきのうへ、よろつ御はからひにて、御ころもかへなど、此よ（マ）よりまいらせ給ふか、けんしの御心みたてまつらんかために、かく申給へり。

#### 13 第5系統（梗概中心本系）天理図書館本（連蔵筆）

「たまかつらのまき」はあるが、衣配りの文章はない。

#### 14 第6系統（和歌中心本系）京都大学本

され、此巻に、「きぬくばり」といふ事有。源氏、女御達の御方へ、十二月の末に、色々の御し（装束）やうそくをそ送り給ふ。

朝顔の前齋院	花散里	明石の御方	紫の上	源氏	
	かゑう <small>(荷葉)</small> のほう	くろほう <small>(黒方)</small>	はい花 <small>(梅花)</small> ほう	し <small>(侍)</small> う <small>(従)</small>	1
	か <small>(荷葉)</small> よう	くろほう <small>(黒方)</small>	はい <small>(梅花)</small> くわ	し <small>(侍)</small> う <small>(従)</small>	2
	か <small>(荷葉)</small> えうのほう	くろほう <small>(黒方)</small>	梅花 <small>(花)</small> ほう	し <small>(侍)</small> う <small>(従)</small>	3
くろほう <small>(黒方)</small>	か <small>(荷葉)</small> えう	くろ <small>(薰衣)</small> ゑかう <small>(香カ)</small>	はい <small>(梅花)</small> 花	侍 <small>(し)</small> 従 <small>(しう)</small>	4
	荷 <small>(荷葉)</small> ようほう <small>(方)</small>	くろほう <small>(黒方)</small>	むめ <small>(梅花)</small> のはな <small>(花)</small> のほう	じ <small>(侍)</small> う <small>(従)</small>	6
くろほう <small>(黒方)</small> ・し <small>(侍)</small> う <small>(従)</small>	か <small>(荷葉)</small> よう	く <small>(薰衣)</small> ん <small>(香)</small> ゑかう <small>(香)</small>	三種 中には <small>(梅花)</small> はいく <small>(黒方)</small> くろほう	くろほう <small>(黒方)</small> ・し <small>(侍)</small> う <small>(従)</small>	7
	か <small>(荷葉)</small> えうほう	く <small>(薰衣)</small> ん <small>(香)</small> ゑかう	梅花 くろほう	し <small>(侍)</small> う <small>(従)</small> ほう	8
	か <small>(荷葉)</small> ようのほう	くろほう <small>(黒方)</small>	梅花 <small>(方)</small> ほう	し <small>(侍)</small> う <small>(従)</small>	9

朝顔の前齋院	花散里	明石の御方	紫の上	源氏	
	かよう <small>(荷葉方)</small> のほう	くろほう <small>(黒方)</small>	梅花のほう <small>(方)</small>	しろう <small>(侍従)</small>	11
	ちしう <small>(侍従)</small>	かよう <small>(荷葉)</small>	くろほう <small>(黒方)</small>		12

### 5 第三系統(増補本系) 光源氏一部源氏寄合之事

たき物色々むめの花、くろぼふをは、むらさきの上あわせ給ふ。はなちるさと、ししゆ、げんじ、いろ／＼さま／＼に出させ給ふ。たき物いづれもとり／＼におもしろき中にも、むめの花は、その此のおりにあひて、おもしろしとさためられけり。

### 10 第4系統(簡略本系) 大阪市立大学本

正月廿日の頃、源氏、六条のゐんにて、たき物合あり。これは、明石はらの御姫君、后にま  
いり給ふ御いそき也。かう(香)とも、御かた／＼へくはりて、いとみあはせたまふ。あさかほのさ

いぬんの御かたより、ちり過たる梅のえたに、御文付て、こんり(紺瑠璃カ)のつほにたき物入て、五よ(葉)う  
のえたに付て、白きつほにはたき物入て、むめをゑりて付られたり。その歌に、

51 花のかはちりにし枝に留らねと移らん袖にあさくしまめや

と有し也。又、兵部卿の宮、さま／＼のかう(香)ともをはん(判)して、帰り給ふ。

### 13 第五系統(梗概中心本) 天理図書館本(連蔵筆) 薫物合の記述なし

### 14 第六系統(和歌中心本系) 京都大学本

明石の姫君、春宮にまゐり給はんと(急)のいそめきに、六条院にて焼(薫物合)ものあはせをし給ふ。頃は  
正月のすゑつかたなるに、前齋院と申方より、散過たる紅梅の枝に御文付て、紅るりの壺にた  
きもの入て、贈給ふ。おなしく歌、

137 花の香は散にし枝にとまらねとうつらん袖に浅くしまめや  
御返事、源氏、

138 はなのえにいと心をしむるかな人のとかめん香をはつらめと

資料3 『源氏小鏡』諸本 若菜下巻「女楽」の様相

源氏	明石の御方	明石の女御	紫の上	女三の宮	
しやうか <sup>(唱歌)</sup>	みも <sup>(美)</sup> ひわ たちはなの花も	ふち しやうのこと	かはさくら <sup>(権桜)</sup> わこん	きんのこと やなき	1
しやうか <sup>(唱歌)</sup>	ひわ	藤 しやうのこと	かは桜	きんのこと やなき	2
しやうか <sup>(唱歌)</sup>	ひは <sup>(琵琶)</sup> 花たちはな	ふち しやうのこと	かはさくら	きんのこと やなき	3
しやうか <sup>(唱歌)</sup>	みも <sup>(美)</sup> ひわ さ月の花たちはなの	藤 さうの御こと <sup>(孝)</sup>	さくら・梅 わこん	柳 きんの御琴	4
しやうが	みも <sup>(美)</sup> 花たちはなの花を もみをも	ふち しやうのこと	さくら わこん	きんのこと あをやき	5
しやうか <sup>(唱歌)</sup>	みも <sup>(美)</sup> はなたちはなの花を も実をも	藤 しやうのこと <sup>(孝)</sup>	かはさくら <sup>(権桜)</sup> 和琴	きんのこと やなき	6

源氏	明石の御方	明石の女御	紫の上	女三の宮	
しやうか <small>(唱歌)</small>	ひは <small>(琵琶)</small> 花たちはなの花も実も <small>(実)</small>	藤 しやうのこと <small>(箏)</small>	桜 わこん <small>(和琴)</small>	きん やなき	7
しやうか <small>(唱歌)</small>	ひわ 花たちはなをみ <small>(実)</small>	しやうのこと	わこむ こすゑの花	きんのこと あをやき	8
しやうか <small>(唱歌)</small>	琵琶 花橘の花も実も	藤 箏	わこん かは桜 <small>(榊)</small>	きんの琴 柳	9

10～14 『源氏小鏡』諸本の若菜下巻には「女楽」の記述が見られない。これらの諸本で語られていることを簡条書きで提示する。

10 「若なの下にいはく」住吉詣・蹴鞠での垣間見・女三の宮懷妊  
落葉の宮のこと

11 「わかかな下」  
住吉詣・蹴鞠での垣間見・紫の上のなやみ・  
女三の宮懷妊・柏木との密事露見

12 「わかかな下」  
住吉詣・蹴鞠での垣間見・紫の上のなやみ・  
柏木との密事露見・落葉の宮のこと

13 「女三のみや、・・・」  
蹴鞠での垣間見・猫・紫の上のおわづらい・  
柏木との密通・密事露見・柏木死去・薫誕生  
柏木の笛の後日譚まで  
住吉詣・柏木との密通・密事露見

14 「若菜下」







資料5 『源氏小鏡』諸本 「須磨卷」源氏寄合

(傍線部は『香道蘭之園』『須磨香』の聞きの名目と同一の寄合、波線部は小異はあるが、ほぼ一致する寄合。)

1 第一系統 京都大学本 (伝持明院基春筆)

かたみのゝみ・おもやせたる・はしらかくれのおもかけ・さらぬかゝみ・あ  
 かつきかけて・いつる月・すまのわかれ・  
 はかまいり・わかきのさくら・にはのやりみつ・にはのくさ・松のはしら・  
 いしのはし・竹かき・しは・もしほやく・けふりにまかふ・すまに、なかあ  
 め・ともちどり・ねさめのとこ・よものあらし・うらなみ・たちくるなみ・  
 なみたにうくまくら・月のかほ・みやこをこふるふせい・うきなたちし・  
 まきかさねたる文・いせしま・みちのくかみ・しほひかた・いふかひなきわ  
 か身・うきめかる・いせおのあま・おもひやれ・おなしなみた・雲ゐにひと  
 り・くろこま・こまふ多・はなのさかつき・ひちかさ雨・人かた・みの日の  
 はらい・大うみのはらまで・ぬれそほち・くたるつかい・ゆめ

2 第一系統 宫内庁書陵部本

こ(番)・すく六(双六)・たんきのはん(彈碁)・こと(碁)・地(りんじよ(輪書カ)也)のけん・かたみのかゝみ・おもや  
 せたる・はしらかけのおも影・さらぬかゝみ・あかつきかけて出る月・はか  
 まいり(声)・あし(廊)ふくらう(下巻)・したや(山中)・やまなか・かみしま・あらし風・わかきの  
 さくら・庭のやり水・まつのはしら・いしのはし・竹あめるかき・ひたきや・  
 とこよのかり・もしほやく・煙のまかふ・ともちどり・ねさめのとこ・いは  
 ほの中・よものあらし・浦なみ立くる・涙にうく枕・まきかさねたるふみ・  
 いせしま・みちのくかみ・しほひかた・いふかひなき身・うきめかる・いせ  
 おのあま(ママ)・ひもやつれ・おなしなみた・雲井にひとり・見やりのいね・春の  
 さかつき・なみたそゝく・いなそらまち・ひちかさ・人かた・大うみのはら・  
 みの日のはらい・ゆめ

3 第一系統 国会図書館本（古活字本）

かたみのかゝみ・おもやせたる・はしらかくれ・さらぬかゝみ・あかつきか  
 けて出月・若木のさくら・やりみつ・にはのくき・松のはしら・いしのはし（巻）

たけかき（安千鳥）・ともちとり・ねさめのとこ（たぢぢ）・うらなみ・おちくるなみ（一被）・なみた

にうくまくら・月のかけ・伊勢の使・みちのくかみ・まきつゝくる文・い勢

しま（彌千恵）・しほひのかた・ゆいかひなきわか身・うきめかる・い勢をのあま・思

ひやれ（ひらひら）・花のさかき（ひらひら）・なみたそゝく。めつらしき・おなしきなみた・くも

ゐにひとり（黒駒）・くろこま（黒駒）・かたみのふえ・ひちかさ雨（ひちかさ）・はらひ（ひらひ）・みの日（みの日）・ゆめ

4 第二系統 神戸親和女子大学本

かたみのかゝみ・おもやせたる・はしらかくれの面影（おもかげ）・さらぬかゝみ・あか

つきかけて出る月・すまのわかれ・はかまいり・庭（には）の遣水（やり）・わか木のさくら・

いしのはし（巻）・たけのかき・松のはしら（巻）・しほ（巻）・もしほやく、けふりにまか

ふ・すまになか雨・ともちとり・月のかほ・ねさめのとこ（よものあらし）・

うらなみ・たちくるなみ・なみたにうく枕（うきな）・うきな、たちし・

まきかねたる文・いせしま・おもひやれ・しほひのかた・ゆふかひなきわか

身・うきめかる・いせおのあま・おなしなみた・雲（雲）ゐにひとり・くろこま（くろこま）ふ  
 急（急）・なみた、そゝく・はなのさかつき・ひちかさ雨・人かた・みの日（みの日）のはら  
 へ・大海原・ぬれそほちて、くたるつかひ、ゆめ

5 第三系統 光源氏一部連歌寄合之事

かたみのかぐみ・おもやせたる・かつらかくれのおもかけ・  
あかつきかけていつる月・わかきのさくら・にわのやりみづ・にわのくさ  
ともちとり・ねさめのとこ・よものあらし・たちくるなみ・うきまくら・  
つきのかほ・まきかさねたる文・いせしま・五六まいそかしみちのくのかみ・し  
ほひかた・いひかいなき身・うきめかる・いせをのあま・おもひやれ・おなしな  
みた・くもあ・にひとり・くろこま・こまおゑ・なみだそく・はるのさかづき・  
ひちかさあめ・すまのことば・さとばなれ・うみづら・あまのいゑい・あしろ・  
はつかよふひ・とのいすがた・こと・もろこし・山がつめきて・宮こはなる・  
たびすがた・ちさと・あわれにすぎき・いせのつかい・からのかみ・あしふけ  
るや・しらぬ国・なかさめ・松しまのあま・かとのきぬ・よにしほじみて・か  
へしふみ・いせ人・こゝろづくし・うみすこし・まくらをそはたつ・てならひ・  
よものあらしまくらもうくはかり・なみこもと・すちゑた・うた・うたふ・  
つくりへ・くさのはな・ちいさきとり・たまくら・かりのつら・とこよのくに・  
月のかほ・月の宮こ・いまこゝにあり・つなでひく舟・山ざと・うしろの山・よ  
のあちはひ・しばといふもの・ゑびすの国・すみよしのかみ・二月廿日・ごすく  
六・あまりのいわや・いしのはし・まつのはしら・たけあめるかき・あま人のさ  
へづる・むまにいねかふ・おふみや人・たかしほ・あすかひうたふ・さけのかわ  
らけ・ゑいのかなしみ・たづ・ふゑ・みのひのはらひ・人かた・うみのふすま

6 第三系統 都立中央図書館本

かたみのかみ・み・おもやせたる・はしらくれのおもかけ・さらぬかみ・あ  
かつきのいづる月・すまのわかれ・  
もしほやくけふりにまかふ・  
まきかさねたる文・伊勢しま・みちのくかみ・いふかひなきわか身・うきめか  
る・いせおとこのあま・思ひやれ・  
ともちとり・ねさめのとこ・よものあらし・なみたうくまくら・月のかほ・み  
やこにて、こゆる心・おなしなみた・くもあにひとり・くろこま・こまふへ・  
なみたそく・花のさかづき・  
ぬれしほちて、  
(そぼちてカ) くだるつかひ・ゆめのつけ

7 第三系統 国文学研究資料館本

かたみのゝみ・おもやせ・はしらかくれのおもかけ・あかつきかけて、いつる  
 月・はかまいり・松のはしら・竹あめめるかき（巻）・石のはし（巻）・庭の草・たていし・  
 わか木のさくら・庭のやり水・し（巻）はといふもの・友千鳥・ねさめの床・四方  
 の嵐・立くる波・枕うく涙・琴・月のかほ・まきかさねたる文・いせしま・し  
 るきからの紙・みちのくかみ・しほひのかた・いふかひなき・うきめかる・い  
 せおのあまを、おもひやれ・ひちかさ雨（入形）・かさも、とりあへず・人かた・大  
 うみのはら・里はなれ・さくら・あまの家ゐ・あしる車・廿日のよひ・とのあ  
 姿・山かつめきて・都はなるゝ・いせしま・からの鏡・うへ木・あしふける屋・  
 しらぬ国・松浦・長雨・からのきぬ・かくしふみ・枕そはたつ・手ならひ・う  
 た、うたふ・ちいさき鳥・雁の一つら・月の都・とこよの国・月のかほいま、  
 ここにあり・山里・すみよしの神・二月の廿日・暮・すく六・海のはやは・あ  
 まのさへつり・大宮人・飛鳥井、うたふ・さけのかはらけ・ゑひのかなしみ・  
 笛・あまのふすま・さいしやうへ、をくり物・笛、黒駒をまいらせしなり

8 第三系統 天理図書館本

形見のかゝみ・おもやせたる・さらぬ別・はかまいり・  
 友なし千（巻）とり・ね覚め床・月のかほ・うきまくら・宮こ、こひしき・  
 まき重たる文・伊勢しま・うきめかる・いせをのあま・ひなのやつれ・  
 おなしなみた・雲ゐにひとり・春のさかつき・有かたき御こゝろさし・  
 ひちかさ雨・  
 さとはなれ・あまのいへ・あしるくるま・とのゐすかた・琴・からくに・山か  
 つめきて・宮こはなるゝ・千里・伊勢のつかひ・あしふける屋・しらぬくに・  
 長雨・松しま・海すこし・てならひ・いせ人か、くれしふみ・す（鈴鹿）か・うたふ・  
 ちいさきとり・うしろの山・やまさと・このくに・住吉神・わか木の桜・二  
 月廿日・暮、双六・あまのいわや・たかしほ・大宮人・石はし（巻）・あまのさへ  
 つり・さけのかはらけ・たつ（巻）・馬にいねかふ・ゑひ（巻）のかなしみ

9 第四系統 神宮文庫本

形見の鏡・おもやせたる・柱隠れの俤・暁かけて出ぬる月・(さらぬみ) さえぬ鏡  
はかまいり・

わか木の桜・庭の遺水・(にほ) 庭の草・松の柱・石の橋・竹のすかき・

(巻) しは・塩やく煙にまかふ・すまの長雨・

友千鳥・ね覚の床・四もの嵐・立ちくる波・泪に浮枕・月の顔・都をこふ  
る・うき名立ちし・

伊せのつかひ文・巻かさねたる文・伊せしま・みちのくかみ・塩干かた・  
いふかひなき・我身、憂めかる・伊せおの海士・おもひやれ

おなし泪・雲ぬにひとり・黒駒・こま笛・泪そくく・花盞・(サカシ)

ひちかさ・人かた・巳の日はらへ・大海はら・

夢の告

10 第四系統 大阪市立大学本

かたみの鏡・おもやせたる・柱かくれのおもかけ・さらぬかみ・暁かけ  
て出る月・すまのわかれ・

若木のさくら・庭のやり水・庭の草・松のはしら・石のはし・竹のかき・  
柴・うしろの山に立煙・

とも千鳥・ね覚の床・四方の嵐・うら波・立くる波・(本のママ) まくらにうく枕・月

のかほ・まきかさねたる文・いせしま・みちのくかみ・(潮干) しほひかた・いふ  
かひなきわか身・うきめかる・伊勢おのあま・思ひやれ・

雲ぬにひとり・(黒駒) くるこま・(高麗) こま笛・泪そくく・おなし泪・花の盃・ひち笠  
雨・人かた・大うなはら・みの日はらひ

資料6 「源氏千種香」の記述と『源氏小鏡』諸本との関係 ○一致 △近似する ×不一致 /該当する記述がない ※誤写か

											『源氏小鏡』諸本
											柴の煙
											只ならぬ身
											いつき・神のいかき
											夏の遅月
											大姫君
											浮船香証歌
											あらはれ文
											九条わたり
											こたま
											小野の尼
第四系統	10 大阪市立大学本	○	○	△	※	/	○	/	○	/	○
第四系統	9 神宮文庫本	○	○	○	○	×	△	○	○	○	○
第三系統	8 天理図書館本	○	○	○	※	/	○	△	○	○	○
第三系統	7 国文学研究資料館本	○	○	○	○	×	×	○	○	×	○
第三系統	6 都立中央図書館本	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○
第三系統	5 光源氏一部連歌寄合之事	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第二系統	4 神戸親和女子大学本	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○
第一系統	3 国会図書館本	○	○	○	○	×	△	○	○	○	○
第一系統	2 宮内庁書陵部本	○	○	○	○	×	/	/	○	×	○
第一系統	1 京都大学本	○	○	○	○	○	△	△	○	○	○

第六系統	第五系統	第五系統	第五系統	
14 京都大学本	13 天理図書館本 (連蔵筆)	12 京都大学本 (飛鳥井重雅筆)	11 天理図書館本 (伝飛鳥井宋世筆)	『源氏小鏡』諸本
/	/	○	○	柴の煙
○	×	○	×	只ならぬ身
×	△	○	△	いつき・神のいかき
○	/	○	/	夏の遅月
/	×	/	/	大姫君
△ (朱)	/	/	△	浮船香証歌
/	/	/	○	あらはれ文
○	/	/	×	九条わたり
○	○	/	○	こたま
○	○	/	○	小野の尼

## 第二部 第五章 「名香古歌古詩」―香名と引歌―

はじめに

「名香古歌古詩」は『香道蘭之園』十巻収載の、香名とその引歌（和歌と漢詩）のことである。『香道蘭之園』十巻は、香道具の図示と詳細な寸法、名香目録、五種の香、名香のきき方、本所六国、名香古歌古詩、薫香名目、匂袋名目、薫香葉種製法から成る。

名香目録収載の「十種之香」「追加六種」「百二十種名香目録」「本所六国」「一味香」「木所譬喩」は、『心遠斎香道叢書』続編七『香之記 名香目録』（内題「香之書」）に載るものと大同小異であるが、『香道蘭之園』には「東山殿御家の香」「佐々木道誉所持の香」も収載されている。五種の香（松根、羅国、伽羅、真那蛮、しゃせつ）についての講釈は、木処六国以前の古説である。名香のきき方は一九の名香の香木の達（性質）や、それに相応しいきき方、香木の由来等を記し、その後、「名香の古歌古詩」と題して、三八種の名香とその引歌、和歌二八首、漢詩八首、連歌の発句一句を列挙している（内一種は引歌なし）。資料1「名香の古歌古詩」を参照されたい。本章では、「名香古歌古詩」の香名と引歌を精査して、これらの引歌が、香りの印象を伝えるにあたり、いかに機能したかを考察し、『香名引歌之書』と比較検討を行う。

第一部第三・四章で考察した『香名引歌之書』が香名一三三種の内一〇四種に対し、八〇首の和歌、二七首の漢詩等を挙げているのに比べると、小規模なものである。列挙される香名は、一木四銘の内「初音」「白菊」「柴船」に始まり、『香道蘭之園』十巻収載「五十種の香」「百二十種の香」「東山殿御家の香」

「佐々木道誉所持の香」「後の追加」から採用されている。資料2「名香古歌古詩」収録香名出自一覧に窺えるように、「後の追加」にある香が多い。また引歌の依拠する和歌集については、『香名引歌之書』には『続千載和歌集』以降の勅撰和歌集は見られなかったが、「名香古歌古詩」は『続後拾遺和歌集』『新千載和歌集』『新拾遺和歌集』や、私撰集の『夫木和歌抄』、私家集の『貫之集』『長秋詠藻』『壬二集』『雲葉和歌集』に依拠するものがある。また歌合、『海道記』、連歌の発句によるものがあり、『香名引歌之書』収録の引歌とは、趣きを異にしている。【表1】「名香古歌古詩」引用和歌・漢詩 典拠別一覧を参照されたい。

『香名引歌之書』収録の香名と同じものがあるが、香木自体が同一とは断定できない。『香名引歌之書』や『五月雨之記』『六番香合』と比較して、香名、引歌ともに同一なもの、同一ながら細かな異同のあるもの、香名は同じで引歌が異なるもの、引歌は同じで香名が異なるもの等様々である。これについては【表2】「名香古歌古詩」と『香名引歌之書』『六番香合』の香名及び引歌対照表を参照されたい。

## 一 引歌と香名

### 一木三銘

「名香古歌古詩」は、一木四銘の内「初音」「白菊」「柴舟」から始まる。ただし、一木三銘とのことわりは無く、「白菊」の引歌は、

またたくひありともいかに末匂ふ秋より後のしらくくの花 源行宗『和歌一字抄』下 一〇二三  
で、初句と第二句が『香名引歌之書』の「たくひあり誰かはいわん」と異なる。また「柴舟」の引歌も、

世中のうきをみにつむ柴船やたかぬさきよりこかれいつらん 謡曲『兼平』

で、『香名引歌之書』の「柴舟のたかぬさきよりまつこかるらん」と微妙に異なる。また一木四銘の「藤袴」は登場しない。一木四銘については、一木三銘とする伝書(1)もあり、その場合「藤袴」は登場しないのが常である。

『五月雨之記』「六番香合」と関係するもの

『五月雨之記』「六番香合」二番「かはら屋」「ゆきの袖」、六番「やまふき」と引歌は同じながら、部分的異同がある。「瓦屋」「梅風」「春雨」の引歌を以下に記す(傍線部は「六番歌合」との異同箇所)。

瓦屋 我はかりおもひこかれぬかはら屋の煙も猶そ下むせふなる

藤原基良『続後撰和歌集』卷第十二恋歌二 七七八

梅風 梅ちらす風もこへてや吹くらんかほれる雪の袖に乱る

康資王母『新古今和歌集』卷第一春歌上 五〇

春雨 春雨にほへる色もあかなくに香さへなつかし山吹の花

よみ人しらず『古今和歌集』卷第二春歌下 一二二

「梅風」と同じ引歌に拠る「六番歌合」での香名「ゆきの袖」の方が、香名としては相応しい。「春雨」は「春雨にほへる色も」から「春雨」を香名にしたと察するが、「六番香合」では「やまふき」と命名され、左「ねぬ夜の夢」が勝を制した。この歌中で確かに香っているのは「山吹の花」である。

引歌が同じで香名が異なるもの

・「名香古歌古詩」「都」と『香名引歌之書』「山桜」  
「都」の引歌

匂ふらん花の都の恋しくて折に物うき山さくらかな

上東門院中将『後拾遺和歌集』第一春上 九二

は、『香名引歌之書』の「山桜」の引歌と同じである。「都」の香名では匂う花が不在になってしまいう感が否めない。「山桜」は二百種名香目録(2)に、「都」は百二十種名香目録にそれぞれ挙げられている。

「山桜」の木処は不明だが、「都」は伽羅(3)とある。恐らく、「山桜」「都」は共通の引歌ながら、香木は別物と考えるべきであろう。

・「名香古歌古詩」「杣」と『香名引歌之書』「賀」

「杣」の引歌

杣人のふる袖匂ふ菊の露うちはらふにも千代は経ぬへし

藤原俊成『新古今和歌集』卷第七賀歌 七三二

は、『香名引歌之書』「六十一種之名香」の「賀」にも引かれている。「六十一種之名香」は、室町幕府八代將軍足利義政の太命により、志野宗信が選んだ六十一種類の名香と伝承されている。「名香古歌古詩」の「杣」の出自は「東山殿御家の香」であるから、おそらく「杣」と「賀」は同一の香木と考えてよいだろう。

### 勅撰和歌集に依拠するもの

引歌の依拠する勅撰和歌集として、『香名引歌之書』では『新古今和歌集』が二五首と最も多く、『続千載和歌集』以降の採用はなかった。「名香古歌古詩」では、『古今和歌集』『新古今和歌集』から各三首が採用され、また『続後拾遺和歌集』『新千載和歌集』『新拾遺和歌集』から各一首が採用されている。『新古今和歌集』の

梅の花匂ほふをうつつ袖そでのうへに軒のきもる月の影かげそあはらそふらぬ

藤原定家『新古今和歌集』卷第一春歌上 四四

を引歌とする香名「軒もる月」は、『心遠齋香道叢書』新編十一『薰香名目志』の「勅名香之記 後水尾院勅名七種之内」の「軒漏月」と察する。

香名「須磨」は、「五十種之名香」あるいは「東山殿御家の香」が出自と考えられる。「五十種之名香」は「六十一種之名香」内の五十種であり、「六十一種之名香」は、足利義政の太命により志野宗信が選んだものであるので、「五十種之名香」の「須磨」と、「東山殿御家の香」の「須磨」とは同一の香木と思

われる。ただ、『香名引歌之書』「六十一種之名香」の「須磨」には引歌の記載が無いので、引歌の同一性による裏付けは得られない。

「名香古歌古詩」香名「須磨」の引歌は、恋の歌、

いかにせん猶こりすまの浦風にくゆる煙のむすほふれつゝ

後鳥羽院御製『新千載和歌集』卷第十二恋歌二 一二五七

で、歌中の「こりすま」の「すま」に「須磨」を掛けての命名である。しかし背景には、『源氏物語』須磨巻での、源氏から朧月夜への贈歌、

こりすまの浦のみるめのゆかしきを塩焼くあまやいかゝ思はん（4）  
を視野に入れるべきと考える。

『香名引歌之書』「右之外名香」には、伊勢の六条御息所への源氏の返歌、

あまかつむなけきの中に塩たれていつまですまの浦になかめん

を引歌とする香名「須磨」も存在する（5）。

### 私撰集に依拠するもの

私撰集『夫木和歌抄』からは四首が採用され、「名香古歌古詩」引歌の依拠する和歌集として、最多である。『香道蘭之園』組香に『夫木和歌抄』由来の組香証歌が二四首あることを鑑みれば、「名香古歌古詩」での『夫木和歌抄』最多採用は頷ける。第二部第三章で検証したように、組香の二四首はすべて西

順自筆本『夫木和歌集抜書』(6)、天和二年板『夫木和歌集抜書』(7) 収載の和歌と一致していたが、「名香古歌古詩」収載の四首中、

松風 住吉の里のあたりに咲花は松風かほる春のあけほの

慈鎮和尚『夫木和歌抄』卷第三春部三 梅 七〇四

だけは、西順自筆本『夫木和歌集抜書』及び天和二年板『夫木和歌集抜書』に収載されていないので、組香での『夫木和歌抄』享受の在り方とは異なるものと察せられる。

藤原基家の撰になる『雲葉和歌集』の、

むらさきの糸よりかけて咲藤の匂ひや野辺にひとやちまとまるに立かほるらん

菅贈太政大臣『雲葉和歌集』卷第三春歌下 二五二

を引歌とする「藤花」は、「佐々木道誉所持の香」及び「後の追加」に見られるが、木処も不明である。この和歌は、「むらさきの」が花の色を印象付け、「藤の匂ひ」とともに、視覚と嗅覚両者に働きかけている。

### 私家集に依拠するもの

『貫之集』を引く「さかき葉」は「百二十種之名香」の内の新伽羅と考えられる。引歌

おく霜の色もかはらぬさかきはの香をやはとめて人の聞くらん 『貫之集』第一十一月神楽 一九

にも「おく霜の色もかはらぬさかき葉の」と「香をやは」で、色と香りが詠み込まれている。

藤原俊成の『長秋詠藻』を引く「露雨」は、『香道蘭之園』収載の「五十種之名香」「百二十種之名香」「東山殿御家の香」「佐々木道誉所持の香」「後の追加」のいずれにも見当たらない香名である。したがって木処も不明である。引歌は、

匂ひ来る山下水をとめくれはてゆけはま袖にきくの露そうつろふ  
『長秋詠藻』中 残菊夾路 二五八

である。この歌で、匂っている山下水と、袖に移ろう菊の露から、香名「露雨」を産み出したものとするれば、かなりの飛躍があると言えよう。

「五十種之名香」に属する「雲井」の引歌は、藤原家隆『壬二集』の

桜はなちるりかひ霞む久方の雲井にかほをる春の山風  
『壬二集』雑部春 二九九四

である。『香名引歌之書』「六十一種之名香」にも「雲井」は収載されており、その引歌は、

千代までの大宮人のかさしとや雲井のさくら匂ひ初そめけんらん

藤原定家『続千載和歌集』卷第二十賀歌 二一〇七

である。引歌は異なるが、香木の出自を鑑みるといずれも同一の「雲井」かと考えられる。

香名「梅の下風」の引歌は、南北朝時代の僧頓阿の『草庵集』の

我袖のひとつ匂ひに成にけり四方の梢の梅の下風  
『草庵和歌集』卷第一春歌上 七二

である。「ひとつ匂ひに成にけり」からは一味香の可能性が窺える。『心遠齋香道叢書』新編七『木処気味秘考』に拠れば、香の味わいは、辛甘鹹苦酸の五味とされ、立出から火末まで一味のものは稀であるとあり、中でも「酸一味の名香、師伝になし。」とある。「後の追加」に見える「梅の下風」は木処不明ながら、もしも一味の香であるならば、歌意から甘一味の名香であると察せられる。

### 歌合の和歌に依拠するもの

「初霜」の引歌は、

名におへる花咲匂ふ紫の一もときくにおける初霜

である。多少の異同はあるものの、『寛平内裏菊合』（八八九年頃か）左方三番の和歌

#### 紫野の菊

名にしおへは花さへ匂ふ紫の一本菊における初霜

に当たると考えられる。香名を「初霜」としたことは、紫菊の初霜への移り香をイメージさせる。『五月雨之記』『六番香合』で示された香木命名の評価「取所も名のとなくもよろし」に該当すると言えよう。

### 『海道記』に依拠するもの

貞応二年（一一二二）成立と考えられる『海道記』の、

問きつるふしの烟は空に消て雲に名残の面影そたつ 『海道記』 四九

を引歌とする香名「富士烟」は「五十種之名香」に見える香である。『香名引歌之書』『六十一種之名香』

「富士烟」の木処は新伽羅であり、引歌は、

世の中を心たかくもいはふかなふしの烟を身の思ひにて

慈円『新古今和歌集』卷第十七雑歌中 一六一四

風になひくふしの烟の空に消てゆくゑもしらぬわか思ひかな

西行『新古今和歌集』卷第十七雑歌中 一六一五

の二首である。第一部第三章で先述したように、高志を詠んだ慈円の和歌と行く先の分らない思いを詠った西行の和歌をもって引歌とすることには、矛盾があると言わねばなるまい。『海道記』の和歌の方が、雄大な感があり、香名「富士烟」に相応しいと考えられる。

### 連歌の発句に依拠するもの

「名香古歌古詩」の内、香名「雪梅」は宗祇の発句

にほひいでゝはらふ袖まで雪の梅（8）

を引歌としている。詞書に「冬半の此より梅のあまねくさきけるとし」とあり、冬の梅を詠んだものである。降る雪に梅の香が移り、袖に降りかかった雪をはらうと梅の香が立ち上るといふ情景であろうか。梅の雪への移り香が主題である。木処としての出自は不明の香であるが、引歌のイメージからは雅味が感じられる。連歌の発句を引歌としたものは「名香古歌古詩」の内、これのみである。

### 漢詩に拠るもの

漢詩を引歌とする香は八種あるが、その内五首は典拠不明である。

「隣家」の漢詩には作者「馬子才」（馬存、字は子才）と記され、その詩は『全宋詩』に八首あるが、当該の詩句は見当たらない。「隣家」は「五十種之名香」に見えるので、『香名引歌之書』「六十一種之名香」の「隣家」と引歌（王駕「晴景」『三体詩』）は異なるが、同一の香と推測できる。

典拠が明らかでない三首は、香名「斜月」の林逋（林和靖）「山園小梅」、「湘竹」の李賀「昌谷北園の新筍四首の内」、そして「探梅」の『中州集』第三卷、劉無党「梅」である。

「斜月」は、「五十種之名香」の内の香である。引歌は宋林逋「山園小梅」（9）の

疎影橫斜水清淺（疎影橫斜して水清淺

暗香浮動月黃昏（暗香浮動して月黃昏）

で、梅のまばらな横斜の影は、清らかに浅い池水に映じ、どこからともなく流れてくる梅の香は、黄昏の月に揺らめいている、の意である。黄昏の月を詠んでいるのであって、「斜月」、つまり傾く月、入りかかった月を詠んではないので、七言律詩の第二聯から「斜」と「月」の字を採り、香名「斜月」に当てたのは聊か強引と言えようか。『香名引歌之書』「六十一種之名香」伽羅「斜月」の引歌は、典拠不明の「清談月已斜」であるが、おそらく『香道蘭之園』収載「斜月」と同一の香と考えられる。

香名「湘竹」と「探梅」は、「東山殿御家の香」に見える。「湘竹」の引歌は、唐李賀による「昌谷北園の新筍四首」（10）の第二首である。

斫取青光写楚辞（青光を斫取して楚辞を写す）

賦香春粉黒離離（賦香春粉黒うして離離）

竹の表皮の湿りを帯びて香るのが膩香、白い粉をふいたようなのが春粉のこととある。つまり、しつとりと香り、粉をふいたような竹に、離れ離れに墨の色がある。それが斑のある竹のような景色であることから、香名「湘竹」に繋がったものと考ええる。「湘竹」は湘水（広西チワン族自治区に発し、北東に流れ、瀟水を合わせて洞庭湖に注ぐ川）のほとりに産する竹で、舜王の死を悲しむ湘妃（舜の妃、娥皇と女英）の涙で、斑ができたと言われている。香木「湘竹」の木処は不明である。

「探梅」の引歌は、『中州集』卷三収載、金の劉無党による七言律詩「梅」（11）と考えられる。

為探疎影暗香処（疎影暗香の処を探らんとして）

独立嫩寒清曉時（独り立つ嫩寒清曉の時）

この詩は闇夜の梅ならぬ、曉の梅の香りを詠んでいる。これも「東山殿御家の香」にあり、木処不明である。

## 二 「名香古歌古詩」の語る香り

「名香古歌古詩」収載和歌二八首中、「匂ひ」「香」「かをる」等の言葉を含む和歌二〇首、「煙」「烟」「けぶり」を含む和歌五首、また「秋風匂ふ」「松風かをる」のような具体的描写が、嗅覚に訴えかける引歌もある。ただし、香名「桂」の引歌は、

久かたの月のかつらも折はかり家の風をもふかせてしかな

菅原道真母『拾遺和歌集』卷第八雜上 四七三

で、「家の風」は香りとは関係なく、「月のかつら」の「かつら」が香名になっている。「桂」は「後の追加」に見られる香木で、木処は不明である。

「名香古歌古詩」中、恋歌を引歌とするものは「片糸」「須磨」「瓦屋」（『五月雨之記』「六番香合」二番「かはら屋」と同歌）「名」の四種である。香名「片糸」は、

かた糸をあなたこなたへよりかけてあはすは何を玉の緒にせむ

よみ人知らず『古今和歌集』卷第十一恋歌一 四八三

からの命名であり、香名「名」は、

いかなれはあはての浦にやく塩のけふりは名のみたつに世かるらん

達智門院『続後拾遺和歌集』卷第十一恋歌一 六七八

の「けふり」立つと「名のみたつ」を掛けた表現から「名」を採用している。恋歌をもって象られる香名は、和歌と香名を撰ぶ人と、それを鑑賞する人の心象に拠って、享受は多様なものにならざるを得ない。「にほひ」「香」「かをる」等の言葉を含む和歌で香りを表現する方が、香りの達（性質）や表情を伝えやすいと言える。「名香古歌古詩」では二八首中恋歌四首で、『香名引歌之書』での全八〇首中恋歌一〇首とほぼ同率である。

漢詩八首は、典拠不明の五首も含めて、すべてに「香」の字を含む。ただし、香名「碧桃」は碧樹（宝

樹)に実る仙桃(仙果)のことで、

春風吹動碧桃花 (春風吹動す碧桃花)

香浮翠帳通仙館 香は翠帳に浮んで仙館に通ず)

を引歌とし、伝説上の果実の花の香りを詠んでいる。

また香名「こ(日偏に叟)雪」の漢詩は、

百花魁早占春光 (百花魁早く春光を占む)

嫩蕊初開こ(日偏に叟)雪香 嫩蕊初て開きこ(日偏に叟)雪香し)

で、春光の中で嫩い蕊が初めて開き、その香りで雪が芳しい、という意である。これは先述した、紫菊の初霜への移り香をもって、香名を「初霜」とした発想と相通するものがあると言えよう。

『心遠斎香道叢書』続編七『香之記 名香目録』には、「百二十種名香」及び「二百種名香」が収載されている。『香道蘭之園』には「二百種の香」という括りでの香名は登場しない。その「二百種名香」に、「初音」(一木三銘内)、「隣家」(『香道蘭之園』「五十種之名香」収載)、「湘竹」(「清香」)、「探梅」(同書「東山殿御家の香」収載)、「藤花」(「吐月」)、「丹楓」(同書「佐々木道誉所持の香」収載)、「桂」(「星合」)、「碧桃」(同書「後の追加」収載)の名が見られる。先述したように、同名だからといって香木自体が同一とは断定できないが、伝書によって名香目録の括り方が異なるために起る錯雑と考えられる。また所持者によって異なる引歌、香名を持つ一木四銘の存在を鑑みれば、「名香古歌古詩」の「杣」(「東山殿御家の香」収載)と『香名引歌之書』の「賀」(「六十一種之名香」収載)が同木である可能性は否めない。

「名香古歌古詩」は、『香名引歌之書』に比して小規模なものである。しかし、『続後拾遺和歌集』『新

千載和歌集』『新拾遺和歌集』や、私撰集の『雲葉和歌集』『夫木和歌抄』、私家集の『貫之集』『長秋詠藻』『草庵集』、『寛平内裏菊合』、『海道記』、連歌の発句等、『香名引歌之書』では見られないものにも依拠している。「名香古歌古詩」は、『香名引歌之書』よりも広い範囲から引歌を採録しており、その成立もあるいは『香名引歌之書』よりも後かとも推察される。

おわりに

「名香古歌古詩」の引歌は、『香名引歌之書』の場合と同様、必ずしもすべてが香名の典拠となったものとは限らないが、しばらくその前提で言えば、和歌二八首の内、歌言葉そのままを香名に採用したものが二五首である。残る三首について記す。

むらさきの糸よりかけて咲藤の匂ひや野辺に立かほるらん ↓ 藤の花

山の端に出るけしきに匂へともまた影かくす秋のよの月 ↓ 吐月

梅ちらす風もこえてや吹くらんかほれる雪の袖に乱る ↓ 梅風

香名「藤の花」は、「咲く藤」を、「梅風」は「梅ちらす風」を名詞化したものである。香名「吐月」は、「山の端に出るけしきに匂へとも」の、山の峰から月の出る景観の美をもつて命名したものと考えられる（12）。

また漢詩の引歌から生れた香名は、八首中「斜月」「湘竹」「探梅」「丹楓」以外は、詩中の言葉そのままを採用している。「斜月」「湘竹」「探梅」については先述した。「丹楓」は、

格物論に曰く楓は香樹也。其の葉、皆赤うして錦の如く

の「楓」と「赤うして」から生み出されたと考える。

「名香古歌古詩」での香名の採り方は、歌や詩の言葉そのままを用いたものが七割強で、歌や詩の言葉を名詞化し、あるいは言葉と言葉を繋げて新たな言葉を生み出したものは二割強である。『香名引歌之書』では後者の例は引歌の和歌八〇首中一割弱の七例で、「名香古歌古詩」の方が、歌や詩の言葉を名詞化したり、別の言葉を繋げて新たな言葉を生み出す例の割合が多い。組香の「聞きの名目」には、この方法で生み出されたと考えられるものが多数あり、名香に相応しい和歌や漢詩を選択して引歌とし香名を付けるという営為が、その後の組香の世界での「証歌」「証詞」「聞きの名目」誕生の始発であろうと推察する。いずれにしても「名香古歌古詩」も『香名引歌之書』同様に、香と和歌、香と漢詩のイメージを重ね合わせて享受された一つの例と考えられる。

## 第二部第五章 注

1 『初音白菊柴舟三事』蜂谷宗意の奥書がある香道伝書で、一木三銘香として有名な初音、白菊、柴舟の由来や所持者等が記されている（神保博行『香道の歴史事典』柏書房、二〇〇三年）一〇三〜一〇五頁。

また国立国会図書館蔵『香名引歌考』も「一木四銘」の内「藤袴」を不用とする。

2 『心遠斎香道叢書』続編七『香之記 名香目録』（内題「香之書」）収録。

3 注2同書、「名香木処」伽羅の項に、香名「都」は収載される。本章にて木所が示されるものは、全て本書による。

4 『新編日本古典文学全集 源氏物語②』小学館、一九九五年、一八九頁。

5 『香名引歌之書』には、この「須磨」を含め『源氏物語』の和歌を引歌とする香名六種（空蟬・花乃香・初草・須磨・野々宮・嶺こえ）がある。これは『新古今和歌集』に依拠する二五種、『古今和歌集』に依拠する七種に次ぐものである。

6 延宝二年（一六七四）、西順自筆本『夫木和歌集抜書』（愛媛大学図書館蔵、鈴鹿文庫五二七デジタル画像）。

7 天和二年（一六八二）『夫木和歌集抜書』（国文学研究資料館タ2・122）。

8 『自然斎発句』冬之部（星加宗一校訂『宗祇発句集』岩波文庫、一九五三年、一六〇頁、一六一一番）。

9 「山園小梅」（『中国名詩鑑賞辞典』一九七八年）四三一頁。

10 「昌谷北園の新筍四首」(『李賀歌詩編1―蘇小小の歌』東洋文庫六四五、平凡社、一九九八年) 四六二頁。

11 延宝二年『中州集』(『和刻本漢詩集成総集篇第四輯』汲古書院、一九七八年、二七三頁)。

12 山の端に出るけしきに匂へともまた影かくす秋のよの月

藤原為家『夫木和歌抄』卷第十三秋部四 秋 五二二三

この和歌は、尾崎左永子・薫遊舎『増補改訂版 香道蘭之園』(淡交社、二〇一三年) 四一一頁、脚注に出典が明記されていない。

資料1 名香古歌古詩

☆『香名引歌之書』と香名が同じで引歌が異なるもの  
○『香名引歌之書』と香名が同じで引歌が同じもの

初音○ きくたひにめつらしければ時鳥いつも初音の心ちこそすれ  
白菊○ またたくひありともいかゝ末句ふ秋より後のしらくくの花  
柴舟○ あまのたきさしという香也

桂 世中のうきをみにつむ柴船やかぬさきよりこかれいつらん  
片糸 久かたの月のかつらも折はかり家の風をもふかせてしかな  
星合 かた糸をあなたこなたへよりかけてあはすは何を玉の緒にせむ  
隣家☆ 夜もすから星合の空に奉る香のけふりや雲となるらん

馬子才  
更ニ愛テ隣家香絶<sup>スルコト</sup> 俗<sup>ニ</sup>一枝還テ日贈青娥<sup>ニ</sup>  
斜月☆ 疎影横斜水清淺 暗香不動月黄昏

紅○ くれなるに匂ふはいつらしらきくの枝もとをるにふるかとも見ゆ  
須磨○ (右之外) いかにせん猶こりすまの浦風にくゆる煙のむすほふれつゝ  
藤の花 むらさきの糸よりかけて咲藤の匂ひや野辺に立かほるらん  
軒もる月 梅の花匂ふをうつつ袖のうへに軒もる月の影そかはらぬ

雪梅 連歌 匂ひ出てはらふ袖まで雪の梅  
湘竹 斫破<sup>テ</sup>青光<sup>ヲ</sup>写<sup>ス</sup>楚詞<sup>ヲ</sup> 賦香春粉墨<sup>ヲ</sup> 離々<sup>シ</sup>

秋風 春よりはもえ出しかと草のかう香は秋風に匂ふ也けり  
吐月 山の端に出るけしきに匂へともまた影かくす秋のよの月  
初霜 名におへる花咲匂ふ紫の一もときくにおける初霜  
夏衣 夏ころも春におくれて咲花の香をたに匂へおなしかたみに

松風 住吉の里のあたりに咲梅は松風かほる春のあけほの

清香 移<sup>テ</sup>栽<sup>テ</sup>東園<sup>ニ</sup>堪<sup>テ</sup>吟<sup>ハ</sup> 一任清香檻外<sup>ニ</sup>翻<sup>ル</sup>  
探梅 為<sup>テ</sup>探<sup>ニ</sup>疎影<sup>ニ</sup>暗香<sup>ヲ</sup> 独立嫩寒清曉<sup>ノ</sup>時<sup>キ</sup>

富士烟☆ 問きつるふしの烟は空に消て雲に名残の面影そたつ  
都☆ 匂ふらん花の都の恋しくて折に物うき山さくらかな  
故郷 人はいさ心もしらすふる里は花そむかしの香に匂ひける  
雲井☆ 桜はなちるかひ霞む久方の雲井にかほる春の山風

碧桃 春風吹動<sup>テ</sup>碧桃花 香<sup>ハ</sup>浮<sup>シ</sup>翠帳<sup>ニ</sup>通<sup>ス</sup>仙館<sup>ニ</sup>  
丹楓 格物論<sup>ニ</sup>曰<sup>ク</sup>楓<sup>ハ</sup>香樹<sup>也</sup> 其葉皆<sup>テ</sup>赤<sup>ク</sup> 如<sup>シ</sup>錦<sup>ノ</sup>下略  
杣 杣人のふる袖匂ふ菊の露うちはらふにも千代は経ぬへし  
さかき葉 おく霜の色もかはらぬさかきはの香をやはとめて人のきくらん

瓦屋 我はかりおもひこかれぬかはら屋の煙も猶そ下むせふなる  
梅風 梅ちらす風もこえてや吹くらんかほれる雪の袖に乱るゝ  
春雨 春雨にはへる色もあかなくに香さへなつかし山吹の花

白浪 かななればあはての浦にやく塩のけふりは名のみたつにかるらん  
名 軒ちかき花橘のかほり来て寝ぬ夜の夢はむかし也けり  
寝ぬ夜夢 匂ひ来る山水をとめくれはま袖にきくの露そうつろふ  
露雨 百花魁<sup>早</sup> 占<sup>ニ</sup>春光<sup>ヲ</sup> 嫩蕊初<sup>テ</sup>開<sup>ク</sup> 腹雪香<sup>ヲ</sup>

腹雪 我袖のひとつ匂ひに成にけり四方の梢の梅の下風  
梅下風



【表2】「名香古歌古詩」と『香名引歌之書』、『六番香合』の香名及び引歌対照表

名香古歌古詩	初音	白菊	柴舟	隣家	斜月	紅	須磨	清香	富士烟	都	杣
『引歌之書』	初音	白菊	柴舟(船)	隣家	斜月	紅	須磨	清香	富士烟	山桜	賀
引歌	○	△	△	×	×	△	×	×	×	○	△
名香古歌古詩 依拠文芸作品				馬子才(不明)	林和靖「山林小梅」		後鳥羽院『新千載』一二五七	不明	『海道記』		
名香古歌古詩	瓦屋	梅風	春雨	寝ぬ夜夢							
『引歌之書』		梅月									
「六番香合」	かはら屋	ゆきの袖	やまふき	ねぬ夜の夢							
引歌	△	△	△	○							
名香古歌古詩 依拠文芸作品											

○…同一引歌、▷…同引歌ながら異同あり、×…別引歌

資料2 「名香古歌古詩」 収載香名出自一覧

※香名が重複するものは片方を網掛け表示とした。  
ただし同名であっても香木自体が同一とは断定できない。

	香名
一木三銘	初音 白菊 柴船
五十種の香	隣家 斜月 紅 須磨 富士烟 雲井
百二十種の香	片糸 秋風 松風 都 故郷 さかさ葉 梅風 名
東山殿 御家の香	紅 須磨 湘竹 清香 探梅 杣
佐々木道誉所持の香	片糸 斜月 藤花 秋風 吐月 故郷 丹楓 白浪
後の追加	白菊 柴船 桂 星合 藤花 軒洩月 夏衣 碧桃 瓦屋 春雨 寝ぬ夜の夢 こ(日偏に叟) 雪 梅の下風
不明	雪梅 初霜 露雨

## 終章

本論文では、大枝流芳の香道伝書と菊岡沾涼の香道伝書を二つの柱とし、これらを精密に読むことにより、享保から延享にかけての香道伝書における文学の受容、特に組香においていかに文芸作品が受容されたのかを実証的に説明することを目的とした。

大枝流芳は、師匠大口含翠の良き弟子として故実の継承につとめ、御家流伝書確立に貢献し、師資相承のための指導者となる一方、所伝の継承だけに終わらない研究的視座での伝書執筆を行った。『心遠齋香道叢書』はその所産であり、その考究の一部が、彼の刊本『香道秋の光』『香道千代の秋』『香道滝の糸』『香道軒の玉水』に結実したと考えられる。大枝は「組香は初心を導んとする筈蹄にして、組香は香の歌舞妓なるものなり」と言いながらも、香道普及を図る啓蒙的姿勢とその多才から、多くの新組香を創出した。組香の素材と言えば和歌が多くを占める中で、大枝は説話や漢詩、中国故事等に取材の範囲を広げ、江戸中期の唐様流行を背景に明風を享受して、文人趣味の香道を模索し、同時に地下社会に香道を伝播せしめたのである。

一方江戸では、栗本穩置、菊岡沾涼によって、元文年間に『香道蘭之園』が誕生した。本書は、何代かに亘って書き継がれたものと察せられ、相伝を受けた者だけに授けられ、受容されたもので、大枝による刊本のように広く普及したものではなかったと考えられる。

『香道蘭之園』収録の『夫木和歌抄』由来の組香は、『夫木和歌抄』原典ではなく、西順自筆本『夫木和歌集抜書』、天和二年板『夫木和歌集抜書』による考案の可能性があり、また八・九巻収載「源氏千種

香」の依拠本としては、『源氏小鏡』古本系京都大学本の系統である可能性が確認できた。これらは、文学の世界における連歌や俳諧の人々と同様な享受の所産であると位置付けられる。

香道伝書の中心は組香であり、組香の背景には文芸作品の存在が不可欠と言っても過言ではない。一見、文芸作品との繋がりが窺えない組香であっても、それらを主題別に分類すると、和歌集の部立に似た様相を呈し、文学的享受が皆無とは考え難いものが多い。組香は、依拠する文芸作品が証歌として明らかに据えられる場合と、証歌としては謳われず、香名や聞きの名目、札名、連衆の名に、和歌や物語の詞が鏤められる場合とがある。香木は、本論文で扱った『香名引歌之書』や「名香古歌古詩」に見る如く、和歌や漢詩に因んだ名を付されていることが多い。これらは香と文芸のイメージを重ねて享受された一つの例と考えられ、香名の存在が先で、それに因んだ和歌や漢詩を撰んで引歌としたのか、香りのイメージに相応しい和歌や漢詩を撰び、その中から詞を採って香名としたのか、そのいずれかの方法に拠るものと考えられる。こうして名付けられた香木自体の名の他に、香木は、香木の木処としての名、つまり六国（伽羅、羅国、真那賀、真那蛮、佐曾羅、寸門多羅）の分類による名も有する。そしてさらに、文芸作品に依拠する組香においての名も付されるのである。したがって、香木はこれら三つの名を有する。

聞香の場においては、組香での香名が優先するものの、本香（組香のゲーム）が終了すると、そこで六国の名と香木自体の香名が明かされる場合が通常である。本香では、組香の文芸作品に因んだ聞きの名目や札名で答え、時には連衆の名にも文芸作品の詞が冠せられる。要するに、これら幾重にも重層する名の存在と、香木の香りが相まって、組香の依拠する文芸世界を描き出し、連衆一座にその文芸世界

を看取させるのである。

香元を中心に、連衆の答えの当否を記録する執筆が存在する聞香の座は、連歌の座に似ている。香席の連衆は、共通認識として、文芸的教養が不可欠である。先述したが、出香者の文芸理解による香木の選択と、連衆が香りから想起する文芸理解とが必ずしも同調するとは限らず、それは予期せぬ即興性を含んだ雅な遊戯と言える。香名や聞きの名目に和歌の詞が多く採用されたことは、風雅な言葉を連ねることであり、これも連歌の世界と相通じるものである。組香は、香りと文学の一座建立の所産と考えられる。

本論文では、大枝流芳と菊岡沾涼による香道伝書を主な対象としたが、享保から元文・寛保にかけて活躍した香人、空華庵忍鎧や、大枝・菊岡以後、宝暦から天明にかけて江戸で多くの門人を教えた、す（艸冠に取）香舎春竜、大枝最晩年の門弟で、彼の死後志野流に入門した江田世恭等の香道伝書を実証的に検討することを、今後の課題としたい。それを通して、大枝流芳と菊岡沾涼の香道伝書の性質や、彼らの事績を鳥瞰的な視座から見直すことが可能となり、さらには、大枝、菊岡以後の香道の変容を把握できるものと考ええる。

五二字×一八行×三五四頁 四〇〇字詰原稿用紙八二八枚相当